

2016年(平成28年)度 博士学位請求論文

日本語指示詞の習得に関する研究

- 韓国人学習者が習得過程で形成する「中間言語」を中心に -

京都外国語大学大学院外国語学研究科 博士後期過程

異言語・文化専攻

言語教育領域

2014DC0001

柳 信愛

## 目次

|                  |    |
|------------------|----|
| 第1章 序論           | 1  |
| 1.1 研究背景         | 1  |
| 1.2 研究目的         | 1  |
| 1.3 論文の全体的流れ     | 2  |
| 第1部 先行研究とけ研究方法概要 | 4  |
| 第2章 日本語指示詞の先行研究  | 5  |
| 2.1 日本語指示詞に関する研究 | 5  |
| 2.1.1 現場指示       | 5  |
| 2.1.2 非現場指示      | 8  |
| 2.1.3 談話管理理論     | 9  |
| 2.2 日韓指示詞の対照研究   | 11 |
| 2.2.1 宋 (1991)   | 11 |
| 2.2.1.1 現場指示     | 12 |
| 2.2.1.2 非現場指示    | 14 |
| 2.2.2 金水他 (2002) | 17 |
| 2.2.2.1 直示指示     | 17 |
| 2.2.2.2 記憶指示用法   | 17 |

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 2. 2. 2. 3 文脈照応用法                  | 18 |
| <b>第 3 章 第二言語習得に関する先行研究</b>        | 19 |
| 3. 1 第一言語習得と第二言語習得                 | 19 |
| 3. 1. 1 対照分析研究                     | 19 |
| 3. 1. 2 誤用分析研究                     | 20 |
| 3. 1. 3 中間言語研究                     | 22 |
| 3. 2 指示詞の習得研究                      | 24 |
| 3. 3 柳(2013, 2014)                 | 27 |
| 3. 4 第二言語習得に関する本研究の立場              | 29 |
| <b>第 4 章 研究方法の概要</b>               | 31 |
| 4. 1 調査方法                          | 31 |
| 4. 2 調査構成                          | 31 |
| <b>第 2 部 韓国人学習者による指示詞の習得に関する調査</b> | 32 |
| <b>第 5 章 韓国の日本語教材における日本語指示詞</b>    | 33 |
| 5. 1 はじめに                          | 33 |
| 5. 2 現在の韓国における日本語教育の現状             | 34 |
| 5. 2. 1 高校における日本語教育                | 34 |

|            |                            |           |
|------------|----------------------------|-----------|
| 5. 2. 2    | 大学における日本語教育                | 35        |
| 5. 3       | 調査目的                       | 35        |
| 5. 4       | 調査対象と内容                    | 36        |
| 5. 5       | 結果と分析                      | 36        |
| 5. 5. 1    | 分析方法                       | 36        |
| 5. 5. 2    | 高校で使用される『日本語Ⅰ』『日本語Ⅱ』       | 37        |
| 5. 5. 3    | 大学で使用される『日本語教材』            | 42        |
| 5. 5. 4    | 高校と大学以外の教育機関で使用される『日本語教材』  | 53        |
| 5. 6       | まとめ                        | 55        |
| <b>第6章</b> | <b>日本語指示詞の習得過程に関する量的調査</b> | <b>57</b> |
| 6. 1       | 調査目的                       | 57        |
| 6. 2       | 被調査者および教育機関                | 57        |
| 6. 3       | 韓国人学習者の指示詞習得               | 58        |
| 6. 3. 1    | 調査内容                       | 58        |
| 6. 3. 2    | 分析方法                       | 61        |
| 6. 3. 3    | 調査結果                       | 61        |
| 6. 3. 3. 1 | 現場指示                       | 62        |
| 6. 3. 3. 2 | 非現場指示                      | 73        |
| 6. 4       | 韓国人学習者の指示詞使用に際する認識         |           |

|                                |               |     |
|--------------------------------|---------------|-----|
| 6. 4. 1                        | 調査内容          | 80  |
| 6. 4. 2                        | 分析方法          | 81  |
| 6. 4. 3                        | 調査結果          | 82  |
| 6. 4. 3. 1                     | 性別による結果       | 81  |
| 6. 4. 3. 2                     | 専攻による結果       | 87  |
| 6. 4. 3. 3                     | 日本留学経験有無による結果 | 92  |
| 6. 4. 3. 4                     | レベルによる結果      | 97  |
| 6. 5                           | まとめ           | 103 |
| <b>第7章 日本語指示詞の習得過程に関する質的調査</b> |               | 107 |
| 7. 1                           | 調査目的          | 107 |
| 7. 2                           | 調査対象          | 108 |
| 7. 3                           | 結果と分析         | 109 |
| 7. 3. 1                        | 母語と目標言語の関係    | 109 |
| 7. 3. 2                        | 韓国人学習者の指示詞習得  | 115 |
| 7. 3. 2. 1                     | 現場指示          | 115 |
| 7. 3. 2. 2                     | 非現場指示         | 118 |
| 7. 3. 3                        | 指示詞の使用に際する認識  | 121 |
| 7. 4                           | まとめ           | 126 |

## 第 8 章 結論

|            |     |
|------------|-----|
| 8. 1 総合的考察 | 128 |
| 8. 2 終わりに  | 131 |
| 8. 3 今後の課題 | 131 |
| 参考文献       | 133 |

## 謝辞

## 付録

- 参考資料① アンケート用紙
- 参考資料② インタビュー内容

## 第1章 序論

### 1. 1 研究背景

人は生まれてからずっと新しいことを学び続ける。「立ち方」や「歩き方」、「箸の使い方」など様々なことを学ぶ。その中で「言語」はどうか。我々が生まれて最初に習得する言語を「第一言語」と呼び、その後新しく習得する言語「第二言語」と呼ぶ。「第一言語」を「母語」とも言い、「第二言語」は言語習得の文脈では「目標言語」とも呼ぶ。第二言語は第一言語の習得がされた後に習得されるため、第一言語の習得が第二言語の習得に影響を与えるはずである。しかし、第二言語の習得過程には第一言語では証明できない様々な現象が現れる。本論文では、韓国語母語話者（以下、韓国人）学習者の日本語習得において、母語と目標言語がどのように関わっているのか、それらの関わりによって形成される「中間言語」はどのような実態なのかを明確にする。

筆者が高校で日本語を初めて習った際、日本語は英語より易しい言語であった。それは英語と比べて日本語は韓国語と語順が同じで、韓国語に日本語を置き換えるだけで文が作れると思ったからである。それをどこで聞いたのか明確に覚えていないが、頭の中に固定観念のように強く刻まれていた。しかしながら、その考えは大学で日本語を学んでから崩れ始め、韓国語と日本語の相違点に気づき、日本語を韓国語と対応させずに日本語らしい日本語を身に付けるため努力を続けた。その中でも日本語の指示詞は韓国語の指示詞と1対1対応していると教えてもらい、簡単だと思っていたのだが、習った後日本語との接触が増え、レベルが上がるにつれ、「コ・ソ・ア」は思ったよりも簡単ではないと認識し始めた。指示詞を母語である韓国語と対応して使用してはいけないと気付いたのである。そのため、頭の中で指示詞の知識が整理されておらず、「コ・ソ・ア」を使用する際、段々自信がなくなり、極端な場合は指示詞の使用を回避するようになってしまった。それに加え、両言語が1対1対応している用法の習得も困難になり、韓国語の影響を受けない誤用が生じ、指示詞の使用に迷うようになった。このような経験から筆者は指示詞の習得過程に影響を与える要因とその過程に現れる様々な状況を研究したいと考えるようになった。

### 1. 2 研究目的

本研究は、韓国人学習者が習得過程で形成する中間言語を明らかにすることが目的である。「中間言語」とは、Selinker (1972) によって造られた用語であり、Selinker は母語の違う学習者から同類の誤用が観察され、それらが学習者の母語の影響では説明できないことであるため、学習者は学習者なりの文法体系を持っていると述べ、その文法体系を「中間言語」と規定した。

また、迫田 (1997 : 7) は中間言語のことを「第二言語習得過程において形成され

る学習者特有の言語体系の存在を認める立場に立ち、学習者の可変的な言語体系を中間言語と呼ぶ」と述べた。すなわち、学習者の習得過程で形成される学習者特有の言語体系であり、母語の影響では説明できない誤用を意味するのである。中間言語の研究は母語の違う学習者を対象にし、習得過程に現れる同様の誤用が観察されることに焦点を当てた調査が主であった (Selinker 1972、ロット・エリス 1988、迫田 1997 など)。言い換えると、形成される中間言語はすべての学習者の習得過程に現れるものである。

しかしながら、果たして中間言語は母語の違う学習者にすべて当てはめる言語体系であるのだろうかという疑問が生じる。もしかすると、学習者ごとに異なる中間言語が形成されるのではないだろうか。指示詞の習得過程で形成される韓国人学習者の特有の「中間言語」は存在するのではないか。このような問題意識が芽生えた。

韓国人学習者の対象にした 柳 (2013) の調査結果では、初級で習得された指示詞用法が中級・上級の習得に影響を与える場合があり、それを「指示用法間の揺れ」である述べた。また、『これ』で問い『それ』で答える (Kawakami 2010) に当てはめた指示詞文型練習によって、~~る~~同じ指示詞系列を使用した文に対して生じる拒否感などがあった。

以上のことから、筆者は、韓国人学習者の指示詞習得過程で形成される特有の「中間言語」があると認め、習得過程に影響を与える要因を具体的に明らかにする必要があると考えた。果たして、韓国人学習者の中間言語の形成に母語の影響はあるのだろうか。本論文では、改めて韓国人学習者による母語である韓国語と目標言語である日本語の関係について明確にした上、母語が中間言語形成にどのような影響を与えるか明らかにする。

### 1. 3 論文の全体的流れ

本論文は全体 8 章で構成されている。第 2 章から第 4 章は「第 1 部 先行研究と研究方法の概要」であり、ここでは日本語の指示詞と第二言語習得の研究に関する先行研究の検討し、課題を明らかにする。その後には本研究の方法について述べる。

第 2 章では、日本語指示詞の先行研究について、「日本語指示詞の研究」と「日韓の指示詞の対照研究」に分けて先行研究を検討する。第 3 章では、第二言語習得に関する理論と日本語指示詞の習得研究について、第 4 章では、本研究の方法について述べる。

第 5 章から第 8 章は、「第 2 部 韓国人学習者による指示詞の習得に関する調査」に当たり、本研究の結果を分析・考察する部分である。

第 5 章では、韓国の日本語教材における日本語指示詞を考察し、その結果を論じる。第 6 章では、韓国人学習者による指示詞の習得過程に関する量的調査の結果を、第 7



章では、韓国人学習者による指示詞の習得過程に関する質的調査の結果を論じる。さらに、第 8 章では、本研究の結果を総合的に考察し、今後の課題について述べる。

## 第 1 部 先行研究と研究方法の概要

第 1 部は、本研究の理論的な部分であり、第 2 章から第 4 章までで構成されている。以下、第 2 章では、日本語指示詞に関する先行研究を検討した上で、日韓の指示詞の対照を行った研究を紹介する。第 3 章では、本研究との関連性が最も深い第二言語習得の理論と日本語指示詞の習得研究について検討し、本研究がとる第二言語習得に関する立場を論じる。第 4 章では、本研究における調査方法と調査の構成について述べる。

## 第2章 日本語指示詞の先行研究

本章では、日本語指示詞に関する研究を用法別に分けて紹介した上で、韓国語と日本語の指示詞を対照させた上で、その対応関係について述べる。

### 2.1 日本語指示詞に関する研究

日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」の3系列で、様々な研究がされてきた。指示詞に関する研究は、佐久間鼎の研究を出発点とせざるのが定説となっている（金水・田窪1992, 岡崎2010）。

佐久間（1983）は、代名詞は「ものを指す体言」と定義し、指示代名詞について以下のように述べている。

いわゆる代名詞の職能を「指示」あるいはオリエンテーションに認めるとすれば、自己を中心として「もの」または「こと」がどういう位置を取り、どの方向にあり、どういう有様を呈しているかについての立言が、直接にこれによって指されるのは当然で、こうして話し相手との関係における、いわゆる指示代名詞(または事所代名詞)について近称・中称・遠称および不定称が分かれる次第です。

佐久間（1983：6）

佐久間は代名詞のことを事物や状態を指し示す単語の一群として類別するのが適当であり、さしあたりの種の語類を「コ・ソ・ア・ド」といい、あるいは「指示詞」・「指す語」ともいうとも述べ、以下の<表 2. 1>のようにまとめている。

<表 2. 1> 佐久間（1983：7）による指示代名詞

|               | 近 称          | 中 称          | 遠 称          | 不定称          |
|---------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| も の           | コ レ          | ソ レ          | ア レ          | ド レ          |
| 方 角           | { コチラ<br>コッチ | { ソチラ<br>ソッチ | { アチラ<br>アッチ | { ドチラ<br>ドッチ |
| 場 所           | コ コ          | ソ コ          | アソコ          | ド コ          |
| { も の<br>人(卑) | コイツ          | ソイツ          | アイツ          | ドイツ          |
| 性 状           | コンナ          | ソンナ          | アンナ          | ドンナ          |
| 指 定           | コ ノ          | ソ ノ          | ア ノ          | ド ノ          |
| 容 子           | コ ー          | ソ ー          | ア ー          | ド ー          |

#### 2.1.1 現場指示

佐久間（1983）は、指示詞「コ・ソ・ア・ド」を「人代名詞」と関連付けて研究し、話し手とその相手との相対して立つところに、現実の話し場ができると述べている。それを「自称・対称・他称」という、対話の場における対立関係に対して内面的な交渉を持つとし、話し手と聞き手との両極によって「なわばり」が形成されると述べ、

指示詞を規定している。

それをまとめると、「これ」の場合は物や事が、話し手自身の手の届く範囲、その勢力内にあるものを指示し、「それ」は話し相手の手の届く範囲、自由に取れる区域内のものを指す場合に用いるとし、それ以外の勢力圏外にある全てのものは「あれ」に属する（佐久間 1983 : 22）と規定している。その指示詞を用いて指示する対象としては、ゆびさされるもので人や物または事や場所であり、その場合の人と事物などとの間に対応の関係が成っていると述べ、以下の<表 2.2>のように表した。

<表 2. 2> 佐久間（1983 : 35）による人と事物との対応関係

|            | 指示されるもの              |               |
|------------|----------------------|---------------|
|            | 対話者の層                | 所属事物の層        |
| 話し手        | (話し手自身) ワタクシ<br>ワタシ  | (話し手所属のもの) コ系 |
| 相手         | (話しかけの目標) アナタ<br>オマエ | (相手所属のもの) ソ系  |
| はたのもの<br>人 | (第三者) アノヒト           | (はたのもの) ア系    |
| 不定         | ドンナ<br>ダレ            | ド系            |

<表 2. 2>は指示詞の研究の始発点であり、後に続くさまざまな研究に影響を与えた。しかしながら、上記で述べているように、指し示す対象が目に見える物の場合、言い換えれば、現代日本語指示詞の用法である現場指示の用法に妥しか適用できない説である。

指示詞の用法には上記の「現場指示」以外にも様々な用法があり、堀口（1978）の用語にしたがってまとめると以下<表 2. 3>の通りである。

<表 2. 3> 堀口（1978）による指示詞「コ・ソ・ア」の用法

|           | 相手       | 指示対象   |
|-----------|----------|--|
| (イ)現場指示   | いる       | 知覚可能なもの  |
| (ロ)文脈指示   | いる/いると仮定 | 先行文脈又は先行談話(「ソ」の場合)<br>観念対象(「コ」, 「ソ」の場合)<br>知覚可能なもの(「コ」の場合) |
| (ハ)知覚対象指示 | いない      | 知覚可能なもの  |
| (ニ)観念対象指示 | いない      | 観念対象   |

正保（1981 : 66<sup>1</sup>）

<表 2. 3>の指示詞の用法を大きく二つに分けると、現場指示用法と現場指示以外の用法で分けられる。現場指示以外の用法は、非現場指示とも呼ぶ。本研究では「現場指示」と「非現場指示」用語を用いるようにする。以下でこれらの用法別の研究を

<sup>1</sup> 正保（1981）『「コソア」の体系』『日本語教育指導参考書 8 日本語の指示詞』国立国語研究所 p. 51-122

まとめて検討してみよう。

前述したように佐久間（1983）の「近称・中称・遠称」によって人や物を指示する指示詞が「現場指示」に当たる用法であり、知覚できるものを指す用法である。現場指示の用法について三上（1992）は「コ・ソ・ア」を「コ・ソ」と「コ・ア」に分けて、話し手と聞き手が「対立」する場面と、話し手と聞き手が「我々」という意識が成立する場面を想定して、前方の場面では「コ対ソ」、後方の場面では「コ対ア」が見られ、「二項対立(doublebinary)」を成していると述べた。また、「コ対ソ」の聞き手と話し手が対立している場面は、楕円的で、「アレ」は現れないに対し、「コ対ア」の話し手と聞き手が「我々」という意識を成す場面は、楕円が円に変わり、円内は「コレ」的で、円外は「アレ」的であって、この場合は聞き手自身は消えることはないが、「ソレ」の領分は没収されてしまうと述べている。

これらの説に対して阪田（1992）は、「コ・ソ(ア)」の関係がすべて佐久間（1983）と三上（1992）の規定のように、「わたし・あなた」の関係に対応しているだろうかといいい、次のような例を挙げている。

彼はむすこの顔をごしごし手で洗った。

「ちゃん、痛いよ。」

「何が痛いんだ。」

「そこ、痛いんだよ。」

周作は目の下の傷を、手でおさえようとした。

阪田（1992:56）

上の例のように、息子が自分自身の顔すなわち、話し手の層である顔を「コ系列」ではなく「ソ系列」を用いて指すのは、佐久間（1983）の規定に反するものである。この反例で阪田（1992:56）によると、「たとえ相手の身につけているものであっても、話し手がそれに手をふれば、『あなたのこの洋服』と、コで指示することになり、『対話者の層』と『所属事物の層』とは対応しなくなる。また、逆に、話し手所属のものであっても、ソで指示する場合もある」と述べている。

そのため、阪田（1992）は佐久間説の話し手と聞き手との対立の場に基づかず、話し手の立場を中心として「コ・ソ・ア」を規定した。話し手の立場を中心と考え、話し手の領域内のものと外にあるものに分け、話し手は空間的・心理的に身近なものは自己の領域内のものと認めた場合は「コ系列」で、自己の領域外のものとして認めたものは「ソ系列」で指示するに対し、話し手と聞き手が「我々」という一つの領域をつくる場合は、その領域内に属するものは「コ系列」で指示し、領域外のものには「ソ系列」あるいは「ア系列」で指示すると述べている。また、阪田（1992）によると、話し手と聞き手が一つの領域を作る場合の「我々の領域外」のものを指す場合、「ア系列」で

指示するほど遠く離れていない際に「ソ系列」を用いて指示するのである。このような指示詞「コ・ソ・ア」の説は、いわゆる「現場指示（阪田 1992, 正保 1981）」、「ダイクシス用法（田中 1981）」「直示指示（金水 1999）」、「眼前指示（田窪 2010）」と呼ばれている。それ以外の用法である「非現場指示」の場合は、「文脈指示（三上 1970, 正保 1981, 阪田 1992）」や「照応指示（田中 1981）」や「非直示指示（金水 1999）」、「非眼前指示（田窪 2010）」などと呼ばれる。

### 2. 1. 2 非現場指示

阪田（1992）は、現場指示の用法で前述したように話し手自身を中心に考え、非現場指示を対話の場合と文章の場合に分けて「コ・ソ・ア」を規定した。話し手自身を中心と考え、話し手自身の領域の中にあるものと外にあるものに分ける場合、対話では、話し手自身の発言内容は自分の領域内のものとして「コ系」で指示し、聞き手の発言内容は自分の領域外のものとして「ソ系」で指示する。文章の場合は、話し手は先行の叙述内容を主体的に捉えた場合、自分の領域内のものとして「コ系」で指示し、客観的に捉えた場合には自分の領域外のものとして「ソ系」で指示すると述べている。

そして、話し手は聞き手を自分の領域内に包み込んで、「我々」という一つの領域を作った場合の非現場指示用法は、話し手の発言が「共通の話題」となった場合、両者は共に「ソ系」で指示することが普通であるが、それを主体的な意識で「我々」の身近なものとしてとらえる場合には「コ系」が使われることがあり、また、特にその話題が両者の共通の知識である場合には「ア系」が用いられると述べている。

一方、久野（1973）は非眼前指示的用法・非現場指示用法について以下のように述べている。

ア系：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合のみ用いられる。

ソ系：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知っていないだろうと想定した場合、あるいは、話し手が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

久野（1973：185）

指示する対象について、話し手が知っているのか知らないかによって、また、聞き手が指示対象を知っているのか知らないのかによって指示用法が異なることなのである。非現場指示「コ系」については、指示する物事が目の前にあるように、生き生きと叙述する際に用いられるようで、依然として、眼前指示代名詞的であると述べ、話し手の方が、その指示対象をよく知っている場合にしか用いられないと結論付け、単に眼

前指示代名詞であると片付けられないと、主張している。

堀口（1978b）は、非現場指示の用法には対話において、相手が表現した内容を指示対象にするものと対話に限らず、文章にも内言・独白にも用いられるので、自分の表現の内容を指示対象にするものの、二つがあると結論付けた。まず、対話の場合の用法から見ると、堀口は話し手の対象の関わりの気持ちの違いによって「コ・ソ・ア」が使い分けられると述べている。そして、久野（1973）の「ア系」の「その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともに、よく知っている場合のみ用いられる」ということはいかなる見解であり、聞き手が対象を熟知しているか否かについては無関係であると堀口（1987b）は主張している。非現場指示のア系列の用法を「話し手が自己に関わりが強い遙かな存在だと捉えている事柄・物事の対象として、強烈に指示するのに用いられる」と述べており、「その対象が聞き手にも同様に、自己に関わりが遙かに強い存在だと捉えられる場合には、両者に一体感といった満足感が得られるが、そうでない場合には、話し手の一方的ななつかしみを表すことになるので、注意を要する」と説明している。堀口（1978b）によると、非現場指示の「コ・ソ・ア」の用法は、話し手の気持ちに任されており、そのいずれを多く用いるかは、全く話し手のくせであるということである。

### 2. 1. 3 談話管理理論

指示詞における最近の研究の中で最も重要なものに、金水・田窪（1990）、田窪・金水（1996）などで提示されている「談話管理理論」によるものがある。田窪・金水（1996）の理論の特徴として、「聞き手の知識」という概念を排除したことで、複数の心的領域を設定することが挙げられる（堤 2012 : 106）。

聞き手の知識を排除したことを、田窪・金水（1996）は次のように規定した。

#### 聞き手知識に関する原則

言語形式の使用法の記述は、その中に聞き手の知識の想定を含んではいけない。

田窪・金水（1996 : 62）

談話管理理論では、メンタル・スペース理論（Fauconnier 1985）をもとに話者の頭の中に複数の心的領域を設定する。指示詞は、その領域に登録された要素を探索する指令である（堤 2012 : 107）。これらのことに基づき、田窪・金水（1996）は、次のようにまとめた。

#### 直接経験領域(D-領域)

長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される。直接指示が可能。

間接経験領域(I-領域)

まだ検証されていない情報（推論、伝聞などで間接的に得られた情報、仮定などで仮想的に設定される情報）とリンクされる。記述などにより間接的に指示する。

田窪・金水（1996：66）

この理論に指示詞「ア系列」と「ソ系列」を関連づけてみると次のように定義ができる。堤（2012）が定義したものを直接引用する。

- a. ア系列指示詞は、D-領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識である。
- b. ソ系列指示詞は、I-領域を検索範囲として、指示対象を検索せよという標識である。

堤（2012：108）

この定義では、久野（1973）の仮説で説明できなかつたことが説明できるようになる。堤（2012）は、ここで「D-領域」と「I-領域」それぞれの対象は一体どのような特徴であるのか、定義は正しいのかなどの点について考察をした。次の例文から見てみよう。

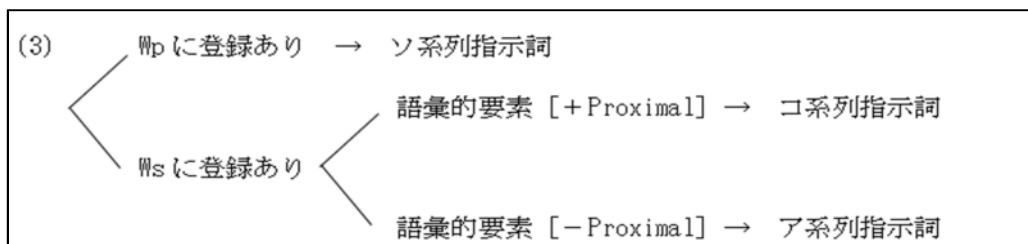
A:ハムナプトラ 2 って映画見た？

B1:いや、あの/?その映画はまだ見てない。

B2:いや、\*あの/その映画は知らない。

堤（2012:110）

堤（2012）は、上の例文を挙げて、どこまで経験すれば直接経験したことになるのか、定義が曖昧なところであると言い、田窪・金水（1996）の理論でいう経験によって、指示される対象が存在する 2 つの領域を分割することにあるのではないかと述べている。また、田窪・金水（1996）の談話管理理論を認めて統一し、以下のように「指示詞コソアの意味」をまとめた。



<図 2.1> 堤（2012：220）における「コソア」の意味



ここでの Ws は話者が外界や文脈から構築する世界で、Wp は Ws と Wo との中間的な存在(interface)である。

また、堤(2012)は現場指示のコ/アの基本的な違いとして、指示される対象を話者が近いと捉えているか、遠いと捉えているかの違いであると述べ、コ/アに次のような意味を与えた。

- a. コ：語彙的に[+Proximal]である。
- b. ア：語彙的に[-Proximal]である。

堤 (2012 : 164)

これらは、三上 (1970) の「近称」「遠称」を想起して頂いても良いと言い、話者がある対象を「近い」「遠い」と捉えるのは、その対象に対する話者の気持ち次第であり、文法以外の要素によって影響を受けると、田窪 (2002 : 200) の記述を引用し、堤 (2012 : 164) は述べている。また、堤 (同書) によると、過去の出来事は、近いとは判断できないほどに時間的隔たりがあると判断され、「コ系列」を用いた指示は難しいのである。

このように、堤 (2012) は指示詞の分類を現場指示と非現場指示に分けて考察せず、指示詞「コ・ソ・ア」の意味、指示詞を統一してまとめた。最近では指示詞を現場指示・非現場指示に分けずに、考察する研究が増えているが、今までの研究は、指示詞「コ・ソ・ア」を「現場指示」と「非現場指示」に分類され、別の用法として研究されてきた。

## 2. 2 日韓指示詞の対照研究

本節では、韓国人学習者による指示詞の習得過程を調査するため、母語である韓国語と日本語の指示詞について検討する。指示詞の対照分析を紹介する前に、日本語と韓国語の対応関係から述べる。

### 2. 2. 1 宋 (1991)

日韓指示詞について対照研究には宋 (1991) が代表的にあげられる。本研究の目的は韓国人学習者が形成する中間言語を探ることであり、習得過程に影響を与える要因は母語以外様々な要因があると考えられる。そのため、まず目標言語と母語の対照分析をした上、習得過程に影響を与えているのか調査する。

宋 (1991) は、日本語教育のための日韓指示詞の対照研究を行い、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」と韓国語の指示詞「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」との用法を「場」の状況別に分類した。現場指示の場合、自分の「コ・ソ・ア」の行為が、相手の存在に配慮するところがあるかないかで「相対的現場指示」と「独立的現場指示」に分け

て分類し、「相対的現場指示」は融合的なものなのか、対立的なものなのかで分けて「融合的指示」と「独立的指示」に区分した。

非現場指示の場合は、指示対象が自分と相手にとって話題性がある経験的なものか、単なる文脈照応的なものかによって「話題指示」と「単純照応指示」に分けて分類した。

<表2. 4> 宋（1991：139） 表1「コ・ソ・ア」の用法の分類

| 用法の名称 |         | 指示対象                     | 「場」の状況                    | 言語行為                     |               |
|-------|---------|--------------------------|---------------------------|--------------------------|---------------|
| 現場指示  | 独立的現場指示 | 現場における知覚できる具体的な対象        | 相手（聞き手）がいない               | 独り言、内言                   |               |
|       | 相対的現場指示 | 融合型                      | 同上                        | 話し手と聞き手が我々認識を持つ          | 主に、対話         |
|       |         | 対立型                      | 同上                        | 話し手と聞き手が対立認識を持つ          | 主に、対話         |
| 非現場指示 | 話題指示    | 独立的話題指示                  | 自分の観念の中に浮かべている話題性のある素材    | 相手（聞き手か読み手）がいない          | 独り言、内言、回顧的言い方 |
|       |         | 相対的話題指示                  | 自分か相手の表現内容にある、話題性のある経験的素材 | 相手（聞き手か読み手）が素材を知っているかを考慮 | 主に対話          |
|       | 単純照応指示  | 自分の経験記憶が関わらない文脈の言語的なある素材 | 相手（聞き手か読み手）がいる、ないし、いと仮定する | 主に作文                     |               |

宋（1991）は上記の<表 2.4>の「コ・ソ・ア」用法を韓国語の「이 (i)・구 (geu)・저 (jeo)」に対応すると対照分析した。各用法についてを韓国語と対照分析した宋（1991）の結果を検討する。宋は「指示詞用法の連続性」に基づき、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の用法を現場指示と非現場指示に大きく分けて韓国語と対照を行った。

## 2. 2. 1. 1 現場指示

現場指示の独立話題指示の場合は日本語と韓国語が1対1対応する指示用法る。

<表2. 5> 宋（1991：140）現場指示の独立話題指示の日韓対照

| 日本語   | 用法                                  | 用例  | 韓国語        |
|-------|-------------------------------------|-----|------------|
| コ系の全て | 指示されるものが自分の関心があるもので、自分に近いと想定した場合用いる | 例 1 | 이(i)系の全て   |
| ア系の全て | 指示されるものが自分の関心があるもので自分から遠いと想定した場合用いる | 例 2 | 저(jeo)系の全て |

例 1（玄関の前にある黒い箱を触りながら、一人でつぶやく）

これは何だ？

<이것은 무엇이고?>

例 2（空を飛んでいる鳥を見上げながら、一人でつぶやく）

僕もあの鳥のように飛ぶことができれば.....

<나도 저 새처럼 날 수가 있다면>

宋（1991）によると、相対的現場指示の融合型に現れる「ソ系列」と非現場指示の話題指示の「場」に現れる「ア系列」の用法は、韓国語の指示詞「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」には全く見られない概念であり、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の方が韓国語の指示詞「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」より複雑な文法性を保っている。また、日本語の指示詞「ソ系」を用いて指示する場合は韓国語とズレがあり、日本語の指示詞が韓国語の指示詞より細かく使い分けられていると、宋は述べている。

<表2. 6> 宋（1991：140）相対的現場指示の融合型の日韓対照

| 日本語          | 用法  | 用例  | 韓国語          |
|--------------|---|-----|--------------|
| コ系の全て        | 指示対象が我々（話し手と聞き手）の関心があるもので、我々の近くにあると想定した場合用いる          | 例 3 | 이 (i) 系の全て   |
| ア系の全て        | 指示対象が我々（話し手と聞き手）の関心があるもので、我々の遠くにあると想定した場合用いる          | 例 4 | 저 (jeo) 系の全て |
| 主に、場所を指し示すソ系 | 指示対象が我々（話し手と聞き手）の関心があるもので、ア系で指すには近すぎるし、やや遠いと想定した場合用いる | 例 5 |              |
|              | 指示対象が我々（話し手と聞き手）の関心があるそう遠くない漠然とした場所を指すとき用いる           | 例 6 | x            |

例 3 (A,B 両者の手元にある一つの人形を指しながら)

A:これは誰の人形ですか。

<이것은 누구의 인형입니까?>

B:これは妹の人形です。

<이것은 여동생의 인형입니다.>

例 4 (空を飛んでいる飛行機を指差しながら)

子:あれが飛行機なの。

<저것이 비행기야?>

母:そうよ、あれは飛行機だよ。

<그래, 저것이 비행기다.>

例 5 お客:そこの煉瓦の建物の前で停めてください。

<저기 벽돌 건물 앞에 세워주십시오.>

運転手:そこの角のところですね。

<저기 모퉁이 말이지요?>

例 6 A:お出かけですか。

<어디 가십니까?>

B:はい、ちょっとそこまで。

<네 좀.....>

次は、対立型用法についてである。日本語の場合、自分の領域内のものを「コ」で、相手の領域内を「ソ」で示すに対し、韓国語の場合自分の領域内は「이(i)」で、相手の領域内のものは「그(geu)」で表す。

<表2. 7> 宋 (1991 : 142) 相対的現場指示の対立型の日韓対照

| 日本語   | 用法                       | 用例         | 韓国語                                   |
|-------|--------------------------|------------|---------------------------------------|
| コ系の全て | 指示対象が話し手の領域にあると想定した場合用いる | 例 7        | 이 (i) 系の全て                            |
| ソ系の全て | 指示対象が聞き手の領域にあると想定した場合用いる | 例 8<br>例 9 | 人の指示外の<br>그 (geu) 系、人を指<br>示す 이 (i) 系 |

例 7 (講演中教師が一冊の本を聴衆に見せながら)

教師:この本を見ると総べてのことが分かります。

<이 책을 보면 모든 것을 알 수 있습니다.>

聴衆中一人:先生、その本いくらですか。

<선생님, 그 책 얼마입니까?>

例 8 (BがAの背中を搔いている)

A:もうちょっと上を搔いてくれ。

<좀더 위쪽을 긁어줘.>

B:ここですか。

<여기 입니까?>

A:うん、そこ。

<응 거기.>

例 9 (対座している妹の隣近くに未知の人がいる時)

弟:その方はどなたですか。

<이 분은 누구입니까?>

妹:あー、この方はね、私の高校時代の先生。

<아, 이 분은, 나 고등학교 때의 선생님.>

## 2. 2. 1. 2 非現場指示

本節は、宋 (1991) が非現場的な指示の用法を日韓対照分析した結果である。以下

の<表 2. 8>は独立的話題指示用法で、記憶の中にある指示対象を聞き手の存在を考慮せずに指し示すものである。以下の表を見ると分かるように、韓国語の場合「저(jeo)」が現れない。

<表2. 8> 宋（1991：144）独立的話題指示の日韓対照

| 日本語   | 用法   | 用例   | 韓国語          |
|-------|--|------|--------------|
| コ系の全て | 概念に存在している指示されるものが自分が知っているもので、眼前にあるかのように強く示すと想定した場合用いる。 | 例 10 | 이 (i) 系の全て   |
| ア系の全て | 概念に存在している指示されるものが自分が知っているもので、平静に指し示すと想定した場合用いる         | 例 11 | 그 (geu) 系の全て |
| ソ系の全て | 概念に存在している指示されるものが自分に係わりがうすい知らないもので、平静に指し示すと想定した場合用いる   | 例 12 |              |

例 10 （自分の息子がまた犯罪を起こして、牢に閉じ込められことを思い出しながら一人でつぶやく）

こいつはどういたものか。

<이놈은 어떻게하지?>

例 11 （昨日食べたフランス料理の味が忘れられなくて）

あの料理は本当においしかったなあ。

<그 요리는 정말 맛있었다.>

例 12 （精密検査の結果、胃に潰瘍があることが発見されたとする。すると自分は自分の胃に異常物があることを知っていることになる。そこで例えばある朝目が覚めて、この潰瘍のことが心に浮かぶ）

一体それはどんな色をしているのだろうか。

<도대체 그것은 어떤 색을 하고 있을까?>

<表2. 9> 宋（1991：146）相対的話題指示の日韓対照

| 日本語   | 用法   | 用例           | 韓国語          |
|-------|--|--------------|--------------|
| ア系の全て | 指示されるものが話し手と聞き手との共有の知識を保ちあっている話題性がある素材であると想定した場合、それを話し手が言及したり聞き手が確認する時用いる。       | 例 13         | 그 (geu) 系の全て |
| ソ系の全て | 指示されるものが話し手と聞き手の中のいずれかの一方ないし皆無の知識の話題性がある素材であると想定した場合、それを話し手が言及したり聞き手が確認したりする時用いる | 例 14<br>例 15 |              |

例 13 A:きのう金君とあった。あの人は随分変わった人だね。

<어제 김군을 만났다. 그 사람은 상당히 색다른 사람이야.>

B:あいつは変人です。

<그놈은 괴짜입니다.>

例 14 A:今朝李一星という人に会いましたが、その人ご存知ですか。

<오늘 아침 이일성이라는 사람을 만났는데 그 사람 압니까?>

B:いいえ、その人、知りません。

<아니요, 그 사람 모릅니다.>

例 15 A:昨夜「人間とは」という本を読んだけど、あなた知ってますか。

B:うーん、その本どういう内容ですか。

<음, 그 책 어떤 내용의 책 입니까?>

非現場指示の場合は、「独立的话题指示」と「相対的话题指示」両方相違点が見られた。宋によると、韓国語の非現場指示の場合は、非現場指示の用法全体を通して「저(jeo) 系列」形式が全然現れず、韓国語の非現場指示の全てを「그(geu) 系列」一つで賄っていると述べた

<表 2. 10>の単純照応指示の場合は、日本語と韓国語が対応している。「コ系」は「現場指示的」なものであり、「ソ系」は自分の係わりが弱い指示対象を平静に指し示す「独立的话题指示」の「ソ系」の用法から派生されたものであると宋(1991)は考えている。

<表2. 10> 宋(1991: 147) 単純照応指示の日韓対照

| 日本語   | 用法   | 用例                           | 韓国語         |
|-------|--|------------------------------|-------------|
| ソ系の全て | 指示される対象は話し手の存在と相手の発言とは無関係なもので、仮定された出来事、予想される出来事または一般的な事柄を平静に指し示したいと想定した場合用いる | 例 16<br>例 17<br>例 18<br>例 19 | 그(geu) 系の全て |
| コ系の全て | 指示される対象は話し手の存在と相手の発言とは無関係なもので、「明瞭な存在」として対象化し、「現場指示的」に生き生きと指し示したいと想定した場合用いる   |                              | 이(i) 系の全て   |

例 16 受付に誰かがいたら、その人に渡してください。

<접수처에 누군가 있으면 그 사람에게 전해 주십시오.>

例 17 選手にその力を十分に発揮させる。

<선수에게 그 힘을 충분히 발휘 시키다.>

例 18 ラッコは海底から手ごろな石を拾ってきて腹の上に乗せ、{それ/これ}に貝を叩き付けて割って食べる。

<해달은 바다 밑에서 쥐기 알맞은 돌을 주어와 배위에 얹어,

{그것/이것}에 조개를 때려 부수어 먹는다.>

例 19 これはだれにも言わないでほしいのですが、私は実は猫が怖いです。

<이것은 누구에게도 말하지 말기를 바라는데, 저는 고양이가 무섭습니다.>

## 2. 2. 2 金水他 (2002)

金水他 (2002) は、日本語と似た 3 系列の指示詞を持つ韓国語に分析を広げ、その類似点と相違点について探った。韓国語では「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」の 3 系列が用いられ、日本語の「コ・ソ・ア」とよく似た用法を持っていると言われていたが、細部に用法を検討してみると、現代日本語の体系よりむしろ古代語日本語の体系に近い面を持っていると金水他 (上掲書) は述べ、指示詞を「直示指示」、「記憶指示用法」、「文脈照応用法」に分けて両言語の対照分析を行った。

### 2. 2. 2. 1 直示指示

金水他 (2002) は、外界において知覚できるもの、典型的には目に見えている物を直接指し示す用法を直示用法 (deictic use) と呼び、日本語の場合は、話し手の身近にある対象を「コ系列」、話し手から見て遠くにあるものを指示する際「ア系列」を用いると述べた。また、「ソ系列」については、指示領域の分布が複雑であり、不安定な面を持っていると述べ、「中距離指示」のソを挙げて領域が安定して存在するのではなく、近距離と遠距離に狭まれた副次的な曖昧な領域としてしか存在しえないと金水他 (上掲書) は考えている。

韓国語の対照分析した結果、韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」の中で、「이(i)」は話し手の近くにある対象を指示する際用いる指示詞で、日本語の「コ」と対応する。遠くにある対象を指す場合は「저 (jeo)」を用いるが、これは日本語の「ア」と対応し、日本語の「コ・ソ・ア」分布によく似ている。しかし韓国語の「그 (geu)」には中距離指示の用法は観察されなかったため、金水他 (2002) は直示指示における「그 (geu)」の使用は、日本語の「ソ」ほどは発達されていないと述べている。

### 2. 2. 2. 2 記憶指示用法

韓国語の場合、記憶指示用法に該当するものは、遠称の「저 (jeo)」ではなく、「그 (geu)」で指示すると述べ、韓国語と日本語の違いを金水他 (2002 : 236-237) は以下のようにまとめた。

a.韓国語の遠称指示詞저 (jeo) は、今日に見える空間及びそれに準じる空間で、話し手から遠方に存在する対象を指し示すのに対し、日本語のア系列は、今知覚できるか否かに拘わらず、話し手の近傍にない、直接的な経験に含まれる対象を指し示す。

b.韓国語의 그 (geu) は、今眼前にないが、話し手が直接知っている対象を照応的

ではなく指し示すことができる（記憶指示用法）が、日本語のソ系列は今眼前にな  
いものを対照的でなく指し示すことはできない。

### 2. 2. 2. 3 文脈照応用法

金水他（2002）によると、照応用法は言語テキストによって導入された先行詞と同  
一指示関係をもつ用法である。この用法で韓国語は日本語と大きく異なる点の一つは、  
遠称の指示詞「저（jeo）」に記憶指示用法がないため、文脈指照応指示用法もないと  
いう点である。これに対し、「그（geu）」に記憶指示用法はあり、話し手の直接経験  
の中に含まれる対象を「그（geu）」を用いて指示する。「이（i）」の文脈照応用法は、  
日本語の「コ系列」とほぼ同じであると金水他（2002）は述べている。

このように金水他（2002：238）は用法別に韓国語と日本語の対照分析を行い、以  
下のように韓国語の指示詞をまとめた。

「이（i）」：今、眼前にある、話し手に近い対象、および文脈に導入された対象を示す。

「그（geu）」：今、眼前にある、聞き手に近い対象、および今眼前にはないが、話し  
手が直接的に知っている対象、文脈に言語的に導入された対象を指す。

「저（jeo）」：今、眼前およびそれに準ずる空間で、話し手から遠い対象を指す。

「그（geu）」の直示指示を除いた体系が古代日本語の体系に大変似ていると述べ、  
「그（geu）」の直示指示は、新しく生まれた派生的な用法ではないかと金水他（2002）  
は結論付けた。

以上、日本語の指示詞と韓国語の指示詞を対照分析した先行研究を検討してみた。  
両言語の指示詞は同じ3系列を持ち、形として似た部分があるに対し、用法によって  
使い方には相違点があることが分かった。



### 第3章 第二言語習得に関する先行研究

本章では第二言語習得研究について検討をする。本研究は韓国人による指示詞習得過程を明らかにすることが目的であるため、第二言語習得に関する理論と指示詞の習得に関する先行研究を踏まえた後、本研究の位置づけを考える。

#### 3. 1 第二言語習得研究

第二言語習得研究について、迫田（2002：10-11）は「学習者が目標言語をどのように習得していくのか、その習得に影響を与えるのは何か、教え方で違いが生じるのか、学習者の母語は大きな影響があるのか、第一言語習得と習得プロセスに違いがあるのかなど、第二言語習得にかかわるさまざまな事象の研究である」と述べている。つまり、第一言語以外の言語の習得を研究対象とする研究である。研究の内容によって第二言語と外国語を区別する場合があるが、一般的には学校で学ぶ外国語、英語の習得も第二言語習得研究の中に含まれる。本節ではこの第二言語習得研究の背景と基礎的理論である対照分析研究、誤用分析研究、中間言語研究について検討する。

##### 3. 1. 1 対照分析研究

第二言語を習得することは、母語の習得で身につけた古い習慣を抑え、反復練習を行ったり、誤りを即時に厳しく訂正したりすることによって新しい習慣を形成することであり、それらの考えが背景になった教授法が、1940年代から50年代にかけて、米国を中心に広まった文型練習重視の「オーディオ・リンガル・アプローチ（Audio-Lingual Approach）」である。このような背景を持つ「オーディオ・リンガル・アプローチ（Audio-Lingual Approach）」は、学習効果を上げるためには、誤用を産出させないようにすること、それは学習者の母語と目標言語の対立を徹底的に研究すること、つまり両言語の相違点を研究し明らかにすることが重要であった。これが「対照分析研究（Contrastive Analysis）」である。対照分析研究における「誤用」は、排除すべきものであり、学習者の母語と目標言語の違いから生まれるものである。つまり、誤用は「母語の干渉（interference）」の影響を受けて起きるとあると考えられ、対照分析の結果を教材や指導に反映すべきであると唱えた。対照分析の代表的な研究者 Labo（1952）は外国語を学ぶ際に母語で用いられる形式や意味、あるいはそれぞれが用いられる範囲を、外国語に転移しがちであると述べた。対照分析研究では、学習者の母語と似た要素は学習者にとって習得しやすく、逆に母語と異なる要素は習得が難しいと考えられた。これは「母語の習得で身につけた古い習慣を抑え、反復練習を行ったり、誤りを即時に厳しく訂正したりすることによって新しい習慣を形成する」という理論に基づいた考えである。つまり、学習者の母語が目標言語という新しいことを習得する際に転移（transfer）した結果、第二言語習得に母語の影響が現れ

るのである。前述したように、この考えは「オーディオ・リンガル・アプローチ (Audio-Lingual Approach)」の背景になっている。

オーディオ・リンガル・アプローチ (Audio-Lingual Approach) は対照分析から明らかになった学習者の母語と目標言語の異同に基づいて教材を開発し、両言語がズレがある部分を中心に繰り返し練習することによって、母語の転移を抑えて正確な第二言語を習得することを目指した。しかし、学習者の発話には対照分析で予想された誤用や習得上の困難点が必ずしも見いだせないこと、又は母語の影響では説明できない学習者に共通の誤用が生じることが指摘されるようになった (Ravem1968)。すなわち、第二言語習得においても学習者の心的なプロセスが関わっており、学習者は与えられた言語データからルールを導き、それを修正しながら目標言語を習得していると考えられるようになった。こうして、対照分析研究は誤用研究と中間言語研究が多く行われるようになり、学習者の母語にもかかわらず、学習者言語に共通にみられる傾向が注目を集めた。迫田 (2002 : 22) は上記の「対照分析研究」の問題点を以下のよう

- ①対照分析による予測が、必ずしもそのとおりにならなかった。
- ②母語の異なる学習者から同種の誤りが観察された。この事実は、誤用は母語の干渉であるとする対照分析の理論では説明できない。
- ③母語と目標言語の言語的な相違の多少が習得に影響すると主張していたが、その相違とは何を基準としているか不明、などの問題点が示された。

迫田 (2002) は以上の 3 つの問題点により、言語研究の流れは学習者の誤用を収集して、その分析から新たな論を展開する誤用分析研究へと移っていたと述べている。

### 3. 1. 2 誤用分析研究

誤用分析研究は、対照分析で立てられた予測が必ずしもその通りにならない事実として、母語が異なった学習者から同類の誤用が出てきたことから、学習者差の誤用に注目した研究である。対照分析研究では、誤用はできるだけ排除して、誤用を生じさせないように正確な表現を産出できるような練習が重視された。それに対し、誤用分析研究では、誤用は必然的なものとする。迫田 (2002 : 23-24) によると、学習者は自分たちが立てた仮説を検証しており、それが間違っていれば誤用になり、学習者は誤用を産出しながら、少しずつ習得を進めていくようになる。従って、誤用を産出しないで習得が進むのは不自然であり、誤用は決して回避すべきものではないと述べている。

コーダー (1988 : 10-11) は、学習者の誤りについて、以下の 3 つの異なる点で重要

な意味を持つと述べている。

第1に教師の立場では、系統的な分析した場合には、学習者がどの程度目標を達成したか、またその結果あと何を習得すればよいかを明らかにしてくれる。

第2に、研究者にとって、誤りは、言語がどのように習得されたり、獲得されたりするか、学習者がその言語の体系を発見する過程において、どのような方略がや手順を取り入れているかを示す証拠となる。

第3に、(ある意味ではもっとも重要な側面であるが、) 誤りは学習者自身にとって必要不可欠なものである。その理由は、誤りをおかすことは学習者が学習するために用いる1つの手段であるとみなすことができるからである。それは学習者が、学習している言語の特性について自らの仮説を試す際に用いる1つの方法である。したがって、誤りをおかすことは、母語を獲得する子供と第二言語を習得する人が共に取り入れる1つの方略である。

学習者が産出する誤用にはいくつかの分類がある。迫田(2002)による誤用の分類を検討する。まず、第1の分類は、「ミステイク (mistake)」と「エラー (error)」である。ミステイク (mistake) は単なる言い間違いで、本来は正しく使えるけれども、体調が悪かったり、つい忘れていたりして、間違ってしまう場合の誤用であり、エラー (error) はどの場面や環境でも、一貫してその間違いが生じる場合の誤用である。また、これを Richards (1971) における「言語間エラー」と「言語内エラー」で分類すると、言語と言語の問題があって生じる誤用、言い換えれば、いわゆる「母語の影響」によって起きる誤用を言語間エラーといい、学習している言語の中で活用を間違えるなどの誤用を言語内エラーという。

このように、誤用分析研究は習得過程において「母語の影響」を認めない立場ではない。ところが、誤用分析で最も決定的な問題点がある。それは「誤用の判定」と「回避」の問題である。研究者間で「誤用」の判断が常に一致するとは限らないからである。また、迫田(2002: 26)は次の例を挙げて、誤用の判定について述べている。

日本の女と友達になりました。 (初級・韓国語母語話者)

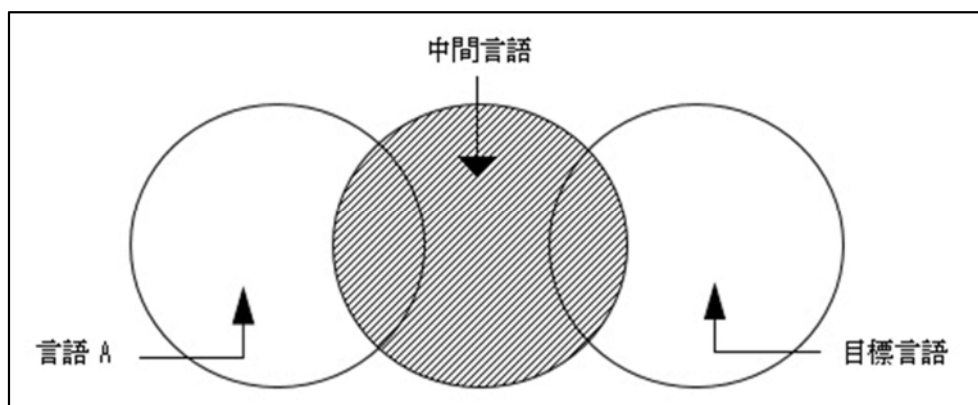
上記の文について迫田(2002)は、「女」よりは「女の人」が適切であるが、誤用とするには意見が分かれるかも知れないと述べた。このように、上記の文を誤用の判定するか、何の誤用と判定するかは困難であり、複数の判定者の間で違いが出てくる可能性がある。誤用の判定に違いが生じると、その分類の妥当性に問題が出て、結果まで疑わしいものになってしまうのである。

これに加え、誤用分析の致命的な弱点は、「回避」を扱うことができない点である。回避とは、学習者が習ったものであっても使い方をよく分からなかったり、自信なかったりするため、その文法や表現を使わない状態を意味する。水谷（1985）の「非用」とも呼ばれる。

誤用分析研究は学習者が産出する誤用だけ対象にして分析するため、表面に出てこない見えない学習者の習得上の問題については明確にすることができない。このような問題点を含め限界があることが分かった。そのため、誤用のみではなく「正用」も含めて「学習者の言語体系」を探る「中間言語研究」が盛んになっていった。

### 3. 1. 3 中間言語研究

1970年代以降に行われた第二言語習得研究では、学習者の内面で言語習得がどのように行われているかに注目した研究が主流になった。Selinker（1972）は、学習者の第二言語能力の総体を「中間言語（Interlanguage）」と規定した。中間言語とは、学習者の心的メカニズムによって形成された、学習者の母語の体系とも目標言語の体系とも区別される独自のシステムである。



<図 3.1>コーダー（1988：18）による中間言語

果たして、「中間言語」とは一体何だろうか。コーダー（1988：87）によると中間言語の主な特徴は「標準的な制度化された言語と比較すると、言語学の観点では『縮小された』または『簡略化された』体系だということ」である。

迫田（1997：7）は中間言語について次のように規定している。

第二言語習得過程において形成される学習者特有の言語体系の存在を認める立場に立ち、学習者の可変的な言語体系を中間言語と呼ぶ。

以上のことをまとめると、中間言語は「第二言語学習者の持つ言語体系」であり、

その研究は、学習者が母語に影響されない共通の傾向があると認める研究である。以下の<表 3. 1>は研究者による中間言語の説明をまとめたものである（山岡 1997 : 66 -67）。

<表 3. 1> 山岡（1997 : 66 -67）による研究者別の「中間言語」の説明

| 研究者    | 定義  |
|--------|---|
| マクローリン | 第二言語学習者が目標言語に到達する途中で構築する暫定的文法（McLaughlin 1987 : 31） |
| セリンカー  | 目標言語とも母語とも異なった学習者特有の言語体系（Selinker 1972 : 213）       |
| スポルスキー | 第二言語学習者の目標言語の知識（Spolsky 1989 : 60）                  |
| スターン   | それ自身固有の特殊と規則を持った個別の言語の型ないしは体系（Stern 1983 : 125）     |

中間言語は習得段階に応じて変化していく体系なので、母語を手掛かりとして目標言語へと向かっていくさまざまな段階のある時点でも言語体系を指す場合と、その連続性としての言語体系を指す場合とがあると迫田（2002 : 28）と述べ、中間言語の特徴を以下のようにまとめた。

- a. 中間言語には体系がある。
- b. 中間言語は、新しい形式や規則を用意に適用し、修正され、発達していく。
- c. 中間言語は同一個人の利用者の同じ時期に、異なった形が存在する。
- d. 中間言語の発達過程において、化石化(ある項目が誤用のまま改善されないで残る現象)が見られる。

（迫田 2002 : 29）

「化石化（fossilization）」と呼ばれる用語は、中間言語の大きい特徴である。「化石化（fossilization）」とは、発達が途中で止まっしまい、正しい形が習得されないまま定着してしまうという現象である。

第二言語学習者の特有の言語体系が存在するとして研究を進めた中間言語研究は、学習者の習得過程の解明という目標を掲げ、それまでの記述研究から理論研究へと発展していった。しかし、中間言語研究にも問題点が2つある。その問題点は1つには「中間言語」という用法であり、2つには「中間言語の実体のあいまいさ」である（迫田 2002 : 32）。

迫田（2002）によると、中間言語という用語は研究者によって、様々な使われ方をしたため、共通の理解が困難となり、この用語を使う必然的な前提が失われていった。また、中間言語実体が可変的なものであるため、習得過程を明らかにする目的として「中間言語」を使用するには疑問が生じる。中間言語研究による先行研究については

3.3 で詳しく述べる。

### 3. 2 指示詞の習得研究

本節では、本研究と関係性が高い第二言語習得論における指示詞の習得に関する研究をまとめる。

まず、安（1996）は「日本語と韓国語の両者の相違点と類似点が明らかにされ、第二言語習得に対する学習者の母語の干渉が生じる部分が発見された」と述べ、それにより予測される誤用を未然に防ぐことが可能になると主張し、日韓両言語の対照分析に基づく非現場指示に関する調査を実施した。各学習者の段階における習得状況とその変化を韓国語の干渉の観点から調べることを目的とし、その調査の結果を以下のように述べている。

韓国人日本語学習者の非現場指示の習得においては、両言語の対応関係の影響を強く受けるが、その過程において、中級で一時的に選択基準が揺れる点が特徴である。すなわち、梅田（1982）の言う「文法構造の類似点と相違点」を指示詞習得に適用するならば、これは両言語の類似点に頼る初級段階、相違点に気付いて選択基準が揺れ、誤用が増加する中間段階に関わるものだと解釈できる。また、李（1990）の「進歩しなくなる」時期とは、学習が進むにつれてより複雑な体系を習得し、初級での選択基準が一時的に揺れる中間段階であることが本研究により示された。

安（1996：11-12）

韓国人学習者による母語の干渉について、より正確な議論を行うためには、他の母語話者に対しても調査を実施し、その結果を比較し、第二言語習得を総合的に捉え一般化していく必要性が考えられると述べ、安（2005）は、韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者を対象にし、日本語の指示詞の非現場指示「コ・ソ・ア」の習得研究を行った。韓国人日本語学習者と中国人日本語学習者の非現場指示の習得を主に「母語の影響」の観点から調べた結果、韓国人日本語学習者、中国人日本語学習者ともにソとアの使い分けが困難であることが分かった。しかし、安は、韓国人学習者と中国人学習者間に顕著な差が見られた部分があることで、ソとアの使い分けが困難であっても同じカテゴリーの習得困難とすることは無理であると考えた。例えば、母語が異なる学習者二人が「ソ系列」を用いるべきであるのに「ア系列」を使用してしまい、同一の誤用が見られたとする。その同じ類の誤用が中間言語と言われるが、学習者独自の共通の言語体系が形成されたと規定するには少し無理がある。

安（1996, 2005）は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の習得を「母語の干渉」という立場から、「非現場指示」の習得に集中して調査を行った。ところが、安（1996, 2005）が述べているように、「現場指示」の習得には困難がないのだろうか。また、指示詞

の習得過程では「母語の干渉」が主に現れるのだろうか。

このように、第二言語習得における日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究は、安（1996, 2005）のように、学習者の母語の影響という立場から習得研究を行う場合もあるし、「中間言語」という立場から指示詞習得研究を行う研究者もいる。

迫田（1993）は入門期に習うコ・ソ・アが上級レベル学習者にも間違っ使われることに疑問を感じ、レベルが上がるにつれ、指示詞の使い方は上達しているのか、どの指示詞が最も難しいのか、その困難点には母語の違いが影響しているのか、この3点を調べることを目的として研究を行った。調査対象を指示詞の体系が日本語と同様の3項対立の母語の学習者と日本語と異なる二項対立の母語の学習者の60人である。結果として、迫田（1993）は話し言葉の指示詞の誤用にソとアの混同、母語が違うにも関わらず同じ「ソ系」と「ア系」の誤用が生じたことで、ソとアの使い分けには母語の指示詞の体系が影響しているとは言えないことが明らかになったと述べている。

この結果から、学習者の母語が違っても同一の誤用が見られることが分かり、「中間言語」という立場から指示詞の習得研究を行っている。迫田（1996）は、迫田（1993）の結果をさらに考察するため、韓国人日本語学習者3名と中国人学習者3名を対象に3年間の縦断的研究を行い、結果として、母語の違いにも関わらず、ソ系を使うべき場合にア系を使用する「ソ→ア」の誤用が見られ、習得が進んでも減少しなかったと述べている。このソ系とア系の選択ルールは、日本語母語話者とは異なっており、接続する名詞に影響を受けることが分かり、これは、日本語のコ・ソ・アの中間言語を形成する「学習者独自の文法」と言えるのではないかと迫田（1996）は主張している。

このように、習得状況の要因としては、前述したように「母語の影響」と「学習者独自の新たな文法構築：中間言語」などがあるが、「学習者の学習環境」の違いによる習得状況を考察する研究もある。

孫（2008）は、台湾人日本語学習者を対象として、第二言語及び外国語としての日本語学習者における非現場指示の習得調査を行った。調査資料として、宋（1991）の枠組みに基づいて作成したアンケート調査による学習者の回答を集計し、学習環境が非現場指示に及ぼす影響を探った。孫（2008：179）の調査結果は、以下の通りである。

①学習環境が非現場指示の習得に与える影響を日本語能力別に検討したところ、下位においては、JSLとJFLは同等な結果となったが、上位においては、JSLはJFLより非現場指示の習得が進んでいた。誤用においては、中国語による負の転移である「誤用コ」は、「相対的課題指示のア」以外の用法でJFLに多い一方、母語話者からのインプットの影響でJSL下位に「独立的话题指示のア」における「誤用のソ」が多く見られた。

②日本語能力が非現場指示の習得に与える影響を学習環境別に検討したところ、JSL

においては、日本語能力が高くなるにつれて、非現場指示の習得が進むのに対して、JFLにおいては、その変化が少なかった。

孫（2008）は調査結果によって、目標言語との接触量によって学習者が異なる中間言語の仮説を構築していると考えられ、学習環境が習得に与える影響を重視すべきであるということを主張したいと述べている。そして、迫田（1998）で指摘されるように、指示詞の言語能力（知識）と運用能力は必ずしも同じではなく、調査によって異なる結果が得られることも予想されると孫（2008）は考えた。第二言語習得の状況を「母語の干渉」による立場、「中間言語」による立場、「学習環境の違い」による立場のそれぞれの研究を検討してみたが、これらの研究は、指示詞の中で「非現場指示」の習得状況を対象にした研究がほとんどである。その中で、Kawakami(2010)は、日韓両言語学習者の指示詞習得に関する研究を行った。日本語を学習する韓国人学習者72名と韓国語を学習する日本人学習者70名を対象としたアンケート調査を行い、各目標言語の指示詞の習得状況を考察している。

Kawakami（2010）は、韓国人日本語学習者と日本人韓国語学習者、両言語学習者の指示詞の習得に関しての対照研究や、現場指示の習得に関する調査はさほど行われていないと指摘している。そのため、両言語学習者が指示詞選択の際に誤用が生じるのは、母語の干渉であるという立場から、指示詞の現場指示と非現場指示両方の習得状況を考察している。アンケート調査の指示詞の例文は、宋（1991）の分類に基づいて24項目を作成し、それをまた、韓国語に訳したものである。日本語のアンケート調査は韓国人日本語学習者を対象にし、韓国語のアンケート調査は日本人韓国人学習者を対象にしている。そして、結果を比較し、両言語学習者の指示詞習得を考察している。結果としては、韓国人日本語学習者における両言語指示詞間にズレがある用法は、母語の干渉により、習得が困難であるということが明らかになって、非現場指示の習得が困難であるというよりも、現場指示・非現場指示両用法において韓国語と1対1で対応していないものが母語の干渉により、習得が困難であるということが証明できた。日本人韓国語学習者の場合は、学習歴が長くなるにつれ、母語の干渉を受けず、正しい指示詞選択を行っているが、日韓両言語1対1の対応していない設問が、1対1の対応している設問に比べて正答率が低いことから、日本語との比較による指導が必要であるとKawakami（2010）は結論付けている。

Kawakami（2010）の特徴は、両言語学習者を対象にして指示詞の習得状況を比較して、両言語学習者の「母語の干渉」による誤用が明らかになったことである。しかしながら、対象になった両言語学習者の数が足りないと考え、更に深い研究を再度行い、仮説を証明する必要があると考えられる。

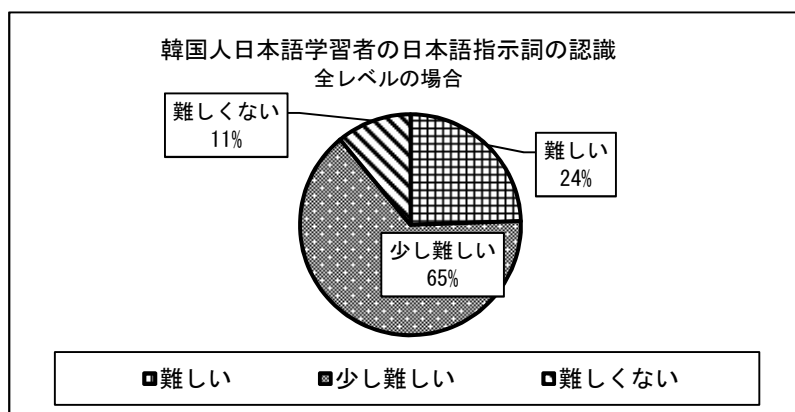
続いては、韓国人日本語学習者を対象にして、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の誤用に関する研究を行った具（2010）である。韓国人母語話者が苦手とする指示詞体系を



明らかにすることが目的で、アンケート調査を行った。アンケートは現場指示 8 問、非現場指示 12 問、計 20 問で調査を実施した。調査対象は韓国語が母語である日本語学習者で、上級 88 人、中級 50 人、初級 37 人で計 175 人である。目立つ調査結果としては、相対的現場指示の融合型の「ソ系」が困難であることが分かったことがあげられる。しかし、具（上掲書）の研究は、誤用の研究であり、韓国人日本語学習者が困難である指示詞体系は分かるかも知れないが、韓国人日本語学習者の指示詞習得の状況を検討するには足りないと考えられる。

### 3. 3 柳 (2013, 2014)

上記に先行研究から、習得過程を明らかにするためには、どちらか一つに絞らず、習得過程で両方現われるという立場に立ち、韓国人日本語学習者の指示詞の全体的な習得状況を明らかにする必要があるだろうと考え、柳 (2013) は、韓国人日本語学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の全体的な習得過程を調査し、習得状況を明らかにすることを目的として調査を行った。柳 (2013) の調査目的は、韓国の大学で日本語専攻・非専攻として日本語を学習している韓国人学習者を対象にし、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の現場指示・非現場指示の習得過程を明らかにすることである。習得が困難な要因が、学習者の「母国語の影響」によるものなのか、学習者の独自の文法項目の「中間言語」によるものなのかどちらでも絞らず、韓国での韓国人日本語学習者の日本語の「コ・ソ・ア」の習得過程を考察し、それを更に明確にするのが目的として、調査を行った。安 (1991) と金水・田窪 (1992) の分類に基づいて、項目を作成したアンケート調査を行い、韓国の大学で日本語を専攻として学んでいる韓国人大学生と、日本語を非専攻として学習している韓国人大学生 237 名を対象にし、指示詞は現場指示・非現場指示用法両方の習得過程を考察した。



<図 3. 2> 柳 (2013 : 32) 韓国人の日本語指示詞の認識 (全レベルの場合)

上の図は韓国人日本語学習者の指示詞に関する認識調査をした結果を表したもの

である。日本語と韓国語の指示詞は類似性が高く、同様の項目も存在するのであり、この点で韓国人学習者は日本語指示詞を簡単な文法項目として捉えるとは言えないことが図 1 で分かった。「難しい」と「少し難しい」と答えた学習者が 89%である。多くの韓国人学習者は指示詞を難しいと思っていることが分かった。日本語と韓国語の指示詞の体系は似ている部分が多く、韓国人日本語学習者はそこに頼りすぎる（安 1996）とは言えないだろう。これで多くの韓国人学習者は、日本語の指示詞を母国語と関連して捉えていないことが分かった。

アンケート調査の結果を先に述べる。調査の結果、韓国人日本語学習者の指示詞習得状況には、「母国語の影響」による習得困難と学習者独自の新たな文法構築の「中間言語」による習得困難の両方が見られた。ところが、調査の結果、その二つ以外に、指示詞用法間に習得の困難さがあることが分かった。調査項目であった「相対的現場指示の融合型『コ系』」の結果を見てみよう。

<表 3. 2> 柳（2014：87）相対的現場指示の融合型「コ系」の結果

| 9. (AとBが同じ女の人の写真を一緒に見ながら)           |            |            |    |           |           |     |           |     |     |     |     |     |
|-------------------------------------|------------|------------|----|-----------|-----------|-----|-----------|-----|-----|-----|-----|-----|
| A: { <b>この</b> / その / あの }人は誰ですか。   |            |            |    |           |           |     |           |     |     |     |     |     |
| B: { <b>この</b> / その / あの }人はチェさんです。 |            |            |    |           |           |     |           |     |     |     |     |     |
|                                     | 正用         | 誤用         |    | コ・コ       | コ・ソ       | コ・ア | ソ・コ       | ソ・ソ | ソ・ア | ア・コ | ア・ソ | ア・ア |
| 初級                                  | 30%        | <b>70%</b> | 初級 | <b>23</b> | <b>17</b> | 4   | <b>11</b> | 10  | 2   | 2   | 4   | 1   |
| 中級                                  | 42%        | <b>58%</b> | 中級 | <b>28</b> | <b>16</b> | 1   | 3         | 2   | 1   | 2   | 4   | 9   |
| 上級                                  | <b>58%</b> | 42%        | 上級 | <b>56</b> | <b>21</b> | 1   | 9         | 1   | 1   | 6   | 0   | 2   |
| 16. (お店に店員、客の両者すぐ近くにある物を指しながら)      |            |            |    |           |           |     |           |     |     |     |     |     |
| 客: { <b>これ</b> / それ / あれ }ください。     |            |            |    |           |           |     |           |     |     |     |     |     |
| 店員: { <b>これ</b> / それ / あれ }ですね。     |            |            |    |           |           |     |           |     |     |     |     |     |
|                                     | 正用         | 誤用         |    | コ・コ       | コ・ソ       | コ・ア | ソ・コ       | ソ・ソ | ソ・ア | ア・コ | ア・ソ | ア・ア |
| 初級                                  | 23%        | <b>77%</b> | 初級 | 17        | <b>18</b> | 6   | <b>15</b> | 3   | 3   | 6   | 2   | 4   |
| 中級                                  | <b>64%</b> | 36%        | 中級 | <b>42</b> | 5         | 1   | 7         | 1   | 1   | 3   | 4   | 2   |
| 上級                                  | <b>58%</b> | 42%        | 上級 | <b>56</b> | <b>11</b> | 7   | <b>13</b> | 1   | 1   | 7   | 0   | 1   |

「相対的現場指示の融合型・コ系」は日韓両言語が 1 対 1 で対応している項目であるにもかかわらず、誤用が多く見られることに注目したい。「相対的現場指示の融合型のコ系」の場合は初級の段階で習った「相対的現場指示の対立型」の影響を受け、この用法の習得が進んでいないことがわかる。これらの結果から、学習者の母国語と目標言語が 1 対 1 で対応する文法項目であっても、必ずしも習得に良い影響を与えるとは言えないということが分かった。

非現場指示の場合はどうだろうか。

<表 3. 3> 柳 (2013 : 54) 独立的話題指示の「ソ系」の結果

| 3. (独り言または心でつぶやいて)  |     |     |    |   |    |    |
|---|-----|-----|----|---|----|----|
| A : 田中さんは山田先生という人のことばかり話していたけど、{ この / その / あの } 1人は偉い人なのだろうか。 |     |     |    |   |    |    |
|   | 正用  | 誤用  |    | コ | ソ  | ア  |
| 初級  | 28% | 72% | 初級 | 9 | 21 | 44 |
| 中級  | 48% | 52% | 中級 | 1 | 31 | 33 |
| 上級  | 55% | 45% | 上級 | 0 | 53 | 44 |

設問 3 は、田中さんが言った山田先生のことについて、A が独り言で話す文であり、山田先生を指示する指示詞を選ぶ文である。まず、設問 3 の正用率は、初級の場合 28%、中級の場合 48%、上級の場合は 55%である。「ソ→ア」の誤用が、レベルが上がっても減少せず、習得が進んでいないことがわかる。このように習得が困難である要因として、Kawakami (2010) は、日本語の指示において記憶の中にある事柄を指し示す場合には「ア系」を用いて問うという認識から、「ソ→ア」の誤用が多く見られるのではないかと述べている。

設問 3 についてインタビュー調査を行った結果、Kawakami (2010) が述べたように影響を受けているような答えが少なからずあった。これにより、独立的話題指示「ソ系」は、相対的話題指示の「ア系」の影響を受けていることが分かったことから、母国語の韓国語と日本語が 1 対 1 の対応をする文法であっても、必ずしも習得の過程に役に立っていないことが分かった。すなわち、母語と日本語が 1 対 1 の対応する用法にも関わらず、「母語の干渉」の「正の言語転移」・「負の言語転移」ではなく、日本語指示詞の他の用法との揺れで誤用が生じ、困難であると言えるだろう。

このように、母国語と目標言語間の文法が 1 対 1 する項目であっても、第二言語習得論でよく言われる「母語干渉」の「正の言語転移」が現れないことが、「相対的現場指示」の結果から明らかになった。それは言い換えれば、初級の指示詞習得が中・上級の習得に影響を与えていると言える。また、日本語指示詞の全般の習得に困難があることが明らかになった。

### 3. 4 第二言語習得に関する本研究の立場

3. 1 節から 3. 3 節にわたって、第二言語習得に関する研究の流れと先行研究を検討した。本節では、以上のことに基づいて、第二言語習得に関する本研究の位置づけを示す。

まず、第二言語習得において第一言語である母語を排除して考えることはできない。しかし、学習者の習得過程には母語の影響では説明できない誤用と、また、母語の違いにも関わらず同類の誤用が生じたことで、「中間言語」という用語が Selinker によって誕生した。

柳（2013）によると、韓国人学習者の指示詞習得に関して調査の結果として、「指示用法間の影響」が良く見られた。→「指示用法間の影響」とは、初級で習った指示詞に関する知識が、中・上級の習得に影響を与えることを意味する。筆者はこの部分に「中間言語」が形成されると考えた。

中間言語について、迫田（2001：23）には「母語が異なった学習者共に見られたソ系とア系の誤用は母語の影響とは限らないことが分かった。（中略）これは、日本語のコ・ソ・アに中間言語を形成する『学習者独自の文法』と言えるのではないだろうか」と述べている。

このように「中間言語研究」は、母語の違いにも関わらず、同類の間違いが生じたことに焦点を与えているのが殆どである(迫田 1997, 2001)。

果たして、「母語の違いによる異なる中間言語」は形成されないだろうか。つまり、母語である韓国語では説明できない「韓国人学習者独自の文法」、「韓国人学習者の特有の中間言語」は形成されにくいのだろうか。

Kawakami（2010）と柳（2013）には韓国人学習者が初級段階で練習する「『こ』で問い、『ソ』で答える」の影響で、融合型の習得が進まなくなるということが明になった。これは母語である韓国語では説明できないものであり、いわゆる中間言語に該当すると考える。「『こ』で問い、『ソ』で答える」という形式は Kawakami によると、韓国の初級の段階で練習する文型であり、その練習のせいで、同一の指示詞をもちいる「融合型」の用法に誤用が生じると述べている。このようなことから、本研究は以下の4の研究課題を挙げて、研究を進める。

- 課題① 韓国語母語話者(以下韓国人)学習者の指示詞習得状況を明らかにする。
- 課題② 韓国人学習者の指示詞習得過程に影響を与える要因について具体的に明らかにする。
- 課題③ 韓国人学習者による目標言語と母語の関係を明確にする。
- 課題④ 指示詞の習得過程で形成される韓国人学習者の特有の「中間言語」を明らかにする。

## 第4章 研究方法の概要

### 4.1 調査方法

第二言語習得研究には、内容の中身を分析するか、数量的に内容を分析するかという点で「質的調査」と「量的調査」という分類がある（迫田 2002 :143）。「質的調査」は、ケース・スタディーという事例研究の方法でよく知られている。多くはありのままの状態を観察し、資料を収集していく。他方「量的調査」は、多量の資料収集を行い、多くの場合がその資料に基づいて統計分析し、結果を一般化する。

本研究では、韓国人学習者が指示詞の習得過程で形成する中間言語を考察するために、上記の「量的調査」と「質的調査」両方の調査を行った。まず、韓国人学習者の特有の中間言語が形成されるのかを調査するため、韓国における日本語教育の現状や教材分析を行い、そこから明らかになった結果を基に、「量的調査」と「質的調査」を行い、総合的に考察する。

### 4.2 調査構成

本研究では、以下の3つの調査を行った。

- ①韓国の日本語教材における日本語指示詞
- ②日本語指示詞の習得過程に関する量的調査
- ③日本語指示詞の習得過程に関する質的調査

まず調査①は、韓国の日本語教材の中では「コ・ソ・ア」をどのように説明しているのか、または、「コ・ソ・ア」を用いた指示詞文はどのような用法が載せられているのかなどに関して、教材分析を行う。教材は韓国の学校教育機関である「高校」と「大学」、「それ以外の教育機関」に分けて、それぞれの機関で使用されている教材を分析する。

調査②は、韓国人学習者による指示詞習得過程を明らかにする調査であり、調査①の教材分析から明確になった結果を基に、アンケートを作成し調査を行った。調査②のアンケートに引用して指示詞文はすべてが、調査①の調査対象であった教材から直接引用した。

調査③は、調査の目的は調査②と同一であり、量的調査から得られたデータを更に具体的に探るため、「質的調査」を実施した。

## 第2部 韓国人学習者による指示詞の習得に関する調査

第2部は、調査の結果と考察の部分であり、第5章から第8章までの章で構成されている。第5章では、韓国の日本語教材における日本語指示詞の調査し、韓国人学習者の習得過程にどのような影響を与えるのか考察する。第6章では、第5章の調査で明らかになったことに基づき、韓国人学習者の習得過程を量的調査を通じて明らかにすることが目的である。続いて第7章では、第6章の量的調査をさらに深く考察するため質的調査を行った。第8章は結論に当たる部分であり、第5章から第7章の調査結果と考察を総合的にまとめる。それぞれの調査については以下に各節で詳しく述べる。

## 第5章 韓国の日本語教材における日本語指示詞

### 5.1 はじめに

韓国語母語話者の学習者にとって、日本語は学習しやすい外国語だと思われる傾向がよくあると言われる(宋 1991, 安 1996, 具 2010)。その理由として「日本語と韓国語、両言語は文法構造の枠組みや語彙など、多くの点で類似性が高い(安 1996:1)」ことなどが挙げられている。そして、韓国人学習者はその類似性に頼りすぎるあまり、間違いに気付かず、一向に習得が進まなくなったりすると言われている(宋 1991, 安 1996)。その中でも指示詞の体系は、日韓両言語は非常に類似しているが、表現の微妙な相違点が存在する。韓国人学習者はその類似性により、日本語指示詞の習得を疎かにしがちで(安 1996)、習得が困難で、誤用が生じると言われている。また、指示詞の「コ・ソ・ア」は、日本語学習者が入門段階で学習する項目であるにもかかわらず、なぜか上級学習者にも依然としてエラーが見られる(迫田 1997)のはなぜなのかに関して解明しようとする研究もある。それらの疑問を明らかにするため、柳(2013)は韓国人学習者による日本語「コ・ソ・ア」の習得状況を明らかにするための調査を行った。その結果、韓国人学習者による「コ・ソ・ア」の習得状況は予想外に複雑であり、習得に影響を与える要因を一つに絞ることができなかった。様々な要因が見られたため、更なる調査と考察が必要であると考えた。その中でも、初級の段階で習得した指示詞が中・上級の指示詞習得に影響を与える「指示詞用法間の影響」が多く見られた。そのため、韓国人学習者の「コ・ソ・ア」の習得過程を調査する必要があると考えた。

韓国における日本語教育は、学校教育と学校以外の教育で分けられる。学校教育機関は、高校と大学が中心であるが、最近では、小学校と中学校でも日本語教育を実施している学校が増えている。特に、中学校における日本語教育は、2001年から第2外国語選択科目として正規の教育課程に日本語が含まれるようになった(遠藤・鄭 2005: 20)。

韓国での日本語教育は1945年から1960年度までは、空白期間であったが、1961年に韓国外語大学に韓国で初の日本語科が開設されたことから徐々に増えてきた。その後、1955年日韓国交正常化と共に、両国の政治的・経済交流が増え、日本語教育の必要性が高くなった。1973年に高校における日本語教育が初めて実施され、130校の韓国の高校で日本語教育が始まった。2001年からは中学校課程に日本語が選択科目として正規教育になった<sup>2</sup>。

このように、韓国における日本語教育は徐々に広がった。国際交流基金の『2012年海外日本語教育機関調査』によると、韓国国内における日本語学習者数は、3,984,538人で、2009年の3,651,232人より9.1%増加し、教育機関数も16,045ヶ所で2009年

---

<sup>2</sup> 遠藤・鄭(2005: 35-38)を参考した。

の14,925ヶ所より7.5%増加している。これより、それぞれの機関による日本語教育の現状と韓国の日本語教材における指示詞について調査した結果を見てみる。

## 5. 2 現在の韓国における日本語教育の現状

韓国における日本語教育は、小学校、中学校、大学で実施されている。それ以外に日本語を習得できる教育機関は、個人運営の日本語学校<sup>3</sup>などがある。本節では主に学校という教育機関における日本語教育中心に「高校」と「大学」の日本語教育の現状を検討していきたい。

### 5. 2. 1 高校における日本語教育

高校における日本語教育は1973年に初めて実施され、今日まで続いている。外国語高校のような特殊学校以外、一般高校での日本語は第2外国語の選択科目として開設されている。韓国の高校における日本語教育の規模は、韓国・ソウル市教育委員会の『2011年高校選択科目編成現況』によると、第2外国語として、日本語の授業を開設した学校はソウル市内の高校222校の中で196校(88.3%)である最も多いと述べている。また、同じ機関による『2015年ソウル第2外国語教育の活性化推進の計画』の調査によると、2014年入学性基準でソウル市内の高校317校の中263校の高校で日本語の科目が開設されており、中国語223校、フランス語47校、ドイツ語27校、スペイン語6校の中で、第2外国語の授業の中で日本語が最も多く開設されている。

その理由は、日本語は韓国語と語順と語彙などが類似している部分が多く、他の言語より学びやすい言語であると言われているからではないかと考えられる。

韓国の高校における日本語教育の目標は何だろうか。それについては、Youn (2012: 1) に述べられている部分を引用する。

日・韓交流に能動的に対処できる人材を育てるために開設した基礎科目である。したがって、外国語教育の実用的な目標や文化的な目標、教育的な目標を達成するために、日常生活につながるやさしい日本語を理解し、表現できる基礎的なコミュニケーション能力を蓄え、文化の相互理解と国際交流に積極的に参加する態度を養うため、上記のような目標を持つ。

Youn (2012: 1) <sup>4</sup>

このことからみると、高校における日本語教育の最終目標は「国際交流」であり、その目的を達成するために、『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』という日本語教材を用いて授業を実施する。『日本語Ⅰ』は入門から初級レベル、『日本語Ⅱ』はその上のレベルで、

<sup>3</sup> 韓国では「日本語塾」と呼ぶ。

<sup>4</sup> 原文は韓国語であり、日本語訳は筆者による。



初中級の内容で構成されている。

## 5. 2. 2 大学における日本語教育

本節では、趙（2010, 2014）の調査結果から大学における日本語教育を検討する。韓国の大学における日本語教育は、1961年韓国外語大学の日本語科、1962年国際大学（現 SEOKYEONG UNIVERSITY）の日語日文学科を始め、1985年まで49学科、1995年まで73学科、2010年には107学科が開設された（趙 2010：23）。大学における日本語関連学科は、日本語科・日語日文学科以外に様々な学科と学部がある。趙（2010）の年度別開設された学科をまとめた<表 5.1>を以下に直接引用する。

<表 5.1> 趙（2010：24）の年度別に開設された学科<sup>5</sup> 数(%)

| 専攻学科<br>開設年度   | 日語日文学科   | 日語教育学科  | 日本語<br>学科 | 日本<br>学科 | 日語日本学科 | 日本語<br>関連学科 | 合計        |
|----------------|----------|---------|-----------|----------|--------|-------------|-----------|
| 1961～1985年     | 33(67.3) | 8(16.3) | 5(10.2)   | 2(4.1)   | —      | 1(2.0)      | 49(100%)  |
| 1961～1995年     | 45(61.6) | 8(11.0) | 14(19.2)  | 5(6.8)   | 1(1.4) | —           | 73(100%)  |
| 1961～2010年(4月) | 36(33.6) | 6(5.6)  | 27(25.2)  | 16(15.0) | 4(3.7) | 18(16.8)    | 107(100%) |

基本的に「日語日文学科」が最も多い割合を占めている。その次に「日本語学科」「日語教育学科」などがある。「日本語関連学科」は、日本学および観光通訳で構成されている学科を意味する。

趙（2014）の結果を加えると、2014年韓国の大学での日本語関連学科名は、「日語日文学科」（33.7%）、「日本学科」（12.9%）、「日本語科」（11.9%）、「日本語学科」（9.9%）の順で多い（趙 2014：214）。趙（2010）は、これらの教科課程の変化を考察し、「日語日文学科」の専攻科目として、「日本学」が増えたことに対し、「日本語学」と「日本文学」は減ったと述べている。また、専攻学科名で「日語日文学科」が減り、「日本語学科」、「日本学科」、「日本語関連学科（日本学・観光通訳など）」が増えたことと関係があると考えられる。このような結果から、趙（2010）は相対的に日本文学の科目を減らし、日本語能力と日本に関する知識の習得を重視、すなわち、日本語に関する専門的、実用的能力の重視への変化の結果であると述べている。大学の専攻は、やがては就職にも繋がるため、「文学」より就職に役立つ実用的な学問が中心となっている。

## 5. 3 調査目的

韓国人学習者による指示詞習得を調査した結果、母国語では説明できない習得状況が見られたため、何らかの影響を受けていることが明らかになった（柳 2013）。これらの要因を探るためには、まずは韓国における日本語教材を検討する必要があると考えられる。

<sup>5</sup> 原文は韓国語であり、日本語訳は筆者による。

本調査の目的は、韓国人学習者の日本語「コ・ソ・ア」の習得に影響を与える要因を明らかにするため、韓国における日本語教材による「コ・ソ・ア」の扱いを調査する。韓国の日本語文法教材に掲載されている指示詞を分析すれば、韓国人学習者の「コ・ソ・ア」習得に影響を与える要因探しの手掛かりの一つになると考えられる。

## 5. 4 調査対象と内容

高校で使用されている教材『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』、大学で使用される『日本語教材』、そして高校や大学以外の教育機関で使用される『日本語教材』を調査対象にする。各教材が対象としている学習者は、高校生、大学で専攻・非専攻として日本語を学ぶ大学生、それ以外の教育機関の場合は高校生や大学生を含め日本語学ぶすべての学習者である。

調査対象である教材の種類は以下<表 5. 2>の通りである。

<表 5. 2> 本調査の対象である「韓国の日本語教材」一覧

|    | 著者              | 年度   | 教材名                    | 出版社            |
|----|-----------------|------|------------------------|----------------|
| 1  | Min Gwang-jun 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ              | (株)CHUN JAE 教育 |
| 2  | An Byeong-gon 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ              | EDU SEOUL      |
| 3  | Youn Gang-gu 他  | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ              | (株)DA RAK 園    |
| 4  | Lee Gyeong-su 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ              | (株)SISA 日本語社   |
| 5  | Han Mi-gyeong 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ              | (株)KYO HAK 社   |
| 6  | Min Gwang-jun 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅱ              | (株)CHUN JAE 教育 |
| 7  | O Hyung-jung 他  | 2014 | 高等学校 日本語Ⅱ              | (株)MI RE EN    |
| 8  | Lee Gyeong-su 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅱ              | (株)SISA 日本語社   |
| 9  | Kim Yang-seon   | 2011 | 韓国語と対応を活用した戦略的日本語文法    | 嶺南大校出版部        |
| 10 | Bae Eun-jeong 他 | 2015 | パワフル日本語文法改正版           | 釜山外国語大校出版部     |
| 11 | Son dong-ju 他   | 2015 | 例文中心で習う PERFECT 日本語文法  | 釜慶大校出版部        |
| 12 | Lee Myo-hee 他   | 2014 | 現代日本語文法の理解             | 忠南大校出版文化園      |
| 13 | Kim Sa-gyeong   | 2007 | New Edition 日本語文法本 改正版 | (株)SISA 日本語社   |
| 14 | 趙南星             | 2015 | やさしい日本語文法              | (株)DA RAK WON  |
| 15 | Heo Youn-jeong  | 2015 | 大韓民国で一番やさしい独学日本語文法 改正版 | YBM ザ・テキスト     |

## 5. 5 結果と分析

### 5. 5. 1 分析方法

高校の日本語教材『日本語Ⅰ』5冊と『日本語Ⅱ』3冊、大学出版部の「日本語文法教材」4冊、それ以外は市販の「日本語文法教材」3冊、全部で15冊の本を対象にし、これらの教材で日本語の「コ・ソ・ア」をどのように扱っているのかを調査する。

また、指示詞の文については、先行研究に基づいて、どのような用法が載せられているのか考察する。

調査対象である 15 冊の教材の中に、指示詞「コ・ソ・ア」が含まれている例文・会話文を集めてみた結果、指示詞を用いる文は、全部で 632 個である。高校の教材から 184 個、大学における文法教材から 355 個、市販の文法教材からは 93 個の指示詞の文が抽出された。

まずは、これらの文を「現場指示」と「非現場指示」の用法別に分けて分類する。指示詞の用法分けは、教材に書かれている韓国語解釈と先行研究の分類に基づいて分類した。例えば、Bae 他(2015:158)には「あのアイドル歌手はみんなから愛されている。」の指示詞の文がある。指示詞「あ」の使用が現場指示なのか、非現場指示なのかは、この文のみでは判断し難い。ところが、韓国語の解釈に「저 아이돌 가수는 모두에게서 사랑받고 있다.」と書かれている。

(1) あのアイドル歌手はみんなから愛されている。

(저 아이돌 가수는 모두에게서 사랑받고 있다.)

Bae 他 (2015 : 158) 下線と太字は筆者によるもの

(1)の場合、「あの-저」に対応させて捉えている。韓国語の「저 (jeo)」で「あの」を考えると、この文は現場指示の用法になる。非現場指示の文である可能性がなくなってしまふ。そのため、「韓国語の解釈」と「日本語の用法」の両方を参照し、教材に掲載されている指示詞の文を分類した。それぞれの細かい部分とこのような韓国語の解釈から生じる影響などについては次節で詳しく述べる。

### 5. 5. 2 高校で使用される『日本語Ⅰ』『日本語Ⅱ』

本節では、15 冊の中で韓国の高校で使われている日本語教材の『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』の教材 8 冊を考察してみる。指示詞という文法項目は、指示詞のコ・ソ・アは、「日本語学習者が入門段階で学習する項目 (迫田 1997)」であるため、『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』の中ではどのように指示詞を説明しているのか、また、どのような用法の指示詞文が載せられているのか調査する。

<表 5. 3> 高校生用の日本語教科書

|   | 著者              | 年度   | 教材名       | 出版社            |
|---|-----------------|------|-----------|----------------|
| 1 | Min Gwang-jun 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ | (株)CHUN JAE 教育 |
| 2 | An Byeong-gon 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ | EDU SEOUL      |
| 3 | Youn Gang-gu 他  | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ | (株)DA RAK 園    |
| 4 | Lee Gyeong-su 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ | (株)SISA 日本語社   |
| 5 | Han Mi-gyeong 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅰ | (株)KYO HAK 社   |
| 6 | Min Gwang-jun 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅱ | (株)CHUN JAE 教育 |

|   |                 |      |           |              |
|---|-----------------|------|-----------|--------------|
| 7 | O Hyung-jung 他  | 2014 | 高等学校 日本語Ⅱ | (株)MI RE EN  |
| 8 | Lee Gyeong-su 他 | 2014 | 高等学校 日本語Ⅱ | (株)SISA 日本語社 |

まず、『日本語Ⅰ』には、日本語の「コ・ソ・ア」を「指示詞(Han 他 2014, Min 他 2014)」、「指示語 (Youn 他 2014, An 他 2014)」、「指示代名詞 (Lee 他 2014)」と書かれている。

『日本語Ⅰ』による指示詞「コ・ソ・ア」の説明は、日本語指示詞の用法に関する説明ではなく、日本語の「コ・ソ・ア」と韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」をそれぞれ対応させて以下の<表 5.4>で説明している。

<表 5. 4> 高校で使用される『日本語Ⅰ』における指示詞

|                | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)     |
|----------------|---------|---------|---------|-----------|
| 사물(事物)         | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느 것)  |
| 장소(場所)         | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)    |
| 방향(方向)         | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느 쪽) |
| 명사수식<br>(名詞修飾) | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)    |

( )の部分は筆者による<sup>6</sup>

Youn (2012 : 14) は、高校の『日本語Ⅰ』の文法項目は習得がスムーズに進むよう構成されているかを探るため、高校の教材分析をした。その結果、各教科書による文型・文法は、大体が形態を中心に提示し、韓国語に対応する言語と例文を用いて説明している<sup>7</sup>ことが分かった。指示詞の用法の説明により、学習者の母国語である韓国語の対応または、例文を用いて説明していることがわかる。このような方法は、「コ・ソ・ア」をどのような場面で使用するのかなど、使い分けに関する習得を更に困難にするのではないだろうか。

続いて、高校の日本語教材『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』の中に指示詞を用いた文はどのようなものがあるかを見てみよう。

<表 5. 5> 高校の教材における指示詞用法別の出現数 単位:文(%)

| 現場指示    | 非現場指示  | 合計       |
|---------|--------|----------|
| 165(90) | 19(10) | 184(100) |

『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』は殆どが「現場指示」用法の文であり、「非現場指示」用法はわずか1割であった。非現場指示用法の19個の84%、16個の文が『日本語Ⅱ』

<sup>6</sup> Han 他 (2014 : 75) 「場所」なし、Youn 他 (2014 : 68) 「名詞修飾」なし/それぞれ指示詞 (コレ・ソレなど) の韓国語なし, An 他 (2014 : 70) 「名詞修飾」→「指示」、Lee 他 (2014 : 88) それぞれ指示詞 (コレ・ソレなど) の韓国語なし、Min 他 (2014 : 66)

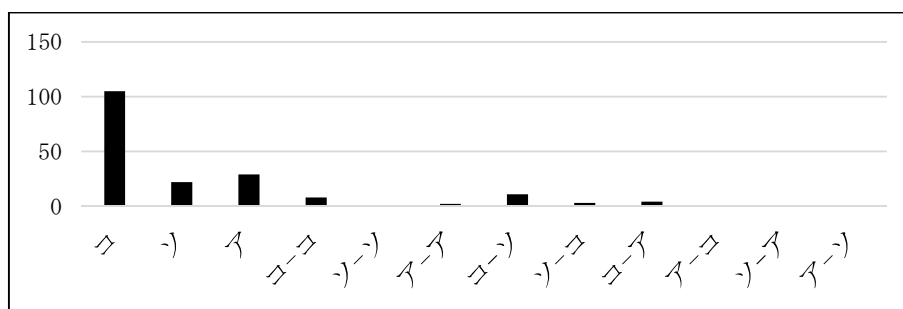
<sup>7</sup> Youn (2012 : 14) ー原文は韓国語で日本語文は筆者による。

から出た文である。『日本語Ⅰ』に非現場指示用法は殆どされていない。

次は、これらの文に出現する指示詞の数をまとめた<5. 9>と<図 5. 2>から、どのような指示詞文が用いられているのかを見てみよう。

<表 5. 6> 『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』における「コ・ソ・ア」出現数

| 1つの系列を用いる文 |    |    | 2つの系列を用いた文 |     |     |     |     |     |     |     |     |
|------------|----|----|------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| コ          | ソ  | ア  | コ・コ        | ソ・ソ | ア・ア | コ・ソ | ソ・コ | コ・ア | ア・コ | ソ・ア | ア・ソ |
| 105        | 22 | 29 | 8          | -   | 2   | 11  | 3   | 4   | -   | -   | -   |



<図 5. 2> 『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』における「コ・ソ・ア」出現数

『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』で最も多く出る指示詞は「コ」である。「コ系列」を用いる指示詞文が多く、二つの指示詞を用いている文の中で最も目立つのは、「コ・ソ」の文である。同じ系列を用いる文としては、以下の(2)から(6)のような「コ・コ」の文と「ア・ア」の文が見られる。

これらの文中には、先行研究の指示詞用法で言えば、現場指示用法として、「対立型(佐久間 1983)」の用法がよく見られる。対立型用法は、「コ系」は話し手の領域のものを指すとき用いて、「ソ系」は聞き手の領域のものを指す場合用いるというものである。韓国では、よく『これ』で問い『それ』答える(Kawakami2010)」と呼ばれている。

また、阪田(1992)の「話し手と聞き手が『我々』という一つの領域をつくる場合は、その領域内に属するものを『コ系』で指示し、『我々の領域外』のものを指す場合、『ア』で指示するほど遠く離れていない際、『ソ』を用いて指示する」のような融合型という用法である。『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』の中にはどのような用法の例文があるだろうか。

- (2) A: **これ**はどう?  
 B: あかいのはちょっと...。  
 A: じゃ**こ**っちの**あ**おいのは?  
 B: うん、きれいですね。**こ**っちにする。

Youn 他 (2014 : 94)

- (3) A:これは何という料理ですか。  
B:これはぶたにくのキムチチゲですよ。

An 他 (2014 : 82)

- (4) A:ユリさん、こっちはですよ。  
B:あ、ななみさん。こんにちは。ここは若い人でいっぱいですね。

An 他 (2014 : 114)

(2) から (4) は、「コ・コ」の文で、場面の説明よりは、韓国語に対応して考えるようになっている。この用法は、日本語と韓国語を対照的にとらえると用法が同じである。そのため、他の説明がされていないと考えられる。次は同じ融合型の「ア・ア」の文である。この用法も「コ・コ」と同じように日韓両言語の用法と全く同じである。

- (5) ナリ : あ、せんぱい、あれは何ですか。  
せんぱい : ああ、あれはこいのぼりだよ。子どもの日が近いからね。

Han 他 (2014 : 86)

- (6) A : あれは何?  
B : あれはぼんおどり。

Lee 他 (2014 : 116)

韓国人日本語学習者にとって、(2) から (6) の例文は韓国語と相違点がないため、理解することは、さほど難しくないだろう。なぜなら、『日本語 I』による指示詞の説明は母国語と関連付けられているため、学習者は日本語の文を韓国語に直して不自然でなければ、正しい文だと捉えるからであると筆者は考える。

しかし、対立型の場合は上記の説明し方と少々違う。対立型は、特別な練習をするようになっている。「『これ』で問い『それ』で答える (Kawakami 2010 : 28)」という初級レベルでの学習として、日本語「コ・ソ・ア」の特徴、すなわち、韓国語の用法とは違うところに注目し、指示詞の用法の説明より例文を通じての練習が行われている。「コ・ソ」と「ソ・ア」を用いる指示詞文が多いのもそのためである。これは Kawakami (上掲書) の「『これ』で問い『それ』で答える」に該当する指示詞文である。柳(2013)の調査でも、これらの指示用法には初級レベルの学習者の誤用が少なかつたため、「『これ』で問い『それ』答える」ということは、韓国人学習者に当然なものとして捉えられている。『日本語 I』と『日本語 II』には「コ・ソ」または「ソ・コ」の指示詞を用いた例文がどのようなものがあるかを見してみる。

- (7) 店員 : この赤いのはどうですかまだ新しいですよ。  
ナリ : いいですね。じゃ、それにします。

Han 他 (2014 : 72)

- (8) A : このきいろいのはどう?

B: かわいいね。それにする

Han 他 (2014 : 73)

(9) A: これは何ですか

B: どれですか。

A: これ…。

B: ああ、それはおまもりです。

Youn 他 (2014 : 63)

(10) A: これはなんですか。

B: それはてるてるぼうずです。

Youn 他 (2014 : 68)

(11) ③それ、何ですか。かわいいですね。

④これはエミリーからのプレゼントです。

Lee 他 (2014 : 82)

(12) (学校が終わって、さきがひろの携帯写真を見ながら話している)<sup>8</sup>

さき: その写真なに?

ひろ: あ、これ? 剣道部の写真。

Min 他 (2014 : 62)

教材には、(7) から (12) のような「コ・ソ」と「ソ・コ」を用いる用法に関する用法説明はない。単に「『これ』で問い『それ』で答える」のような繰り返しの練習を通じ、学習者が日本語指示詞の特徴として習得するようになっている。この部分は、学習者のレベルが上がるにつれ、習得過程に影響を与えると柳 (2013) の調査で明らかになった。

以上、高校の日本語教材『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』における「コ・ソ・ア」は、韓国語に対応させた日本語文の下に韓国語で解釈されていることが殆どであり、母国語と相違点がある場合は指示詞「コ・ソ・ア」別の用法として練習するようになっている。このように目標言語を母国語と対応させて学習してしまうと、目標言語を使う場合、母国語に目標言語を挿入して考えるようになる。勿論、目標言語と母国語が類似性が高く、第二言語習得論でいう「正の言語転移」が生じ、習得が進んでいくかもしれない。しかし、このような学習が、「母国語らしい日本語」または「日本語らしくない日本語」を生み出させているのではないだろうか。文法・文型を説明するため、用いられる例文に関する場面の説明や状況の説明がない文は目標言語の習得に役に立たないと考えられる。

特に『日本語Ⅰ』の中には、現場指示の場合の指示用法しかなかった。いわゆる非現場指示と呼ばれる指示用法は言及もなく、例文もなかった。これに対し、『日本語Ⅱ』には非現場指示の例文が出たが、用法として別の説明はない。韓国の高校の教材には、

<sup>8</sup> 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

日本語の「コ・ソ・ア」は韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と同じ 3 系列で 1 対 1 対応している例文ばかりである。

### 5. 5. 3 大学で使用される『日本語教材』

本節では、大学における日本語文法教材を検討する。韓国の大学出版部の教材で、この教材は大学で日本語学習者のために作られたものである。すなわち、大学の専攻として日本語を学習する学習者と非専攻の日本語学習者ためのものである。考察する教材は 4 冊で、韓国の「釜慶大学<sup>9</sup>」、「釜山外国語大学<sup>10</sup>」、「嶺南大学<sup>11</sup>」、「忠南大学<sup>12</sup>」の出版部が出版された教材である。

<表 5. 7> 大学で使用される「日本語文法教材」

|    | 著者              | 年度   | 教材名                   | 出版社         |
|----|-----------------|------|-----------------------|-------------|
| 9  | Kim Yang-seon   | 2011 | 韓国語と対応を活用した戦略的日本語文法   | 嶺南大學校出版部    |
| 10 | Bae Eun-jeong 他 | 2015 | パワフル日本語文法改正版          | 釜山外国語大學校出版部 |
| 11 | Son dong-ju 他   | 2015 | 例文中心で習う PERFECT 日本語文法 | 釜慶大學校出版部    |
| 12 | Lee Myo-hee 他   | 2014 | 現代日本語文法の理解            | 忠南大學校出版文化園  |

これらの教材と前節の高校の教材『日本語Ⅰ』、『日本語Ⅱ』を比較し、どのような違いがあるのか検討する。この 4 冊の教材の中に指示詞を用いている文は、全部で 355 個で、用法別の出現数と割合は以下の<表 5.8>の通りである。

<表 5. 8> 大学の教材における指示詞用法別の出現数 単位:文 (%)

| 現場指示     | 非現場指示   | 合計        |
|----------|---------|-----------|
| 259 (73) | 96 (27) | 355 (100) |

高校の教材より非現場指示の割合は大きくなったが、全体的には現場指示の文が多い。また、日本語の「コ・ソ・ア」を韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」に対応させて韓国語の解釈をしているものが多く、日本語の文では現場指示なのか、非現場指示なのか曖昧な文は、韓国語の解釈で現場指示に捉えられる文が数多くあった。それぞれの例文については、各教材を分析する際、詳しく述べる。

大学出版部の文法教材は、「非現場指示」用法の文が約 3 割で、一応高校の教材よりは多く載せられている。高校の場合「現場指示」や「非現場指示」という概念の説明が全くなかったことに対し、大学の教材ではどのように説明しているだろうか。

次の<表 5. 9>は、大学の文法教材から得られた指示詞を用いた 335 の文における

<sup>9</sup> www.pkun.ac.kr

<sup>10</sup> www.bufs.ac.kr

<sup>11</sup> www.yu.ac.kr

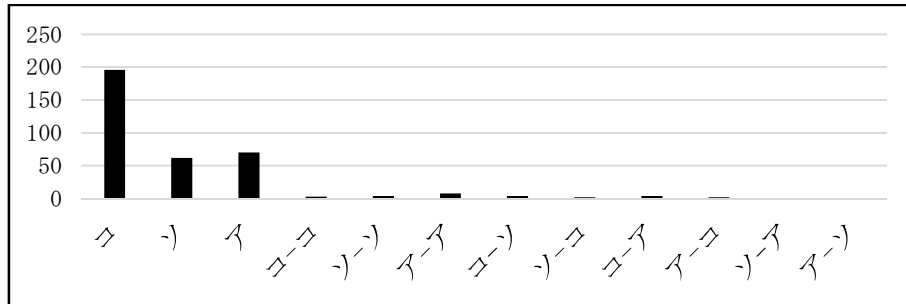
<sup>12</sup> www.cnu.ac.kr



各指示詞を系列別に分類したものである。

<表 5. 9> 大学の「日本語文法教材」における「コ・ソ・ア」出現数 単位:文

| 1つの系列を用いる文 |    |    | 2つの系列を用いた文 |     |     |     |     |     |     |     |     |
|------------|----|----|------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| コ          | ソ  | ア  | コ・コ        | ソ・ソ | ア・ア | コ・ソ | ソ・コ | コ・ア | ア・コ | ソ・ア | ア・ソ |
| 196        | 62 | 70 | 3          | 4   | 8   | 4   | 2   | 4   | 2   | -   | -   |



<図 5. 3> 『日本語 I』と『日本語 II』における「コ・ソ・ア」出現数 (単位:文)

『日本語 I』の場合も、「コ系列」の文が最も多かったが、大学の文法教材の場合も、「コ系列」の文が 55%で半分以上を占めている。これらの 355 文から、二つの指示詞を用いた文は 27 個で、高校の教材『日本語 I』と『日本語 II』より出現数が多い。二つの指示詞を用いる文には、「ア・ア」の文が最も多く見られる。「コ・ソ」と「ソ・コ」も少なくとも見られる。また「コ・ア」、「ソ・ア」、「ア・ソ」の文も見える。それぞれの教材の指示詞に関する文法をどのように説明しているのだろうか。

まず、Son 他 (2015) の教材では、指示詞項目を 4 ページ<sup>13</sup>にわたって「コ・ソ・ア」の用法を説明している。高校『日本語 I』と『日本語 II』の日本語と韓国語を 1 対 1 で対応した指示詞の表は Son 他 (2015) の教材にはなかった。

Son 他 (2015) では指示詞を「指示詞」と表記し、「現場指示」と「文脈指示」に分けて指示詞の用法を説明している。「現場指示」は「目の前に見える事項や事物を指示する時<sup>14</sup>」と述べて、また、「1.話し手と聞き手が離れている時<sup>15</sup>」と「2.話し手と聞き手が同じ空間にいると認識する時<sup>16</sup>」に分け、「コ系列」「ソ系列」「ア系列」の例文を用いて用法を説明している。

「文脈指示」は「目に見えない事項や事物を指示する時<sup>17</sup>」と述べ、「ソ系列」と「ア系列」の場合を説明している。「文脈指示」の「ソ系列」は「1) 相手が知らないものを指す場合<sup>18</sup>」「2) 話し手と聞き手、二人ともよく知らない場合<sup>19</sup>」に用いると例文

<sup>13</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 75-78)

<sup>14</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 75) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

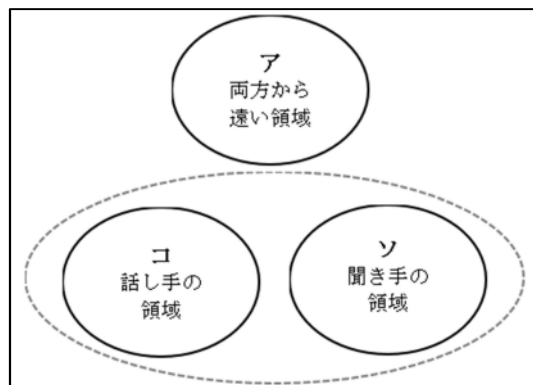
<sup>15</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 75) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

<sup>16</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 75) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

<sup>17</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 77) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

<sup>18</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 77) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

を挙げながら述べている。「ア系列」については、「1) 話し手と聞き手、両方よく知っている場合<sup>20)</sup>」「2) 指示対象の名称が浮かばない場合<sup>21)</sup>」に用いると書かれている。これらの説明は、言語学的な日本語指示詞分類(久野 1973)に基づいた用法説明である。



<図 5. 4> Son 他 (2015 : 75) による現場指示の対立型

この<図 5. 4>は佐久間 (1983 : 35) による「なわばり論」と同じものである。現場指示の対立型、「1. 話し手と聞き手が離れている時」の例文は、(12) - (14) である。

(13) [授業中に教授が学生に]

教授：来週の授業には、このプリントを持ってきてください。

学生：先生、それはどこでダウンロードできますか。

Son 他 (2015 : 75)

(13) の例文に関しては、「話し手の領域は「コ」、聞き手の領域は「ソ」で示す」と書かれている。「ア系列」は、「話し手と聞き手の両方から遠く離れている領域を示す」に用いると述べている。「ア系列」の例文は (14) である。

(14) [ロビーで係員に]

A：シンポジウムの参加者ですけど。

B：あ、はい。会場はあちらです。

Son 他 (2015 : 75)

また、この対立型用法「1.話し手と聞き手が離れている時」は、物理的な領域のみ

<sup>19</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 77) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

<sup>20</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 77) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

<sup>21</sup> Son,dong-ju 他 2 名 (2015 : 77) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

ではなく精神的領域をも含むと書かれている。この場合の例文としては(15)を用いて説明している。

(15) [歯科で]

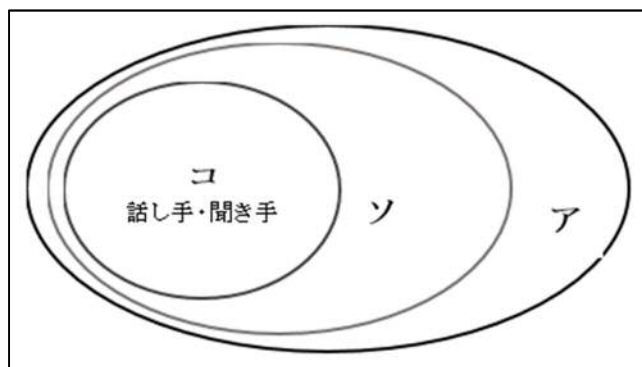
医者：痛いのはここですか。

患者：はい、そこです。その歯です。

Son 他 (2015 : 75)

(13) - (15) には [授業中に教授が学生に] [ロビーで係員に] [歯科で] のように場面の説明<sup>22</sup>がついている。また、系列別の用法も説明していることが、高校の教材『日本語 I、II』とは異なる部分である。

現場指示の融合型、「2.話し手と聞き手が同じ空間にいると認識する時」用いる指示詞の例文は、(16) - (18) である。融合型の用法も「コ・ソ・ア」を次の<図 5. 5>で説明している。



<図 5. 5> Son 他 (2015 : 75) による現場指示の融合型

(16) は「コ・コ」、(17) は「ア・ア」の文で、「近いものは『コ』で、遠いものは『ア』で示す」と説明し、(16) と (17) を挙げている。

(16) [写真を一緒に見ながら]

A：これ、加藤さんの若い時ですか。

B：いいえ、この人は吉田さんです。

(17) [空を飛ぶ鳥を指しながら]

A：あの鳥、何ですか。

B：あれはカササギですよ。韓国では幸運を呼ぶ鳥です。

Son 他 (2015 : 76)

<sup>22</sup> (11) - (13) の [授業中に教授が学生に] [ロビーで係員に] [歯科で] の原文は韓国語で、日本語訳は筆者による。

融合型「ソ・ソ」の用法については、「近くも遠くもないものを指す場合に用いる」と説明している。先行研究でよく言われる「中間距離ソ」の規定と類似している。柳（2013）のアンケート調査の23項目は以下に（18）と同一の用法である。

<表 5. 10> 柳（2013：44）アンケート調査の23項目

|    |   |
|----|---|
| 23 | <p>（タクシーの車内で、近くの角を指しながら運転手に話す）</p> <p>乗客：すみません、{ ここ / <b>そこ</b> / あそこ }の角を右に曲がってください。</p> <p>運転手：{ ここ / <b>そこ</b> / あそこ }の角ですね。</p> |
|----|---|

(18) [タクシーの中で]

A：その道を右に入ってください。

B：はい、その角ですね。

Son 他（2015：76）

(16) - (18) は、Son 他（2015）の「融合型」の用法の例文である。「対立型」と同じように [写真を一緒に見ながら] [空を飛ぶ鳥を指しながら] [タクシーの中で] と会話の状況が説明<sup>23</sup>されている。

次は、Son 他（2015）の非現場指示の場合の例文（19） - （23）を見てみよう。教材には、非現場指示を「目の前に見えない事項や事物を指示する時」と規定が書かれている。「ソ系列」と「ソ系列」に分けて例文を挙げている。

「ソ系列」は（19） - （21）で、「ソ系列」は「1）相手が知らないものを指す場合」「2）話し手と聞き手、二人ともよく知らない場合」に用いると説明されている。

（19）と（20）は、「1）相手が知らないものを指す場合」にあたる例文である。（19）の文は、宋（1991）によると「現場指示」として分類されている。柳（2013）も、この例文を「現場指示」の項目としてアンケート調査を行った。しかし、安（1993, 1996）は、この例文を「非現場指示」として分類している。そのため、（19）の文は改めて指示状況を考察する必要があると考えられる。

Son 他（2015）では、非現場指示の用法で聞き手が知らないものを指す場合「ソ系列」を用いる例文として（19）を挙げている。一方、（21）は「2）話し手と聞き手、二人ともよく知らない場合」に用いる「ソ系列」の例文である。

(19) A：お出掛けですか。

B：はい。ちょっと**そこ**まで。

<sup>23</sup> (11) - (13) の [写真を一緒に見ながら] [空を飛ぶ鳥を指しながら] [タクシーの中で] の原文は韓国語で、日本語訳は筆者による。

- (20) A : 駅前に新しくできた店に行って来たんだけど、**その**店とてもおいしかったよ。(18)  
 B : 本当?**そこ**は何売っているの。
- (21) A : 明日面接に来る学生の名前知ってる?  
 B : ええと...確か...。  
 A : **その**人、男?女?  
 B : うーん、男だったかな。

Son 他 (2015 : 77)

次の Son 他 (2015) による非現場指示用法の「ア系列」の例文 (22) - (23) を見てみよう。「ア系列」については、「1) 話し手と聞き手、両方よく知っている場合」「2) 指示対象の名称が浮かばない場合」に用いると説明されている。(22) は「1) 話し手と聞き手、両方よく知っている場合」の例文である。(23) は、「2) 指示対象の名称が浮かばない場合」のものである。

- (22) A : 昨日一緒に行ったあの店、とてもおいしかったね。  
 B : そうだね。**あそこ**、また行きたいね。
- (23) 夫 : **あれ**どこにある。  
 妻 : **あれ**って何ですか。  
 夫 : **あれ**だよ、**あれ**!

Son 他 (2015 : 77)

非現場指示「ソ系列」と「ア系列」を、『ソ』VS『ア』で「私が話している指示事項について相手が知らない場合は『ソ』を使用する。しかし、対話途中で指示事項について知るようになった場合には『ア』を使用する (Son 他 2015 : 78)」と述べて、次の例文を用いて説明している。

- (24) A : 同じクラスに鈴木さんっていう子がいるんだけど、最近テレビに出ているんだよ。  
 B : **その**子、そんなにきれいな?  
 A : それほどきれいじゃないけど、**その**子背が高くてモデルみたいなんだよ。  
 B : もしかして、**その**子って鈴木京子さん?  
 A : そうそう!知っているの?  
 B : **あの**子の弟が僕の後輩なんだよ。  
 A : あ、そう。**あの**子君のタイプだろう?

Son 他 (2015) の教材では、指示詞を用いた慣用表現の中で韓国語と順番が異なる表現の説明をしている。上記では、Son 他 (2015) 教材における指示詞の説明を検討してみた。

続いては、Bae 他 (2015) の教材における指示詞を検討する。Bae 他 (2015) は、指示詞を「指示代名詞」と称し、「事物・場所・方向」を表す代名詞を指示代名詞という。話し手が指す物の位置関係によって分けられる。指示代名詞は、大きく現場指示と文脈指示で分けて考えられる。」と次の表を用いて説明している。

<表 5. 11> 大学で使用される「日本語教材」における指示詞

| 指すもの     |               | こ(이)               | そ(그)               | あ(저)               | ど(어느)                |
|----------|---------------|--------------------|--------------------|--------------------|----------------------|
| 名詞的用法    | 物を指すもの        | これ(이것)             | それ(그것)             | あれ(저것)             | どれ(어느것)              |
|          | 方向            | こちら(이쪽)<br>こっち(이쪽) | そちら(그쪽)<br>そっち(그쪽) | あちら(저쪽)<br>あっち(저쪽) | どちら(어느쪽)<br>どっち(어느쪽) |
|          | 場所            | ここ(여기)             | そこ(거기)             | あそこ(저기)            | どこ(어디)               |
| 名詞の修飾的用法 | 修飾する名詞の<br>限定 | この(이)              | その(그)              | あの(저)              | どの(어느)               |
|          | 修飾する名詞の<br>属性 | こんな(이런)            | そんな(그런)            | あんな(저런)            | どんな(어떤)              |
| 副詞的用法    | 方法            | こう(이렇게)            | そう(그렇게)            | ああ(저렇게)            | どう(어떻게)              |

Bae 他 (2015 : 14)

<表 5. 11>は、高校の教材『日本語 I』の表とも類似しているが、より詳しく説明されている。その上、日本語の横に韓国語もが書かれている。「コ・ソ・ア」は韓国語と同じ3系列であることが大きい部分を占めている。

しかし、<表 5. 11>で指示詞の文法説明が終わるのではなく、Bae 他 (2015) の中でも、Son 他 (2015) と同じように「現場指示」と「文脈指示」に分けて用法を説明している。また「現場指示」は、話し手と聞き手が同じ領域にいる「融合型」と話し手と聞き手が別の領域にいる「対立型」に分けて、それぞれの系列について例文を挙げている。

「融合型」の例文は (25) - (27) の順に「コ系列」「ソ系列」「ア系列」の例文である。「コ系列」については、「話し手と聞き手の領域にいる/あるものを指示する際用いる<sup>24</sup>」と書かれて、次の (25) の文を挙げて理解を高めている。

(25) A : この花はなんといいますか。

<sup>24</sup> Bae 他 (2015:15) 原文は韓国語で、日本語訳は筆者による。

- B : これは百合といます。
- (26) A : 私のかばんはどこにありますか。  
B : その机の上にあります。
- (27) A : あれは何ですか。  
B : あれはパソコンです。

Bae 他 (2015 : 15)

「ソ系列」は、「話し手と聞き手の領域から少し遠いものを指示する場合用いる。<sup>25)</sup>と書かれている。この「ソ系列」を用いて指示するには、とても遠い場合は「ア系列」を用いて指示すると述べている。先行研究の用語を拝借すると「中間距離ソ」で呼ばれるものであるが、Bae 他 (2015) による「少し遠い」の言い方がそれに該当すると考えられる。次の (26) と (27) の文がそれぞれに該当する例文であるが、教材には直訳した韓国語の文がともに掲載されており、「ソ系列」と「ア系列」を用いる場面の説明が足りないのではないかと考えられる。

対立型の例文は (28) と (29) で、「コ系列」は「話し手が自分の領域に属しているものを指す場合」に、「ソ系列」は「話し手が聞き手の領域に属しているものを指す場合」に用いると説明している。「ア系列」については、話し手と聞き手に領域外に属しているものを指す場合に用いると述べている。この用法は、阪田 (1992) の「話し手中心」に考え、指示詞を用いる。

- (28) A : (別の部屋にいるお母さんに向かって)お母さん、これ何?  
B : これ何? って言われても私には見えないんだけど...  
A : あ、ごめん。(向うで箱を見せながら)この白い箱。  
B : それね。お祖父さんからの土産。
- (29) A : むこうからやってくる男の人は誰ですか。  
B : あの人は鈴木さんですよ。  
A : ああ、あの人が鈴木さんですか。

Bae 他 (2015 : 16)

非現場指示は、話し手と聞き手が話題としている事項や、記憶中のものを指す場合に用いる用法であると述べ、「コ系列」「ソ系列」「ア系列」の例文を挙げている。まず「コ系列」の場合、話し手と聞き手が共に内容を知っている際に用いると述べ、(30) の例文を挙げている。「授業で時代の説明を聞きながら」という場面が追加されている。

- (30) (授業で時代の説明を聞きながら)

<sup>25)</sup> Bae 他 (2015:15) 原文は韓国語で、日本語訳は筆者による。

A : あのう、この時代にはもう冷蔵庫はありましたか。

B : いいえ、この時代には冷蔵庫はまだありませんでした。

Bae 他 (2015 : 16)

非現場指示の「ソ系列」用法については、Bae 他 (2015) の教材には二つに分けて説明している。「話題について話し手は知っているが、聞き手は知らない場合、または聞き手が知らない話し手が考える場合<sup>26)</sup>」と「会話の相手が話題として話しているものを話し手が知らない場合<sup>27)</sup>」に分けている。前者の例文は (31) で、後者の例文は (32) で、教材には韓国語文と一緒に挙げられている。最後に、非現場指示「ア系列」は、「話し手と聞き手両方が話題を知っている時 (過去の経験など) <sup>28)</sup>」と (33) の例を挙げながら説明している。

(31) 今年の夏休みには沖縄に行きました。そこで古い友人に会いました。

(32) A : 先週、自分の夢について書いてくるようにと、お話ししましたが...

B : えっ?そんな話は聞いていませんが。

(33) あの時のステーキは本当においしかった。

Bae 他 (2015 : 17)

Kim (2011) の日本語文法教材は、韓国語が日本語と対応する部分を活用し、日本語の文法を両言語対象の観点から説明している。本研究の対象である「コ・ソ・ア」についても、韓国語と比較しながら、用法を説明している。指示詞を「指示語」として、「指示語の『こ』『そ』『あ』『ど』」の概念は次のように韓国語“이 (i)”“그 (geu)”“저 (jeo)”“어느 (eoneu)”に大体対応する (Kim 2011 : 119)」と説明している。

この説明とともに次の指示詞の文が載せられている。

(34) この方(かた)は小泉(こいずみ)さんです。

이분은 코이즈미 씨입니다.

Kim 他 (2011 : 119)

そして、必ずしも「コ・ソ・ア」と「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と対応しない場合もあると説明を加えている。

また、Kim (2011) の教材でも、以下の<5. 11>のように「コ・ソ・ア」の形態を中心に説明している。

<sup>26)</sup> Bae 他 (2015 : 17) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

<sup>27)</sup> Bae 他 (2015 : 17) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。

<sup>28)</sup> Bae, Eun-jeong 他 2 名 (2015 : 17) 原文は韓国語、日本語訳は筆者による。



<表 5. 11> 大学で使用される「日本語教材」における指示詞

| 指すもの    |          | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |
|---------|----------|---------|---------|---------|----------|
| 名詞的用法   | 事物を指すもの  | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |
|         | 方向       | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |
|         |          | こっち(이쪽) | そっち(그쪽) | あっち(저쪽) | どっち(어느쪽) |
|         | 場所       | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |
| 名詞修飾的用法 | 修飾する名詞限定 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |
|         | 修飾する名詞属性 | こんな(이런) | そんな(그런) | あんな(저런) | どんな(어떤)  |
| 副詞的用法   | 方法       | こう(이렇게) | そう(그렇게) | ああ(저렇게) | どう(어떻게)  |

Bae 他 (2015 : 14)

同じように韓国語の解釈を付け、指示詞を「コ・ソ・ア」を韓国語の指示詞と対応・挿入し、理解できるよう構成されている。また、用法による指示詞の文法は説明されてないが、「ア系列」については「現場指示」と「文脈指示」に分け、使い分けを説明している。

(35) 現場指示:目に見える状況+知らない場合

あの人(ひと)はどなたですか。

저 사람은 누구십니까?

文脈指示:目に見えない状況+既に知っている場合

こういう料理(りょうり)をあの人と一緒に(いっしょ)に食べたいなあと  
思った。

이런 음식을 그 사람과 함께 먹고 싶다는 생각을 했다.

Kim 他 (2011:120)

「ア系列」は現場指示の場合は韓国語の「저(jeo)」と対応し、非現場指示の場合は「그(geu)」と対応すると述べている。Kim (2011) の教材における日本語「コ・ソ・ア」の扱いは、高校の『日本語 I』と似ている部分が多い。例えば、韓国語に対応し、形態を中心に導入させていることなどが類似している。しかしながら、それに加え、両言語が対応していない部分も載せて説明しているが、指示詞の用法を習得するには物足りない。

続いては、忠南大学出版部による Lee 他 (2014) の教材における「コ・ソ・ア」を検討してみよう。Lee 他 (2014 : 41-42)には「指示詞」を「人称代名詞」と「指示代名詞」に分けて以下の通りに説明している。

①人称代名詞-人の名前の代わりに用いる名詞。

<人称代名詞の例>

|      |      |          |     |
|------|------|----------|-----|
| 1 인칭 | 2 인칭 | 3 인칭(他称) | 부정칭 |
|------|------|----------|-----|

| (自称)                                   | (対称)                                    | 近称                             | 中称                             | 遠称  | (不定称)                       |
|--|---|--------------------------------|--------------------------------|---|-----------------------------|
| わたし<br>(나/저)<br>ぼく<br>(저)<br>おれ<br>(나) | あなた<br>(너/당신)<br>きみ<br>(너)<br>お前<br>(너) | この人<br>(이 사람)<br>こいつ<br>(이 녀석) | その人<br>(그 사람)<br>そいつ<br>(그 녀석) | あの人<br>(저 사람)<br>あいつ<br>(저 녀석)<br>かれ<br>(그) | どなた<br>(어느 분)<br>だれ<br>(누구) |

②指示代名詞-物、場所、方向の代わりに用いる名詞。

<人称代名詞の例>

|              | 事物          | 장소          | 方向               |
|--------------|-------------|-------------|------------------|
| 근칭<br>こ(이)   | これ<br>(이것)  | ここ<br>(여기)  | こっち/こちら<br>(이쪽)  |
| 중칭<br>そ(그)   | それ<br>(그것)  | そこ<br>(그저)  | そっち/そちら<br>(그쪽)  |
| 원칭<br>あ(저)   | あれ<br>(저것)  | あそこ<br>(저저) | あっち/あちら<br>(저쪽)  |
| 부정칭<br>ど(어느) | どれ<br>(어느것) | どこ<br>(어디)  | どっち/どちら<br>(어느쪽) |

Lee 他 (2014) は、上記の内容で「コ・ソ・ア」を説明している。指示詞の用法に関する説明は載せていない。この説明は、高校の教材『日本語Ⅰ』と変わらないだろう。韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と日本語の「コ・ソ・ア」を対応させており、日韓両言語の指示詞の使い分けが類似していると学習者が捉えるようになっている。

韓国の高校での教材と大学で使用される日本語の文法教材での指示詞の扱いに関して検討した結果、高校の『日本語Ⅰ』と『日本語Ⅱ』より大学での日本語文法教材の方が日本語指示詞をより詳しく説明していることが分かった。また、日本語を用法中心に説明している部分が、高校の教材との最も大きな違いである。しかし、大学教材でも韓国語と関連付けて説明している部分がある。また、指示詞の項目以外の指示詞を用いる多様な指示詞の文に関しては、場面の説明が足りないと思われる。大学の日本語文法の教材には、指示詞を用法別に分類して述べているが、日本語と韓国語の指示詞を1対1対応している部分が多かった。

#### 5. 5. 4 高校と大学以外の教育機関で使用される『日本語教材』

本節では、以下の市販の「日本文法教材」を対象にし、指示詞または指示詞文について検討をする。

<表 5. 12> 高校と大学以外の教育機関で使用される「日本語教材」

|    | 著者             | 年度   | 教材名                    | 出版社           |
|----|----------------|------|------------------------|---------------|
| 13 | Kim Sa-gyeong  | 2007 | New Edition 日本語文法本 改正版 | (株)SISA 日本語社  |
| 14 | 趙南星            | 2015 | やさしい日本語文法              | (株)DA RAK WON |
| 15 | Heo Youn-jeong | 2015 | 大韓民国で一番やさしい独学日本語文法     | YBM ザ・テキスト    |

高校、大学のような教育機関によるものではなく、出版社から出版された市販の日本語教材も多くある。これらの教材が対象にしている学習者は、前述のように、日本語を学習するすべての学習者である。高校生、大学生、社会人などを全て含む。教材の種類も様々であるが、本調査では、指示詞の項目と関連性が高い文法教材を調査対象とし、考察を行う。まず、市販の「日本語文法教材」における指示詞文はどのような用法が出ているのかを見てみよう。

3冊の教材からは93文の指示詞文が抽出された。その中で、「コ系列」を用いる文が最も多かったのに対し、「ア系列」の文は9文で最も少なかった。

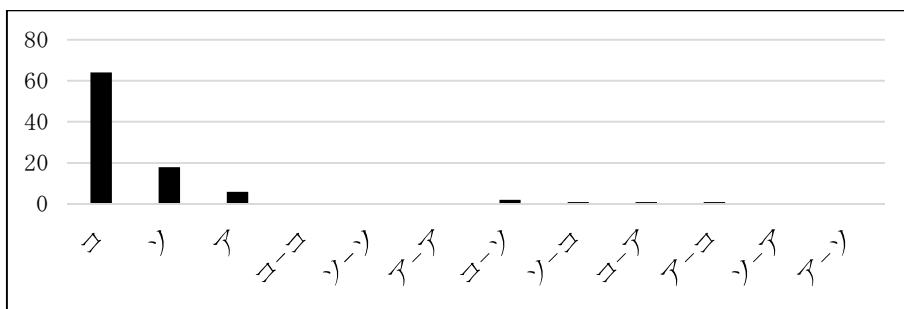
<表 5. 13>市販教材における指示詞用法別の出現数 単位:文(%)

| 現場指示   | 非現場指示  | 合計      |
|--------|--------|---------|
| 80(86) | 13(14) | 93(100) |

「現場指示」と「非現場指示」の割を比較してみると、約9割が「現場指示」方法である。「非現場指示」の用法はわずか14%で少ない。これらの結果は、高校の教材と大学における日本語文法教材とのものと変わらない。続いては、その93個に用いられた指示詞の系列別に分類してみよう。市販の「日本語文法教材」における「コ・ソ・ア」出現数は次の<表 5. 14>と<図 5. 6>の通りである。

<表 5. 14> 市販の「日本語文法教材」における「コ・ソ・ア」出現数 単位:文

| 1つの系列を用いる文 |    |   | 2つの系列を用いた文 |     |     |     |     |     |     |     |     |
|------------|----|---|------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| コ          | ソ  | ア | コ・コ        | ソ・ソ | ア・ア | コ・ソ | ソ・コ | コ・ア | ア・コ | ソ・ア | ア・ソ |
| 64         | 18 | 6 | -          | -   | -   | 2   | 1   | 1   | 1   | -   | -   |



<図 5. 6> 市販の日本語文法教材における「コ・ソ・ア」出現数 (単位:文)

その中で、「コ系列」を用いる文が最も多いのに対し、「ア系列」の文は最も少ない。このような結果も高校の教材と大学の日本語文法教材での結果とさほど違いはない。ところが、二つの指示詞を用いる文を検討してみると、同じ系列の指示詞を用いる文の出現が1文もないことが分かる。言い換えれば、「現場指示」の用法である「融合

型」の文が教材に掲載されていないのである。

複数の異なる系列の指示詞を用いる文は (36) - (39) などがある。(36) - (39) はすべて、Kim (2007) の教材からの文で、「現場指示」の用法である「対立型」の用法の文である。

- (36) これはたくあん、それはちゃんぽんです。  
 (37) これはひらがな、それはカタカナです。  
 (38) A: あれ、ください。 B: このペンですか。  
 (39) A: それはなんですか。 B: これは日本のまんがです。

Kim (2007 : 26)

市販の文法教材における指示詞は、「指示代名詞」という名称が用いられている。指示詞に関し、Heo (2015) と趙 (2015) の教材では、次の<表 5. 4>の高校の教材『日本語 I』の表を用いている。

<表 5. 4> 高校で使用される『日本語 I』における指示詞

|                | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)     |
|----------------|---------|---------|---------|-----------|
| 사물(事物)         | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느 것)  |
| 장소(場所)         | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)    |
| 방향(方向)         | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느 쪽) |
| 명사수식<br>(名詞修飾) | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)    |

(( ))の部分は筆者によるもの<sup>29</sup>

趙 (2015 : 16) には、「日本語のこ-、そ-、あ-、ど-は韓国語の이 (i) - 그 (geu) - 저 (jeo) / 그 (geu) - 어느 (eo-neu) - に該当する<sup>30</sup>」と指示詞について説明している。韓国語と 1 対 1 で対応し、日本語の指示詞を学習するようになっている。また、高校の『日本語 I』と『日本語 II』と同様に、非現場指示に関する説明は載せていない。

ところが、Kim (2007 : 37) には、韓国語に対応していない非現場指示の用法を『その』と『あの』として別に使い分けを次のように説明している。

「...(中略)目に見えない対象、言い換えれば話し手と聞き手がお互い既に知っている対象を指す場合、韓国語では‘그 영화(その映画)、그 사람(その人)’と‘그(そ)’

<sup>29</sup> Han 他 (2014 : 75) 「場所」なし, Youn 他 (2014 : 68) 「名詞修飾」なし/それぞれ指示詞(コレ・ソレなど)の韓国語なし, An 他 (2014 : 70) 「名詞修飾」→「指示」, Lee 他 (2014 : 88) それぞれ指示詞(コレ・ソレなど)の韓国語なし, Min 他 (2014 : 66)

<sup>30</sup> 趙 (2015 : 16) -原文は韓国語、筆者による日本語訳。「일본어의 こ-, 그-, 아-, 도-는 한국어의 ‘이-, 그-, 저 (그) -, 어느-’에 해당한다.」

という指示詞を用いるが、日本語では「あの」を用いる<sup>31</sup>。」

教材には(40)と(41)の例文を挙げて、上記のことをさらに説明している。しかし、以下の説明は、日本語の指示詞用法の説明というより、日本語と韓国語の対応させて捉えたのである。

(40) あのえいが、どうでしたか。

(41) あのひと、とてもいいですよ。

Kim (2007: 37)

しかし、(37)の「あのえいが、どうでしたか。」と(38)の「あのひと、とてもいいですよ。」の例文のみで考えると、上記で述べている「話し手と聞き手がお互い既に知っている対象を指す場合」であるとは必ずしも言えない。単に日本語と韓国語両言語の相違点を示すためであれば良いかもしれないが、文のみで指示詞の用法、または使い分けを理解するには、少々難しさがある。

このように、文の場面・背景の説明がないものが殆どである。このような教材を通じて指示詞を習得するとすれば、日本語の指示詞は韓国語と同じ3系列で1対1対応しているが、使い分けが異なる部分も存在すると学習者は捉えるようになるだろう。

## 5.6 まとめ

先行研究と柳(2013)の結果から、指示詞の習得過程には学習者の母国語の影響による誤用より、その他の要因による影響が見られたため、学習過程を調査する必要があると考えた。そのため、第5章で韓国の日本語教育と日本語教材を検討してみた。韓国の日本語教育は、小学校から大学、日本語学校などの教育機関で行われている。本章では調査協力者たちの属性を考え、高校の日本語教育と大学の日本語教育を中心に考察した。また、教材も高校の日本語教材と大学の日本語文法教材、その他市販の日本語文法教材に分類して、教材における指示詞を調査・考察した。

特に、高校の日本語教科書の『日本語Ⅰ、Ⅱ』における指示詞は、韓国語と1対1で対応させた指示詞文と説明が殆どであった。そして、「コ・ソ」「ソ・コ」のように「コ系列」と「ソ系列」の対立型の文が見られた。また、指示詞を用いる文は殆どが現場指示用法に当たる文であり、非現場指示用法の文の出現は殆ど無かった。これは、高校と大学以外の教育機関で使用される日本語文法教材における指示詞ととても似てい

<sup>31</sup> Kim (2007:37) -原文は韓国語、筆者による日本語訳。「...눈에 보이지 않는 대상, 말하자면 말하는 사람이나 듣는 사람 서로가 이미 알고 있는 대상을 가리킬 때, 우리말에서는 '그 영화, 그 사람'이라고 해서 '그'라는 지시어를 쓰는데, 일본어는 「あの」를 씁니다.」

る。

それに対し、大学で使用される「日本語文法教材」での指示詞は、指示詞「コ・ソ・ア」の用法に基づいた指示詞の文が書かれていた。高校の教材と市販の日本語文法教材では、指示詞に関する説明が1ページで終わるのに対し、大学教材は日本語の指示詞の用法を4-5ページにわたって説明している。しかし、指示詞を用いる文を全て集めて検討した結果、日本語と韓国語を対応させた文が多かった。指示詞は発話の場面の状況が重要である文法の項目にも拘わらず、韓国の日本語教材による指示詞の文はそれに関する説明がされている教材は殆ど無かった。

韓国の日本語教育では、日本語の「コ・ソ・ア」と韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」が同じ3系列で、類似性が高いことに注目している。この考察の結果に基づいて、第6章では「指示詞の習得と使用上の認識」について調査を行う。

## 第6章 日本語指示詞の習得過程に関する量的調査

### 6.1 調査目的

先行研究では、習得上の困難さと誤用の要因を学習者の「母語」からの影響、「母語干渉」であると考えて研究・調査をしているものが多い（安 1996, 2000, 2005, Kawakami 2010, 具 2010 など）。それ以外にも、学習者の母語の影響により習得上で形成された「中間言語」母語では説明できない誤用、すなわち「中間言語」という立場の研究（迫田 1993, 1996, 1997）もあるが、筆者は習得状況にはこの両方の現象が現れると考える。そのため、習得困難である要因をどちらにも絞らず、アンケート調査を行った結果、要因として両方の現象が複合的にみられることが明らかになった（柳 2013, 2014）。

特に、最も目立つ部分は、『『こ』で問い『そ』で答える』のような指示詞文が他の指示詞用法の習得に負の影響を与えていることである。それを筆者は「指示詞用法間の影響」と呼んでいる。また、第5章で韓国における日本語教育と教材における日本語指示詞の扱いに関する考察をした結果、日本語の「コ・ソ・ア」を韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と対応・対照した説明と日本語の用法より挿入式の説明（『『こ』で問い『そ』で答える』）がない文が殆どであったことから考えても、韓国人の学習者の指示詞習得には様々な要因が存在することがわかるだろう。

柳（2013）と第5章の調査から明らかになった結果に基づき、韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」習得の状況を更に調査・分析する必要があると考えた。また、どのような「指示詞用法間の影響」などがあるか、レベル別に指示詞の習得過程を調査し、どのように習得に影響を与えているのか考察することが目的である。また、韓国人学習者が日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際、どのように指示詞を認識しているのかも明らかにする。

### 6.2 被調査者および教育機関

調査対象は、大学で日本語を専攻し、学んでいる韓国人大学生と日本語を非専攻<sup>32</sup>で学ぶ韓国人大学生である。調査は2016年5月から8月にかけて韓国内の以下（1）～（4）の4つの大学で各大学に所属している教員にアンケートの実施、回収を依頼した。

- (1) 釜山外国語大学(釜山市)：私立総合大学
- (2) 江原大学(江原道、春川市)：国立総合大学
- (3) 東義大学(釜山市)：私立総合大学
- (4) 新羅大学(釜山市)：私立総合大学

被調査者である学生には、調査の目的や統計について了解を得た上で、その場で記

---

<sup>32</sup> 大学で教養として日本語を学習する場合。

入してもらう方法で調査票を回収した。記入の際に注意することとして、以下の内容を口頭で伝達した。

- (1) 自分で記入すること。
- (2) 教材や携帯でアンケート項目の答えを調べないこと。
- (3) 分からない語彙があれば、辞書は引いても構わない。
- (4) 素直に答えること。

調査に協力した学習者は 303 名で、それぞれの人数は以下の<表 6. 1>である。

<表 6. 1> アンケート調査の被調査者の人数 単位:人(%)

| レベル            | 初級      |         | 中級      |        | 上級     |        | 計        |
|----------------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|----------|
|                | 119(39) |         | 107(35) |        | 77(26) |        |          |
| 性別<br>(男/女)    | 57(19)  | 62(20)  | 52(17)  | 55(8)  | 42(14) | 35(12) | 303(100) |
| 専攻<br>(専攻/非専攻) | 76(25)  | 43(14)  | 85(28)  | 22(7)  | 72(24) | 5(2)   |          |
| 日本留学経験(有/無)    | 3(1)    | 116(38) | 17(6)   | 90(30) | 40(13) | 37(12) |          |

被調査者の日本語レベル分けは、日本語能力試験と被調査者の自己判別によってレベル分けをし、303 名の中で初級が 39%、中級が 35%、上級が 26%を占めている。また、この 303 名を「男と女」や「専攻と非専攻」、「日本留学経験有と無」に分類すると、性別は男性と女性が約 50%ずつで、専攻の違いによる割合は日本語専攻 77%に対して非専攻の場合 23%である。日本留学経験の有無によるそれぞれの割合は、経験者は 20%、未経験者が 80%である。

### 6. 3 韓国人学習者の指示詞習得

本調査協力者である 303 名の回答をレベル別に分け、各項目別にまとめる。全 10 項目を 6. 4. 2. 1 現場指示と 6. 4. 2. 2 非現場指示に分けて考察する。選択された回答の数と割合をレベル別に比較し、また選択した理由について書いてもらった自由記述も項目に分けてまとめたものに基づき、韓国人学習者による「コ・ソ・ア」の習得過程を明らかにする。

#### 6. 3. 1 調査内容

アンケートには、3 つのパートがある。Part I はフェースシートで、Part II は指示詞習得の状況について、最後の Part III は日本語指示詞の使用と使用上の認識について調査した。フェースシートには、性別や大学、専攻、日本語レベル、日本語能力試験、日本語学習歴、日本留学経験有無、主に日本語を学習する媒体について記入してもらった。Part II は、「指示詞の習得状況」を調査するため、第 5 章で分析した教材より 10 項目の指示詞文を引用してアンケートを作成した。各項目の指示詞文について、<



1. 自然>、<2. 不自然>、<3. どちらも言えない>3 つの中から一つを選択し、各項目の下に選択した理由を自由記述の形式である。記入例は以下の通りである。

|           |  |       |            |
|-----------|--|-------|------------|
| 例)<br>Q0. | A : <sup>えいが</sup> この映画、 <sup>おもしろ</sup> 面白いですか。 B : ええ、 <sup>おもしろ</sup> 面白いですよ。 |       |            |
|           | ① 自然   | ② 不自然 | ③ どちらも言えない |
|           | 選択した理由は、<br>( <span style="margin-left: 150px;">理由を簡単に書</span> )<br>く            |       |            |

<図 6. 1>アンケート調査:Part II の記入例<sup>33</sup>

現場指示 6 項目、非現場指示 4 項目でそれぞれの指示詞文は先行研究の分類に当てはまる用法を韓国の日本語教材から直接または一部修正して、引用した。教材より引用した各項目の指示詞文は次の通りである。

現場指示 2-1 から 2-6 の指示詞文は「相対的対立型」と「相対的融合型」に分けて作成した。

2-1 「相対的対立型」

A : これはあやさんのかばんですか。  
 B : そうです。それは、私のかばんです。

2-2 「相対的対立型」

A : これは何ですか。  
 B : それはてるてるぼうずです。

Youn 他 (2014 : 60-68)

2-3 「相対的対立型」

A : それは何ですか。  
 B : これは日本のまんがです。

Kim (2007 : 37)

2-1 から 2-3 は同じ用法の文である。佐久間 (1983) に基づいた佐久間説の定義として、話し手に近いものや人を指示する場合は「コ系列」を用い、聞き手又は相手に近いものや人を指し示す場合は「ソ系列」、話し手と聞き手の二人から遠く離れている場合は「ア系列」を用いる用法である。そして、2-1 から 2-3 までの文は第 5 章の調査によると、韓国における日本語教材の中で頻繁に出現する指示詞なのである。これら

<sup>33</sup> アンケートは各項目の指示詞文を除きすべて韓国語で作成した。

の指示詞を韓国人学習者はどのように習得しているか考察を行う。

2-4 「相対的融合型」

(写真を一緒に見ながら)

A : これ、加藤さんの若い時ですか。

B : いいえ、この人は吉田さんです。

Son 他 (2015 : 76)

2-5 「相対的融合型」

(タクシーの中で)

A : その道を右に曲がってください。

B : はい、そこの角ですね。

Son 他 (2015 : 76) 一部修正して引用<sup>34</sup>

2-6 「相対的融合型」

(空を飛ぶ鳥を指しながら)

A : あの鳥、何ですか。

B : あれはカササギですよ。

Son 他 (2015 : 76)

続いて、2-4 から 2-6 までの指示詞は阪田(1992)によると、話し手と聞き手が一緒に同じ領域にいて二人に近い物や人を指示する際、二人が「コ系列」を用いるものである。「ソ系列」の場合は二人と一緒に同じ空間にいて、二人から少し離れているものや人を指示する場合に用いる。「ア系列」場合は、二人と一緒に同じ空間にいて、二人から遠く離れているものや人を指す場合は二人とも「ア系列」を用いる。それぞれの指示詞使いに対して韓国人学習者はどのように習得されているかを考察する。

次は、非現場指示の用法で、「独立話題指示」の「ア系列」2項目と「相対的話題指示」の「ア系列」1項目と「ソ系列」1項目である。

2-7 「独立話題指示」

あの頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。

Son 他 (2015 : 249)

2-8 「独立話題指示」

あの時のステーキは本当においしかった。

Bae 他 (2015 : 17)

2-7 と 2-8 のような用法は「独立話題指示」であり、宋 (1991) によると、「概念に

<sup>34</sup> [택시 안에서] A : その道を右に入ってください。 B : はい、そこの角ですね。

存在している指示されるものを自分が知っているもので、平静に指し示すと想定した場合」に「ア系列」を用いるものである。

また、この用法は日韓対照の観点から比較してみると、両言語に違いがある用法で、先行研究ではその相違点の影響で習得が進まないと述べられている (Kawakami2010, 具 2010)。

#### 2-9 「 相対的話題指示 」

A : 昨日一緒に行ったあの店、とてもおいしかったね。

B : そうだね。あそこ、また行きたいね。

Son 他 (2015 : 77)

#### 2-10 「 相対的話題指示 」

A : 昨日、山下さんに会ったよ。

B : えっ、山下さん? だれ、その人?

Son 他 (2015 : 82) 一部修正して引用<sup>35</sup>

2-9 と 2-10 は「相対的話題指示」の用法に当てはまる文であり、「ア系列」と「ソ系列」の使い分けを示している。宋 (1991) によると、相対的話題指示の「ア系列」は、「指示されるものが、話し手と聞き手の共通の知識を保ち合っている話題性のある素材であると想定した場合、それを話し手が言及したり聞き手が確認したりするとき用いる」用法である。それに対して「ソ系列」は、「指示されるものが話し手と聞き手の中のいずれかの一方ないし皆無の知識の話題性がある素材であると想定した場合、それを話し手が言及したり聞き手が確認したりするとき用いる」と宋 (1991) は相対的話題指示用法の「ア系列」と「ソ系列」の使い分けについて述べている。

### 6. 3. 2 分析方法

被調査者である 303 名をレベル別に分けて分類し、6.4.2 指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する調査結果と 6.4.3 指示詞の使用と使用上の認識に関する調査結果に分けて分析を行う。各項目の選択された答えの数と割合を表にまとめる。また、選択された答えについて記入してもらった自由記述についても表まとめておく。レベル別に日本語の「コ・ソ・ア」がどのように習得されているのか考察を行う。

### 6. 3. 3 調査結果

上記の調査の結果を 6. 3. 3. 1 現場指示と 6. 3. 3. 2 非現場指示に分けて、韓国人学習者の指示詞の習得状況を分析・考察する。

---

<sup>35</sup> A : 藤田さんという人を知っていますか。 B : 知りません。誰ですかその人は。

### 6. 3. 3. 1 現場指示

本調査の「現場指示の用法」は「相対的現場指示の対立型」と「相対的現場指示の融合型」に分けて項目が作成されている。上述の 2-1 から 2-3 は「相対的現場指示の対立型」に当てはまる項目で、2-4 から 2-6 は「相対的現場指示の融合型」の用法である。

次の<表 6. 3>は 2-1 の項目に対して、自然なのか、不自然なのか、それとも、どちらとも言えないのかについて答えてもらった回答の数とその割合をレベルに分けてまとめたものである。<表 6. 4>、<表 6. 5>、<表 6.6>はそれぞれ選択した理由をまとめたものである。2-1 から順番通りに結果を分析する。

以下の<表 6. 3>から<表 6. 6>までは「相対的現場指示の対立型」の用法の 2-1「A：これはあやさんのかばんですか。 B：はい。そうです。それは私のかばんです。」の結果をまとめたものである。

<表 6. 3> 2-1 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然    | 2.不自然 | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|---------|-------|-------------|----------|
| 初級 | 102(85) | 5(4)  | 12(11)      | 119(100) |
| 中級 | 83(78)  | 11(9) | 13(13)      | 107(100) |
| 上級 | 68(86)  | 2(4)  | 7(10)       | 77(100)  |

2-1 の指示詞の場合、初級から上級の順に 85%、78%、86%が「自然」であると答えた。全レベルの約 8 割がこの指示詞に対して違和感を持っていない。「不自然」を選択した学習者もいるが、それより「どちらとも言えない」の割合に注目したい。各レベルの約 1 割が 2-1 の項目が自然なのか不自然なのか明確に言えないと答えた。

続いては、<自然><不自然><どちらとも言えない>を選択した理由には何があるかを検討する。

<表 6. 4> 2-1 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |   | 初級       | 中級      | 上級      |
|----|---|----------|---------|---------|
| 0  | 無応答                                     | 17(17)   | 21(25)  | 9(13)   |
| 1  | A と B の間に距離がある。                         | 5(5)     | 2(2)    | 6(9)    |
| 2  | 指示対象が A と近いから「これ」、B と少し離れているから「それ」を用いる。 | 33(32)   | 27(33)  | 25(38)  |
| 3  | A が B のかばんを持って、A と B が対面している。           | -        | -       | 1(1)    |
| 4  | 「これ」で問い、「それ」で答たえる。                      | 16(16)   | 9(11)   | 9(13)   |
| 5  | 「これ」と「それ」は物を指し示す指示詞である。                 | -        | -       | 1(1)    |
| 6  | 韓国語で考えたら自然である。                          | 5(5)     | 8(10)   | 6(9)    |
| 7  | このような文が正しいと習った。                         | 1(1)     | -       | 1(1)    |
| 8  | 直感的                                     | 25(24)   | 16(19)  | 10(15)  |
| 計  |   | 102(100) | 83(100) | 68(100) |

<表 6. 4>は「自然」だと選択した学習者がどのように考えているかを書いたものである。これらの表には「0.無応答」の数と割合も表している。まず、最も目立つ回答は「2.指示対象が A と近いから『これ』、B と少し離れているから『それ』を用いる。」で、初級 3.2 割、中級 3.3 割、上級 3.8 割を占めている。日本語の「コ・ソ・ア」の用法や使い分けに注目して考えているのが分かった。このように指示詞の用法を中心に捉えていることに対し、「4.『これ』で問い、『それ』で答える。」からであると答えた学習者もある。この回答は第 5 章の結果から関連付けて考える。「4.『これ』で問い、『それ』で答える。」は Kawakami (2010) に言及されたことで、「コ」と「ソ」の使い分けよりも、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」を使う 1 つの特徴として多く日本語教材に言及されている。言い換えれば、2-1 の「A: これはあやさんのかばんですか。B: はい。そうです。それは私のかばんです。」の項目には、この「4.『これ』で問い、『それ』で答える。」が当てはまるため、指示詞の使い方を正しく捉えていることになる。

それ以外にも、「8.直感的」の場合は、調査協力者 303 名の中の 2 割の学習者が答えた。日本語の指示詞を文法的に捉えるのではなく、日本語の文を見た際に違和感があるかないか、または自然に取れるかを基準として指示詞を考えているとも言えよう。

<表 6. 5> 2-1 「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                       | 初級     | 中級      | 上級     |
|----|-----------------------|--------|---------|--------|
| 0  | 無応答                   | 1(20)  | 1(9)    | 1(50)  |
| 1  | 会話内容自体が不自然である。        | 2(40)  | 1(9)    | 1(50)  |
| 2  | 「これ-これ」               | 1(20)  | 7(64)   | -      |
| 3  | 「それ-これ」               | 1(20)  | -       | -      |
| 4  | 「あれ-これ」               | -      | -       | -      |
| 5  | 指示詞を                  | -      | 1(9)    | -      |
| 6  | 「それ」の後ろにある「、」が不自然である。 | -      | 1(9)    | -      |
| 計  |                       | 5(100) | 11(100) | 2(100) |

2-1 に対し、「不自然」であると選択した学習者の数は「自然」の場合と比べたら、数は多くない。<表 6. 5>では「これ-これ」と「それ-これ」、「あれ-これ」と書いた学習者は、自分のかばんを「それ」を用いて指示することは正しいと述べて(B)の指示詞は「それ」ではなく「これ」だと殆どが答えた。「コ系列」の使い分けに対して、「身近な物事を指示する際」のことが「自分の物事を指示する際」に変更された形で考えているかもしれない。

<表 6. 6> 2-1 「3.どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                    | 初級      | 中級      | 上級     |
|----|--------------------|---------|---------|--------|
| 0  | 無応答                | -       | 3(23)   | 2(29)  |
| 1  | もっと詳しい場面の説明が必要である。 | 12(100) | 10(77)  | 5(71)  |
| 計  |                    | 12(100) | 13(100) | 7(100) |

2-1 の指示詞のに対し、「3. どちらとも言えない」と回答した学習者はレベルごとに約 1 割ずつである。そのように答えた理由として、「1. もっと詳しい場面の説明が必要である。」という答えが殆どであった。

次は 2-2 の「A: これは何ですか。B: それはてるてるぼうずです。」の結果である。2-2 は 2-1 と同じように、「相対的現場指示の対立型」の用法であって、文の形も似ている 2-1 の結果と比べながら、分析する。

<表 6. 7> 2-2 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然   | 2.不自然 | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|--------|-------|-------------|----------|
| 初級 | 94(79) | 9(8)  | 16(13)      | 119(100) |
| 中級 | 86(80) | 8(8)  | 13(12)      | 107(100) |
| 上級 | 64(83) | 6(8)  | 7(9)        | 77(100)  |

「自然」と答えた学習者の割合は 2-1 の結果とそんなに変わりはない。各レベルの約 8 割がこの文を自然で正しい文であると考えている。まず、「1. 自然」を選択した理由を見てみよう。

<表 6. 8> 2-2 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |   | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|---|---------|---------|---------|
| 0  | 無応答                                     | 15(16)  | 25(29)  | 7(11)   |
| 1  | A と B の間に距離がある。                         | 2(2)    | 1(1)    | 5(8)    |
| 2  | 指示対象が A と近いから「これ」、B と少し離れているから「それ」を用いる。 | 29(31)  | 28(32)  | 29(45)  |
| 3  | A が B のかばんを持って、A と B が対面している。           | 1(1)    | -       | -       |
| 4  | 「これ」で問い、「それ」で答える。                       | 19(20)  | 10(12)  | 6(9)    |
| 5  | 「これ」と「それ」は物を指し示す指示詞である。                 | -       | 1(1)    | -       |
| 6  | 韓国語で考えたら自然である。                          | 7(8)    | 5(5)    | 5(8)    |
| 7  | このような文が正しいと習った。                         | 3(3)    | -       | 1(2)    |
| 8  | 直感的                                     | 18(19)  | 16(19)  | 11(17)  |
| 計  |   | 94(100) | 86(100) | 64(100) |

2-2 が「自然」である理由も、2-1 と同じように、「2. 指示対象が A と近いから『これ』、B と少し離れているから『それ』を用いる。」と書いた答えが多かった。またこの文にも「『これ』に問い、『それ』で答える。」ということで、2-2 が自然だと答えた学習者も少なくともあった。4 の「『これ』に問い、『それ』で答える。」は、2 の「指示対象が A と近いから『これ』、B と少し離れているから『それ』を用いる。」とは違う捉え方で、4 の場合「コ・ソ・ア」の特殊な使い方として判断していると考えられる。

<表 6. 9> 2-2 「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                                  | 初級     | 中級     | 上級     |
|----|----------------------------------|--------|--------|--------|
| 0  | 無応答                              | 2(22)  | 3(37)  | 3(50)  |
| 1  | 「これ-これ」                          | 2(22)  | 5(63)  | -      |
| 2  | 「それ-これ」                          | 1(11)  | -      | 1(16)  |
| 3  | 「あれ-これ」                          | -      | -      | 1(16)  |
| 4  | B が知っている対象であるため「あれ」を用いる(「これ-あれ」) | -      | -      | 1(17)  |
| 5  | A と B の距離がもっと離れている。              | 1(11)  | -      | -      |
| 6  | 直感的                              | 3(24)  | -      | -      |
| 計  |                                  | 9(100) | 8(100) | 6(100) |

2-2 の文が「不自然」であると選択した学習者は、レベルごとに 0.8 割の人しかいなかったが、中級の場合は、8 名中 5 名が「これ-それ」の文に対して違和感を持ち、「これ-これ」に直した方が良いと答えた。

また、上級者の答えの中で一つ注目すべきものがあった。「4. B が知っている対象であるため「あれ」を用いる」という回答である。これを言い換えれば、B は指示する「てるてるぼうず」を知っているから「A 系列」を用いて指示すべきである。これは、「非現場指示の相対的課題指示」の「A 系列」が 2-2 現場指示の用法に影響を与えたと言えよう。「指示詞用法間の影響」が生じた部分であると考えられる。

<表 6. 10> 2-2 「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                    | 初級      | 中級      | 上級     |
|----|--------------------|---------|---------|--------|
| 0  | 無応答                | 4       | 1       | 1      |
| 1  | 「これ-これ」も可能である。     | -       | 2       | -      |
| 2  | もっと詳しい場面の説明が必要である。 | 11      | 9       | 5      |
| 3  | 後ろ B の指示詞はなくてもいい。  | -       | 1       | 1      |
| 4  | 分からない。             | 1       | -       | 1      |
| 計  |                    | 16(100) | 13(100) | 7(100) |

2-1 の指示詞文に対し、「3. どちらとも言えない」の回答は 2-1 と変わらない。最も多く挙げられた理由は、「2. もっと詳しい場面の説明が必要である。」という答えである。ところが、2-1 より様々な理由があった。「これ-これ」の文も可能であるなど、B にある指示詞はなくても良いなどの意見もあった。「4. 分からない」の場合は、指示詞文が正しいのか間違っているのかを判断できないという意味である。

次に 2-3 の「A：それは何ですか。B：これは日本語のまんがです。」の結果をまとめた<表 6. 11>から<表 6.14>を見てみよう。2-3 も前の項目と同様の「相対的現場指示の対立型」の用法であるが、「それ-これ」で構成されている。2-1、2-2 の結果と比較しながら結果を述べる。

&lt;表 6. 11&gt; 2-3 の回答の数と割合

単位：人(%)

| 区分 | 1.自然    | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|---------|--------|-------------|----------|
| 初級 | 100(84) | 9(8)   | 10(8)       | 119(100) |
| 中級 | 85(80)  | 11(10) | 11(10)      | 107(100) |
| 上級 | 68(88)  | 3(4)   | 6(8)        | 77(100)  |

「A：それは何ですか。B：これは日本語のまんがです。」の会話文については、初・中・上級のレベルは関係なく、全体的に「自然」であると学習者は考えている。数値的に 2-1 と 2-2 の結果と比べてみるとあまり変わらない。それぞれの回答に対する理由について検討してみよう。

&lt;表 6. 12&gt; 2-3 「1. 自然」を選択した理由

単位：人(%)

| 区分 |  | 初級       | 中級      | 上級      |
|----|--|----------|---------|---------|
| 0  | 無応答                                    | 20(20)   | 26(31)  | 11(16)  |
| 1  | A と B の間に距離がある。                        | 2(2)     | 2(2)    | 4(6)    |
| 2  | 指示対象が A 少し離れているから「それ」、B と近いから「これ」を用いる。 | 35(35)   | 31(37)  | 36(53)  |
| 3  | 「それ」で問い、「これ」で答える。                      | 17(17)   | 7(8)    | 2(3)    |
| 4  | 韓国語で考えたら自然である。                         | 7(7)     | 10(12)  | 6(9)    |
| 5  | このような文が正しいと習った。                        | 3(3)     | 1(1)    | 2(3)    |
| 6  | 直感的                                    | 16(16)   | 8(9)    | 7(10)   |
| 計  |  | 100(100) | 85(100) | 68(100) |

「自然」である理由として、殆どが次のように捉えているとは言えないが、最も目立つこととして「2. 指示対象が A 少し離れているから「それ」、B と近いから「これ」を用いる。」である。これは 2-1、2-2 の「指示対象が A と近いから「これ」、B と少し離れているから「それ」を用いる。」という答えと同一のものである。

また、2-3 の「それ-これ」の文に対して「3. 『それ』で問い、『これ』で答える。」から、この指示詞文が正しいと回答した学習者もいた。特に、初級の場合が他のレベルよりも多く見られた。

その他に韓国語と対応して日本語の文を判断するなど、このような文について正しいと習ったなど、様々な意見があった。

&lt;表 6. 13&gt; 2-3 「2. 不自然」を選択した理由

単位：人(%)

| 区分 |                                   | 初級     | 中級      | 上級     |
|----|-----------------------------------|--------|---------|--------|
| 0  | 無応答                               | 5(56)  | 3(27)   | -      |
| 1  | 「これ-これ」                           | 3(33)  | 1(9)    | -      |
| 2  | 「これ-それ」                           | 1(11)  | -       | 2(67)  |
| 3  | 「あれ-これ」                           | -      | 2(18)   | -      |
| 4  | B が持っている物を A が「それ」で指示することが不自然である。 | -      | -       | 1(33)  |
| 5  | 直感的                               | -      | 5(46)   | -      |
| 計  |                                   | 9(100) | 11(100) | 3(100) |



2-3 に対し、「不自然」と選択された数は「自然」より少ない結果であるが、その中の理由は検討する必要がある。まず、初級の場合、無応答に該当する部分を除き、用いられた指示詞の系列に関する答えである。「それ-これ」のより、「1. これ-これ」とか「2. これ-それ」の方を正しいと考えている。上級の3名中、2名も「2. これ-それ」の方が正しいと回答した。この部分は2-1と2-2の『これ』で問い、『それ』で答えるの規則に合わないもので、違和感があると答えた学習者もいた。中級の場合、用法的な捉え方より、直感的に考えたという意見が多かった。

<表 6. 14> 2-3 「3. どちらとも言えない」を選択した理 単位：人(%)

| 区分 |                   | 初級      | 中級      | 上級     |
|----|-------------------|---------|---------|--------|
| 0  | 無応答               | 9(90)   | 2(18)   | 1(16)  |
| 1  | 「これ-それ」も可能である。    | -       | -       | 1(17)  |
| 2  | 「それ-それ」も可能である。    | -       | 2(18)   | -      |
| 3  | もっと詳しい説明が必要である。   | -       | 6(55)   | 4(67)  |
| 4  | 後ろ B の指示詞はなくてもいい。 | -       | 1(9)    | -      |
| 5  | 分からない。            | 1(10)   | -       | -      |
| 計  |                   | 10(100) | 11(100) | 6(100) |

「3. どちらとも言えない」と回答した学習者は、「2. 不自然」を選択した数がほぼ同じ数値を表している。また、初級の場合、「0. 無応答」と答えた学習者が多い。それに対し、目立つ意見としては、「4. もっと詳しい場面の説明が必要である。」という答である。会話の場面によって「コ・ソ・ア」の使い分けが違ふということを学習者は認知しているということになる。

このように現場指示の中でも、「相対的現場指示の対立型」に当たる項目の結果を分析した結果、意外と韓国人学習者は日本語の指示詞を場面によって「コ・ソ・ア」に合わせて使おうとしている状況もあった反面、『これ』で問い、『それ』で答えるのような数学公式の形式に合わせて「コ・ソ・ア」を用いている状況も見られた。

続いては、同じ現場指示用法の「対立型」ではなく「融合型」の項目の結果を分析する。

<表 6. 15> 2-4 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然   | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|--------|--------|-------------|----------|
| 初級 | 60(51) | 48(40) | 11(9)       | 119(100) |
| 中級 | 56(52) | 43(40) | 30(8)       | 107(100) |
| 上級 | 40(51) | 30(40) | 7(9)        | 77(100)  |

2-4 は、A と B の会話で「(写真を一緒に見ながら)A：これ、加藤さんの若い時ですか。B：いいえ、この人は吉田さんです。」に関する回答で、この設問の場合、初・中・

上級の全レベルでの<1. 自然>対<2. 不自然>の割合が、50%対 40%となる結果が出た。

<表 6. 16> 2-4 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                           | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|---------------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無応答                       | 13(22)  | 20(36)  | 6(15)   |
| 1  | A と B の距離が近い。             | -       | 1(2)    | 3(7)    |
| 2  | 指示対象を A と B が同じ距離で指示している。 | 31(52)  | 24(43)  | 19(47)  |
| 3  | お互い共有している指示対象は「こ」を用いる。    | 3(5)    | 1(2)    | 1(3)    |
| 4  | 韓国語で考えたら自然である。            | 5(8)    | 2(3)    | 5(13)   |
| 5  | 直感的                       | 8(13)   | 8(14)   | 6(15)   |
| 計  |                           | 60(100) | 56(100) | 40(100) |

まずは、自然であると理由として、「0.無応答」を除き、最も目立つのは、「2. 指示対象を A と B が同じ距離で指示している。」という回答である。レベルごとに約 40%以上、この文に対し、A と B が一緒いて対象を指示しているからお互い「コ」系列を用いることが自然であると答えた。

それ以外は、「5. 直感的」に考え、この文が自然に読み取れるからだと答えた学習者は、各レベル約 10%ずつである。

これまでの結果から一つ言えることは、韓国人学習者は指示詞を用いる際、日本語の用法で考えようとしていることである。対立型の場合は、自然の回答が殆どであったのに対して、2-4 の融合型の回答は自然と不自然が半分半分の割合だったため、次は「2. 不自然」を選択したそれぞれの理由を検討してみる。

<表 6. 17> 2-4 「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                  | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無応答              | 11(23)  | 10(23)  | 6(20)   |
| 1  | 「これ-その」          | 10(21)  | 6(14)   | 10(34)  |
| 2  | 「これ-あの」          | 1(2)    | 2(5)    | 4(13)   |
| 3  | 人に「これ」は使えない。     | 18(38)  | 23(53)  | 8(27)   |
| 4  | 韓国語に直すと不自然である。   | 1(2)    | -       | -       |
| 5  | あえて指示詞を用いる必要がない。 | 2(4)    | -       | 1(3)    |
| 6  | 直感的              | 5(10)   | 2(5)    | 1(3)    |
| 計  |                  | 48(100) | 43(100) | 30(100) |

<表 6. 17> 「1. これ-その」と「2. これ-あの」に注目すると、同一な指示詞の系列使用に違和感を持っていることが分かる。上級でもその数は少なくない。この部分は相対的現場指示の「対立型」、「『これ』で問い『それ』で答える」の影響を受けた結果であると考えられる。文の場面から考えると、指示詞の使用に集中して考えるとも言えよう。また、「3. 人に『これ』は使えない。」に対する回答も初・中級に数多く見られる。指示詞の用法より、「コ・ソ・ア」の後に来る名詞に意識を向けている。言い

換えれば、「コ系列」が正しいか正しくないかにより、「これ」は物を指す指示詞で、すなわち「人」には使えないと学習者が捉えているのである。

<表 6. 18> 2-4 「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                    | 初級      | 中級     | 上級     |
|----|--------------------|---------|--------|--------|
| 0  | 無応答                | 2(18)   | 2(25)  | -      |
| 1  | 「これ-その」も可能である。     | -       | 1(12)  | 2(28)  |
| 2  | もっと詳しい場面の説明が必要である。 | 6(55)   | 4(50)  | 3(43)  |
| 3  | 分からない。             | 3(27)   | 1(13)  | 2(29)  |
| 計  |                    | 11(100) | 8(100) | 7(100) |

2-4の項目に対し、「3.どちらとも言えない」を選択した学習者は自然・不自然の割合と比べると多くはないが、その中でも、文の場面についてもっと詳しく説明してほしいと答えた人の割合が高いことが際立っている。

次の<表 6. 19>は同じ融合型で「ソ系列」を用いた「(タクシーの中で) A: その道を右に曲がってください。B: はい、その角ですね。」に対する結果を表したものである。

<表 6. 19> 2-5 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然   | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|--------|--------|-------------|----------|
| 初級 | 49(40) | 60(51) | 10(9)       | 119(100) |
| 中級 | 45(38) | 55(53) | 7(9)        | 107(100) |
| 上級 | 22(28) | 49(66) | 5(6)        | 77(100)  |

この設問の結果の特徴は、「2. 不自然」を選択した学習者がレベルに関係なく多いことである。レベルが上がるにつれ、徐々に不自然の割合が高くなっている。この文に対しては、教材には「近くも遠くもないものを指示する際、『ソ』を用いる(Son 2015 : 76)」と説明している。学習者はどのように考えているのか見てみよう。

<表 6. 20> 2-5 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                              | 初級      | 中級      | 上級     |
|----|------------------------------|---------|---------|--------|
| 0  | 無応答                          | 14(29)  | 24(53)  | 3(14)  |
| 1  | AとBが同じ空間で会話している。             | 12(25)  | 2(5)    | 2(9)   |
| 2  | AとB、二人から遠いところを指示する。          | 7(14)   | 5(11)   | 3(14)  |
| 3  | AとBが指示対象をよく知っている(認知)。        | 1(2)    | -       | 1(4)   |
| 4  | 少し離れているところを指示する。             | 1(2)    | 5(11)   | 1(4)   |
| 5  | 運転手Bは、Aが言及したことを改めて確認したことである。 | -       | -       | 3(14)  |
| 6  | 「こ」と「あ」は不自然である。              | -       | -       | 1(4)   |
| 7  | 韓国語で考えたら自然である。               | 5(10)   | 3(7)    | 3(14)  |
| 8  | 聞いたことがある文である。                | 1(2)    | 1(2)    | -      |
| 9  | 直感的                          | 8(16)   | 5(11)   | 5(23)  |
| 計  |                              | 41(100) | 40(100) | 17(77) |

まず、「1. 自然」と答えた場合を見ると、その理由を答えてくれなかった学習者が多いが、その中でも「1. AとBが同じ空間で会話している。」と「2. AとB、二人から遠いところを指示する」のように場面を考えて指示詞の使分けしている。また、母国語である韓国語と対照して考えている様子もレベルに関係なく見えるが、この用法は韓国語の「이(i)・그(geu)・저(jeo)」と対応して考えると両言語間にズレがある用法である。また、指示詞の「その」と「そこ」が自然に読み取れるか、または、文章と指示詞が合うのかなど、文法的な知識に基づく考えよりも直感的に判断していることが分かる。

また、一つ注目すべき回答がある。「3. AとBが指示対象をよく知っている(認知)」という答えで、初級と上級に一人ずついる。2-2の結果でも、現場指示の用法に非現場指示が影響を与えた場合と同じとも言える。ただし、2-5の場合、「現場指示用法の融合型」の「ソ」を、「非現場指示用法の相対的话题指示」の「ア」と勘違いしている。複数の用法が混ざっている。これを本稿では「指示詞用法間の影響」と呼ぶことにする。

<表 6. 21> 2-5 「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                  | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無応答              | 20(34)  | 8(15)   | 10(20)  |
| 1  | 「その-ここ」、「この-そこ」  | 12(20)  | 20(35)  | 6(12)   |
| 2  | 「その-あそこ」、「あの-そこ」 | 14(23)  | 12(22)  | 14(29)  |
| 3  | 「この-ここ」          | -       | -       | 2(4)    |
| 4  | 「あの-あそこ」         | 6(10)   | 13(24)  | 13(27)  |
| 5  | 韓国語に直すと不自然である。   | 3(5)    | -       | 1(2)    |
| 6  | 直感的              | 5(8)    | 2(4)    | 3(6)    |
| 計  |                  | 60(100) | 55(100) | 49(100) |

「2. 不自然」を選択した理由としては、指示用法の対立型である「1. 『その-ここ』、『この-そこ』」と「2 『その-あそこ』、『あの-そこ』」の指示詞系列を用いる正しいという答えが各レベル約4割を占めている。これらは、2-4の<表 6. 17>の結果と似ている。多くの学習者が同じ系列の指示詞の使用に違和感を持っていることが分かった。

「4. 『あの-あそこ』」と「5. 韓国語に直すと不自然である。」を関連付けて考察をする。2-5の項目に対して「ソ系列」より「ア系列」の使用が正しいと回答したのは、「(タクシーの中で)A: その道を右に曲がってください。B: はい、その角ですね。」を韓国語に直すと「저系列」の指示詞を用いる文になる。この「저」は日本語の「ア系列」と対応する指示詞である。そのため、「4. 『あの-あそこ』」の回答が多く出たと考える。しかし、初級の場合、「『これ』で問い、『それ』で答える」と「対立型」の影響を母語より多く受けている。それに対し、中・上級の場合は、母国語の影響と対立

型、両方の影響を受けていると上の<表 6. 21>から言うことができる。

<表 6. 22> 2-5 「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |  | 初級      | 中級     | 上級     |
|----|--|---------|--------|--------|
| 0  | 無応答                                      | 5(50)   | 3(43)  | 1(20)  |
| 1  | 道を見て認知した後の会話であれば、「この-ここ」も可能である。          | -       | 1(14)  | 1(20)  |
| 2  | A と B 二人がその道についてよく知っていれば、「あの-あそこ」も可能である。 | -       | 1(14)  | -      |
| 3  | もっと詳しい場面の説明が必要である。                       | 2(20)   | 1(15)  | 3(60)  |
| 4  | 分からない。                                   | 3(30)   | 1(14)  | -      |
| 計  |  | 10(100) | 7(100) | 5(100) |

2-5 の指示詞文に対し、「3. どちらとも言えない」を選択した数が少ないが、意見としては、「3. もっと詳しい場面の説明が必要である。」という答えが目立つ。

以上、これまで 2-5 のアンケート結果を考察した結果、韓国人学習者は指示詞の使用に同じ系列を用いることに違和感があることが明らかになった。そして、現指示詞用法の対立型の影響を受けて習得が進まなくなる状況も見てきた。

次の 2-6 は、「融合型」の「A 系列」に該当する例文である。AB 二人が空を飛ぶ鳥を指しながらの会話で、「A：あの鳥何ですか。B：あれはカササギですよ。」という内容である。

<表 6. 23> 2-6 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分            | 1.自然   | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|---------------|--------|--------|-------------|----------|
| 初級            | 97(82) | 16(14) | 6(4)        | 119(100) |
| 中級            | 97(91) | 8(7)   | 2(2)        | 107(100) |
| 上級<br>(1名無回答) | 73(96) | 3(4)   | 0(0)        | 76(100)  |

<表 6. 24>を見ると、2-6 の設問は 2-4 と 2-5 の結果より<1. 自然>の割合が著しく高いことが分かる。初級の場合 8.2 割、中級は約 9 割、上級は 77 名中、73 名がこの項目の指示詞文が正しいと答えた。それぞれの理由を以下の<表 6. 24>、<表 6. 25>と<表 6. 26>を見ながら考察する。

<表 6. 24> 2-6 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                            | 初級     | 中級     | 上級     |
|----|----------------------------|--------|--------|--------|
| 0  | 無回答                        | 27(28) | 34(35) | 13(18) |
| 1  | A と B、二人から遠くにいる/ある対象を指示する。 | 39(40) | 39(40) | 32(44) |
| 2  | A と B が同じ空間で会話をしている。       | -      | -      | 3(4)   |
| 3  | A と B が同じ対象を指示している。        | 6(6)   | 5(4)   | 5(7)   |
| 4  | A と B が指示対象を良く知っている(認知)。   | 5(5)   | 2(2)   | 1(1)   |
| 5  | A と B が「あ-あ」のように同じ系列の指示    | 3(3)   | -      | 2(3)   |

|   |                           |         |         |         |
|---|---------------------------|---------|---------|---------|
|   | 詞を用いた。                    |         |         |         |
| 6 | A と B が指示する対象を見ながら会話している。 | 2(2)    | -       | -       |
| 7 | 韓国語で考えたら自然である。            | 8(9)    | 2(2)    | 6(8)    |
| 8 | 聞いたことがある文である。             | 1(1)    | 1(1)    |         |
| 9 | 直感的                       | 6(6)    | 14(15)  | 11(15)  |
|   | 計                         | 97(100) | 97(100) | 73(100) |

<表 6. 24>で目立つのは、「1. A と B、二人から遠くにいる/ある対象を指示する。」という答えである。「ア系列」は「遠くにいる/ある対象を指示」の場合を用いると認識されているようである。それ以外は、韓国語と対応させて直すと自然など、また直感的に読み取れるなどの意見もあった。

ところが、「4. A と B が指示対象を良く知っている(認知)」の回答に注目されたい。この 2-6 の指示詞文は目に見える鳥を指示する場面で、「現場指示用法」の一つである。しかし、「4. A と B が指示対象を良く知っている(認知)」の答えは「非現場指示用法の相対的話題指示」の「ア系列」を用いる際の条件でよく挙げられるものである。それが、初級と上級の中で見られたため、「現場指示」の習得に「非現場指示」の用法が影響を与えているのではないだろうかと考えられるのである。

<表 6. 25> 2-6 「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                                     | 初級      | 中級     | 上級     |
|----|-------------------------------------|---------|--------|--------|
| 0  | 無回答                                 | 8(50)   | 4(45)  | -      |
| 1  | 「あの-それ」「その-あれ」                      | 6(38)   | 1(11)  | 1(25)  |
| 2  | 「あの-これ」                             | -       | 1(11)  | 1(25)  |
| 3  | 動いている対象であるため、A と B はお互い違う位置を指示している。 | -       | 1(11)  | 1(25)  |
| 4  | 「あれ」は物を指示する指示詞である。                  | 1(6)    | 1(11)  | -      |
| 5  | 直感的                                 | 1(6)    | 1(11)  | 1(25)  |
|    | 計                                   | 16(100) | 9(100) | 4(100) |

<表 6. 26> 2-6 「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                    | 初級     | 中級     | 上級     |
|----|--------------------|--------|--------|--------|
| 0  | 無回答                | 3(50)  | 1(100) | -      |
| 1  | もっと詳しい場面の説明が必要である。 | 2(33)  | -      | -      |
| 2  | 後ろ B の指示詞はなくてもいい。  | 1(17)  | -      | -      |
|    | 計                  | 6(100) | 1(100) | 0(100) |

2-6 の「融合型」の「ア系列」に対し、「2. 不自然」と「3. どちらとも言えない」の回答が全体と比べると少ない。しかし、初級の場合、<表 6. 25>の「1. 『あの-それ』、『その-あれ』」のように異なる指示詞を用いた方が正しいと考えている場合もある。<表 6. 26>の場合初級の学習者の意見が殆どだが、その中には文に対する場面の説明が必要だという答えがある。

以上、「現場指示用法」に当たる 2-1 から 2-6 の結果を考察してみた。次の 2-7 から 2-10 までの「非現場指示用法」に該当する項目の結果を分析して述べる。

### 6. 3. 3. 2 非現場指示

「非現場指示用法」は、「独立話題指示の『ア系列』」と「相対的話題指示の『ア系列』」と「相対的話題指示の『ソ系列』」の例文で構成されている。

まずは 2-7 の設問で「あの頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。」という文が自然なのか、不自然なのか、それともどちらとも言えないかを選択した結果を<表 6. 27>にまとめた。

<表 6. 27> 2-7 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然   | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|--------|--------|-------------|----------|
| 初級 | 69(58) | 28(22) | 22(20)      | 119(100) |
| 中級 | 67(63) | 23(21) | 17(16)      | 107(100) |
| 上級 | 60(79) | 10(13) | 7(8)        | 77(100)  |

「あの頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。」の回答は、初級では「1. 自然」と「2. 不自然」、「3. どちらとも言えない」3つの選択に全体的に広がっている。それが、レベルが上がるにつれ、「1.自然」という選択に集中されていることが分かる。しかし、上級の場合もこの文を自然だと考えている割合は8割未満であるため、この用法は韓国人学習者が習得の際に難しいと思われる部分なのではないだろうか。それぞれの自由記述の内容と比較しながら考察する。

<表 6. 28> 2-7 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                          | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|--------------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無回答                      | 31(45)  | 24(36)  | 12(20)  |
| 1  | 「あの頃」は韓国語「그 시절」の意味である。   | 4(6)    | 6(9)    | 7(12)   |
| 2  | 過去の時点を指示している(過去回想、思い出など) | 12(17)  | 17(25)  | 23(38)  |
| 3  | 指示対象についてお互い知っている(共有)。    | 1(2)    | -       | 2(3)    |
| 4  | 時間は抽象的のものであるため「あ」で指示する   | 1(2)    | 1(2)    | 1(2)    |
| 5  | 何か遠くにあるものを指しながら話している。    | -       | 2(3)    | -       |
| 6  | 「こ」と「そ」は不自然。             | 1(1)    | 2(3)    | -       |
| 7  | 韓国語で考えたら自然である。           | 1(1)    | 4(6)    | -       |
| 8  | 聞いたことがある文である。            | 2(3)    | 4(6)    | 5(8)    |
| 9  | 直感的                      | 16(23)  | 7(10)   | 10(17)  |
| 計  |                          | 69(100) | 67(100) | 60(100) |

初級の場合、2-7 が自然である理由としては 無回答を除くと、「9. 直感的」の回答

が多かった。その中には「8. 聞いたことがある文である。」を含め、自然に読み取れるなどの答えが多い。それに対し、中・上級は「過去の時点を指示している」という回答が最も目立つ。「ア系列」は「過去の経験や思い出」などを指示する際に用いる指示詞であるという知識を習得をしている。その反面、中・上級でも、指示詞の文に多く接したことがあるか、また、自然に読み取れるのかなど、文法・用法の観点からではなく直感的に判断していることが分かる。

また、「独立話題指示用法」を「相対的課題指示用法」としてとらえていることも「3. 指示対象についてお互い知っている」という答えから明らかになった。

<表 6. 29> 2-7「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                     | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|---------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無回答                 | 6(22)   | 11(48)  | 1(10)   |
| 1  | 「その頃」               | 11(39)  | 4(17)   | 4(40)   |
| 2  | 「この頃」               | 2(7)    | 3(13)   | -       |
| 3  | 「頃」よりは「時」           | -       | -       | 1(10)   |
| 4  | 「あ」系列で過去の時点が指示できない。 | 1(4)    | -       | -       |
| 5  | 指示詞がなくてもいい。         | -       | 1(4)    | -       |
| 6  | 聞いた事がない。            | -       | -       | 2(20)   |
| 7  | 韓国語に直すと不自然。         | 4(14)   | 2(9)    | 1(10)   |
| 8  | 直感的                 | 4(14)   | 2(9)    | 1(10)   |
| 計  |                     | 28(100) | 23(100) | 10(100) |

<表 6. 29>は「不自然」の答えに対する理由をまとめたもので、最も目立つのは「2. その頃」である。初・中・上級のレベルに関係なく、全体的に「その頃」が正しくて「あの頃」は正しくないと答えている。それと結びつけることは「7.韓国語に直すと不自然」である。これを説明するには、日本語の「コ・ソ・ア」と韓国語の指示詞を対照する必要がある。「あの頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。」という文を韓国語に直すと「あの頃」の部分が「그 시절」になる。「그 시절」の「그」は日本語の「ソ」に対応する指示詞である。そのため、多くの学習者が「あの頃」ではなく「その頃」が合うと考えるのではないだろうか。

ここまでの内容をまとめてみると、学習者は韓国語の影響も受けていると同時に、日本語指示詞の使い分けの用法の影響も複合的に受けていると言える。

以下の<表 6. 30>は自然なのか、不自然なのか、言えないと答えた学習者らの意見である。

「0. 無回答」と「4. 分からない」の回答が多いことから、この 2-7「独立話題指示」の用法が韓国人学習者に正確に習得されていない状況であることが分かった。

<表 6. 30> 2-7「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 | 初級 | 中級 | 上級 |
|----|----|----|----|
|----|----|----|----|



|   |                     |         |         |        |
|---|---------------------|---------|---------|--------|
| 0 | 無回答                 | 9(41)   | 7(41)   | 2(28)  |
| 1 | 「その」も可能である(その頃、あの頃) | 2(9)    | 3(18)   | 1(14)  |
| 2 | 指示詞で時制を表すことができない。   | -       | 1(6)    | -      |
| 3 | もっと詳しい場面の説明が必要である。  | 1(5)    | 2(12)   | 2(29)  |
| 4 | 分からない。              | 10(45)  | 4(23)   | 2(29)  |
| 計 |                     | 22(100) | 17(100) | 7(100) |

次の 2-8 も 2-7 と同じ「独立話題指示用法」として「あの時のステーキは本当においしかった。」の文である。以下の<表 6. 31>から結果を見る。

<表 6. 31> 2-8 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然   | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|--------|--------|-------------|----------|
| 初級 | 59(49) | 48(39) | 12(12)      | 119(100) |
| 中級 | 62(58) | 28(24) | 17(18)      | 107(100) |
| 上級 | 58(75) | 13(18) | 6(7)        | 77(100)  |

2-8 の場合、2-7 と同じ用法であるため、結果が似ている。初級では、習得が揺れており、レベルが上がるにつれ、安定していく。初・中級レベルではこの用法の習得が一向にできていないことを示す数値となっている。

<表 6. 32> 2-8 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                          | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|--------------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無回答                      | 21(36)  | 27(43)  | 11(19)  |
| 1  | 「あの時」は韓国語「그 때」の意味である。    | 4(7)    | 6(10)   | 9(15)   |
| 2  | 過去の時点を指示している(過去回想、思い出など) | 10(17)  | 14(22)  | 21(36)  |
| 3  | 指示対象についてお互い知っている(共有)。    | 3(5)    | 1(2)    | 1(2)    |
| 4  | 時間は抽象的のものであるため「あ」で指示する   | -       | -       | 1(2)    |
| 5  | 「こ」と「そ」は不自然。             | -       | 1(2)    | 1(2)    |
| 6  | 独り言である。                  | -       | -       | 3(5)    |
| 7  | 韓国語で考えたら自然である。           | 3(5)    | 2(3)    | -       |
| 8  | 聞いたことがある文である。            | 5(8)    | 3(5)    | 4(7)    |
| 9  | 直感的                      | 13(22)  | 8(13)   | 7(12)   |
| 計  |                          | 59(100) | 62(100) | 58(100) |

なぜ「自然」であると考えたかに対する答えも、2-7<表 6.28>とあまり変わりがない結果となった。初級は用法的な接近より、自分が聞いたことが、または見たことがあるかなど経験に基づく直感的な部分に頼っていることが分かる。それに対して、中・上級も中級より割合は小さく、用法的に指示詞を考えようとしている。しかし、上で述べたように、様々な要因が習得に影響を与えていることが分かった。

<表 6. 33> 2-8 「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                     | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|---------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無回答                 | 22(46)  | 8(29)   | 1(8)    |
| 1  | 「その時」               | 17(36)  | 13(46)  | 8(61)   |
| 2  | 「あ」系列で過去の時点が指示できない。 | 3(6)    | -       | -       |
| 3  | 韓国語に直すと不自然。         | 3(6)    | 5(18)   | 2(15)   |
| 4  | 直感的                 | 3(6)    | 2(7)    | 1(8)    |
| 計  |                     | 48(100) | 28(100) | 13(100) |

2-8 に対する「不自然」の場合も、2-7 の項目と殆ど類似している結果である。「あの時」より「その時」が似合うと答えた学習者の回答が多かった。またこの部分は「3. 韓国語に直すと不自然」と関連付けてみると、2-7 の<表 6-29>とまったく同じ結果である。「あの時」を韓国語に直すと、「그 때」を用いる。この「그」は日本語の「ソ」と対応するものであるため、このような結果が出たと考えられる。

次の<表 6. 34>は 2-8 に対して「3. どちらとも言えない」と答えた学習者らの意見である。「0. 無回答」と「4. 分からない」の回答が多く、文の場面説明が欲しいという答えがあった。場面の説明には、相手がいるかいないかとかが分からないと書かれていた。

<表 6. 34> 2-8 「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                     | 初級      | 中級      | 上級     |
|----|---------------------|---------|---------|--------|
| 0  | 無回答                 | 5(42)   | 7(41)   | 1(17)  |
| 1  | 「その」も可能である(その時、あの時) | 1(8)    | 3(18)   | 1(17)  |
| 2  | 指示詞で時制を表すことができない。   | -       | 1(6)    | -      |
| 3  | もっと詳しい場面の説明が必要である。  | 3(25)   | 4(23)   | 2(33)  |
| 4  | 分からない。              | 3(25)   | 2(12)   | 2(33)  |
| 計  |                     | 12(100) | 17(100) | 6(100) |

次の<表 6. 35>から<表 6. 38>は「相対的課題指示」の「ア系列」で「A：昨日一緒に行ったあの店、とてもおいしかったね。B：そうだね。あそこ、また行きたいね。」の項目の結果を表したものである。

<表 6. 35> 2-9 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然   | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|--------|--------|-------------|----------|
| 初級 | 60(51) | 44(36) | 15(13)      | 119(100) |
| 中級 | 73(68) | 28(26) | 6(6)        | 107(100) |
| 上級 | 47(63) | 21(25) | 9(12)       | 77(100)  |

2-9 は、レベルに関係なく「自然」と「不自然」に答えが分けられている。「1. 自然」の割合をレベル別に比べてみると、初級は約 5 割、中級の場合は約 7 割、上級は約 6 割である。上級になると、むしろ自然の割合が減る結果となった。

まず、「自然」を選択した理由から検討する。



<表 6. 36> 2-9 「1. 自然」 を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                                | 初級      | 中級      | 上級      |
|----|--------------------------------|---------|---------|---------|
| 0  | 無回答                            | 19(32)  | 28(38)  | 9(19)   |
| 1  | A と B が指示対象を良く知っている。(認知)       | 3(5)    | 7(10)   | 10(21)  |
| 2  | 過去の時点を指示している(過去回想、思い出など)       | 8(13)   | 3(4)    | 9(19)   |
| 3  | 「あ」-指示対象である店は A と B から遠く離れている。 | 9(15)   | 14(19)  | 5(11)   |
| 4  | 「あ」-韓国語「コ」は日本語「そ」以外に「あ」とも対応する。 | 5(8)    | 9(12)   | 2(4)    |
| 5  | 「あ-あ」(「あ」で問い「あ」で答える。)          | 3(5)    | -       | 1(2)    |
| 6  | 「こ」「そ」は不自然である。                 | -       | 1(2)    | -       |
| 7  | 聞いたことがある文である。                  | -       | 1(2)    | -       |
| 8  | 直感的                            | 13(22)  | 10(14)  | 11(24)  |
| 計  |                                | 60(100) | 73(100) | 47(100) |

<表 6. 36>を見ると、初・中級では、「0. 無回答」が多い。上級の場合は、「1. A と B が指示対象を良く知っている」と「8. 直感的」と答えた学習者が多い。初級と中級の場合、「ア系列」は過去のことを指示する際に用いるため、例文の「昨日」に注目して学習者は捉えている。

<表 6. 36>の「3」に注目したい。この例文が自然である理由として、「『あ』-指示対象である店は A と B から遠く離れている」と答えた学習者が初・中・上級に何人かずついる。その中でも中級のが最も目立つ。これは 2-9 の文に用いられた指示詞「ア」を現場指示の用法として習得されているとも言える。2-7 と 2-8 の例文の場合は、指示詞の後に「頃」「時」が来たため、現場指示用法として捉えているような答えが無かった。それに対し、2-9 のように「店」を指示する文になると、現場指示の用法として認識される。

<表 6. 37> 2-9 「2. 不自然」 を選択した理由 単位：人(%)

| 区分  |                                | 初級      | 中級      | 上級      |
|-----|--------------------------------|---------|---------|---------|
| 0   | 無回答                            | 18(41)  | 9(32)   | 3(14)   |
| 1-a | 「そ-そ」-日本語「そ」は韓国語「コ」と対応する。      | 8(18)   | 2(7)    | 5(24)   |
| 1-b | 「そ-そ」-A と B が指示対象を良く知っている。(認知) | 5(11)   | 5(18)   | 4(19)   |
| 2   | 「あの-そこ」「そこ-あそこ」                | -       | 1(3)    | 1(5)    |
| 3   | 「あの-ここ」「この-あそこ」                | 10(23)  | 10(36)  | 4(19)   |
| 4   | 指示詞を消した方が良い。                   | -       | -       | 2(9)    |
| 5   | 直感的                            | 3(7)    | 1(4)    | 2(10)   |
| 計   |                                | 44(100) | 28(100) | 21(100) |

2-9 が不自然に感じられる理由は、「ア系列」ではなく「ソ系列」を用いるべきであ

るという意見が多い。しかし、その中には、「1-a」のように韓国語の指示詞と対応させて考えた場合と「2-b」の非現場指示の用法上の間違っただけによる場合がある。すなわち、単に「ア系列」を用いる場面に「ソ系列」を用いたとしても、韓国語である母語の影響を受けたからだとは簡単に言えないだろう。

また、韓国人学習者は「こ-こ」「そ-そ」「あ-あ」のように同じ系列を用いる指示詞文に対し、指示詞の用法に関係なく少し違和感を持っている。

<表 6. 38> 2-9 「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                    | 初級      | 中級     | 上級     |
|----|--------------------|---------|--------|--------|
| 0  | 無回答                | 4(27)   | 4(67)  | 1(11)  |
| 1  | 「そ」「あ」両方可能である。     | 2(13)   | 2(33)  | 4(45)  |
| 2  | もっと詳しい場面の説明が必要である。 | 2(13)   | -      | 3(33)  |
| 3  | 分からない。             | 7(47)   | -      | 1(11)  |
| 計  |                    | 15(100) | 6(100) | 9(100) |

2-9 の「3. どちらとも言えない」を選択した学習者の場合、自然と不自然より数は少ないが、「1. 『そ』『あ』両方可能である」と「3. 分からない」の部分を見ると、「相対的話題指示」の用法の習得が学習者の頭の中にまとめられていない状況である。これで、「相対的話題指示」の「ア系列」に当たる項目の結果を考察してみたが、同じ用法の「ソ系列」の場合にはどのような結果が出たのか見てみよう。

<表 6. 39>から<表 6. 42>は 2-10 の「A：昨日、山下さんに会ったよ。B：えっ、山下さん?だれ、その人?」の指示詞文に対する結果を表したものである。

<表 6. 39> 2-10 の回答の数と割合 単位：人(%)

| 区分 | 1.自然   | 2.不自然  | 3.どちらとも言えない | 計        |
|----|--------|--------|-------------|----------|
| 初級 | 68(57) | 40(34) | 11(9)       | 119(100) |
| 中級 | 53(49) | 36(35) | 18(16)      | 107(100) |
| 上級 | 46(60) | 22(27) | 9(13)       | 77(100)  |

2-10 の場合も 2-9 の<表 6. 35>と変わりがない数値である。初級と中級の場合は、答えが「自然」と「不自然」に分けられた結果で、上級の場合は、初・中級より「自然」が 6 割で最も高い。ところが、6 割で最も高いとしても習得が進んでいるとはっきりとは言えない数値である。それぞれの「自然」や「不自然」、「どちらとも言えない」を選択した理由に基づき、この用法の習得状況を考察する。

<表 6. 40> 2-10 「1. 自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                       | 初級     | 中級     | 上級     |
|----|-----------------------|--------|--------|--------|
| 0  | 無回答                   | 31(46) | 29(55) | 13(28) |
| 1  | B は知らない人である。「そ」       | 10(15) | 3(5)   | 10(22) |
| 2  | A と B が指示対象を良く知っている(認 | 2(3)   | -      | 1(2)   |

|    |                     |         |         |         |
|----|---------------------|---------|---------|---------|
|    | 知)。                 |         |         |         |
| 3  | BはAが言及した内容を改めて指示する。 | 1(1)    | 1(2)    | 2(5)    |
| 4  | 山下は、AとBから少し離れている。   | 4(6)    | 2(4)    | -       |
| 5  | 時制が過去である。「そ」        | -       | -       | 1(2)    |
| 6  | この場にはいない人を指示する。     | 2(3)    | 1(2)    | 1(2)    |
| 7  | 「こ」「そ」は不自然である。      | -       | -       | 1(2)    |
| 8  | 韓国語で考えたら自然である。(そ=그) | 11(16)  | 9(17)   | 10(22)  |
| 9  | 聞いたことがある文である。       | 1(1)    | 2(4)    | -       |
| 10 | 直感的                 | 6(9)    | 6(11)   | 7(15)   |
| 計  |                     | 68(100) | 53(100) | 46(100) |

「0. 無回答」の部分を除き、レベル別の結果を見ると、初級の場合は「8. 韓国語で考えたら自然である」と「1.Bは知らない人である」の答えが目立つ。母国語である韓国語と対応しているから自然であると捉える方と、非現場指示の用法上による捉え方、両方の答えがみられる。このような結果は、初級のみではなく中・上級にも見える。

また、2-10も2-9と同じように「現場指示」と影響を受けているような答えが初級と中級に見られる。すなわち、「現場指示の用法」が「非現場指示の習得」に影響を与えているとも言える。本稿では、このようなことを「指示詞用法間の揺れ」と呼び、韓国人学習者の指示詞習得の過程によく現れていると考える。

<表 6. 41> 2-10 「2. 不自然」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分  |                                 | 初級      | 中級      | 上級      |
|-----|---------------------------------|---------|---------|---------|
| 0   | 無回答                             | 16(40)  | 9(25)   | 5(23)   |
| 1-a | 「あの」-韓国語「그」は日本語「そ」以外に「あ」とも対応する。 | 3(7)    | 1(3)    | 1(4)    |
| 1-b | 「あの」-Bが知らない人である時には「あ」を用いる。      | 4(10)   | 13(36)  | 5(23)   |
| 1-c | 「あの」-指示対象である山下が目の前にいない。         | 3(7)    | 4(11)   | 2(9)    |
| 1-d | 「あの」-指示対象である山下はAとBから遠く離れている。    | 1(2)    | 2(5)    | 1(4)    |
| 2   | 「どの人」                           | 3(8)    | 1(3)    | 1(4)    |
| 3   | 「この人」                           | -       | -       | 1(5)    |
| 4   | 指示詞を消した方が良い。                    | 3(8)    | 2(6)    | 3(14)   |
| 5   | 聞いたことがある文である。                   | 3(8)    | -       | -       |
| 6   | 直感的                             | 4(10)   | 4(11)   | 3(14)   |
| 計   |                                 | 40(100) | 36(100) | 22(100) |

2-10の「不自然」の場合は2-9の<表 6. 37>と似ている結果が出たとなった。「そ」ではなく「あの」を用いるべきであるという答えが、初級2.6割、中級5.5割、上級4割である。

また、これらを韓国語と対応して考えた「1-a.韓国語『그』は日本語「そ」以外に

『あ』とも対応する」と指示詞の間違った使い分けによる「1-b」、指示対象が会話の場所にいないので「ア」を用いるべきであるという「1-c」、非現場指示の用法を現場指示の用法としてとらえている「1-d」で答えが分かれている。全レベルの答えの中で最も目立つのは、「Bが知らない人である時には『あ』を用いる。」という意見である。これは、本稿で言う「指示詞用法間の影響」による誤用であると言える。

<表 6. 42> 2-10 「3. どちらとも言えない」を選択した理由 単位：人(%)

| 区分 |                    | 初級      | 中級      | 上級     |
|----|--------------------|---------|---------|--------|
| 0  | 無回答                | 5(46)   | 8(44)   | 1(11)  |
| 1  | 「その」「あの」両方可能である。   | -       | -       | 3(33)  |
| 2  | 指示詞がなくでもいい。        | -       | 1(6)    | -      |
| 3  | もっと詳しい場面の説明が必要である。 | 4(36)   | 5(28)   | 4(45)  |
| 4  | 分からない。             | 2(18)   | 4(22)   | 1(11)  |
| 計  |                    | 11(100) | 18(100) | 9(100) |

2-10 の指示詞文に対し、「3. どちらとも言えない」を選択した理由としては、「3. もっと詳しい場面の説明が必要である。」という答えが最も多い。場面によって指示詞の使い方が異なると学習者は考えていることが分かった。

以上、アンケート調査のパートⅡの結果を考察してみた。次の節では指示詞「コ・ソ・ア」の使用と認識に関する調査の結果を見てみる。

#### 6. 4 韓国人学習者の指示詞使用に際する認識

本 6. 4 節からは韓国人学習者は日本語指示詞をどのように使用して認識しているかについて考察するために行った調査の結果を述べる。

##### 6. 4. 1 調査内容

続いては PartⅢの調査内容である。このパートは、「日本語指示詞の使用と使用上の認識」を調査することを目的として作成した。<表 6. 2>は、韓国語で作成した調査項目を筆者自身が日本語に訳したものである。回答の方法は、調査対象の学習者は調査項目の内容に同意できる程度について、4段階の判定(<1. 全くそうではない>、<2. あまりそうではない>、<3. 少しそうだ>、<4. かなりそうだ>)の中で一つを選択して記入する。

調査項目はすべて 14 項目で、「指示詞の使用」に関する項目と「指示詞の使用上の認識」に関する項目に分かれている。それぞれ項目の内容は以下の<表 6. 2>の通りである。

<表 6. 2> PartⅢ調査項目の内容

| 項目   | 内容  |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
|------|---|---------|---------|----------|------|-------|----|--------|--------|--------|---------|----|--------|--------|---------|--------|----|---------|---------|---------|----------|------|-------|-------|-------|--------|
| 3-1  | 日本語の「コ・ソ・ア」は韓国語の「이・그・저」と類似している。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-2  | 日本語の「コ・ソ・ア」は難しい。  |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-3  | 韓国語の「이・그・저」は日本語の「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。  |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-4  | <表 1>は日本語の「コ・ソ・ア」の文法説明として十分である。<br><表 1>  |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
|      | <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>こ(이)</th> <th>そ(그)</th> <th>あ(저)</th> <th>ど(어느)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>사물</td> <td>これ(이것)</td> <td>それ(그것)</td> <td>あれ(저것)</td> <td>どれ(어느것)</td> </tr> <tr> <td>장소</td> <td>ここ(여기)</td> <td>そこ(거기)</td> <td>あそこ(저기)</td> <td>どこ(어디)</td> </tr> <tr> <td>방향</td> <td>こちら(이쪽)</td> <td>そちら(그쪽)</td> <td>あちら(저쪽)</td> <td>どちら(어느쪽)</td> </tr> <tr> <td>사물수식</td> <td>この(이)</td> <td>その(그)</td> <td>あの(저)</td> <td>どの(어느)</td> </tr> </tbody> </table> |         | こ(이)    | そ(그)     | あ(저) | ど(어느) | 사물 | これ(이것) | それ(그것) | あれ(저것) | どれ(어느것) | 장소 | ここ(여기) | そこ(거기) | あそこ(저기) | どこ(어디) | 방향 | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) | 사물수식 | この(이) | その(그) | あの(저) | どの(어느) |
|      | こ(이)  | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 사물   | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 장소   | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 방향   | こちら(이쪽)   | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 사물수식 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-5  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-6  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、韓国語の「이・그・저」に当てはめる   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-7  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、日本語の「コ・ソ・ア」の用法に当てはめる。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-8  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに当てはめる。  |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-9  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-10 | 日本語の「コ・ソ・ア」の使い分けに関する自分なりのルールがある。  |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-11 | 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-12 | 日本語の「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-13 | 日本語の「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違ったのか確認する。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |
| 3-14 | 日本語の「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。   |         |         |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |

「指示詞の使用」に関する項目は 3-5 から 3-10 までの 6 項目で、日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際にどのように考えているのかについて学習者は答えることになる。残りの 8 項目は「指示詞の使用上の認識」について調査する項目である。これはさらに細かく「日本語の『コ・ソ・ア』と韓国語の『이・그・저』の関係」を問う 3-1 から 3-4 のまでの 4 項目と自分自身の「日本語指示詞の習得状況」について聞く 3-11 から 3-14 までの 4 項目に分けられている。

#### 6. 4. 2 分析方法

PartⅢの調査は、「指示詞の使用」(3-5～3-10)と「指示詞使用上の認識」(3-1～3-4、3-11～3-14)に分けて結果を分析する。それぞれ得られた各項目の回答の平均と標準偏差を示す。設問項目の数は 14 項目で、それぞれの項目について<1=全くそうではない、2=あまりそうではない、3=少しそうだ、4=かなりそうだ>の中で一つを選択してもらった。平均の数は大きいほど項目に賛成する回答が多く、数値が少ないほど反対する回答が多いことを意味する。なお、本調査の平均は理論上 1 から 4 までの数値をとる。



平均値の基準を 2 として 2 以下と 2 超過に分ける(≤ 2 <). 303 名の回答の「性別」や「専攻」、「日本留学経験有無」、「レベル」の違いによる回答傾向の違いについては、「t-test(t 検定)」と「One way ANOVA 分析」により有意差検定を行う。

### 6. 4. 3 調査結果

まず、調査協力者に 303 名の場合の結果を検討する。<表 6. 43>は「日本語の『コ・ソ・ア』と韓国語の『이・그・저』の関係」を問う 3-1 から 3-4 の 4 項目を平均値が高い順に並べたものである。

<表 6. 43> 「日本語の『コ・ソ・ア』と韓国語の『이・그・저』の関係」の結果

| 項目   | 内容   | 平均      | 標準偏差    |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
|------|--|---------|---------|----------|------|-------|----|--------|--------|--------|---------|----|--------|--------|---------|--------|----|---------|---------|---------|----------|------|-------|-------|-------|--------|------|------|
| 3-1  | 日本語の「コ・ソ・ア」は韓国語の「이・그・저」と類似している。  | 3.31    | .683    |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
| 3-3  | 韓国語の「이・그・저」は日本語の「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。   | 3.12    | .647    |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
| 3-4  | <p>&lt;表 1&gt;は日本語の「コ・ソ・ア」の文法説明として十分である。</p> <p>&lt;表 1&gt;</p> <table border="1" style="margin-left: 20px;"> <thead> <tr> <th></th> <th>こ(이)</th> <th>そ(그)</th> <th>あ(저)</th> <th>ど(어느)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>사물</td> <td>これ(이것)</td> <td>それ(그것)</td> <td>あれ(저것)</td> <td>どれ(어느것)</td> </tr> <tr> <td>장소</td> <td>ここ(여기)</td> <td>そこ(저기)</td> <td>あそこ(저기)</td> <td>どこ(어디)</td> </tr> <tr> <td>방향</td> <td>こちら(이쪽)</td> <td>そちら(그쪽)</td> <td>あちら(저쪽)</td> <td>どちら(어느쪽)</td> </tr> <tr> <td>사물수식</td> <td>この(이)</td> <td>その(그)</td> <td>あの(저)</td> <td>どの(어느)</td> </tr> </tbody> </table> |         | こ(이)    | そ(그)     | あ(저) | ど(어느) | 사물 | これ(이것) | それ(그것) | あれ(저것) | どれ(어느것) | 장소 | ここ(여기) | そこ(저기) | あそこ(저기) | どこ(어디) | 방향 | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) | 사물수식 | この(이) | その(그) | あの(저) | どの(어느) | 2.98 | .845 |
|      | こ(이)   | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
| 사물   | これ(이것)   | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
| 장소   | ここ(여기)   | そこ(저기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
| 방향   | こちら(이쪽)  | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
| 사물수식 | この(이)  | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |
| 3-2  | 日本語の「コ・ソ・ア」は難しい。   | 2.58    | .805    |          |      |       |    |        |        |        |         |    |        |        |         |        |    |         |         |         |          |      |       |       |       |        |      |      |

3-1 の日本語の指示詞と韓国語の指示詞の類似性に関しては、平均が 3.31 で多くの韓国人学習者は両言語の指示詞が似ていると考えている。また、3-3 に対しても肯定的に認識されている。平均値が 3.12 で韓国語の指示詞が日本語の指示詞の習得に良い影響を与えると答えた。次は 3-4 の<表 1>による日本語指示詞の習得に関する設問で、平均が 2.98 である。平均が 3 より小さくても、2 より大きいので、肯定に近いと言える。この設問の<表 1>は日本語の指示詞を韓国語の指示詞に対応させて作成したものである。3-1 と 3-2 の結果から考えてみると、韓国人学習者は日本語の「コ・ソ・ア」を韓国語の指示詞と似ており、韓国語と対応しているため習得しやすい文法項目であると、まとめられる。

ところが、3-2 「日本語の『コ・ソ・ア』は難しい」項目に対する結果を見ると、平均は 2.58 で「難しい」と韓国人学習者は答えている。これは、両言語の指示詞は類似しており、「コ・ソ・ア」の習得に役立つ結果とは合わない。母国語と目標言語が類似しており、学びやすいと共に難しいと感じているということ話になる。

以下の<表 6. 44>は「指示詞の使用」に関する項目 3-5 から 3-10 の 6 項目の平均

値と標準偏差を表したものである。

<表 6. 44> 「指示詞の使用」の結果

| 項目   | 内容  | 平均   | 標準偏差 |
|------|---|------|------|
| 3-9  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。           | 3.09 | .794 |
| 3-8  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに当てはめる。    | 2.90 | .693 |
| 3-5  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。 | 2.83 | .823 |
| 3-6  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、韓国語の「이・그・저」に当てはめる       | 2.82 | .945 |
| 3-7  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、日本語の「コ・ソ・ア」の用法に当てはめる。   | 2.72 | .833 |
| 3-10 | 日本語の「コ・ソ・ア」の使い分けに関する自分なりのルールがある。                | 2.15 | .857 |

最も平均が大きい項目は 3-9 で 3.09 である。「コ・ソ・ア」を用いる際に直感的に判断して使用していると答えた。この部分は前の 6.3 節の結果にも多く出現した内容で、学習者は、日本語の文を文法より全体的な感じでとらえていることが分かった。しかし、それ以外の「3-8」の教材からの内容、「3-6」韓国語との対応、「3-7」日本語の用法のように直感的判断以外、様々なプロセスで日本語指示詞を使用していることが分かった。

韓国人学習者は指示詞を用いる際、指示詞の選択が困難である場合があったのかに対しては、平均が 2.83 で高い数値が現れた。

最後に、3-10 日本語指示詞に関して自分なりの分類法があるのか聞いてみた。その結果、平均が 2.15 で<表 6. 44>の中で最も低い数値である。すなわち、「コ・ソ・ア」を直感的に判断して使用しているが、用法の分類法が整理されていないと言える。

続いては、<表 6. 45>は「日本語指示詞の習得状況」に関するそれぞれの平均と標準偏差である。

<表 6. 45> 「日本語指示詞の習得状況」の結果

| 項目   | 内容  | 平均   | 標準偏差 |
|------|---|------|------|
| 3-14 | 日本語の「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。           | 2.98 | .830 |
| 3-11 | 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。 | 2.71 | .897 |
| 3-13 | 日本語の「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違ったのか確認する。     | 2.59 | .901 |
| 3-12 | 日本語の「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。               | 2.53 | .749 |

<表 6. 45>の 3-11 と 3-12 の平均によると、韓国人学習者は日本語の指示詞を教材から習い、用法を理解している。それに対し、日本語の指示詞に関する説明が必要であると答えた。また、指示詞の使用に対し、正用なのか誤用なのかに関する確認も平均が 2.53 であるため、重要として考えていると言える。

以上、調査協力者である 303 名の結果を考察してみた。次は各項目の平均値を 6.4.3.1 性別の差、6.4.3.2.専攻の違い、6.4.3.3 日本留学経験の有無、6. 4. 3. 4 レベルによる各集団間に有意差( $t \geq 1.96$ ,  $p < .05$ )があるか考察する。

#### 6. 4. 3. 1 性別による結果分析

それぞれの項目に関し、性別による差があるか平均を比べて見てみよう。

まず<表 6.46>は、韓国人学習者は母国語である韓国の「이(i)・그(geu)・저(jeo)」と目標言語である日本語「コ・ソ・ア」の関係に関する調査項目である。

<表 6. 46> 「日本語の『コ・ソ・ア』と韓国語の『이・그・저』の関係」の結果

| 区分  | 男性   |      | 女性   |      |
|-----|------|------|------|------|
|     | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 |
| 3-1 | 3.25 | .711 | 3.38 | .649 |
| 3-2 | 2.49 | .855 | 2.98 | .742 |
| 3-3 | 3.11 | .685 | 3.14 | .610 |
| 3-4 | 2.87 | .877 | 3.09 | .800 |

3-1 の「日本語指示詞『コ・ソ・ア』は韓国語指示詞『이 (i)・그 (geu) ・저 (jeo)』と類似している」に当たる項目に関しては、分析した結果、この項目に対し、性別による 統計的に有意差はなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=-1.661(.098)$ )。韓国人学習者は性別に関係なく、母語である韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と目標言語である日本語の「コ・ソ・ア」が類似していると捉えていることが分かった。基本的に両言語の指示詞の類似性を認識している。

次は 3-2 の設問「日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい」に対して男女の差があるか分析したのが<6.47>である。

<表 6. 47> 3-2 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 男性                | 2.49          | .855     |
| 女性                | 2.68          | .742     |
| <i>t-value(p)</i> | -2.038*(.042) |          |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

分析した結果、3-2 の項目は性別による有意の差があることが分かった( $p < .05$ )。韓国人学習者は日本語の指示詞を男女ともに、少し難しく考えていると言える( $\leq 2 <$ )。

女性の学習者は男性より相対的に指示詞をより難しく考えている。

3-3 項目である韓国語の指示詞が日本語の「コ・ソ・ア」習得の際、役に立つのかを分析した結果、性別による統計的に有意差はなかった ( $p > .05$ 、 $t\text{-value}(p) = -0.432(.666)$ )。韓国人学習者は性別に関係なく、韓国語が日本語の「コ・ソ・ア」習得に良い影響を与えていると考えている。これは、303名の結果と変わらない。

次は韓国の日本語教材によく掲載されている以下の設問 3-4 の<表 1>が「コ・ソ・ア」の説明として十分なのかに対し、男女による有意差があるか調査した結果である。

<表 1> 韓国の日本語教材による指示詞説明表

|      | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |
|------|---------|---------|---------|----------|
| 사물   | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |
| 장소   | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |
| 방향   | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |
| 사물수식 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |

<表 6. 48> 3-4 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 男性                | 2.87          | .877     |
| 女性                | 3.09          | .800     |
| <i>t-value(p)</i> | -2.328*(.021) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

分析した結果、二つのグループの間で有意差があった ( $p < .05$ )。その表に対する信頼度は男女関係なく高い数値であるが、男性より女性の方が強いことが分かった。

続いては、男女による指示詞の使用の認識の差があるか見てみる。以下の<表 6.49>は平均と標準偏差をまとめたものである。T検定を通じて分析した結果、3-5 から 3-10 項目の中で有意差があると項目は、3-5 と 3-6 二項目である。

<表 6. 49> 「指示詞の使用」の結果

| 区分   | 男性   |      | 女性   |      |
|------|------|------|------|------|
|      | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 |
| 3-5  | 2.73 | .894 | 2.93 | .734 |
| 3-6  | 2.67 | .964 | 2.96 | .905 |
| 3-7  | 2.78 | .848 | 2.65 | .816 |
| 3-8  | 2.85 | .734 | 2.95 | .649 |
| 3-9  | 3.17 | .798 | 3.01 | .785 |
| 3-10 | 2.19 | .948 | 2.11 | .756 |

各項目の平均を比べてみると、各項目に賛成するという結果が出た。ところが、その中でも 3-10 「日本語の『コ・ソ・ア』の使い分けに関する自分なりのルールがある」の項目の結果が最も平均が少ない。各項目の結果を順番通り述べていく。まずは男女

間に有意差が見られた 3-5 の結果である。

<表 6. 50> 3-5 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 男性                | 2.73          | .894     |
| 女性                | 2.93          | .734     |
| <i>t-value(p)</i> | -2.189*(.029) |          |

\*  $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

指示詞を用いる際に迷ったことがあるかに対し、男女による有意の差があることが分かった( $p < .05$ )。女性の場合、男性より日本語の「コ・ソ・ア」の使用に困難を感じている。

<表 6. 51> 3-6 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)         | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------|----------|
| 男性                | 2.67           | .964     |
| 女性                | 2.96           | .905     |
| <i>t-value(p)</i> | -2.714**(.007) |          |

\*  $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

分析した結果 3-6 の項目に対しても男女による有意の差があった( $p < .01$ )。3-6 は指示詞を用いる際、韓国語と比べて使用しているか問うた項目で、男女の平均が 2 より高い数値である 2.67 と 2.96 であった。ところが、その中でも男性の学習者より女性の方が母国語と関連付けて「コ・ソ・ア」を使用していることが分かった。

<表 6. 49>で有意差がある結果の項目は 3-5 と 3-6 で、3-7 から 3-10 は分析した結果、統計的に各間に差は見られなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=1.362(.174)$ )。3-7 の「コ・ソ・ア」を使用する際に日本語の用法で考えて使用するかについて問うた設問で、平均はそれぞれ 2.78 と 2.65 で、男女の差はなかった。平均値から見ると「コ・ソ・ア」を日本語の用法で考えて使用していることが分かった。

また、3-8 の結果、男女間の有意差は見られなかった(\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ ,  $t\text{-value}(p)=-1.170(.243)$ )。韓国人学習者は教材と教師から習った「コ・ソ・ア」を基準として捉えているのである。3-9 日本語「コ・ソ・ア」を直感的に判断して使用しているかに対する各平均値は男性 3.17 女性 3.01 で高い数値が現れた。二つ間に統計的に有意差はなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=1.821(.070)$ )。

学習者なりに「コ・ソ・ア」に関する分類法があるかに対する 3-10 の結果、性別による統計的に有意の差はなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=-.813(.417)$ )。それぞれの平均は中間値の 2 より高い 2.19 と 2.11 であるが、他の項目より低い。性別による差は見られなかったが、更に考察する必要がある。次の節で分析する。

続いては、指示詞「コ・ソ・ア」の認識状況に関する設問で、3-11 から 3-14 であ

る。分析の結果、男女別の平均と標準偏差は以下の<表 6. 52>の通りである。

<表 6. 52> 「日本語指示詞の習得状況」の結果

| 区分   | 男性   |      | 女性   |      |
|------|------|------|------|------|
|      | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 |
| 3-11 | 2.65 | .888 | 2.76 | .904 |
| 3-12 | 2.57 | .779 | 2.49 | .719 |
| 3-13 | 2.72 | .969 | 2.46 | .813 |
| 3-14 | 2.99 | .887 | 2.97 | .772 |

3-11 は日本語の指示詞の用法を教師と教材を通じて詳しく習ったのかによる男女の平均を比べてみると、2.65 と 2.76 である。両方 3-11 の項目で賛成する回答が多かった。303 名の全体の平均 2.71 と比べてみると大きな差はない。また、性別による差があるか分析した結果、有意差はなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=-1.108(.269)$ )。

3-12 「日本語の『コ・ソ・ア』の文法的用法をよく理解している」に対して分析を行った結果、男女による有意の差は見られなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=.884(.377)$ )。平均値は男性 2.57 女性 2.49 で全体の 2.53 と比べてみると違いはない。

次は 3-13 項目で指示詞の使用を間違った際に、その理由を確認するのかに対し、男女の差があるのか分析した結果、以下の<表 6. 53>と通りで有意差があった( $p < .05$ )。

<表 6. 53> 3-13 の分析結果

| 区分                  | 平均値(M)       | 標準偏差(SD) |
|---------------------|--------------|----------|
| 男性                  | 2.72         | .969     |
| 女性                  | 2.46         | .813     |
| $t\text{-value}(p)$ | 2.478*(.014) |          |

\*  $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

平均値を見てみると、303 名の平均 2.59 と比較するとそれぞれ 2.72 と 2.46 で男女ともに、指示詞の誤用の修正しようとする結果が出た。また女性より男性の方が間違った際、その理由を探ることが分かった。

3-14 の結果では、男女関係なく、現在よりも指示詞の説明が詳しくなってほしいと答えた( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=.137(.772)$ )。それぞれの平均値を見てみると、男性 2.99、女性 2.97 で 303 名の 2.98 と変わりがない。

#### 6. 4. 3. 2 専攻による結果

本節では各項目に対する専攻の違いによる結果を分析する。<表 6. 54>は日本語の「コ・ソ・ア」と韓国語の「이・그・저」の関係性を表したものである。以下の 4 項目を日本語専攻者と非専攻者による差があるか分析した結果、3-2 の項目で有意の差が見られた。項目の順番通り平均を比較する。

<表 6. 54> 「日本語の『コ・ソ・ア』と韓国語の『이・그・저』の関係」の結果

| 区分  | 専攻   |      | 非専攻  |      |
|-----|------|------|------|------|
|     | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 |
| 3-1 | 3.28 | .705 | 3.40 | .600 |
| 3-2 | 2.52 | .788 | 2.80 | .827 |
| 3-3 | 3.10 | .659 | 3.20 | .604 |
| 3-4 | 3.00 | .853 | 2.90 | .819 |

3-1の平均は専攻 3.28、非専攻 3.40 で両方高い数値であった。3-1 は日本語の「コ・ソ・ア」と韓国語の指示詞が類似しているという設問に答えたもので、日本語専攻者・非専攻関係なく、日本語学習者は両言語の指示詞が似ていると認識していることが分かった。

<表 6. 55> 3-2 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)         | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------|----------|
| 専攻                | 2.52           | .788     |
| 非専攻               | 2.80           | .827     |
| <i>t-value(p)</i> | -2.583**(.010) |          |

\* p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

3-2 の「日本語指示詞の難易度」に関して t 検定を行った結果、日本語専攻者と非専攻者の間に有意差があった。二つのグループとも平均値が 2 より高い数値で、日本語の「コ・ソ・ア」は韓国人学習者に難しい文法であることがわかる。その中でも、非専攻者の場合は専攻者と比べ、高い数値であり、「コ・ソ・ア」に対して難しいと認識していることが分かった。

3-3 日本語の「コ・ソ・ア」の習得に良い影響を与える韓国語の指示詞について、それぞれの専攻間を分析した結果、二つのグループの間に有意の差は見えなかった (p<.05 t-value(p)=-1.149(.252))。平均はそれぞれ 3.10 と 3.20 で高い数値であるため、韓国語の指示詞によって、日本語の「コ・ソ・ア」の習得を進められると学習者は考えていると言える。

次は 3-4 項目で、「コ・ソ・ア」を韓国語の指示詞と対応させてまとめた 設問 3-4 の<表 1>が「コ・ソ・ア」の説明として十分なのかについて回答を専攻と非専攻に分けて分析した。

<表 1> 韓国の日本語教材による指示詞説明表

|      | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |
|------|---------|---------|---------|----------|
| 사물   | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |
| 장소   | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |
| 방향   | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |
| 사물수식 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |

その結果、それぞれ 3-3 と同じように有意差はなかった ( $p > .05$ 、 $t\text{-value}(p) = .905(.366)$ )。すなわち、韓国人学習者は設問 3-4 の<表 1> より、指示詞の説明に対して高い信頼度を持っている。また、平均値を比べてみると非専攻より、日本語専攻者の平均が 3.00 で非専攻より少し高い。以上で母国語である韓国語「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と日本語の「コ・ソ・ア」の関係について日本語専攻と非専攻に間に差があるか分析してみた。次は「コ・ソ・ア」の使用方略について専攻・非専攻の間に有意の差があるかの結果である。

<表 6. 56> 「指示詞の使用」の結果

| 区分   | 専攻   |      | 非専攻  |      |
|------|------|------|------|------|
|      | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 |
| 3-5  | 2.81 | .814 | 2.90 | .819 |
| 3-6  | 2.79 | .954 | 2.91 | .913 |
| 3-7  | 2.83 | .800 | 2.33 | .829 |
| 3-8  | 2.93 | .682 | 2.81 | .728 |
| 3-9  | 3.15 | .767 | 2.87 | .850 |
| 3-10 | 2.21 | .868 | 1.93 | .786 |

<表 6. 56>は 3-5 から 3-10 の平均と標準偏差をまとめたものである。この項目の中で、グループ間の有意差が見られたのは「3-7」と「3-9」、「3-10」である。まず順番通り結果を分析する。

3-5 は指示詞の使用に困難があったかに対する回答で、二つの中で統計による有意差はない( $p > .05$ 、 $t\text{-value}(p) = -.792(.429)$ )が、それぞれの平均が 2.81、2.90 で中間値の 2 より高い数値である。日本語専攻者・非専攻者関係なく、「コ・ソ・ア」の使用に難しさがある。

3-6 の分析結果、有意の差は見られなかった ( $p < .05$   $t\text{-value}(p) = -1.001(.318)$ )。この項目は日本語の指示詞を用いる際、韓国語に対応して考えて使用するかに対する回答であり、平均からみると、2.79 と 2.91 で、項目に同意する結果が現れている。両方とも日本語の指示詞を使用する際、母国語と関係づけて用いることが分かった。

<表 6. 57> 3-7 の分析結果

| 区分                  | 平均値(M)         | 標準偏差(SD) |
|---------------------|----------------|----------|
| 専攻                  | 2.83           | .800     |
| 非専攻                 | 2.33           | .829     |
| $t\text{-value}(p)$ | 4.584***(.000) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

3-7 の場合、上の<表 6.57>のように二つ間の有意差が高く見られた( $p < .001$ )。3-7 の項目は「コ・ソ・ア」を用いる際、日本語の用法に当てはめるかについて問うた設問である。その結果、専攻の場合が非専攻より「コ・ソ・ア」を日本語の用法に当て



はめて使っていることが分かった。これまでの結果をまとめてみると、日本語専攻である学習者は母国語の韓国語と日本語用法に適応して使用することに対し、非専攻の場合は日本語の用法にも当てはめて使用するより母国語である韓国語と対応させて考えられると言える。

続いては、学校と教材から習った指示詞用法に当てはめて「コ・ソ・ア」を使用しているかの回答である。<表 6.56>の 3-8 の場合、平均をに比較してみると、専攻 2.93 で非専攻が 2.81 である。二つ間の有意差があるのか分析した結果、差はなかった ( $p > 05$ ,  $t\text{-value}(p)=1.195(.233)$ )。両方とも教師や教材から学習した内容に基づいて指示詞を使用している。これを言い換えれば、日本語専攻者は「コ・ソ・ア」を使用する際、「韓国語」や「日本語」、「習った内容」を複合的に参照していると言える。また、非専攻の場合には、日本語の用法に当てはめての使用平均は、専攻の場合と大きい差があったが、平均が 2 より高い 2.33 であるため、日本語の用法に当てはめる学習者もいる。そのため、非専攻の場合も、「韓国語」と「日本語」、「習った内容」この 3 つから考え、「コ・ソ・ア」を使用しているとも言える。

<表 6. 58> 3-9 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 専攻                | 3.15          | .767     |
| 非専攻               | 2.87          | .850     |
| <i>t-value(p)</i> | 2.640**(.009) |          |

\*  $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

<表 6. 58>は 3-9 の分析結果で表したもので、専攻と非専攻の間に有意差が見られた ( $p < .01$ )。3-9 は「コ・ソ・ア」を文法的な考えはなく、直観的に判断して使用するかを聞いてみた。その結果、日本語専攻者は 3.15 で、非専攻の場合は 2.87 で二つの中で大きな差が出た。平均値を比較してみると、日本語専攻の方が「コ・ソ・ア」をより直観的に使用していることが分かる。この「直観的」ということは、先の 3-6、3-7、3-8 のように何かに当てはめて考えることではなく、文法的観点では説明できない捉え方を意味する。

非専攻の場合も 2.87 で 3 に近い平均を示しているため、その中でも、「韓国語」や「日本語」、「習った内容」に当てはめて指示詞を使用するとともに、3-9 の直観的に判断して「コ・ソ・ア」を用いることになる。

<表 6. 59> 3-10 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 専攻                | 2.21          | .868     |
| 非専攻               | 1.93          | .786     |
| <i>t-value(p)</i> | -2.565*(.011) |          |

\*  $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

3-9 は「コ・ソ・ア」の使い分けについて、学習者に自分なりの方法があるか聞いてみた。ここでいう「自分なりのルール」は、日本語の用法的な分類というよりは、学習者が総合的にまとめた指示詞の分類法があるのかを聞く設問である。その結果、日本語専攻と非専攻の間に有意差があった( $p < .05$ )。特に、非専攻の場合、「コ・ソ・ア」の使い分けに関する自分なりのまとめがないと答えた( $\leq 2$ )。それに対して、日本語専攻の場合は平均が 2.21 で、学習者なりの「コ・ソ・ア」の分類法があると答えた。

<表 6. 60> 「日本語指示詞の習得状況」の結果

| 区分   | 専攻   |      | 非専攻  |      |
|------|------|------|------|------|
|      | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 |
| 3-11 | 2.76 | .900 | 2.51 | .864 |
| 3-12 | 2.62 | .734 | 2.24 | .731 |
| 3-13 | 2.67 | .899 | 2.31 | .860 |
| 3-14 | 2.97 | .855 | 3.03 | .742 |

上の<表 6. 60>は学習者自身の指示詞の学習状況を聞いた項目の平均と標準偏差を表したものである。これらの項目の結果を専攻と非専攻の違いによる有意差があるか分析した結果、3-14を除いたすべての項目で有意の差が見られた。

まずは、3-11の結果から述べていく。日本語専攻と非専攻の間、3-11の結果に対して有意差が出た( $p < .05$ )。以下の<表 6. 71>から見てみよう。

<表 6. 61> 3-11 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)       | 標準偏差(SD) |
|-------------------|--------------|----------|
| 専攻                | 2.76         | .900     |
| 非専攻               | 2.51         | .864     |
| <i>t-value(p)</i> | 2.053*(.041) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

3-11は、日本語の「コ・ソ・ア」を教師や教材と通じて詳しく習ったのかを問うた設問である。それぞれの平均値を比較してみると、日本語専攻の場合 2.76、非専攻の場合 2.51 で、数値的には両方が「詳しく習った」と答えている。ところが、非専攻の場合より、専攻の方がもっと自分自身が指示詞について教師や教材から詳しく習ったと考えている。この結果は次の 3-12 の結果とどのような差があるか見てみたい。

<表 6. 62> 3-12 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)         | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------|----------|
| 専攻                | 2.62           | .734     |
| 非専攻               | 2.24           | .731     |
| <i>t-value(p)</i> | 3.753***(.000) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

3-12の項目は、現在「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解しているかに関する設問で、<表 6. 62>の結果から見ると、専攻と非専攻の間に統計的な有意差が見られた( $p < .001$ )。各平均値を比べてみると、専攻 2.62 で、非専攻が 2.24 である。それぞれの平均値は中間値の 2 より高く、「コ・ソ・ア」の用法をよく理解していると答えた学習者が多い。その中でも、日本語専攻の学習者の場合が、非専攻より項目に同意する回答が多くあった。

続いて 3-13 の設問は指示詞の誤用に対する姿勢に関するもので、「コ・ソ・ア」の使い方を間違えた際、その理由を確認するのかを聞いてみた。その結果が以下の<表 6. 63>である。

<表 6. 63> 3-13 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 専攻                | 2.67          | .899     |
| 非専攻               | 2.31          | .860     |
| <i>t-value(p)</i> | 2.927**(.004) |          |

\*  $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

この項目に対し、専攻と非専攻の二つの間に差があるのか分析した結果、有意差が見られた( $p < .01$ )。それぞれの平均値を比較してみると、日本語専攻の場合 2.67 で、非専攻は 2.31 である。数値的にはともに 2 より高いので、間違えた際、その理由を探すと答えた学習者が多いことが分かる。ところが、それを日本語専攻者と非専攻者に分けて分析してみると、専攻者の方が非専攻者より間違えた原因・理由を確認しようとしていることが分かった。

最後に 3-14 の場合は、専攻と非専攻による統計的な有意差は見られなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p) = -.556(.579)$ )。この設問は、「コ・ソ・ア」の説明が現在より更に詳しくなってほしいのかを問うたものである。<表 6. 70>から 3-14 のそれぞれの平均を比べてみると、専攻から非専攻の順で 2.97 と 3.03 であった。この結果から、日本語専攻・非専攻に関係なく、指示詞の説明は現在より詳しい説明が必要であると答えたことが分かる。前述したが、この結果と 3-2、3-11、3-12 と関連付けてみると、教師と教材から指示詞について習い、その用法を理解していると答えた学習者が多い反面、指示詞は難しく、現在より更に詳しい説明が要ると答えている。これらの結果については 6.5 の節でさらに細かくまとめる。

#### 6. 4. 3. 3 日本留学経験有無による結果

本説では、日本留学経験の有無によってどのような違いがあるか結果を分析する。以下の<表 6. 64>は日本語「コ・ソ・ア」と日本語の「이(i)・그(geu)・저(jeo)」の

対応関係について問うた項目 3-1 から 3-4 の結果である。

<表 6. 64> 「日本語の『コ・ソ・ア』と韓国語の『이・그・저』の関係」の結果

| 区分  | 日本留学経験 有 |      | 日本留学経験 無 |      |
|-----|----------|------|----------|------|
|     | 平均       | 標準偏差 | 平均       | 標準偏差 |
| 3-1 | 3.17     | .806 | 3.35     | .646 |
| 3-2 | 2.48     | .873 | 2.61     | .787 |
| 3-3 | 3.03     | .551 | 3.14     | .668 |
| 3-4 | 2.78     | .904 | 3.03     | .825 |

それぞれの項目が学習者の日本留学経験によって違いがあるのか分析を行った結果、3-4 以外の項目では有意の差( $t \geq 1.96$ ,  $p < .05$ )がなかった。3-4 以外の結果は、前のものと変わりがなかった。まずは 3-1 の項目からみると、留学経験有の平均は 3.17 で、未経験は 3.35 である。ともに 3 以上の高い数値であり、「コ・ソ・ア」が「이(i)・그(geu)・저(jeo)」と類似していると考えており、二つ間に統計的な有意差はない( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=-1.825(.069)$ )。

3-2 の各平均値を比べてみると、「コ・ソ・ア」が難しいのかに対し、留学経験有も未経験も少し難しいと答え、二つのグループの間に統計的な差は見られなかった ( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p)=-1.084(.114)$ )。

3-3 の項目の結果を見ると、この二つのグループに差があるのか t 検定を行った結果、有意確率(p)が 0.05 より多く出たため( $t\text{-value}(p)=-1.332(.186)$ )、二つの間には有意差がない。すなわち、これは前の結果と同じで、韓国人日本語学習者は韓国語の「이(i)・그(geu)・저(jeo)」が日本語の「コ・ソ・ア」の習得に良い影響を与えると考えていることが分かる。留学経験があるにも関わらず、3.03 のように高い平均値が出た結果から考えてみると、3-3 項目は韓国人学習者が基本的に持っている概念であるのではないだろうか。

次は前述の設問 3-4 の<表 1> (再掲) が「コ・ソ・ア」の説明として十分なのかに対する回答を分析した結果、<表 6. 65>のように留学経験の有無によって有意の差があった( $p < .05$ )。

<表 1> 韓国の日本語教材による指示詞説明表

|      | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |
|------|---------|---------|---------|----------|
| 사물   | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |
| 장소   | ここ(여기)  | そこ(저기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |
| 방향   | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |
| 사물수식 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |

<表 6. 65> 3-4 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 有                 | 2.78          | .904     |
| 無                 | 3.03          | .825     |
| <i>t-value(p)</i> | -2.024*(.044) |          |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

分析の結果、ともに<表 1>が「コ・ソ・ア」の文法の説明として十分であると答えた。ところが、その平均値を比較してみると、日本留学経験が無い学習者の方が、留学経験有の学習者より 3-4 の項目に同意の答えが多いことが分かる。

<表 6. 66> 「指示詞の使用」の結果

| 区分   | 日本留学経験 有 |       | 日本留学経験 無 |      |
|------|----------|-------|----------|------|
|      | 平均       | 標準偏差  | 平均       | 標準偏差 |
| 3-5  | 2.78     | .865  | 2.84     | .813 |
| 3-6  | 2.38     | 1.010 | 2.92     | .899 |
| 3-7  | 3.02     | .770  | 2.64     | .933 |
| 3-8  | 2.83     | .693  | 2.92     | .693 |
| 3-9  | 3.35     | .732  | 3.02     | .797 |
| 3-10 | 2.25     | .795  | 2.12     | .871 |

次は、指示詞の使用に関して問うた 3-5 から 3-10 をグループ間の有意差があるのか分析した<表 6.66>である。その中で日本留学経験有無による統計的な有意の差があった項目は、3-6 と 3-9 である。各分析結果を表を挙げながら述べる。まずは 3-5 指示詞の使用が困難であった場合があるかに対する回答を分析した結果、有意差はなかった( $p > .05$ ,  $t\text{-value}(p) = -.508(.612)$ )。この各平均を比べてみると、経験有の場合は 2.78 で未経験は 2.84 である。両方とも指示詞の使用際「コ・ソ・ア」の選択を迷ったことがあると答えた。これらの結果は留学経緯にとって差はなく、調査対象であった韓国人学習者は「コ・ソ・ア」の使い分けで難しさを持っていると言える。

3-6 から 3-9 は「指示詞を使用する際」にどのような形で用いているのかを中心に答えてもらった項目である。3-6 は「韓国語の指示詞に当てはめる」に対する回答で、分析結果、二つの間に有意差があった( $p < .001$ )。分析結果は以下の<表 6. 67>の通りである。

<表 6. 67> 3-6 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)         | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------|----------|
| 有                 | 2.38           | 1.010    |
| 無                 | 2.92           | .899     |
| <i>t-value(p)</i> | 3.777***(.000) |          |

\*  $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

平均から見ると、両方 2 以上であったが~~出た~~。しかし、その中でも留学経験が

ある学習者より経験が無い方が母語への依存が強いことが分かった。日本で日本語を勉強した経験がある学習者はある程度は韓国語と照らし合わせて、対応関係の中心に「コ・ソ・ア」を使用しているが、その答えが半々になったため、韓国語に当てはめない学習者が留学経験が無い場合より多いと言える。

続いては、「日本語の用法に当てはめて、使用する」3-7 の設問に対する回答を留学経験の有無による差があるか分析した結果である。この二つは 3-7 の設問に対し、有意差がある結果であった( $p < .001$ )。

<表 6. 68> 3-7 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 有                 | 3.02          | .770     |
| 無                 | 2.64          | .833     |
| <i>t-value(p)</i> | 3.320**(.001) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

<表 6. 68>によると、留学経験がある学習者が、経験のない学習者より、指示詞を日本語の用法に当てはめて用いることが分かった。経験有の平均値は 3.02 で、3 を超えた数値であるため、多くの学習者が「コ・ソ・ア」を日本語として考えようとしている。以上、<表 6. 66>の結果と比較してみると、日本留学経験がある学習者は指示詞を用いる際、「日本語の用法」として考える上に、母国語である「韓国語」にも当てはめてみる。また、日本留学の経験がなくても、学習者は、日本語は日本語として用法に当てはめて使用しようとしていることが分かった。

次は、韓国語や日本語の用法ではなく、「教師や教材から習った指示詞」に当てはめるのかに対する 3-8 の結果である。この項目に対しては、グループ間の統計的な差は見られなかった( $p > .05$ ,  $\text{value}(p) = -.844(.399)$ )。それぞれの平均値が留学経験有から無の順に、2.83 と 2.92 である。統計的には二つ間にはさほど差はないが、数値としては日本留学経験の無い学習者の方が高い。ここまでの結果をまとめてみると、学習者は日本語留学経験の有無に関係なく自分自身が教材と教師から教えてもらったことを基準として考えている。

3-9 は、指示詞を直感的判断して使用しているのかに対する回答を分析した結果で以下の<表 6. 69>の通りである。3-9 の場合は、分析結果、留学経験の有無による有意差があった( $p < .001$ )。

<表 6. 69> 3-9 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)        | 標準偏差(SD) |
|-------------------|---------------|----------|
| 有                 | 3.35          | .732     |
| 無                 | 3.02          | .797     |
| <i>t-value(p)</i> | 2.874**(.004) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

まず、平均から見ると、両方 3 以上の数値であった。そのため、両方指示詞を直感的に判断していると答えた学習者が多いことが分かる。ところが、その中でも、殊に、3.35 の日本留学経験がある学習者の場合が、指示詞と何らかの規則に照らし合わせて考えるのではなく、「直感的」に使用していると答えた。

それに対し、「自分なりの指示詞の使い分けに関して分類法」があるかに対する回答では、否定する回答が多い。これが 3-10 の結果である。この項目は t 検定を通じて分析した結果、二つの間に有意差はなかった( $p > .05$ ,  $\text{value}(p)=1.058(.291)$ )。ここでは、それぞれの平均値に注目したい。3-9 の結果として、韓国人学習者は、「コ・ソ・ア」を直感的に判断して使用すると答えた。特に、留学経験がある学習者の場合は更に多かった。この「直感的」が意味することは次の章で詳しく述べる。直感的に使用するとは 3-6、3-7、3-8 のように何かに当てはめて考える過程とは違う、何らかの基準で判断するとも言えるだろう。しかし、学習者は指示詞に関する自分なりのまとめ・基準についてさほど認識していないと考える。

続いては、<表 6. 70>の結果である。3-11 から 3-14 は指示詞習得に関する設問で、留学経験の有無によって統計的に有意差があった部分は「指示詞の用法をよく理解している」に対する 3-12 である。

<表 6. 70> 「日本語指示詞の習得状況」の結果

| 区分   | 日本留学経験 有 |      | 日本留学経験 無 |      |
|------|----------|------|----------|------|
|      | 平均       | 標準偏差 | 平均       | 標準偏差 |
| 3-11 | 2.60     | .978 | 2.73     | .876 |
| 3-12 | 2.77     | .745 | 2.47     | .740 |
| 3-13 | 2.73     | .841 | 2.55     | .914 |
| 3-14 | 2.99     | .946 | 2.99     | .800 |

まず、指示詞の方法について、教師や教科書を通じて詳しく教えてもらったのかに対する 3-11 は、統計的に有意差はなかった( $p > .05$ ,  $\text{value}(p)=-1.025 (.306)$ )が、平均を比べてみると、ともに 2 以上の数値で「そうである」と答えた学習者が多かったことが分かる。

3-12 の指示詞の用法を理解しているのかに対する回答を分析した結果、このグループ間に有意差が見られた( $p < .001$ )。結果は以下の<表 6.71>の通りである。

<表 6. 71> 3-12 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)         | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------|----------|
| 有                 | 2.77           | .745     |
| 無                 | 2.47           | .740     |
| <i>t-value(p)</i> | 2.746**(0.006) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

日本留学の経験がある学習者の場合が経験の無い学習者より、指示詞習得に確信があるように見える。

次の 3-13 の回答の各平均を比べてみる。3-13 は指示詞の使用が間違った時、その理由について調べるなどに対する回答である。この項目を分析した結果、日本留学経験による差は見えなかった( $p > .05$ ,  $\text{value}(p)=1.402(.162)$ )。二つの間に統計的は差がなかったが、日本留学経験のある学習者の方が、誤用の理由を確認しようとする事が分かる。

最後の設問で指示詞の説明が、現在より詳しくなしてほしいと答えた学習者を見ると、ともに同一の平均値 2.99 であったため、日本留学経験の有無に関係なく、更に詳しい指示詞の用法の説明が必要であると考えている ( $p > .05$ ,  $\text{value}(p)=-.314(.753)$ )。

以上、日本留学経験の有無による項目別に結果を分析した。次節ではこれらの項目が「レベル別」による差があるのかを分析する。

#### 6. 4. 3. 4 レベルによる結果

次は各項目におけるレベル別の結果である。<表 6. 72>は日本語の「コ・ソ・ア」と韓国語の「이 (i)・구 (geu) ・저 (jeo)」の関係性を表したものである。

<表 6. 72> 「日本語の『コ・ソ・ア』と韓国語の『이・구・저』の関係」の結果

| 区分  | 初級   |      | 中級   |      | 上級   |      |
|-----|------|------|------|------|------|------|
|     | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 |
| 3-1 | 3.33 | .665 | 3.39 | .724 | 3.17 | .637 |
| 3-2 | 2.78 | .772 | 2.48 | .744 | 2.43 | .880 |
| 3-3 | 3.16 | .651 | 3.10 | .700 | 3.09 | .566 |
| 3-4 | 3.06 | .784 | 3.08 | .814 | 2.71 | .930 |

3-1「日本語の「コ・ソ・ア」は、韓国語の「이(i)・구(geu)・저(jeo)」と類似している」のレベル別の平均値を比べてみると、全レベルが 3.0 以上の平均である。この項目に対し、レベル間の有意差はなかった( $p > .05$ ,  $F\text{-value}(p)=2.491(.085)$ )。<表 6.72>の被調査者の 3-1 の平均 3.31 とも、さほど変わりがない数値であるだろう。前述のように、韓国人学習者は、目標言語である日本語の「コ・ソ・ア」と韓国語の「이(i)・구(geu)・저(jeo)」が似ていると捉えていることがわかる。

第二言語習得では、母国語と目標言語間の類似性が高いと、目標言語の習得に「正の影響」を与えて習得が進むようになると述べている。3-1 の結果のような考えが、3-2「日本語の「コ・ソ・ア」は難しい」の項目の結果とどのような関係があるか見てみよう。

レベルによる日本語指示詞の難しさに差があるのか分析した結果が以下の<表 6. 73>である。



<表 6. 73> 3-2 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                     | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------------------|----------|
| 初級                | 2.78 <sup>b</sup>          | .772     |
| 中級                | 2.48 <sup>a</sup>          | .744     |
| 上級                | 2.43 <sup>a</sup>          | .880     |
| <i>F-value(p)</i> | 6.177 <sup>**</sup> (.002) |          |

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Duncan : a<b<c

分析の結果によると、統計的に有意差が見られた(p<.01)。また、初級の場合は中・上級に比べ、相対的に日本語の「コ・ソ・ア」を難しいと考えていることが分かった。ところが、日本語の「コ・ソ・ア」は初級の段階で導入される文法項目で、韓国の日本語教材の場合、韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」に対応させて説明しているのと、この結果をともに考えてみると、学習者は母国語と類似しているとして、必ずしもその部分を易しいと考えていないと言える。

3-3「韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」は日本語の「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。」に対するレベル別の平均は、初級 3.16、中級 3.10、上級 3.09 であり、有意差は見えなかった(p>.05、F-value(p)=.336(.715))。全体的に韓国語は日本語の指示詞習得に良い影響を与えると韓国人学習者は考えている。

調査の結果、韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と日本語の「コ・ソ・ア」は同じ 3 系列の指示詞を持ち、用法的にも類似している部分が多く、韓国人の学習者もそのように捉えていることが分かった。また、韓国の日本語教材によく出る表は、その部分に頼った説明法で、日韓指示詞を対応させ、説明している。設問 3-4 の「<表 1> (再掲) は日本語の「コ・ソ・ア」の文法説明として十分である。」に対し、レベル間の差があるかどうかを分析したのが以下の<表 6.74>である。

<表 1> 韓国の日本語教材による指示詞説明表

|      | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |
|------|---------|---------|---------|----------|
| 사물   | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |
| 장소   | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |
| 방향   | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |
| 사물수식 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |

<表 6. 74> 3-4 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                     | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------------------|----------|
| 初級                | 3.06 <sup>b</sup>          | .784     |
| 中級                | 3.08 <sup>b</sup>          | .814     |
| 上級                | 2.71 <sup>a</sup>          | .930     |
| <i>F-value(p)</i> | 5.276 <sup>**</sup> (.006) |          |

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Duncan : a<b<c

分析の結果によると、統計的に有意差が見られた( $p < .01$ )。また、初級の場合は中・上級に比べ、相対的に日本語の「コ・ソ・ア」を難しく考えていることが分かった。ところが、日本語の「コ・ソ・ア」は初級の段階で導入される文法項目で、韓国の日本語教材の場合は韓国語の「이(i)・ 그(geu)・ 저(jeo)」に対応させて説明しているのと、この結果をともに考えてみると、学習者は母国語と類似しているとして必ずしもその部分を易しいとは思っていないと言える。

<表 6. 75>は指示詞をどのように使用しているかについてレベル別の差を分析した結果である。3-5 から 3-10 の中でレベルによる有意差が見られたのは 3-8 以外の項目である。

<表 6. 75> 「指示詞の使用」の結果

| 区分   | 初級   |      | 中級   |      | 上級   |       |
|------|------|------|------|------|------|-------|
|      | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差  |
| 3-5  | 3.06 | .762 | 2.75 | .728 | 2.60 | .950  |
| 3-6  | 3.13 | .833 | 2.82 | .856 | 2.31 | 1.016 |
| 3-7  | 2.40 | .867 | 2.76 | .712 | 3.14 | .738  |
| 3-8  | 2.92 | .732 | 2.97 | .651 | 2.78 | .681  |
| 3-9  | 2.84 | .844 | 3.09 | .746 | 3.47 | .620  |
| 3-10 | 1.97 | .838 | 2.34 | .835 | 2.14 | .869  |

まずは、<表 6. 76>によると、指示詞の使用が困難であるかに対する回答を分析したもので、その結果、統計的に有意差があった( $p < .001$ )。初級の場合、中・上級より指示詞の使用に難しさを感じていることが分かる。レベルが上がるにつれ、平均値が減っているが、上級の平均値も 2.60 で 2 以上で、3 に近い数値であった。

<表 6. 76> 3-5 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                      | 標準偏差(SD) |
|-------------------|-----------------------------|----------|
| 初級                | 3.06 <sup>b</sup>           | .762     |
| 中級                | 2.75 <sup>a</sup>           | .728     |
| 上級                | 2.60 <sup>a</sup>           | .950     |
| <i>F-value(p)</i> | 8.630 <sup>***</sup> (.000) |          |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Duncan : a<b<c

指示詞使用の困難は、上・中・初級の順に多いが、平均値を見ると、レベル全体に困難であると答えた学習者が多いことが分かる。

次の<表 6. 87>は、指示詞を韓国語に当てはめるのかに対する回答をレベル別に分析し、結果を表したものである。分析した結果、この項目は初・中・上級による統計的な有意差があった( $p < .001$ )。

<表 6. 77> 3-6 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                       | 標準偏差(SD) |
|-------------------|------------------------------|----------|
| 初級                | 3.13 <sup>c</sup>            | .833     |
| 中級                | 2.82 <sup>b</sup>            | .856     |
| 上級                | 2.31 <sup>a</sup>            | 1.016    |
| <i>F-value(p)</i> | 21.095 <sup>***</sup> (.000) |          |

\* p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Duncan : a<b<c

初級の場合が 3.31 で最も高い平均値であった。「コ・ソ・ア」を韓国語の指示詞に対応させて捉えているとも言える。中級の場合は初級より小さい数値であるが 2.82 で、高い平均値である。中級も初級のように韓国語に当てはめて使っていると答えた回答が多いことが分かる。次は上級の場合で、平均が 2.31 で中間値の 2 以上である。全レベルの中で最も低い数値であるが、上級の場合も日本語の指示詞に韓国語の指示詞を当てはめる学習者が他のレベルよりは少ないかもしれないが、滅多に無いとも言えない。この結果を全体的にみると、レベルが上がるにつれ、徐々に「コ・ソ・ア」に「이 (i)・구 (geu)・저 (jeo)」を当てはめての使用が減っていき、基本的に、学習者は母国語である韓国語を基準として、日本語の指示詞を考えていることが分かった。ところで、次の 3-7 の「コ・ソ・ア」を日本語の用法に当てはめて考えることに対する結果はどうか。3-6 の結果と共に考えてみると、韓国人学習者は韓国語に当てはめるといふ答えが多かったため、この項目に対し、項目に反対する結果が出るのか以下の<表 6. 88>を見てみよう。

<表 6. 78> 3-7 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                       | 標準偏差(SD) |
|-------------------|------------------------------|----------|
| 初級                | 2.40 <sup>a</sup>            | .867     |
| 中級                | 2.76 <sup>b</sup>            | .712     |
| 上級                | 3.14 <sup>c</sup>            | .738     |
| <i>F-value(p)</i> | 21.095 <sup>***</sup> (.000) |          |

\* p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

Duncan : a<b<c

日本語の用法に当てはめ、日本語の用法を中心に考え、「コ・ソ・ア」を使用するかを分析した結果、統計的にもレベル間に有意の差があった(p<.001)。まず、結果を見ると、各レベル別に大きい差があることが分かる。平均値から検討してみると、初・中・上の順に平均が高くなる。初級の場合は 2.40 で 3 つの中で最も低いが、中間値の 2 より高い数値である。この項目に賛成する答えと、反対する答えが約 5 割ずつであった。

中級の場合は 2.76 で、初級よりは日本語の用法に当てはめると答えた学習者が増えている。レベルが上級になるにつれ、賛成の回答が増え、3.14 という高い平均値であった。ここまでの<表 6. 78>をまとめるとレベルが上がると、「コ・ソ・ア」を日本語の用法に適応させて考えようとしていることが増えると言える。また、指示詞を用

いる際韓国人学習者が母語である韓国語に当てはめて使用することに関しては、レベルが上がると平均が減るに対し、目標言語の日本語に当てはめて考える場合は平均が高くなる。しかし、全レベルの平均が中間値の2以上であるため、全体的に「コ・ソ・ア」の使用に韓国語と日本語がかかわっていることが分かった。

韓国語と日本語以外に「コ・ソ・ア」の使用に学習者が教材と教師から習った指示詞はどれくらい影響を与えるか調査したのが3-8である。3-8は分析した結果、3-6と3-7のようにグループ間の有意差は見られなかった( $p > .05$ ,  $F\text{-value}(p)=1.787(.169)$ )。<表 6.85>3-8の平均値を見ると、初級 2.92・中級 2.97・上級 2.78 で、レベル間に差がない平均値である。レベルに関係なく、学習者は自分自身が習って来たことに頼っていることが分かった。すなわち、「コ・ソ・ア」の使用には韓国語・日本語・習った内容のすべてがかかわっていると言える。それらの基準ではなく、指示詞を直感的に判断し、用いる学習者はいないのか、またレベルによる差は存在するのかについて以下の<表 6. 79>に 3-9の項目を分析した結果を示す。

<表 6. 79> 3-9の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                       | 標準偏差(SD) |
|-------------------|------------------------------|----------|
| 初級                | 2.84 <sup>a</sup>            | .844     |
| 中級                | 3.09 <sup>b</sup>            | .746     |
| 上級                | 3.47 <sup>c</sup>            | .620     |
| <i>F-value(p)</i> | 16.022 <sup>***</sup> (.000) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

Duncan : a<b<c

レベルによる有意差検定を行った結果、有意確率が0.000で0.001より小さいので、有意差がある結果が出た。まず平均から見ると、初・中・上級の順に平均が高くなる。上級になると「直感的に判断する」と答えた学習者が最も多いことが平均値を見ると分かる。ところが、初級の場合も2.84で3に近い数値である。中・上級よりは少ないが、多く学習者が何らかの規則に当てはめて「コ・ソ・ア」を考えるのではなく、「直感的」に捉えていると答えた。それでは、この直感的に捉えることに何らかのルールはあるのかを調査するため、自分なりの指示詞の使い分けに関し、分類法があるかを聞いてみた。以下の<表 6.80>が3-10の回答の分析結果である。

<表 6. 80> 3-10の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                     | 標準偏差(SD) |
|-------------------|----------------------------|----------|
| 初級                | 1.97 <sup>a</sup>          | .838     |
| 中級                | 2.34 <sup>b</sup>          | .835     |
| 上級                | 2.14 <sup>ab</sup>         | .869     |
| <i>F-value(p)</i> | 5.160 <sup>**</sup> (.006) |          |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

Duncan : a<b<c

分析した結果3-10がレベルによる有意差があった( $p < .05$ )。上級を基準とし、初級

が最も低い 1.97 で、自分なりの「コ・ソ・ア」の使い分けに関する方法はないと答えた。中級の場合は、高い数値ではないが、2.34 で指示詞の分類法があると答えた学習者が初級よりは多いことが分かる。初級では反対する回答が多かったが、それが中・上級になると賛成の回答に変わる。筆者はこの部分を韓国人学習者の「中間言語形成」と関係があると考え。その「中間言語」には、新たな何かが生まれるのではなく、前述した韓国語・日本語・教材と教師から習うなど、様々な要因が絡み合ったものであると考える。

続いて、以下の<表 6. 81>は残りの項目で 3-11 から 3-14 の結果である。この項目の中で統計的に有意差があったのは 3-12 と 3-13 である。順番を追って結果を考察する。

<表 6. 81> 「日本語指示詞の習得状況」の結果

| 区分   | 初級   |      | 中級   |      | 上級   |       |
|------|------|------|------|------|------|-------|
|      | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差 | 平均   | 標準偏差  |
| 3-11 | 2.78 | .835 | 2.76 | .856 | 2.52 | 1.021 |
| 3-12 | 2.35 | .755 | 2.52 | .678 | 2.82 | .756  |
| 3-13 | 2.48 | .901 | 2.53 | .894 | 2.83 | .880  |
| 3-14 | 3.07 | .778 | 2.93 | .827 | 2.91 | .906  |

まず、3-11 指示詞の方法について教師や教科書を通じて詳しく教えてもらったのかに対する回答は、統計的にレベルによる有意差がなかった ( $p > .05$ 、 $F\text{-value}(p)=2.280(.104)$ )。それぞれの平均値を比べてみると、初級 2.78・中級 2.76・上級 2.52 で、統計的にはレベルによる差が見えないという結果であったが、レベルが上がると、その数値も低くなることが分かる。その平均から分かることは、韓国人学習者は指示詞について教材と教師から詳しく習ったことに対し、「そうである」と考えているのである。

次の、3-12 の指示詞の用法を理解しているのかに対する回答を分析した結果、このグループ間に有意差が見られた ( $p < .001$ )。結果は以下の<表 6.82>の通りである。

<表 6. 82> 3-12 の分析結果

| 区分                | 平均値(M)                      | 標準偏差(SD) |
|-------------------|-----------------------------|----------|
| 初級                | 2.35 <sup>a</sup>           | .755     |
| 中級                | 2.52 <sup>a</sup>           | .678     |
| 上級                | 2.82 <sup>b</sup>           | .756     |
| <i>F-value(p)</i> | 9.537 <sup>***</sup> (.000) |          |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

Duncan : a<b<c

初級の場合が初・中級より項目に賛成する回答が多かった。初級と中級の場合は、それぞれ平均値が 2.35 と 2.52 で、よく理解している学習者が多いが、この項目に対し、「そうではない」と答えた学習者も少なくともいることが分かった。その数値は、



に用いると答えた。このように指示詞の使い分けに注目した使用とともに、『これ』で問い、『それ』で答える」など、『それ』で問い『これ』で答える」ような規則に当てはめる答えも少なくともあった。

現場指示の融合型は、「コ・ソ」と「ソ・コ」のように、異なる指示詞を用いる文ではなく、「コ・コ」や「ソ・ソ」、「ア・ア」のように、同一の指示詞を使用する用法である。この用法の結果、「ア・ア」以外の「コーコ」と「ソ・ソ」の文に対し、韓国人学習者はレベルに関係なく、違和感を持っていることが分かった。上級になっても「コ・ソ」の方が正しいと答えた回答が多かった。この部分に対し、『これ』で問い、『それ』で答える」や、『それ』で問い『これ』で答える」の規則の影響を受けたからであると考えられる。これに加え、指示詞を判断する際、指示詞の用法より後に来る「名詞」と関連して考えている回答もあった。

「コ系列」と「ソ系列」の使用に対しては、同一の指示詞を用いることには正しくないと習得されており、これは母国語の影響による現状ではなく習得上の何らかの規則によって生じたものである。

「ア・ア」の指示詞文に対しては全レベルで習得が進んでいた。この文の習得が進んでいる理由としては、二人から遠く離れている物や人を示すからと答えた回答が多かった。そして、この文に対し「AとBが指示対象をよく知っている」と答えた学習者が初級と上級で何人かいた。この部分は「現場指示」の習得に「非現場指示」の用法が影響を与えたと考える。最終的に誤用は生じなくとも、その過程が間違っただけであるということである。

次に非現場指示の習得状況を見た。項目は4項目であり、「ソ系列」と「ア系列」の使い分けに注目し、調査した。まずは、「独立話題指示」の「ア系列」に対する文で、レベルが上がるにつれ、徐々に正用が多くなるが、全体的に見てみると、現場指示の用法より習得が進んでいない結果であった。その指示詞の文が正用であると答えた学習者は、「ア系列は過去を話す場合に用いる」という回答がレベルに関係なく最も多かった。それが中・上級になると、指示詞の用法や文法の観点ではなく、「直感的」に指示詞を判断して使用していることが分かった。

さらに、「相対的话题指示」の「ソ系列」と「ア系列」の習得状況を考察した。レベルが上がるにつれ、徐々に誤用が少なくなるが、上級になっても誤用が多く見られるため、習得が進んでいないと言える。まず「ア系列」については直感的に正しいなど、自然に読み取れると答えた学習者が多かった。この用法の「ア系列」について、「過去を話す場合」と「二人が指示対象を良く知っている場合」に用いると分類していた。また、現場指示の用法として考え、指示詞対象が遠く離れているので、「ア系列」を使用すると答えた学習者も初・中・上級に少なからずあった。それに対し、この用法に「ア→ソ」の誤用も多く見えた。この誤用に関しては、「韓国語と対応させて考えた場

合」と『ソ系列』の使用に関する習得が、『ア系列』と混同した場合」があった。「相対的話題指示」「ソ系列」の使い分けについては「知らない対象を指示」と「韓国語と対応」させて習得されていた。この用法の誤用は「ソ→ア」が多く見られたが、その中には、『ア系列』との指示用法の混同」と「現場指示用法と混同」による誤用であった。

第一の結果から明らかになったことは、指示詞の習得過程に影響を与える要因は様々なものがあり、その要因が複雑で総合的に現れることが分かった。続いては第二の指示詞の使用に関する認識調査の結果をまとめてみる。韓国人学習者は、性別・専攻・日本留学経験・レベルに関係なく、指示詞を母語の韓国語と類似していると基本的に認識していた。この類似性が指示詞の習得に良い影響を与えて習得に役に立つと考えている。また、韓国語と日本語に対応し、「コ・ソ・ア」を説明することが指示詞の説明として十分であるとも学習者は捉えていることが分かった。「コ・ソ・ア」と「이(i)・구(geu)·저(jeo)」に対応した説明に対し、男性より女性、日本留学経験がある学習者より無い学習者が、上級よりは初・中級の方がそれぞれ強いことが分かった。ところが、3-2「日本語の『コ・ソ・ア』は難しい」に対する回答は「そうである」を選択した学習者が多かった。また、指示詞の使用に困難があると答えた。

すなわち、日本語の指示詞は学習者の母国語である韓国語と1対1で対応しており、日本語の習得にも役に立つが、指示詞は簡単ではなく、難しいと認識しており、指示詞の習得が進んでいないことが分かった。第一の調査の結果からも学習者は、「コ・ソ・ア」を韓国語に当てはめた「コ・ソ・ア」より、日本語の用法など、直感的に捉えていることが明らかになった。そのため、両言語の類似性と日本語指示詞の習得に、一方的に影響を与えているのではなく、「母国語との類似性」と「目標言語」が、互いに影響を与えていると予測できる。

それを証明するため、「韓国語」や「日本語」、「教師と教材から習った内容」の中で、指示詞を用いる際に、基準として考えることは何なのか調査した結果、3つの中で1つではなくすべてを基準として複合的に考えていることが分かった。更に詳しく述べると、韓国語に当てはめると答えた学習者は、日本語非専攻者と日本留学経験無の者、上級よりは初・中級の方がそれぞれ多かった。それに対し、日本語に当てはめるに対する回答は、日本語専攻者と日本留学経験がある学習者、上級の場合が多かった。しかし、最終的に韓国人学習者は、「コ・ソ・ア」の使用に様々なことを適応させ、総合的に考えていることが分かった。習得過程にもこれらの複合的なものが影響を与え、習得が進んだり進まなくなったりすると考える。

そして、韓国人学習者は指示詞の用法について教師と教材を通じて習い、ある程度指示詞の用法を習得していると考えている。それに対し、現在の指示詞の説明は十分ではなく、足りないと話している。すなわち、「コ・ソ・ア」について習い、用法につ



いても知っているが、何かが学習者の頭の中にまとめられていない状況である。そのため、現在より更に詳しい指示詞の説明が必要だと考えているのである。

殊に、3-9「日本語の『コ・ソ・ア』を直感的に判断して使用する」の結果を見ると、韓国人学習者の中に、「コ・ソ・ア」の使い分けがきっちりと出来ていない状況であることが分かる。全体的にこの項目に対し、「そうである」と答えた。指示詞の使い方が習得されていることより、文の流れや自然に読み取れるのかなど、直感的に考えていることが分かった。また、学習者は指示詞を正確に習得したがっており、自分の誤用に対しても興味が高いことが 3-13 の結果から明らかになった。

以上で、指示詞の習得過程に影響を与える様々な要因があり、それらのことで学習者の「中間言語」が形成されるのではないだろうか。本章の調査から明らかになったことを更に深く証明するため、指示詞の習得に関する質的調査を行う必要があると考えられる。第 7 章ではインタビュー調査を通じて、韓国人学習者による指示詞の習得過程を考察していく。

## 第7章 日本語指示詞の習得過程に関する質的調査

### 7.1 調査目的

日本語教材の指示詞と指示詞習得の調査を通じ、韓国人学習者による習得過程を考察した。その結果指示詞の習得に影響を与える要因は様々であり、それらの要因は総合的に習得が進められないように影響していることが分かった。

本章では第5章の教材分析と量的調査の結果に基づき、指示詞の習得過程を具体的に明確にするために行った質的調査について述べる。本調査の目的は、「韓国人母語話者による韓国語と日本語の関係」と「指示詞の習得状況と認識」を調査し、最終的に韓国人学習者の「中間言語」の形成過程を明らかにすることである。

インタビュー調査は2016年8月30日から9月9日にわたって実施した。調査の内容は以下の3つのカテゴリーに分けている。

- 1) 母語と目標言語の関係
- 2) 韓国人学習者の指示詞習得
- 3) 指示詞の使用に関する認識

「1) 韓国語と日本語の関係」は、日本語の学習履歴と学ぼうとしたきっかけ、母国語である韓国語と日本語について答えるものである。そして、第6章のアンケートで作成されている項目3-1から3-4についても述べている。

<表 7. 1> 母語と目標言語の関係に関するアンケート項目

| 項目   | 内容                               |         |         |          |         |
|------|----------------------------------|---------|---------|----------|---------|
| 3-1  | 日本語の「コ・ソ・ア」は韓国語の「이・그・저」と類似している。  |         |         |          |         |
| 3-2  | 日本語の「コ・ソ・ア」は難しい。                 |         |         |          |         |
| 3-3  | 韓国語の「이・그・저」は日本語の「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。 |         |         |          |         |
| 3-4  | <表 1>は日本語の「コ・ソ・ア」の文法説明として十分である。  |         |         |          |         |
|      | <表 1>                            |         |         |          |         |
|      |                                  | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)     | ど(어느)   |
|      | 사물                               | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)   | どれ(어느것) |
|      | 장소                               | ここ(여기)  | そこ(저기)  | あそこ(저기)  | どこ(어디)  |
| 방향   | こちら(이쪽)                          | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |         |
| 사물수식 | この(이)                            | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |         |

次は「コ・ソ・ア」の習得状況に関して調査するため、改めてアンケート用紙にある10個の指示詞の文についてどう考えるのかを問い、またその理由についても詳しく答えたものである。各項目における指示詞文は以下の<表 7. 2>に示す。

<表 7. 2> アンケート調査に引用した指示詞文

| 項目  | 内容                         |                               |
|-----|----------------------------|-------------------------------|
| 2-1 | A: <u>これ</u> はあやさんのかばんですか。 | B: そうです。 <u>それ</u> は、私のかばんです。 |
| 2-2 | A: <u>これ</u> は何ですか。        | B: <u>それ</u> はてるてるぼうずです       |
| 2-3 | A: <u>それ</u> は何ですか。        | B: <u>これ</u> は日本のまんがです。       |

|      |   |
|------|---|
| 2-4  | (写真を一緒に見ながら)<br>A:これ、加藤さんの若い時ですか。 B:いいえ、この人は吉田さんです。 |
| 2-5  | (タクシーの中で)<br>A:その道を右に曲がってください。 B:はい、その角ですね。         |
| 2-6  | (空を飛ぶ鳥を指しながら)<br>A:あの鳥、何ですか。 B:あれはカササギですよ。          |
| 2-7  | あの頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。                         |
| 2-8  | あの時のステーキは本当においしかった。                                 |
| 2-9  | A:昨日一緒に行ったあの店、とてもおいしかったね。<br>B:そうだね。あそこ、また行きたいね。    |
| 2-10 | A:昨日、山下さんに会ったよ。 B:えっ、山下さん?だれ、その人?                   |

最後の「3) 指示詞の使用に関する認識」は、学習者が持っている「コ・ソ・ア」の認識を調査する部分であり、これもアンケート用紙にある<表 7. 3>の 10 項目の設問について改めて細かく答えたものである。

<表 7. 3> 指示詞使用に際する認識に関するアンケート項目

| 項目   | 内容  |
|------|---|
| 3-5  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。 |
| 3-6  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、韓国語の「이・그・저」に当てはめる。      |
| 3-7  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、日本語の「コ・ソ・ア」の用法に当てはめる。   |
| 3-8  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに当てはめる。    |
| 3-9  | 日本語の「コ・ソ・ア」を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。           |
| 3-10 | 日本語の「コ・ソ・ア」の使い分けに関する自分なりのルールがある。                |
| 3-11 | 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。       |
| 3-12 | 日本語の「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。                     |
| 3-13 | 日本語の「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違ったのか確認する。           |
| 3-14 | 日本語の「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。                 |

## 7. 2 調査対象

本研究は韓国語母国語話者による日本語指示詞の習得過程を明らかにすることが最終的目標であるため、調査対象は韓国語が母語である韓国人日本語学習者を対象とした。本調査の調査協力者の一覧と各習得状況を<表 7.4>に示す。

<表 7. 4> インタビュー調査の調査協力者の属性

|        | 日本語レベル | 専攻       | 日本語学歴 | 日本留学経験 |
|--------|--------|----------|-------|--------|
| ①SA(男) | 初級     | 日本語      | 1年6ヶ月 | 無      |
| ②SB(女) | 初級     | 日本語→看護学科 | 4年    | 有(4ヶ月) |
| ③SC(男) | 初級     | 日本語      | 1年    | 無      |
| ④CA(男) | 中級     | 日本語      | 6年    | 無      |

|        |    |     |       |       |
|--------|----|-----|-------|-------|
| ⑤CB(女) | 中級 | 日本語 | 6年    | 無     |
| ⑥CC(女) | 中級 | 日本語 | 7年    | 無     |
| ⑦JA(女) | 上級 | 日本語 | 10年   | 有(1年) |
| ⑧JB(男) | 上級 | 日本語 | 8年    | 無     |
| ⑨JC(男) | 上級 | 日本語 | 6年    | 有(1年) |
| ⑩JD(女) | 上級 | 日本語 | 6年6ヶ月 | 無     |
| ⑪JE(男) | 上級 | 日本語 | 10年   | 有(1年) |

初級3名、中級3名、上級5名で全員11名の学習者が協力を得た。それぞれのレベルは自己判断と日本語能力試験で分類した。インタビューは一名ずつ実施し、学習者の母国語である韓国語で行った。インタビュー時間は45分から60分で、学習者に事前に同意を得た上で、インタビューを録音した。

### 7. 3 結果と分析

韓国語で進行されたインタビューを韓国語で文字化をし、その韓国語を日本語に訳した。調査協力者11名のインタビューを通じて得られたデータを用いて韓国人学習者による「コ・ソ・ア」の習得過程を考察する。カテゴリーは7. 3. 1 母語と目標言語の関係、7. 3. 2 指示詞の習得状況、7. 3. 3 指示詞の使用に関する認識に分けてデータを分析する。

#### 7. 3. 1 母語と目標言語の関係

第5章で韓国の日本語教材での指示詞を調査した結果、日韓両言語が対応すると認識していることが分かった。さらに、第6章の量的調査によると学習者は「コ・ソ・ア」が韓国語の指示詞と類似していると考えていることが分かった。そして、指示詞以外にも日本語と韓国語は、文の基本的な構造と語彙などが似ている部分が多い。本節では、韓国人学習者にとって目標言語である日本語と韓国語はどのような関係を成しているのかについて考察する。考察に入る前に、以下の中級の学習者のインタビュー内容に注目されたい。

CA:英語より(日本語は)自然に表現できる。語順も似ている。初めて習う時、語順が似ていると教わったし。また、学んでみたら(両言語が)似ていて、学ぶことも簡単で。解釈も簡単。英語は難しいけど日本語は触れてみると易しかった、英語より。英語を初めて習う時より。語順が似ていたから。私は不思議に英語の文字より日本語のひらがなが好きだった。覚えるときも。

上記の内容をまとめてみると、日本語は韓国語と語順が似ていて英語より易しくて簡単であり、自然に表現ができる外国語である。一体「日本語」は韓国人学習者にとってどのような「目標言語」なのだろうか。CAが話した通り、韓国人の学習者は「日本語は韓国語と類似している」と捉えているのか。そして、その類似性で「日本語は

他の外国語より学びやすい」と学習者に思われるのかについて考察する。

まずは初級の場合で、目標言語である日本語について母語の韓国語と関連付けて述べた部分である。

SA:初めに習った時は、単語(語彙)は似ている部分が多かった。そして、覚えやすかった。だが、結局文法に入ると(両言語の)差が多くなって、そんな長所はないと思う。深化すればするほど、両言語の違いがはっきり分かるようになる。  
(中略)  
むしろ曖昧に似ているから、さらに難しい。

SA は日本語と韓国語は文の構造が似ていると認めた上、文法的には相違点が多いと述べ、「むしろ曖昧に似ているから、さらに難しい」と言った。そして、文の構造の類似性で日本語の習得が進んでいたとも言えないと述べた。SA の場合は「母語」と「目標言語」と分離しようとする試みが強い。SA と似ている話をした初級の学習者は SC である。

SC : (両言語は)似ている。私の故郷は「釜山」で、おばあさんと一緒に住んでいるが、語彙やイントネーションが似ているものが多い。  
釜山(プサン)方言の単語も(日本語と)似ているものが多い。  
(中略)  
語順が同じで似ているけど、助詞はちょっと難しい...。  
英語のように明確に異なるのではないが、100%同じとは言えない。  
深く入れば、(日本語と韓国語は)別国の言語だ。

SC の場合は、方言によるイントネーションと語彙に似ていると述べているが、SA と同じように文法的には似ていないと「別国の言語」であると言っている。すなわち、見た目を類似しているのに見えるに対し、中身は違うところが多いのである。

しかしながら、SC が「英語のように明確に異なるではないが...」と言った部分から考えてみると、「英語」と比べると「日本語」の方がより簡単に感じられるようだ。同じ初級である SB の場合も英語と比較し、日本語の方が易しかったと述べている。

SB: (日本語は)あんまり難しくなかった。(韓国語と)語順も同じだし、英語と比べたら。

このような考えは初級のみではなく上級者になっても持っていた。以下の JC の場合、韓国語と日本語の文の構造が似ているため、学ぶ際に英語より簡単であると言った。

JC : 日本語は韓国人が学びやすい外国語だと思う。また、韓国語に日本語がすごくたくさん残っている。(中略)韓国語と日本語の文の構造そのものが結構似ていて、文法を勉強する時、英語のようなストレスは少ない。

この SB と JC のように目標言語と母語の類似性で、「目標言語が学びやすかった」

または「難しくなかった」などに繋げて捉えている学習者もいた。次の中級 CC と上級 JD もそれと同じ立場である。

CC：語順が同じだから(学びやすいと思った)。

JD：どうしても韓国語と文法的な部分が似ているから、韓国人が習いやすい言語だったと思う。

殊に上級者である JD の場合は、基本的に「韓国語と日本語は似ているから、韓国人が学びやすい言語だ」と認識している。それに対して、目標言語と母語は類似していても、「目標言語は難しい」と考えている学習者もいた。中級の CA と上級の JE がそれに該当する場合である。

CA：(両言語)似たような部分がある。初めは易しいと思った。ますますレベルが上がることに連れ、漢字や専門用語が多くて、漢字と語彙などが…。日本語は勉強すればするほど難しい。

JE：最初は簡単だったけど、だんだん難しくなった。  
(最初は)たくさんアニメを通じて聞いてみたし、また、韓国語と語順も同じで…。思った通り話せるから。ある程度話を通じるし、けれども、ここで敬語とか文法的なものを習い始めると、だんだん難しくなる。

CA は初級から中級になって、漢字・専門用語などが増え、日本語が難しくなると述べている。これは SA と SC の「両言語は類似しているように見えるが、結局は違う言語である」という考えと少し異なっており、最初は両言語の類似性で日本語の習得が進んでいたが、段々「覚えるもの」が多くなり難しくなると述べている。JE の場合は、初級の時は母語と語順が同じで易しく習得したことが、レベルが上がって新しい部分を学び始めると難しくなると述べている。すなわち、最初は目標言語と母語が類似していて、目標言語が学びやすかったのである。

次の中級 CB と上級 JA・JB の場合は「見た目を類似しているのに見えるに対し、中身は違うところが多い」と述べている。

CB：(韓国語と日本語は)語順も同じであるし、近い国であるからそう思うかもしれない。私は、中学 2 回生の時、(日本語の)家庭教師から「中国語は泣きながら入って、笑ながら出る」に対して、「日本語は笑いながら入って、泣きながら出る」と聞いた。思ったより中国語が複雑に見えるけど易しい部分があるそうだ。しかし、日本語はちらっと見たら、語順が同じで易しいと思われるが、韓国と日本の文化の違いとか・・・たとえば、「受け身」のような文化の差があって難しいと思い、(日本語の学習を)あきらめる人が多いそうだ。私も勉強すればするほど、韓国語で考えてはいけなし、日本人になって考え、(日本語を)話すべきだと。(日本語は)本当に難しいと思う。  
(中略)

日本語と韓国語は似ていない。

JA : (日本語は)難しい。勉強すればするほど。最初には、初級の段階で韓国語と類似していると思った。語順とか助詞の使い、単語などが似ていると思ったが、中級、上級になってから韓国語と(日本語は)全く違う言語であることが分かった。これが...本当に、その国の文化をよく知らないとともに理解できない部分が多すぎて、勉強しなければならない部分も増えた。また、私は、詳細専攻が通訳・翻訳だが、勉強すればするほどもっと日本語が難しく感じられた。

JB : (中略)それがピッタリ合う部分もあるけど、それが別の外国語より多いが、それ以外にもっと日本語らしい表現とか日本語で直した時「これだ!」という表現がない場合が(勉強を)すればするほどだんだん増えてきたから。

母語の韓国語と目標言語である日本語は文の構造や語彙など似ている部分があり、それで覚えやすいかもしれないが、日本語の習得には役に立たないと捉えていることが分かる。

特に、中級と上級の場合は、日本語習得によって学習者自らの経験を通じて知覚し、最初に「韓国語と日本語が類似している」と考えたことを「そうではない」と認識しなおすことが分かった。

続いては、指示詞において日本語と韓国語はどのように認識されているのか考察する。両言語の指示詞は、同じ3系列で1対1対応すると韓国の日本語教材に載せられている。ところが、韓国人学習者はそれについてどう考えているだろうか。第6章のアンケート調査で作成した項目の中で、日本語の指示詞を韓国語と関連付けた項目を再び本節で用いて分析する。

まずは「日本語の『コ・ソ・ア』は韓国語の『이・그・저』と類似している」について11名の中で10名が「似ている部分が多い」と答えた。初級のSAのみ、両言語の類似性より相違点に注目して以下のように述べた。

SA : 一次的な部分は似ているけど、私は(両言語を)比較して使わないため、よく分からない。(辞書的な)意味は似ているかも知れないが、実例は全く違う。細かい部分は差が多い。

SA は辞書的に似ているように見えるかも知れないが、実際はそうではないと認識し、目標言語と母語が分離して考えている。それに対して、SA以外の10名の学習者は、両言語の指示詞について、初・中・上級関係なく基本的に「似ている」と認識した共に、両言語のズレに関しても知っていた。また、その10名の中で初級のSBは試験における「コ・ソ・ア」は韓国語と対応して考えるが、会話に時は両言語が類似していると気にしないと以下のように述べた。

**SB**：似ているが、違う。60%は似ても40%は違う。試験の時は重要だが、会話する時はあえて(類似していると考える必要があるか)。

そして、**SB** は次の「日本語の『コ・ソ・ア』は難しい」について「試験の時は難しいが、会話の時は大まかに使っても大丈夫」だと述べている。このように難しいが指示詞を用いる際に深く考えないと答えた学習者が多くいた。

**SA**：考えてみたら、難しい。  
実際、用いて使う時はあまり気にしないけど、考えて使ったら難しい。

**SC**：韓国人の立場ではちょっと難しい。私たちの立場ではそんなに気を使わず、使ってるようですが、日本語で習うと場面によってあまりにも使うものが違って、難しい。20%が少し大きく感じられる。

**JC**：深く考えると難しい。私は最初に簡単に考えた。  
現在も私は指示詞について深く考えていない。

**JE**：普段口から出るそのまま(指示詞を)使っている。

初級の場合調査対象である3名の全員が「コ・ソ・ア」について深く考えないと答えた。そして、上級の**JC**と**JE**も指示詞は簡単に考えて使っていると述べた。**JC**と**JE**は日本で1年間滞在した経験がある学習者である。上級の5名の中でこの二人以外に**JA**も日本滞在経験がある学習者であり、**JA**も答えと上記の内容を比べる。

**JA**：難しい。まだ私の頭が整理ができていない。とくに私は「そ」と「あ」が。  
韓国語と日本語、両言語の指示詞は類似しているけど、細かくみると、違う部分がたくさんある。私はその部分が非常に困難である。

上記の**JA**の場合は、自分の中に指示詞の使い分けがまとめていないと言いながら、「ソ系列」と「ア系列」の使い分けが困難であると述べている。また、韓国語と類似してない部分があると言っている。中級**CA・CB・CC**と上級**JB・JD**の場合、**JA**と同じように「コ・ソ・ア」が韓国語の指示詞と違うところがあるため、難しいと答えた。

以上で、韓国人学習者は母語である韓国語と日本語が異なる部分に気を付けていることが分かった。両言語の指示詞の使いに「ズレ」があるから難しいと考えている。

続いては、「韓国語の『이・유・저』が日本語の『コ・ソ・ア』の学習に役に立つ」という文に対してどう思うのか聞いてみた。その結果、初級の時は「コ・ソ・ア」の習得が進んでいけるようにするが、中・上級になると両言語の対応していると考えた部分が必要のない内容になってしまうと、中級と上級の学習者は以下のように述べている。



CA: 最初は助けになる。初級では役に立つが、レベルが上がると、習ったことが役に立たない。短くみたら役に立つようだが、長くみると役に立たない。(中略)

JA: 50%ぐらいは役に立つと思う。ところが、段階別に影響が違う。初級の時は、簡単に優しく理解できるが、レベルが上がると私みたいになるからだ。その初級の時の影響がとてもひどい場合は、後に再び分けて習得をするのがとても難しい。

すなわち、「コ・ソ・ア」が韓国語の指示詞と 1 対 1 対応関係を成していると考えられることは、初級の段階で一時的に習得に役に立つように見えるかもしないが、長く見るとそのような考え方は良くないと言える。また、JA の場合は「コ・ソ・ア」を韓国語の指示詞と 1 対 1 対応させて習得すると、中・上級の指示詞習得に影響を与えると述べている。

次は、韓国の日本語教材で指示詞を説明する際用いられる以下の<表 1> (再掲) について、指示詞の説明として十分なのか聞いてみたデータである。

<表 1> 韓国の日本語教材による指示詞説明表

|      | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |
|------|---------|---------|---------|----------|
| 사물   | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |
| 장소   | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |
| 방향   | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |
| 사물수식 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |

この表に対して初級 SB、中級 CB、上級 JC は、「正確ではないが説明として問題はないし、指示詞習得に役に立つ」と述べた。しかし、付加的な説明が必要であると以下のように SA は言った。

SB: この表が正確ではないが問題はない。先程のように細部的な文法は説明できない。けど、基礎的なものはこの表で習って、詳細的なことを付加的に学ばなければならない。6-70%は、役に立つ。大きな枠組みとして。

それ以外は<表 1>を否定的に考えていた。指示詞の説明としては物足りないとして以下のように述べた。そして、<表 1>が指示詞の説明として不十分であることに対し、初級の段階ではこの表が必要があると中・上級の学習者は言っている。

SC: 大きな枠組みは取ってくれるかもしれないが、例を見ると、全然役に立たない。

JB: 初級の時には役に立つと思う。

JD:(中略)この表では十分ではないが、初めて基礎としては必要があると思う。

JE: 十分ではない。初級の時のみ、それ以上は役に立たない。中級の時からここに含まれていない日本語の指示詞の用法を説明してほしい。

このように、韓国語と日本語を対応して説明した「コ・ソ・ア」は、短く見ると習得が進んでいるように見えるかもしれないが、中・上級になると逆に指示詞の習得に負の影響を与え、習得が進まなくなるのである。

### 7. 3. 2 韓国人学習者の指示詞習得

本節では、韓国人学習者の指示詞習得の状況と使用方略を考察し、習得過程で形成される中間言語を探る。以下の<表 7-2>における指示詞文に対して自由に話し合い、指示詞の使い分けについて語った。学習者から得られたデータをレベル別に分けて考察してみる。

<表 7. 2>アンケート調査に引用した指示詞文

| 項目   | 内容  |
|------|---|
| 2-1  | A:これはあやさんのかばんですか。 B:そうです。 <u>それは</u> 、私のかばんです。                        |
| 2-2  | A: <u>これ</u> は何ですか。 B: <u>それは</u> はてるてるぼうずです                          |
| 2-3  | A: <u>それは</u> 何ですか。 B: <u>これは</u> 日本のまんがです。                           |
| 2-4  | (写真を一緒に見ながら)<br>A: <u>これ</u> 、加藤さんの若い時ですか。 B:いいえ、 <u>この</u> 人は吉田さんです。 |
| 2-5  | (タクシーの中で)<br>A: <u>その</u> 道を右に曲がってください。 B:はい、 <u>そこ</u> の角ですね。        |
| 2-6  | (空を飛ぶ鳥を指しながら)<br>A: <u>あの</u> 鳥、何ですか。 B: <u>あれ</u> はカササギですよ。          |
| 2-7  | <u>あの</u> 頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。                                   |
| 2-8  | <u>あの</u> 時のステーキは本当においしかった。   |
| 2-9  | A:昨日一緒に行った <u>あの</u> 店、とてもおいしかったね。<br>B:そうだね。 <u>あそこ</u> 、また行きたいね。    |
| 2-10 | A:昨日、山下さんに会ったよ。 B:えっ、山下さん?だれ、 <u>その</u> 人?                            |

#### 7. 3. 2. 1 現場指示

まずは、相対的現場指示の対立型における結果を述べる。

2-1の「A:これはあやさんのかばんですか。B:そうです。それは、私のかばんです。」と2-2のA:これは何ですか。B:それははてるてるぼうずです」、2-3「A:それはは何ですか。B:これは日本のまんがです。」について、11名の学習者の中で、初級SBと上級JEを除いた9名の学習者が「自然」または「正しい」と答えた。その理由として主に挙げられたのは、「会話している場面の状況が頭の中に浮かぶ」という以下のような答えが多かった。

SA：自然。Aがカバンを持って少し離れているBに話している場面であったら、問題ない。

SC：大丈夫そうだ、読んだ時場面が想像できる。カバンがあって、「だれの物なのか」と聞いている。

CB: 自然だ。状況が頭の中に想像できる。

JD: 自然だ。状況が自然に頭の中に想像できる。A がかばんを持って「これ」で聞いたし、彩さん(B)はちょっと離れているところで答えている。

上記のように会話の状況が頭の中に想像ができると答えて、その場面について、「指示対象が A と近いから『これ』、B と少し離れている場合は『それ』を用いる」と答えた。レベル関係なく指示詞の用法を中心に「コ・ソ・ア」を用いていることが改めて明らかになった。そして、「指示対象が A と近いから『これ』、B と少し離れている場合は『それ』を用いる」と「指示対象が A 少し離れているから『それ』、B と近いから『これ』を用いる。」に当てはめて状況を考えて上、最後の確認として、母語である韓国語に直してみる傾向があった。

SC: (中略) 韓国語でも自然だ。

CA: ちょっと (韓国語で) 考えてみた。勿論、日本語でも考えた。半々ぐらいかな。  
(中略) 韓国語でも考えた。半々ぐらい日本語と韓国語を一緒に考えてみた。韓国語にも解釈をしてみて、日本語にも解釈をしてみた。

JB: 自然である。韓国語で考えても「이것(これ)」で聞いたら「그것(それ)」で答えるのが自然だ。

また 相対的現場指示の対立型の文について教材によく見た文であり、正しくとらえる場合もあった。

SC: そうだ。たくさん接した文だから。日本語文法的なことよりは、この文が慣れたものである。  
SC: これも自然だ。これも教科書でたくさん見た。  
SC: 韓国語で解釈はしてみたが、(この文も)たくさん見たことがある。それで正しいと思った。

JA: 自然。理由なしただ自然である。初級の教科書によく出る感じ

JB: そうだ。状況も想像できる。教科書でこのような文を多く見た。

一方、相対的現場指示の対立型に対して、違和感があると答えた初級 SB と上級 JE の中で、SB は「A と B の位置が分からない」と語った。上級の JE の場合は、以下のように、「コ・ソ」、「ソ・コ」のような指示詞文を日本人は使わないと言い、曖昧で違和感があると答えた。

JB: 少し曖昧である。

間違っただとは言えないが、日本人がこんな文を話すことを見たことはない。

以上のことから、韓国人学習者は「学習した目標言語の知識」や「母語の知識」など総合的に考え、目標言語を使用していることが分かった。つまり、学習者の目標言語は一つではなく様々な多様な影響を受けて、産出されるものであるとも言える。

続いては、相対的現場指示の融合型に当たる項目であり、それぞれ「コーコ」、「ソ・ソ」、「ア・ア」のように話し手と聞き手が同一の指示詞を用いる文である。対立型と違いがあるかを中心に考察を行う。話し手と聞き手が「コ系列」を用いる文である 2-4 の「A: これ、加藤さんの若い時ですか。B: いいえ、この人は吉田さんです。」と「ソ系列」を用いる「A: その道を右に曲がってください。B: はい、そこの角ですね。」の結果から述べる。

それぞれ「写真を一緒に見ながら」「タクシーの中で」という場面の説明がされている。韓国人学習者はこの二つの指示詞文に対して「不自然である」と「違和感がある」と語った人が多かった。その答えで最も目立つのは、「二人が同一の指示詞を用いることが不自然」という答えである。

SB: (「コーコ」の文に対して) 何か間違っただ気がするけど…。韓国語に解釈すれば、意味が通じるから、自然な文みたいだけど、何か少し違和感はある。

CA: これはちょっと分からない。写真を一緒に見ているけど、A が聞いたから A は「これ」を用いて、返事する時は「それ」にした方が良い。無意識的にそう思っている。習う時、そう学んだ。それでこの Q4 の場合は、写真を一緒に見ているから両方「こ」を使わなければならないようだが、この部分がちょっと不自然に感じられる。指示対象が二人から遠くに離れていたなら二人とも「あれ」を使えばいいが、この場合はよく分からない。お互いに別の指示詞を使わなければならないと習ったので、私も知らないうちにそう使っている。この Q4 は同じ写真を見ているから、同じ指示詞を用いるのが正しそうだけど、少し判断がつかない。

JC: (「ソ・ソ」の文に対して) 文法的に考えると、直さなければならないと思う。前に「その」を用いたので、後ろは「ここ」で指示した方が良く思うけど

調査対象であった学習者はレベル関係なくこのように考えていることが分かった。このように、「相手と同一の指示詞を用いる」ことに対する拒否感、第 5 章の量的調査でも明らかになった部分である。また、この融合型「コ系列」の場合、日韓対照分析によると用法の使いが類似している部分であり、両言語のズレがないにもかかわらず、学習者は母語と比較しないのである。従って、「融合型」の場合は、「対立型」の影響により、習得が進まないことが本調査を通じて、更に明らかになった。

ところが、「融合型」の「ア系列」の用法に対する結果は、少し異なる結果が出た。融合型「ア系列」の用法には全員「自然である」と言い、その理由に関しては日本語の「ア系列」を中心に考えていた。

SC:大丈夫そうだ。遠くて、二人から遠くて。

CA:これは正しい。一緒に見ており、空を見ているため両方「あ」が自然だ。

JC: これはいい。理由は二人が空を見ているから。 遠く離れているから。

上記のように文法的に接近して指示詞を捉えている答えた学習者以外、単に『ア』で問い『ア』で答える」ように考えている場合もあった。

CB: 自然だ。たくさん聞いたことがある。「あ-あ」が自然だ。

CC: 自然。「あ」は「あ」と一番似合う。

これは、韓国の教材に載せられている「『これ』で問い、『それ』で答える」文型の練習と似ているものである。以上で相対的現場指示の対立型と融合型の結果を分析してみた。続いては、非現場指示の結果を考察し、現場指示と非現場指示の習得過程を分析する。

### 7. 3. 2. 2 非現場指示

本節では「独立的话题指示」に当たる 2-7「あの頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。」と 2-8「あの時のステーキは本当においしかった。」、「相対的话题指示」の用法である 2-9「A:昨日一緒に行ったあの店、とてもおいしかったね。B:そうだね。あそこ、また行きたいね。」と 2-10「A:昨日、山下さんに会ったよ。B:えっ、山下さん?だれ、その人?」の結果について考察する。

独立的话题指示用法である 2-7 の「あの」と 2-8 の「あの」について、初級の学習者はまだその用法の習得がされていないため、違和感があると語った。しかし、初級の学習者たちは習った部分なのか否かより、学習者自分自身が聞いたことがあるか否かによって、以下のように判断していた。

SA:「あの」より「この」?これは見たことがなくて、「あの」が不自然に感じられる。私の経験では「この」は聞いたことがある。

SB:「あの頃」は初めて聞いた。「その頃」も「この頃」全部不自然。聞いたことない。

勿論、中級・上級になると日本語の用法として「ア系列」に関して、の学習者が「過去の出来事を語る際用いる」と答えた学習者もいた。

CA:これも自然。「あの時」は「昔の事を話す時」、Q7 と同じ。昔、幼い時、過去の話

する時は「あ」を使う。

JC: 両方、Q7 も 8 も問題ない。Q7 はたくさん聞いて見た。昔のことを回想する時よく用いる。

JD:ある。過去回想のような、日本人友達からたくさん聞いてみた。

しかし、文法的に捉えるより、上記の JD の「日本人友達からたくさん聞いてみた」のように、見たことがあるか、聞いたことがあるによって指示詞を捉えていた。従って、以上で明らかになったことは、韓国人学習者は、「独立話題指示」の用法を文法的に捉えるより、文を接したことがあるか否かによって指示詞文を直感的に判断していることがわかった。

一方、独立話題指示用法の「ア系列」について、久野（1973）の「お互い知っている場合に用いる」と語った学習者がいたが、これは「相対的话题指示」の用法である。つまり、学習者の中に指示詞の用法に関する習得がまとめていないのである。そのため、文法的な捉え方より、直感的な捉え方を通じて指示詞を使っているのではないだろうか。

続いては、「相対的话题指示」の「ア系列」と「ソ系列」の場合を見てみる。この用法は韓国人日本語学習者と共に日本語学習者が習得困難である用法である（迫田 1997,安 2000, Kawakami2010, 具 2010 など）。調査対象である 11 名の韓国人日本語学習者はどのように習得しているのか見てみる。

2-9「A:昨日一緒に行ったあの店、とてもおいしかったね。B:そうだね。あそこ、また行きたいね。」に対しては、「二人が昨日一緒に行った店であるため、『ア系列』を用いる」と語った学習者が多かった。

SC: これはそんなこと(韓国語の解釈)より「二人が知っている場所」なので「あ」の指示詞が似合う。

CB: 頭に場面が想像できる。二人が話して「아, 그가게?(ああ、その店)」抽象的な?回想する二人が一緒に経験したことについて。アニメでそのような状況を見たようだ。このような会話文を聞いたことがある。

JE: これは自然。二人が昨日一緒に行った店について話している。指示詞文が自然に読み取れる。

そして、上級の JE が語った「指示詞文が自然に読み取れる」ように、指示詞の用法による捉え方より、聞いたことがあるかなど直感的に判断している学習者も少なくなかった。

一方、「不自然である」と答えた学習者は、初級の SA、中級の CC、上級の JD と JB である。SA の場合は、指示する店が目の前にあれば、問題ない文にあると語った。

この場合、まだ、彼の中に非現場指示のことが習得されていないからであると考えられる。

続いて、中級 CC と上級の JD の場合、2-9 のような指示詞文を見たことがないと言い、「ア」を「ソ」に直したいと述べた。その理由として彼らは以下のように答えた。

CC：不自然である。B の「あそこ」を「そこ」に直したい。後ろが「そこ」が似合うから。  
(中略)  
教科書では、「これ」があったら後ろに「それ」があるし…。このような文は(教科書には)ない。見たことがあまりない。

JD：違和感があるけど、どこがおかしいのかよく分からない。なんか指示詞の「そ」がどこかに入らないと。後ろに。「あーそこ」のように。

彼らは、教材に載せられている文型の形を話しながら、「ア-ア」が不自然であると語った。つまり、言い換えれば、「コ・ソ・ア」を文法と用法を中心に考えて使用していないのである。

続いては、上級 JB の答えに注目したい。彼は、2-9 の指示詞文が不自然であると言い、その理由を次のように語った。

JB：Q6 と同じ文法であるが、まず、二人が共有している情報であるため「あ」を用いて指示する。B は、前に言及された店を改めて指示するから「そ」を用いる。そして、この文は正しくない。

JB が直した文を見ると「ア-ソ」の指示詞文になる。これは中級 CC と上級 JD が答えた文と同じ形式である。しかし、同類の誤用として扱うことはできない。JB は A は昨日一緒に行った店で、お互い共有しているため「ア系列」を用いると語った。これは久野(1973)の非現場指示用法に当てはまる部分である。ところが、B の「ア系列」に対して JB は「A が言及した店を指示するため、『ソ系列』が自然である」と述べている。つまり、JB の場合は、相対的課題指示と照応指示の二つの指示用法を混同して捉えているのである。従って、同類の誤用であっても、誤用の要因は異なることと、異なる 2 つの指示用法が混在して習得過程に現れることが分かった。

続いては、2-10 「A：昨日、山下さんに会ったよ。B：えっ、山下さん?だれ、その人?」の結果である。調査協力者の 11 名の中で 7 名が「自然である」と答えた。自然である理由としては「B が知らない人であるため『ソ系列』を用いる」という以下の JB のような答えが多かったが、大体が上級の学習者であった。

JB：これは B は山下を知らないから、「そ」で指示する。自然な文。

自然である捉えた他の理由としては、初級 SA と中級 CA の答えが挙げられる。CA の場合は、「聞いたことがあるし、韓国語に直しても問題ない」と語った。CA の場合は、指示詞の用法より、直感的に考え、念のため確認として母語を入れてみるのである。つまり、総合的に考えて指示詞を使っているのである。

次は SA の答えに注目したい。SA は、2-10 の相対的課題指示「ソ系列」の用法について、以下のように語った。

SA：自然だ。確かに「あの」ではない。この場面に「あの」を使うためには、何か対象が視野内にあったり、具体的に取れなければならない。「その」は対象がない場面に用いる指示詞である。

SA の場合は、「ア系列」は「指示対象が視野内にある場合用いる」指示詞であり、「ソ系列」は「指示対象がその場にない場合用いる」と規定している。そのため、「A: 昨日、山下さんに会ったよ。B: えっ、山下さん? だれ、その人?» に用いられた「ソ系列」は SA にとっては正しいと判断されるのである。結果的に正用を選択したとしても、彼の習得が進んでいるとは言えないだろう。それに対して、中級の CC は、「ア系列」を使うべきであると以下の理由を挙げながら語った。

CC：不自然。B の「その人」を「あの人」に。山下さんがこの場にはいないから「あの」である。B の視野内にはいないけど遠くいるから。

CC の場合は、「ア系列」を遠く離れている対象を指示する際用いると規定している。2-10 の場面は指示対象の「山下」が視野内にいない、つまり、遠いところにいると考え、「ア系列」を用いて山下を指示するべきであると述べた。

このように、学習者は、自分なりの規定を作り、その規定に当てはめて指示詞を判断することが分かった。その規定は、いわゆる研究者による先行研究からのものではなく、学習者自身が定めたものである。

以上、アンケート調査の指示詞文を用いて、改めて、指示詞習得状況を考察してみた。続いては、指示詞の使用に関して、韓国人学習者はどのように指示詞を判断して用いるのか考察する。

### 7. 3. 3 指示詞の使用に際する認識

本節では指示詞の使用に際する認識を分析する。調査内容は第 6 章のアンケート調査の 3-5 から 3-14 の項目を用いて深くインタビューした。項目 3-5 からデータを検討・考察する。「日本語の『コ・ソ・ア』を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある」に対して上級の JE を除き、10 名が全部経験があると答えた。その中でも、「自分自身の中で指示詞がまとまっていない」とか、指示詞使用



に難しさがあるため『コ・ソ・ア』の使用を避ける」、または『コ・ソ・ア』が韓国語と違う部分がある」と以下のように述べた。

**CB:** ある。頭の中でまとまっていないし、「そ」と「あ」がちょっと難しいです。方向や距離感が弱くて、相手が理解すると思って指示詞を使っているけど、もう一度整理する必要がある。

**JD:** ある。それで(指示詞を)使わず、物事を直接言う場合がある。

**SC:** ある。  
会話よりは書くとき(作文)、私たち(韓国語)と覚えるのが違って、相手(の位置)とか。

一方、初級 **SB** と上級 **JA** は、指示詞の使用に困難を感じたことはあるが、それについて重く考えないと答えた。すなわち、指示詞が文の中で大きい部分を占めていないと思われているのである。

**SB:** 迷う。試験の時。会話する時は間違ってもそのまま使う。相手が理解するから。

**JA:** 多くはないが、あんまり気にしない。どうせ話すと、意味は通じる。

どうせ話すと意味は通じると **JA** は述べているし、**SB** も相手が理解してくれると言っている。指示詞が間違っても相手に伝えようとするのか伝えられたら構わないのである。続いては「コ・ソ・ア」を用いる際、どのように認識して使用しているのかについて考察する。

指示詞を用いる際、母語である「韓国語」に当てはめて考えるか、「日本語」の用法に果てはめるのか。または、「教師と教材で習った内容」を基準として考えるのかについて、インタビューのデータを見てみる。

まず、一応韓国語と対応して考えてみると答えた学習者は、特に中級と上級で多かった。その中で中級の **CB** と **CA** のデータに注目したい。

**CB:** 一次的には考える。直感的にもう一度考えてみる。

**CA:** 半々だ。状況によって、頭の中で、まず韓国語を代入して考えてみる。これが習慣となっている。しかしもう一度日本語で考えてみようとする。

**CB** と **CA** の場合、韓国語に当てはめて考えてみた後に、改めて直感的に考えるとかかなど、日本語で考えるようなプロセスを使っている。これは第 6 章の調査でも明らかになった部分で、韓国人学習者による指示詞の習得過程には様々な要因があり、その要因が総合的に影響を与えていることになる。「コ・ソ・ア」を母語に代入させて済ますのではなく、再び確認をする過程を通じて、指示詞を用いるのである。このよう

なプロセスを通じて正用を産み出すのかまたは誤用が生じるのかによって習得状況が判断されるようになる。

「教師と教材両方から？習った内容」を参考にする場合は、韓国語と日本語の両方に当てはめて考えてみても解決できない時であると述べた。

また、「韓国語と比較」、「日本語で考える」、「習った内容を参考」のようなことより、自分が聞いたことがある文または見たことがある文のように学習者自身のデータを中心に指示詞を使っている場合もあった。以下の中級 CC と上級 JC の場合がそれに該当する。

CC:依存しない。私が聞いたことや見た表現中心に。

JC: 今はよく分からない。影響を受けても私が集めたデータがあるから。

指示詞の使用が正しいが正しくないかの判断を文法的に考えずに、聞いたことや見たことがある指示詞文なのかを中心に指示詞を使用していることが分かる。それは第 6 章のアンケート調査からも明らかになったことであり、言い換えれば、指示詞の使用の基準が主観的であるとも言える。そして、学習者による言語体系「中間言語」が形成されている可能性が認められる。一方、指示詞の使用の基準について、上記の韓国語・日本語ではなく、CB が言及した「直感的にもう一度考えてみる」で「直感的に判断して指示詞を使用する」と調査協力者である 11 名の 9 名が答えた。指示詞の使用が正しいか正しくないかより、直感的に考えると大体の学習者が以下の JC のように語った。

JC: そうだ。正しいか間違っているかよりは直感的に考える。

すなわち、指示詞の使い分けに関する客観的な基準がなく、文法を直感的・感情的・主観的基準を持っているのである。この「直感的に考える」とは、日本語を文法に合わせず、指示詞の使いに違和感があるのか、または自然に読み取れるかに注目し、「コ・ソ・ア」を用いることである。言い換えれば、指示詞の使用が正しいか間違っただのかを判断する基準が曖昧である。このように指示詞を直感的に考えると、「学習者の言語」言い換えると「中間言語」が形成されるようになる。

その反面、初級の SC と上級の JB の場合は「コ・ソ・ア」を直感的に判断せず、「韓国語」と「教材で習ったこと」を基準として用いていると次のように答えた。

JB: 私は韓国語に直して 1 次的に考えてみる。何と言うか。間違うか心配になる。私は日本留学経験がないから、余計に間違ったらどうするか思う。それで文法中心に考える。

SC: そうだ。 90% ぐらいは習った内容を中心に(考える)

殊に、上級の JB は日本留学の経験がないため、指示詞を含め日本語を産出する時は必ず母語である韓国語に直した上、改めて習った文法中心に考えると、このような彼の日本語を「文法に合わせて使った日本語」とであると語った。一方、SC の場合は、初級レベルであるため自分の日本語に自信がないし、まだ日本語の知識が足りないと言いき、頼れるものが教材に載せられている説明と母語の韓国語であり、それを中心に「コ・ソ・ア」を使っていると語った。

指示詞を直感的に判断して使用するという抽象的やり取りに関して、何かの基準やルールがあるのか、または「コ・ソ・ア」の使い分けに関する学習者なりの分類法があるかについて話してもらった。その結果、自分なりの分類法があると答えた学習者は 11 名の中で 4 名であり、7 名は「考えたことがない」、「持っていない」「考えずに直感的に使用する」と答えた。分類法があると答えた学習者の場合も「明確に説明はできないが、基準がありそうだ」と語った。これらの結果から言えるのは、指示詞の習得が進んでおらず、揺れているということである。それでは、韓国人学習者自身は日本語指示詞をどの程度理解しているかについて調べてみよう。

まず、授業や教材を通じて、「コ・ソ・ア」を詳しく習ったと語った学習者は 11 名の中で 4 名で、初級の SB、中級の CB、上級の JC と JD である。その中で、JD は習ったけど、活用しないと以下のように答えた。

JC: 習ったと言えよう。だけど、今は影響を受けていない。知識として習ったけど私は活用はしない。

JC の場合は、指示詞を直感的に判断して使うし、文法的には考えないのである。これと似ている答えが、上級 JE であり、彼は、詳しく習っていないで一人で習得し、直感的に捉えていると語った。

また、次のような答えが多かった。

SA: 詳しく習っていない。自ら勉強したし、先の表外のことについて習ったことはない。

SA が言う「先の表」は以下の<表 1>を示すのである。この表は韓国の日本語教材に載せられている指示詞の表である。以下に再掲する。

<表 1> 韓国の日本語教材による指示詞説明表

|      | こ(이)    | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |
|------|---------|---------|---------|----------|
| 사물   | これ(이것)  | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |
| 장소   | ここ(여기)  | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |
| 방향   | こちら(이쪽) | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |
| 사물수식 | この(이)   | その(그)   | あの(저)   | どの(어느)   |

「コ・ソ・ア」の説明は、上記の表が全部で、細かい用法の説明がないと答えた。そのため、指示詞の文法的な用法を理解していないと初級の SC を始め多くの学習者が語った。

SC: 自信がない。私は、主に(教科書の)横に書かれている韓国語の意味と対応させて考える。日本語指示詞「こ・そ・あ」がどのような形になっているか分からない。

CC: 理解ができていない。50%ぐらいがまとめていない。

JB: いや、理解していないし、まとめられていない。

一方、上級の学習者の中では、理解していないからこそ、直感的に指示詞を捉えると言った。結果的に韓国人学習者は「コ・ソ・ア」の習得が進んでいないのである。そのため、学習者は自分なりの方法で指示詞を使用しているのである。それがはっきりした分類法ではなくても、何かに基準を持っていると考えられる。

では、学習者は指示詞に関する説明が今よりさらに詳しくなる必要があると考えているだろうか。11名の中10名がそうになってほしいと答えた。

SA: 初級から細かいけど、説明はしてくれたら良いと思う。この表がすべてではないことを最初から説明してくれたら良い。この表で勉強して後に再び修正することよりは、最初からするのが良い。

SC: 日本人ネイティブ先生より韓国人先生が一度整理して説明をして欲しい。韓国語対照ではなく、場面別に日本語指示詞がどのように使われているかを。

CA: 教科書を中心に勉強が殆どである。私は会話中心の授業が多くなってほしい。学校で学ぶのが不足した部分が多い。そして、ちょっと様々な分野とか教科書中心ではなく、多様な分野を広げてほしい。媒介体を増やしてほしい。

説明の仕方として、「両言語の相違点をもっと詳しく説明する」と「両言語を対照せず、日本語中心に教える」などがあつた。

JA: 必要である。二つの言語の相違点中心に詳しく説明してほしい。

SC: 日本人ネイティブ先生より韓国人先生が一度整理して説明をして欲しい。韓国語対照ではなく、場面別に日本語指示詞がどのように使われているかを。

このように、指示詞の習得が安定しておらず、学習者の中でまとまっていないし、より詳しい指示詞を習得したがっていることが分かった。また、韓国人学習者は指示詞の誤用に気を付けていた。「隣の日本人に直接直してもらおう」タイプと「一人で調べる」タイプがあった。主に上級の場合、以下のように指示詞の使用の間違いを気にしない傾向があった。

JC: 別に気にしない。指示詞が間違っても、会話には邪魔にならないから。

JD: 会話の途中であれば、あんまり気にしない。

以上で、韓国人学習者の指示詞使用に際する認識について考察してみた。韓国人学習者が指示詞を用いる際に、様々な基準を用いて捉えていることが分かった。

#### 7. 4 まとめ

本章では、第 6 章の量的調査から明らかになった韓国人学習者による日本語指示詞の習得過程を更に探るため 質的調査を行った。調査は、1) 母語と目標言語の関係、2) 韓国人学習者の指示詞習得、3) 指示詞の使用に関する認識を明らかにすることが目的であった。各調査の結果をまとめると以下の通りである。

##### 1) 母語と目標言語の関係

韓国人学習者にとって、母語である韓国語と目標言語である日本語はどのような関係を成しているのか考察した。その結果、学習者は基本的に「韓国語と日本語は類似している」と考えていた。しかし、その類似性が日本語の習得に役立つのかに関しては、否定的に捉えていることが分かった。つまり、韓国人学習者は、目標言語として日本語のそのままを考えようとしているのである。指示詞に対しても、同じ結果となった。日本語の指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語の「이 (i)・그 (geu)・저 (jeo)」と 1 対 1 対応しており、初級の段階では、それが指示詞習得に正の影響を与え、習得に役立つ反面、中・上級になると役に立たなくなると学習者は考えている。そのため、母語である韓国語と日本語を分離し、関連付けずに捉えるべきであると語った。

##### 2) 韓国人学習者の指示詞習得

続いては、日本語指示詞の習得状況に関する結果をまとめる。韓国人学習者は指示詞を直感的に判断し、使用していることが分かった。その中には、用法または文法的な接近ではなく、文の全体的な流れと接したことがあるかなどの基準で指示詞を捉えるものがあつた。それぞれを用法別に分けて、見られた特徴をまとめて述べる。

#### i 現場指示

- ・「対立型」の場合は、「コ・ソ」と「ソ・コ」の形の文に親密感を持っていた。  
また、「指示対象が A と近いから『これ』、B と少し離れている場合は『それ』を用いる」と「指示対象が A 少し離れているから『それ』、B と近いから『これ』を用いる。」の規定を基準として用いていた。
- ・「融合型」の場合は、韓国人日本語学習者は「コ・コ」と「ソ・ソ」の指示詞を用いる指示詞文について、違和感があり、拒否感を持っていた。その理由としては、「対立型」の「コ・ソ」と「ソ・コ」の影響によるものであると考えられる。  
ところが、「コ・コ」を用いる用法の場合は、母語の韓国語とまったく同じ用法であるにも関わらず、事前に習得した目標言語の影響を受けているのである。
- ・同じ「融合型」の「ア・ア」に対しては、「ア系列」は「遠く離れている物を指す」という規定に当てはめて使用してより、この部分是对立型の「コ・ソ」と「ソ・コ」の影響をさほど受けていない。

#### ii 非現場指示

- ・初級の場合は、また非現場指示の習得がされていないため、非現場指示用法を現場指示用法として考える傾向があった。
- ・非現場指示の「ア系列」に対しては、学習者は「過去のことを指す場合」または「お互いよく知っているものを指す場合」用いると認識していた。
- ・非現場指示の「ソ系列」に対しては、「その場にないものを指す場合」または「知らないものを指す場合」に用いる指示詞であると答えた。
- ・上記のような規定中心に指示詞を考えることと共に、「直感的」に判断する場合が多かった。指示詞文に対して接した経験がある文なのか、または、自然に読み取れるのかなどを基準として指示詞を捉えていた。
- ・韓国人学習者の中でも同類の誤用に対して、誤用の要因が異なることが分かった。

### 3)指示詞の使用に関する認識

次は、指示詞使用に関する認識を調査した結果、量的調査と似ている結果となった場合である。まず、韓国人学習者は、指示詞を使用する際、「母語」「目標言語」「文法知識」「直感的」の中で一つを基準とするのではなく、それらの全てが総合的に混合して考え、指示詞を使用していることが分かった。以上のように指示詞を捉えている理由は、学習者が日本語指示詞の使い分けに関して理解ができていないからである。そのため、自分自身の基準を作り、そこに当てはめて、指示詞を捉えているのである。

## 第 8 章 結論

本研究では、韓国人学習者の指示詞習得過程に形成される中間言語に焦点を当てて調査を行った。結果の分析においては、韓国人学習者の指示詞習得過程に影響を与える要因とその要因間の影響を中心に探った。この章では、まず、第 5 章、第 6 章、第 7 章の調査結果をまとめた上、本研究の結果を第 3 章で示した研究課題に沿ってまとめる。本研究の課題は以下の 4 つである。

- 課題① 韓国語母語話者(以下韓国人)学習者の指示詞習得状況を明らかにする。
- 課題② 韓国人学習者の指示詞習得過程に影響を与える要因について具体的に明らかにする。
- 課題③ 韓国人学習者による目標言語と母語の関係を明確にする。
- 課題④ 指示詞の習得過程で形成される韓国人学習者の特有の「中間言語」を明らかにする。

### 8.1 総合的考察

#### 第 5 章 韓国の日本語教材における日本語指示詞

柳(2013)の結果、韓国人学習者による指示詞習得に初級に習得した指示詞の用法が中・上級の新しい習得に影響を与えていることが明らかになり、韓国の日本語教材を調査する必要があると考えた。韓国の「高校」「大学」「その他の教育機関」で使用される日本語教材を分析した結果、母語である韓国語と目標言語である日本語を 1 対 1 対応させた説明が殆どであった。3 つの中で、大学で使用される教材の場合は、他の教材より用法に関する説明が乗せていたが、基本的日韓対応関係による説明であった。

日韓両言語のズレがある指示詞用法については、日本語指示詞の特徴として句型練習をするようになってきている。最も目立つ句型は「コ・ソ」「ソ・コ」であり、「コ系列」と「ソ系列」がどのような場面で使われるのかより、句型として、日本語指示詞のルールとして捉えるようになってきている。

#### 第 6 章 日本語指示詞の習得過程に関する量的調査

第 5 章の日本語教材における指示詞を分析した結果、母語と対応した説明と特定の文型の繰り返し練習などが目立った。そして、第 6 章では、それらが韓国人学習者の指示詞習得にどのような影響を与えて形成されるのかを探るために量的調査を行った。

その結果、日本語の指示詞は学習者の母国語である韓国語と 1 対 1 で対応しており、日本語の習得にも役に立つが、指示詞は簡単ではなく、難しいと認識しており、指示詞の習得が進んでいないことが分かった。そのため、両言語の類似性と日本語指示詞の習得に、一方的な影響ではなく、「母国語との類似性」と「目標言語」が、互いに影

響を与えていることが明らかになった。

従って、指示詞の習得過程に影響を与える様々な要因があり、その要因が複雑で総合的に現れることが分かった。それらによって学習者の「中間言語」が形成されるのである。

## 第7章 日本語指示詞の習得過程に関する実的調査

第6章の量的調査から明らかになったことを更に深く考察するため、第7章では、質的調査を行った。この調査の目的は、韓国人が指示詞習得過程で形成する中間言語を探るためであり、1) 母語と目標言語の関係、2) 指示詞の習得状況、3) 指示詞使用に際する認識を調査した。その結果、学習者は母語と目標言語を分離して考えるため努力していた。しかし、初級の段階に習得が進めるようにする役割については、肯定的であった。続いて、指示詞の習得状況の場合、「指示詞用法間の影響」が良く見られた。言い換えれば、初級段階で習得した指示詞が中・上級の習得に影響を与えるのである。特に目立つのは、韓国の日本語教材に多く載せられている「コ-ソ」「ソ-コ」の影響で、同一の指示詞を用いる指示詞文に対して違和感を持つようになったことである。第6章で明らかになったように、韓国人学習者は指示詞を直感的に判断して用いる。その直感の基準については、文に対する親密観と読む・話す際の気持ちなどを基準とする。このような、様々な要因が混合され、習得に影響を与え、誤用が生じるのである。その誤用が、学習者の母語では説明できないものであれば、中間言語が形成され、習得が進まなくなると言える。

続いては、これらの調査から明らかになったことを中心に、以下の本研究の課題に沿って総合的にまとめる。

### 課題① 韓国語母語話者(以下韓国人)学習者の指示詞習得状況を明らかにする。

韓国人学習者の習得過程には、母語以外様々な要因の影響が総合的に現れていた。言い換えれば、母語という1つの影響を受けるのではなく、学習者の様々な指示詞に対する基準や規定が組み合わせて、指示詞の習得過程に影響を与えるのである。その結果、初級に習得した用法が中・上級の習得に影響を与えて、習得が進まなくなる。また、現場指示と非現場指示の用法間の影響も見られたため、韓国人学習者による日本語習得は全体的に揺れていることが分かった。学習者の中に指示詞が明確に習得されていないため、学習者は自分なりの基準に基づいて、指示詞を用いているのである。

### 課題② 韓国人学習者の指示詞習得過程に影響を与える要因について具体的に明らかにする。

量的調査と質的調査で明らかになったことが課題②に当たる部分である。習得過程



に影響を与える要因については、まず、「母語」が挙げられる。韓国人学習者は基本的に日本語と母語である韓国語が類似していることを認識している。そのため、一次的や最終の確認として、日本語に韓国語を入れて考えてみる。もし、韓国語で考えてすぐそのまま日本語が産出されたら、「母語の影響を受けた」と言えるかもしれない。しかし、本調査を通じて明らかになったことは、習得に影響を与えることが母語だけではなかったということである。

母語以外の要因としては、課題①でも言及したが、学習者が「習得した目標言語」と「直感による判断」などがあつた。「直感による判断」は、指示詞文に対する馴染み具合によって、指示詞を用いることである。

### 課題③ 韓国人学習者による目標言語と母語の関係を明確にする。

課題③は韓国人による日本語と韓国語の関係についてまとめてみる。

学習者が産出する誤用の中には母語では説明できないものがあり、習得には母語以外の何だかの影響を受けていると研究されてきた。しかし、第二言語習得において「母語」は必要不可欠なものであると考えられる。果たして、韓国人学習者は、母語と目標言語をどのように考えているだろうか。

第6章の量的調査と第7章の質的調査の結果、韓国人学習者は韓国語と日本語が類似していると捉えている同時に、日本語と韓国語は全く同じではないという二つの考えを持っていることが分かった。その理由として、学習者は日本語の指示詞を用いる際、韓国語に当てはめてすぐ産出するのではなく、「目標言語の知識」などで改めて考える作業を通じるからである。つまり、韓国人学習者には母語と目標言語の習得のための一つの知識であり、目標言語の全てではないのである。

### 課題④ 指示詞の習得過程で形成される韓国人学習者の特有の「中間言語」を明らかにする。

本研究の最終の目的である、課題④は韓国人学習者の特有の「中間言語」を明らかにすることであった。調査の結果、韓国人学習者の習得には母語では説明できない様々な現象が現れ、中間言語が形成されることが明らかになった。学習過程において、指示詞用法間の影響がその一つである。初級段階で習得した指示詞用法が中・上級の新しい用法の習得に影響を与え、習得が困難になるのである。また、逆に、中・上級で習得したことが、初級に習った用法に影響を与える場合もある。このような揺れで、母語では説明できない「中間言語」が形成されるのである。

韓国の日本語教材における「コソ」と「ソコ」の文型の練習により、同一の指示詞を用いることに違和感を持つことも上記のような影響を受けてからであるし、これが指示詞の習得過程で形成された韓国人学習者の特有の「中間言語」であると考えられる。

## 8. 2 終わりに

以上で本研究の調査で明らかになったことと本研究の課題に沿って結果をまとめた。本節では、そのまとめとして、「中間言語」について改めて考えてみたい。

中間言語 (Interlanguage) は Selinker (1972) によって使用された用語であり、用語の背景は母語が違う学習者の中で同類の誤用が生じたからである。その後、多くの研究者によって「中間言語研究」がされてきた。それらは「中間言語」と目標言語学習者すべてに焦点を与え、母語が違う学習者を対象にして調査し、「中間言語」を考察した (迫田 1997, 安 2000)。

ところが、筆者は母語が違う学習者ごとの「中間言語」が形成されると考えた。柳 (2013, 2014) によって、「指示用法間の影響」による習得困難があることが分かり、本研究でその要因を探り、韓国人学習者の中間言語形成を探るようにした。結果として韓国人学習者の習得過程には何らかの特徴が見られ、母語では説明できない「中間言語」が形成されることが分かった。つまり、同じ母語話者間に共有できる「中間言語」が形成されるのである。言い換えれば、「韓国で日本語を学ぶ韓国人の中間言語」である。このような「中間言語」が形成される理由は、同じ学習環境によって、同じ学習カリキュラムによって、目標言語を習得した共通の経験と知識によるものであると筆者は考える。すなわち、母語が違っても、同じ環境で習った学習者のグループごとの「中間言語」が形成される可能性があると言える。

## 8. 3 今後の課題

本研究では、韓国人学習者の習得過程で形成される中間言語を探るため、教材分析、量的調査、実的調査を行った。調査の結果で、韓国人学習者が指示詞の習得過程で形成する中間言語のことが明らかになった。しかし、「中間言語」は可変的なものであり、個人によって異なる場合もあるため、本研究の調査では明確に言えなかった部分がある。今後、さらに考察しなければならない課題について以下に述べる。

### (1) 「中間言語」がミスタイクによるものなのか、エラーによるものなのか

学習者から産出された誤用が母語では説明できない、母語と目標言語とは異なり言語体系であるし、これを「中間言語」が形成されたと捉える。ところが、それが一時的なミスタイクによる場合は、議論として意味がなくなるである。形成された中間言語が学習者のエラーによる場合とミスタイクによる場合を徹底的に区別する必要があると考える。そのためには、本研究の横断的研究より、縦断的研究を通じてそれぞれの「中間言語」を区別する必要がある。

## (2) 「回避」による習得過程

第7章のインタビュー調査の対象であった学習者の中で指示詞の習得がされていない、使用に迷いがある際は、「指示詞を使わず、指示対象を直接言う」という答えもあった。それは「回避」または「非用」と解釈されるものであり、本研究では、「回避」に対する部分は考察できなかった。「回避」により別の中間言語が形成される可能性もあると考えられる。

そのため、指示詞の回避により、形成される「中間言語」も調査する必要がある。

## (3) 韓国人学習者の特有の「中間言語」なのか

次は研究の課題であった、韓国人学習者の特有の中間言語があるのかについて量的調査と質的調査を通じて分析した結果、「現場指示の融合型」が「対立型」の影響を受けていることが分かった。筆者はこの部分を韓国の日本語教材によって形成された「中間言語」であると捉えたが、一体、この現象は韓国人学習者の特有のものであるのだろうかという疑問に対する更なる研究が必要である。また、上記の考えが正しいとすれば、韓国人や中国人学習者のような分類より、学習環境によって形成される「中間現語」が異なるとも考えられる。そのため、この課題を議論として明確にするため、更なる研究が必要である。

## 参考文献

### <日本語文献>

- 安 龍洙 (1996) 「韓国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得における母語の影響について－非現場指示の場合－」『東北大学文学部日本語学科論集』 6, pp.1-12
- 安 龍洙 (1999) 「韓国人学習者と中国人学習者の現場指示コソアの習得に関する一考察－相対的現場指示の対立型の場合－」『言語科学論集』 第 3 号 pp.1-12
- 安 龍洙 (2004) 「韓・中日本語学習者の指示詞の使い分けに関する一考察－『単純照応指示』のコ系とソ系の使用をめぐる－」『茨城大学留学センター紀要』 第 2 号 pp.35-48
- 安 龍洙 (2005) 「日本語学習者の非現場指示コソアの習得に関する研究－韓国人学習者と中国人学習者を比較して－」『茨城大学留学センター紀要』 第 3 号 pp.35-51
- 安 龍洙 (2008) 「韓国人学習者の指示詞の使用意識に関する一考察－指示詞のテストの後に実施した自由記述の分析から－」『茨城大学留学センター紀要』 第 6 号 pp.61-76
- 伊藤 恵子・田中 真理・細川 徹(2004) 「指示詞コ・ソ・アの理解における発達的变化」『東北大学院教育学研究科研究年報』 第 52 集 pp.223-236
- 李賢淑(2011) 「韓国の中高等教育における日本語指示詞の扱い－高校の日本語教科書の場合－」『日本語教育研究』 第 20 輯 pp.171-184
- 梅田 博之 (1982) 「韓国語と日本語－対象研究の問題点－」『日本語教育』 48 号 pp.31-42
- 岡崎 友子 (2010) 『日本語指示詞の歴史的研究』 ひつじ書房
- 鰻井 綾希 (2011) 「指示代名詞「それ」の文脈指示における照応規則について」『言語科学論集』 15 号 pp.37-48
- Kawakami Erico (2010) 「韓・日両者学習者の指示詞 습득에 관한 考察－ 설문 조사를 통해서－」明知大学校大学院日語日文学科 硕士学位论文論文
- 姜 一奉 (1998) 「日本語 指示詞研究」濟州大学校 教育大学院 日語教育専門 硕士学位论文論文
- 金水 敏・木村 英樹・田窪 行則(1989) 『日本語文法セルフマスターシリーズ 4 指示詞』 くろしお出版
- 金水 敏・田窪 行則(1992) 「談話管理理論から見た日本語の指示詞」『認知科学の発展』 第 3 卷 講談社
- 金水 敏・田窪 行則(1992) 『日本語研究資料指示詞』 ひつじ書房
- 金水 敏・岡崎 友子・曹美庚(2002) 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究-日本語・韓国語・トルコ語-」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』 東京大学出版会 pp.217-247
- 具 武伴(2010) 「韓国人母語話者を対象とした日本語の指示詞の誤用に関する研究」

釜慶大学校 教育大学院 碩士學位論文

- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』 185-190 大修館書店
- 黒田 成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」 『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』 pp.41-59 くろし出版
- 小泉 保 (1990) 『言外の言語学 日本語誤用論』 三省堂
- コーダー・S.ビット(1988) 『中間言語入門-誤答分析を越えて-』 (玉川大学応用言語学研究会(訳)) 三修社 [corder,S.P. (1981) *Error Analysis and Interlanguage*.Oxford University Press]
- 佐治 圭三 (1992) 『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』 ひつじ書房
- 佐久間 鼎 (1983) 『現代日本語の表現と語法<<増補版>>』 くろし出版
- 迫田 久美子 (1991) 「学習レベル別の指示詞「コ・ソ・ア」の運用能力に関する研究」 『中国四国教育会教育学研究紀要』 第 37 卷第二部 pp.435-440
- 迫田 久美子 (1992) 「話し言葉における指示詞コ・ソ・アの研究ー日本語母語話者の発話資料に基づくコ・ソ・ア分類の枠組みー」 『中国四国教育会教育学研究紀要』 第 38 卷第二部 pp.409-414
- 迫田 久美子 (1993) 「日本語学習者と日本語幼童による指示詞コ・ソ・アの習得研究ー穴埋めテストの調査結果に基づいてー」 『広島大学教育学部紀要』 第二部第 49 号 pp.199-206
- 迫田 久美子 (1996) 「指示詞コ・ソ・アに関する中間言語の形成過程ー対話調査による縦断的研究に基づいてー」 『日本語教育』 第 85 号 pp.64-75
- 迫田 久美子 (1997) 『中間言語ー日本穂学習者による指示詞コ・ソ・アに習得ー』 溪水社
- 迫田 久美子 (2002) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 アルク
- 坂田 雪子 (1992) 「指示詞『コ・ソ・ア』の機能について」 金水 敏・田窪 行則(編) 『指示詞』 pp.54-68 ひつじ書房
- 宋 晩翼(1991) 「日本語教育のための日韓指示詞の対照研究ー「コ・ソ・ア」と「이그저」との用法についてー」 『日本語教育』 第 75 号, pp.136-152
- 宋 晩翼 (2003) 「韓国における日本語習者にする指示詞コソア指導の研究ー「場」の状況別用法に基づいてー」 韓国 <sup>ハンバクト</sup>한밭 大学校外国語学部教授 博士學位論文
- 孫 愛維 (2008) 「第二言語及び外国語としての日本語学習者における非現場指示の習得ー台湾人の日本語学習を対象にー」 『世界の日本語教育』 18 号 pp.163-184
- 単娜 (2009) 「中国語を母語とする学習者の指示詞コソアの習得に関する研究ーダイクシスと照応を総合したモデルによる分析ー」 『言語文化と日本語教育』 37 号 pp.11-20
- 高見 澤孟・ハント蔭山 裕子・池田 悠子・伊藤 博文・宇佐美 まゆみ・西川 寿

- 美 (2004) 『新・はじめての日本語教育 日本語教育の基本知識』 CO.,LTD.,TOKYO
- 田中 望 (1981) 「「コソア」をめぐる諸問題」『日本語教育指導参考書 8 日本語の指示詞』 pp.1-50 国立国語研究所
- 玉村 文郎 (1998) 『新しく日本語研究を学ぶ人のために』 世界思想者
- 正保 勇 (1981) 「「コソア」の体系」『日本語教育指導参考書 8 日本語の指示詞』 pp.21-122 国立国語研究所
- 堤 良一 (2012) 『現代日本語指示詞の総合的研究』 ココ出版
- テレンス・オドリン (1995) 『言語転移言語学習における通言語的影響』 (丹下省吾(訳) リーベル出版 [Terence Odlin (1989) Language Transfer. Cambridge University Press])
- 中島 信夫 (2012) 『誤用論』 朝倉書店
- 野田 尚史・迫田 久美子・渋谷 勝己・小林 典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』 大修館書店
- 野浪 正隆・劉 佳 (2010) 「「コ」と「ソ」の非現場指示用法に関する研究—アンケート調査に基づいた使用現場からの研究—」『大阪教育大学紀要』 第 1 部門第 59 巻 第 1 号 pp.55-76
- 三上 章 (1992) 「コソアド抄—『文法小論集』より—」 金水 敏・田窪 行則(編) (1992)
- 三宅 和子 (2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』 ひつじ書房
- 本橋 美樹 (2006) 「日本語学習者の指示形容詞の使用」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 16 号 pp.61-72
- 榎山 洋介 (2014) 『日本語研究のための認知言語学』 研究社
- ラーセン・フリーマン、D・ロング、M. (1995) 『第 2 言語習得への招待』 (牧野高吉(訳)) 鷹書房弓プレス [Larsen-Freeman, D. and Long, M. (1991) An introduction to second language acquisition research. London:Longman]
- ロッド・エリス (1988) 『第2言語習得の基礎』 (牧野高吉(訳)) ニューカレントインターナショナル [Rod Ellis (1985) Understanding Sceond Language Acquisition. Oxford University Press]
- ロッド・エリス (1996) 『第二言語習得序説-学習者言語の研究-』 (金子朝子(訳)) 研究社出版 [Rod Ellis (1994) The Study od Second Language Acquisition. Oxford University Press]
- 柳 濟權 (1984) 「韓日語指示詞に関する対照研究」『誠信研究論文集』 第20輯pp.1-30
- 柳 信愛 (2013) 「韓国人日本語学習者の日本語指示詞「コ・ソ・ア」の習得研究-アンケート調査の結果から-」 京都外国語大学大学院 修士学位論文
- 柳 信愛 (2014) 「韓国語母語話者の日本語学習者の日本語の指示詞「コ・ソ・ア」

の習得研究－現場指示の習得状況の調査結果を中心に－』『韓日語文論集』第18輯  
pp.79-93

堀口 和吉(1978a)「指示詞『コ・ソ・ア』考」『論集日本文学・日本語 5 現代』pp.137-158  
角川書店

堀口 和吉(1978b)「指示詞の表現性」『日本語・日本文化』8号 pp.23-44 大阪外国  
語大学

矢野 文博(1992)『日本語法論』和泉書院

吉本 哲(1992)「日本語の指示詞コソアの体系」金水 敏・田窪 行則(編)(1992)

#### <英語文献>

Alfonso, Anthony (1974) *Japanese Language Patterns*. Sophia University Press.

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge MA:MIT Press.

Cook, V. (1985) Chomsky's Universal Grammar and Second Language Learning.  
*Applied Linguistics* 6: pp. 2-18.

Corder, P. (1967) Significance of Learner's Errors. *International Review of Applied  
Linguistics* 5: pp. 161-169.

Dulay, H. and Burt, M. (1973) Should We Teach Children Syntax? *Language  
Learning* 23: pp. 245-258.

Krashen, S. (1981) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*.  
Oxford: Pergamon.

Labo, R. (1957) *Linguistics Across Cultures*. Ann Arbor: University of Michigan  
Press.

Lott, D. (1983) Analysing and Counteraction Interference errors. *ELT Journal* 37,  
3: pp. 256-261.

Ravem, R. (1968) Language acquisition in a second language environment.  
*International Review of Applied Linguistics* 6: pp. 165-185.

Richards, J. (1971) Error analysis and second language strategies. *Language  
Sciences* 17: pp. 12-22.

Selinker, L. (1972) Interlanguage, *International Review of Applied Linguistics* 10:  
pp. 209-231.

Yoshimoto, K (1986) On demonstratives *KO/SO/A* in Japanese. *言語研究* 90: pp.  
48-72.

#### <韓国語文献>

윤강구 (2012) 「고등학교 『일본어 I』에서의 문법 항목 -'자연스럽게 익힐 수

- 있도록' 되었는지를 중심으로-」 『日本語教育』 第61輯、1-15
- 宋晚翼 (1993) 「「コ・ソ・ア」의 의미영역과 중간언어구조에 관한 고찰 -  
한국어화자의제2언어습득과정을중심으로 -」 『大田産業学校論文集』 第10卷1輯  
pp. 611-623
- 서울특별시교육청 (2009) 『2009학년도 고등학교 교육과정편성현황』  
- (2011) 『2011학년도 고등학교 교육과정편성현황』  
- (2015) 『第2 外国語教育の活性化推進の計画』
- 趙南星 (2010) 「한국에서의 일본어 교육의 변화 -일어일문학과 교과과정을  
중심으로-」 『日本語教育研究』 第 19 輯 pp. 23-34
- 趙南星(2014) 「한국 대학교의 일본어 관련 학과의 과목명에  
대하여」 『日本語教育研究』 第 30 輯 pp. 213-232
- 遠藤 織江・鄭 起永(2006) 『日本語教育入門』 부산외국어대학교 출판부

#### 参考教材

- Kim, Sa-Gyeong(2007) 『New Edition 日本語文法本 改正版』 (株)SISA 日本語社
- Kim, Yang-seon (2015) 『韓国語と対応を活用した戦略的日本語文法』 嶺南大學校出版部
- Min, Gwang-Jun、Yun, Chang-Geun、Park, Heng-Ja、Youn, Sae-Ra、Park, Cuang-Hwi、ワタナベヒロアキ(2014) 『高等学校 日本語 I』 (株)CHUNJAE 教育
- Min, Gwang-Jun、Yun, Chang-Geun、Park, Heng-Ja、Youn, Sae-Ra、Park, Cuang-Hwi、ワタナベヒロアキ(2014) 『高等学校 日本語 II』 (株)CHUNJAE 教育
- Bae, Eun-Jeong、Na, Yu-Jeong、Jeong, Eun-ju(2015) 『パワフル日本語文法改正版』 釜山外国語大學校出版部
- Son, dong-ju、Jeon, Seung-Hyo、Lee, Jin-Gyeong(2015) 『例文中心で習う PERFECT 日本語文法』 釜慶大學校出版部
- An, Byeong-Gon、Cho, Byeong-Chyeol、Choi, Yong-Hyeok、Ceon, Cheol、Gwon, Jeong-Ae、Min, Ju-Hyeon、泉文明、松本修輔、入江さやか、宗永明子(2014) 『高等学校 日本語 I』 EDU SEOUL
- On, hyeon-Jeong、kim Tae-ho、相沢優香、石井直美、Kim, Hye-gyeong、Kim, mun-jeong、Yang, Hee-jun (2014) 『高等学校 日本語 II』 (株)MRAEN
- Youn, Gang-gu、Park, Cha-Hwan、Mun, Jeong-Seon、鈴木睦(2014) 『高等学校 日本語 I』 (株)DA RAK WON
- Lee, Gyeong-Su、Yeo, Seon-Gu、ナゴマリ、Gwak, Yeong-Suk、Yun, Na-Ri(2014) 『高等学校 日本語 I』 (株)SISA 日本語社
- Lee, Gyeong-Su、Yeo, Seon-Gu、ナゴマリ、Gwak, Yeong-Suk、Yun, Na-Ri(2014)



『高等学校 日本語Ⅱ』(株)SISA 日本語社  
Lee, Myo-hee、Keum, Jong-ae『現代日本語文法の理解』 忠南大學校出版文化園  
Han, Mi-Gyeong、Cho, Jong-Hwan、ミネザキトモコ、Park, Sae-Eun(2014)『高等  
学校 日本語Ⅰ』(株)KYO HAK 社  
Heo, Youn-Jeong(2015)『大韓民国で一番やさしい独学日本語文法 改正版』 YBM  
ザ・テキスト  
趙南星(2015)『やさしい日本語文法』(株)DARAK 園

## 謝辞

本研究のテーマ設定から始め、アンケート調査の作成、色々ご助言してくださった京都外国語大学の日本語学科の由井紀久子教授に、心からお礼申し上げます。日本語から様々な助言をいただいたお蔭で、本研究の博士論文が書くことができ、無事に提出することになりました。誠に感謝しております。

また、アンケート調査にご協力いただいた釜山外国語大學校の日本語学科のキム・ジョンヒ教授、江原大學校の OCHI KIMIKO 先生、釜山南区市委員のソン・ドンファン委員にも、お礼申し上げます。お蔭様で、本研究の調査を行うことができました。誠にありがとうございました。

最後に、本研究について、様々なご意見、ご助言をいただいたゼミの皆様と TOKU 韓国語教室の院長のカン・ドゥヒ先生、そして、友人のチョ・ヨンヒにも、ここでお礼を申し上げます。(연회야 고맙고 우리 힘내자!)

2016年12月

柳 信愛(リュ・シンエ)

## 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する調査

この調査は、韓国語母語話者の日本語指示詞「コ・ソ・ア」の習得の状況を調査するものであります。本調査は、論文「日本語教育のための指示詞習得に関する研究」に必要な統計を出すことが目的で、それ以外の目的での使用や評価などは、一切しません。

指示詞「コ・ソ・ア」を用いる際、感じたことをもとに、アンケートに記入をお願いします。

アンケート項目を読んで、該当するところに○を表示してください。

それ以外の叙述形の項目には、意見を書いてください。

(この統計をもとに、2016年9月中に「インタビュー調査」も実施する予定です。)

京都外国語大学大学院 博士後期課程

日本語教育専攻 柳 信愛

14dc0001@kufs.ac.jp

PART 1. 該当するところに○と記入をしてください。

|  |
|--|
| 1. 性別 ( ① 男 ② 女 )  |
| 2. 専攻 ( 大学 科 年生 / 卒業 )   |
| 3. 本人が思う日本語レベル<br>① 初級 ② 初中級 ③ 中級 ④ 中上級 ⑤ 上級   |
| 4. 日本語能力試験の有無 ( ① 有 ② 無 )<br>→ 4-a. 4番に「① 有」を選択した場合、(複数の選択可能)<br>① JLPT ( N1 / N2 / N3 / N4 / N5 ) ② JPT ( 点 ) ③ その他 ( ) |
| 5. 日本滞在の経験有無 (留学、ワーキングホリデー、交換留学など) ( ① 有 ② 無 )<br>→ 5-a. 5番に「① 有」を選択した場合(日本滞在の期間を記入) ( 年 月 )                             |
| 6. 主に何を通じて日本語を勉強するのか。(複数の記入可能)   |

(例) 日本語教材, ドラマ, アニメーション, 日本語学校の授業, 学校の授業 など)

裏で続きます。

PART II. Q1からQ10までの指示詞文を読んで① ② ③ の中で一つを選んだ後に,  
それを選択した理由を書いてください。

예) Q0.

A: この映画、えいが面白いおもしろですか。 B: ええ、おもしろ面白いですよ。

① 自然

② 不自然

③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

(理由を簡単に書く)

Q1.

(사진을 같이 보면서) A: これ、かとう加藤さんのわかとき若い時ですか。 B: いいえ、この人はひとよしだ吉田さんです。

① 自然

② 不自然

③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q2.

(하늘을 나는 새를 가리키면서) A: あとりの鳥、何なんですか。 B: あれはカササギですよ。

① 自然

② 不自然

③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q3. (덱시 안에서) A: その道の右に曲がってください。 B: はい、その角ですね。

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q4. A: これはあやさんのかばんですか。 B: はい、そうです。それは、私のかばんです。

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q5. A: これは何ですか。 B: それはてるてるぼうずです。

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q6. A: それは何ですか。 B: これは日本のまんがです。

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q7. あの頃の小さい子がこんなにご立派なお嬢様になりました。

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q8. あの時のステーキは本当においしかった。

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q9. 

|   |
|---|
| A: 昨日 <sup>きのう</sup> <sup>いっしょ</sup> <sup>い</sup> 行ったあの店、とてもおいしかったね。 B: そうだね。あそこ、また行きたいね。 |
|---|

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

Q10. 

|   |
|---|
| A: 昨日、山下さん <sup>やました</sup> に会 <sup>あ</sup> ったよ。 B: えっ、山下さん <sup>やました</sup> ? だれ、その人 <sup>ひと</sup> ? |
|---|

- ① 自然      ② 不自然      ③ どちらとも言えない

☞ 選択した理由は、

( )

裏で続きます。

PART III. 次の 1~14項目を読んで、該当する番号に○をしてください。

1 全くそうではない。      2 さほどそうではない。      3 少しそうだ。      4 かなりそうだ。

|      |                                       |         |         |          |   |
|------|---------------------------------------|---------|---------|----------|---|
| 1    | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「이・그・저」と似ている。     | 1       | 2       | 3        | 4 |
| 2    | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。                    | 1       | 2       | 3        | 4 |
| 3    | 韓国語指示詞「이・그・저」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。 | 1       | 2       | 3        | 4 |
| 4    | 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「+」である。  | 1       | 2       | 3        | 4 |
| <表1> |                                       |         |         |          |   |
|      | こ(이)                                  | そ(그)    | あ(저)    | ど(어느)    |   |
| 사물   | これ(이것)                                | それ(그것)  | あれ(저것)  | どれ(어느것)  |   |
| 장소   | ここ(여기)                                | そこ(거기)  | あそこ(저기) | どこ(어디)   |   |
| 방향   | こちら(이쪽)                               | そちら(그쪽) | あちら(저쪽) | どちら(어느쪽) |   |

|    | 사물수식  | この(이) | その(그) | あの(저) | どの(어느)  |
|----|---|-------|-------|-------|---------|
| 5  | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を使う(作文/会話)場合、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。 |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 6  | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を使う(作文/会話)場合、韓国語でまず考えて、日本語に直訳して使用する。 |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 7  | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を使う(作文/会話)場合、すぐ日本語の用法で適用して使用する。      |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 8  | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を使う(作文/会話)場合、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。 |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 9  | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を使う(作文/会話)場合、直感的に判断して使用する。           |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 10 | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の用法に関する自分なりの「使い分け」がある。               |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 11 | 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の用法を詳しく勉強した。 |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 12 | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。                     |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 13 | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を間違っって使った場合、必ずなぜ間違っったのか確認する。         |       |       |       | 1 2 3 4 |
| 14 | 日本語指示詞「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。                 |       |       |       | 1 2 3 4 |

**ご協力、ありがとうございます。**

書き忘れた項目があるのか、もう一度確認してください。

## 付録 参考資料② インタビュー内容

①2016/09/02

SA : 初級 / 男 / 日本語専攻者 / 日本留学経験無

R:調査者

R:これからインタビューを始めます。気軽に自分の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

SA:初級、JLPT3級。男。

R:日本語はいつ初めて習いましたか。

SA:大学に入学してから(日本語を)習った。今(2016年、現在)、2年生だ。高校時代、日本語の授業はあったが、私は大学で初めて(日本語を)習った。

R:専攻として日本語を選択した理由はありますか。

SA:入学する時には決まった理由はなかった。日本語が一番適当であるみたいで。

R:「適当」の意味は？

SA:趣味と関連もあったし、日本文化にも興味があったので(専攻を日本語として)選択した。

R:日本語を専攻として選択する時、日本語が他の外国語より韓国語と類似していて、学びやすいと思いませんか。

SA:初めに習った時は、単語(語彙)は似ている部分が多かった。そして、覚えやすかった。だが、結局文法に入ると(両言語の)差が多くなって、そんな長所はないと思う。深化すればするほど、両言語の違いがはっきり分かるようになる。

R:韓国語と日本語は、類似しているように見えるが、類似していない？

SA:むしろ曖昧に似ているから、さらに難しい。

R:日本語を日本で習った経験がありますか。

SA:ない。けれども、留学よりワーホリに興味がる。英語圏とか留学に関しての義務感はない。言語だけ集中して習うことはもったいないと思う。それより、それ以外のいろんなことを経験したくてワーホリの方が(留学より)よい



と思っている。言語よりは言語以外のことを経験したい。

R:日本語を一言で説明したら。

SA:言語はまじめにずっと勉強する方がよい。日本語は難しい外国語だ。言語を勉強することにおいて、文法だけでなくその国の情緒も学ばなければならないので難しい。

R:韓国語と日本語の関係についてもう一度言ってほしい。

SA:(両国の)文化の差がある。その国の情緒。特に、日本は(韓国と)歴史的に近いけど、遠い国だ。それで言語(文字)は通じるかも知れないが、考えは通じない場合がある。

R:じゃ、これから日本語の指示語について聞いてみたい。あなたが考える日本語の指示語について説明してください。

SA:「これ・それ・あれ」を基準として、その後ろを変えること。

R:どこでそのように習いましたか?

SA:大学の授業の時、日本人ネイティブスピーカーの先生から教えてもらった。

R:日本語の指示詞を用いる時、本人はどのように指示詞を選択して使っているのか。

SA:私は、日本語で考えて、(指示詞を)使う。韓国語指示詞と比較して使用したことがない。韓国語で考えたらさらに難しくなるので、(自分が)聞いてみたことを中心に使っている。私は(指示詞を)でまかせに使う。

R:それでは、教科書を通じて学んだことを基準として、(指示詞を)使ったことはないですか? 授業中に習ったこと。

SA:私はメディアの方に多くの影響を受けた。状況に代入しやすいから。教材は基本学びにはいいが、状況をもう一度考えなければならない。けど、アニメの場合は「ああ、この場面でこのように言うんだ」みたいにすぐ頭の中で浮かぶので使用しやすい。

## <アンケートPART II Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか?

SA:自然。Aがカバンを持って少し離れているBに話している場面であったら、

問題ない。

R: この文を日本人が話することを聞いたことがありますか。

SA: ない。教材でたくさん見た。

R: Q2はどうですか。

SA: Q1と似ている。自然だ。距離の基準で考えた。

R: Q3のAとB会話文の場合は？

SA: 少し違和感がある。意味は通じるがAの「それ」が不自然。辞書的な意味は正しいと思うが、この文は間違った文であると思う。

R: Q4は、二人が一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

SA: 不自然。経験上、私は「この人」という表現をあまり聞いたことがない。「この」よりは「あの人」が自然だと思う。「あの人」はたくさん聞いたことがあるから

R: 「人」に似合う指示詞を用いること？

SA: そうだ。

R: Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

SA: 不自然。「指し示す」って、目に見えるものを指示するという意味だが、「そ」は道が見えない場合に多く使う指示詞であると思う…。「そ」より「こ」を用いた方が自然。道が見えるから「こ」、何かが見えない時は「そ」を用いる。「そ」は頭の中のことを説明する時に使う指示詞。

R: Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

SA: 場面が頭の中に浮かぶ。それで自然な文である。よく聞いたことがある文。

R: 次はQ7は、どうですか。

SA: 「あの」より「この」？これは見たことがなくて、「あの」が不自然に感じられる。私の経験では「この」は聞いたことがある。

R: Q8はいかがですか。

SA: Q7と同じように「あの時」よりも「この」または「その」の方は聞いたことがある。多分、私の経験不足かも知れないが、この文は不自然に感じられ

る。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

SA:不自然。違和感がある。もし、目の前に店があったら自然だ。

R:Q10の文は、いかがですか。

SA:自然だ。確かに「あの」ではない。この場面に「あの」を使うためには、何か対象が視野内にあったり、具体的を取れなければならない。「その」は対象がない場面に用いる指示詞である。

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

**3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。**

SA:一次的な部分は似ているけど、私は(両言語を)比較して使わないため、よく分からない。(辞書的な)意味は似ているかも知れないが、実例は全く違う。細かい部分は差が多い。

**3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。**

SA:考えて見たら、難しい。実際、用いて使う時はあまり気にしないけど、考えて使ったら難しい。

R:初めて指示詞を習った時、簡単だと思いましたか。

SA:そう思った。これだけなのかと思った。それを覚えて書かなきゃと思ったが、(頭の中に指示詞の)整理はできなかった。

**3-3. 韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。**

SA:これだけでない。まず、私は代入して勉強しない。後になると(韓国語が)邪魔になるから。最初から(韓国語と日本語を)比較する必要はない。結果的にこれが後に足を引っ張る(妨害になる)。私は(韓国語指示詞が日本語指示詞の学習に)30%ぐらい役に立つと思う。

R:この表を見れたことがありますか。

SA:ある。教材とか問題集から。

**3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」で**

ある。

SA: そう思わない。30%ぐらい役に立つかも知れないが、十分ではない。

R: この表が必要だと思いますか。

SA: そうだ。一番基礎的なものであるため。でも、文章を書く時は代入してはならない。最初には(この表が)助かる。

**3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。**

SA: ある。いつも迷う。自信がない。私の直感どおりに選択して使うから。指示詞をすべて入れてみてから、一番自然だと思う指示詞を使う。みんな、(指示詞が)重要だと思っていなくて、そのまま軽く説明して飛ばすから、(指示詞の使い分けが)まとまっていない。

**3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。**

SA: 韓国語で考えずに「こ・そ・あ・ど」四つの中に何を使うか思う。

**3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。**

SA: 私はそうだ。

**3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。**

SA: 私の場合は自分の経験中心に。

**3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。**

SA: 私はそうだ。

**3-10 日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。**

SA: 具体的に(頭の中に)まとめてはいないけど、ありそうだ。

**3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。**

SA: 詳しく習っていない。自ら勉強したし、先の表外のことについて習ったこ

とはない。

**3-12. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。**

SA:理解していない。いつも(指示詞を)使う時いつも自信がない。私の中でまとめていないと思う。

R:もしかしたら指示詞の使用を避けるのではないでしょうか。

SA:そうだ。(指示詞の使用を)避けるし、他の表現にで言う。

**3-13. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っ  
たのか確認する。**

SA:私は一人で解決するタイプだ。なぜなのか、(間違った)原因は探らない。

**3-14. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要  
だ。**

SA:初級から細かくないけど、説明はしてくれたら良いと思う。この表がすべてではないことを最初から説明してくれたら良い。この表で勉強して後に再び修正することよりは、最初からするのが良い。

R:お疲れ様でした。

②2016/09/10

SB : 初級 / 女 / 日本語専攻者→看護学科 / 日本留学経験有

R:調査者

R:さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。  
まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

SB:初級に近い。女性。

R:日本語はいつ初めて習いましたか。

SB:高校の時、塾で初めて習った。

R:その時習ったきっかけがありますか。

SB:母から誘われた。従姉が日本語を勉強していて、私も。

R:最初、日本語を習う時、どうでしたか。

SB:あんまり難しくなかった。(韓国語と)語順も同じだし、英語と比べたら。

R:今もそう思いますか。

SB:そうだ。

R:では、その部分が日本語を学ぶ時、役に立ちますか。

SB:役に立つ。40%ぐらいは役に立つ。

R:意外と少ないですが…

SB:違う。英語と比べたら多い方だ。英語は0%である。

R:では、余りの60%はどうして?

SB:それでも、その国の文法を勉強しなければならないから。日本語は一応日本語だ。

R:日本語を日本で習った経験がありますか。

SB:東京で4カ月間勉強した経験がある。

R:日本で勉強しながら感じたことがありますか。

SB:本で習うことより、直接経験しながら習うのが良かった。

R:言語的な部分はどうでしたか。

SB:日本人と話できる機会が多くて良かった。

R:4カ月間日本にいながら日本語の実力は伸びましたか。

SB:4カ月では足りなかった。1年程はいないと…。

R:外国語はその国に行って、習うことが良いと思いますか。

SB:そうだと思う。なぜなら、アクセントが違うから。特に日本語は。

R:日本語教材についてあなたはどのように思いますか。

SB:まあまあ。良いか悪いかの基準がわからない。私は本より先生。

R:主に何を通じて日本語を勉強しましたか。

SB:本(教科書)で。単語覚えて、たまにドラマもみた。

R:学校(高校)の先生ですか。

SB:違う。塾のせんせい。高校で習ったことでは、会話ができない。単語中心。  
「すみません」が話せるぐらい。

R:大学の日本語授業はどうですか。

SB:大学は言語以外の歴史、文化も一緒に勉強する。もっと深く。

R:じゃ、これから日本語の指示詞について聞いてみたい。あなたが考える日本語の指示詞について説明してください。

SB:「これ・それ・あれ・どれ」

R:どこでそのように習ったのか?

SA:塾、高校、大学で。

R:では、これらの指示詞を韓国語の指示詞と関連付けてかんがえたことはありますか。

SB:ある。私はそう考えた方が楽だ。「こ・そ・あ=・・・」で。

R:あなたは「こ・そ・あ=・・・」として日本語指示詞を使うということですね。

SB:そうだ。無理はないと思う。けど、私もすべてがそうではないとは知っている。

#### <アンケートPART II Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか？

SB: どちらとも言えない。なぜならこれが。Bが「それ」と言うことが…、Bがどこにいるのかわからない。我々のようにすぐ前にいたら、「これ」を使っても良さそうだ。

R:Q2はどうですか。

SB: これは自然だ。

R:Q1と違うのは何ですか？ Q2は頭の中に場面が浮かびますか。

SB:いや、あ、これもQ1と同じようにどちらとも言えない文である。Bの「それ」の部分が。

R:Q3のAとB会話文の場合は？

SB: これは自然。読んだ時何も違和感なし。

R:Q1~3のような文、日本人が話すこと、聞いたことがありますか。

SB:ある。私が「こ」で聞いたら、相手が「そ」とか「あ」で答えたことがある。

R:それでは、このような文、見たことはありますか。

SB:たくさん見た。試験の時。

R:Q4は、二人と一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

SB:「その人」は不自然で、「あの人」は…。

R:今、韓国語で考えていますか。

SB:そうだ。日本語指示語は習ったけど、大分忘れてしまった。



R:Q4について、もう一度、話してください。

SB:何か間違った気がするけど…。韓国語に解釈すれば、意味が通じるから、自然な文みたいけど、何か少し違和感はある。

R:Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

SB:何か一緒にいたら、何か違うと教えてもらったけど…Bの「そこ」が違和感ある。両方「あ」で。「..(あそこ)」だから。韓国語で思ったよりも、日本人は「あ」を多く使うみたいから。

R:「その道」が違和感があるということですか。

SB:そうだ。「あの」はたくさん(日本人が)使うみたいけど、このように「そ」指示詞で質問して「そ」で答えるは不自然な感じ。「その道」の部分が違和感がある。難しい。私は(韓国語の)「.....」で考えたけど…。分からない。違和感があるから、直したいけどよくわからない。解釈してもおかしい。

R:Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。いかがですか。

SB:「あの鳥=..」だから自然だ。韓国語の解釈が自然だから。

R:それでは、Q5の場合は韓国語の解釈が不自然なので「不自然な文」。Q6は、韓国語の解釈が自然だから「自然な文」である。そのようなことですか。

SB:そうだ。一応私はこのように考える

R:Q6についてもう一度話してください。

SB:指しているから…「あの鳥」が正しい。「その鳥」は似合わない。

R:今、指示詞を全部代入してみたんですか。

SB:そうだ。「あの鳥」は複数の鳥を指示。「その鳥」は鳥一匹を。

R:次はQ7はいかがですか。

SB:「あの頃」は初めて聞いた。「その頃」も「この頃」全部不自然。聞いたことない。

R:Q7の「あの」とQ6の「あの」はどうですか。

SB:違う「あの」だと思う。

R:Q8はどうですか。

SB: 自然だ。「あの時」はたくさん聞いたことがある。

R: そのように判断する基準は「自分がたくさん聞いてことがあるか」の差ですか。

SB: そうだ。「あの時」は私も直接使ったこともあるし、正しいと思う。「あの頃」は見たことも聞いたこともないし、使ったこともない。(韓国語の)解釈もできないからよく分からない。

R: Q9の文は、AとBの対話文です。

SB: 自然だ。違和感なし。

R: 読んだ時、何を考えましたか。

SB: みて、すぐ韓国語で考えた。

R: どのように解釈できますか。

SB: まあこれの解釈は「・(そ)」であるから、なんか「そ」を使わなければならないようだけど…。これは「あ」を使わなければならない。なぜなら、昨日二人が一緒に行った店だから。

R: どこでそのように習いましたか。

SB: この部分は試験によく出る部分である。

R: Q10の文はいかがですか。

SB: 「・・・(その人)」?分からない。「・・・」だから「その人」?「あの人」は違和感あるし、「その人」も間違っただけ。

R: 「この人」はどうですか。

SB: 違う。「この人」は(対象が)目の前にある/いる時に用いる表現だ。

R: このような文を聞いたことがなくて、迷っているのですか。

SB: それではなく、知らない人に「その」を使うのが正しいのか、よく分からない。解釈すると、不自然ではないけど、よく分からない。

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

SB: 似ているが、違う。60%は似ても40%は違う。試験の時は重要だが、会話する時はあえて(類似していると考えer必要があるか)。

3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

SB: 試験の時は難しい。けれども、指示詞は会話の時は、大まかに使っても大丈夫だと思う。

3-3. 韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。

SB: そうだ。40%程役に立つ。「こ・そ・あ=・・・・」に解釈すれば、大まかには正しい。けれども、確信はできない。

R: この表を見れたことがありますか。

SB: ある。

3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

SB: この表が正確ではないが問題はない。先程のように細部的な文法は説明できない。けど、基礎的なものはこの表で習って、詳細的なことを付加的に学ばなければならない。6-70%は、役に立つ。大きな枠組みとして。

R: 先の日本語文をこの表の内容を基準として考えましたか。

SB: この表の通り考えたが、何かもっと強くて詳しい文法がある。

3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

SB: 迷う。試験の時。会話する時は間違ってもそのまま使う。相手が理解するから。

3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

SB: 先に韓国語ですぐ解釈した後、日本語で考える。

R: どれぐらい韓国語に依存をしてそうですか。

SB:7-80%ぐらい。

**3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。**

SB:「あの時」みたいにたくさん聞いたことがあることは、韓国語での解釈なしで、すぐ日本語が頭の中に浮かぶ。

R:では「あの時」はいつ用いる指示詞ですか。

SB:過去のことを話する時。

**3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。**

SB:ほとんど。それを基準として(指示詞を)使う。

**3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。**

SB:そのまま考えずに使っている。正しいのか正しくないのか考えずに、ただに(指示詞を)使っている。直感的に。

R:じゃ、今の指示詞の用法は頭の中にまとめていないですね。

SB:そうだ。(指示詞の)体系がない。そのまま使っている。

**3-10日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。**

SB:それはないが、感じによって使っている。場面とか雰囲気、その場所の感じ。

**3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。**

SB:詳しく習ったが、私は忘れてしまった。(指示詞の方法について)習った。

**3-12. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。**

SB:理解していない。習ったが、私が忘れてしまって。私は「あれ」を使わない。避けている。

**3-13. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。**

SB:間違っているかどうか分かるか。 なにか私は間違ったら、インターネット

で調べてみる。

3-14. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。

SB: 詳しい説明はすでに本の中に出ている。教材にはすべて説明が載せている。私が勉強をしなかつただけ。教師は全部私に教えてくれた、でも私が忘れてしまった。

R: お疲れ様でした。

③2016/09/12

SC : 初級 / 男 / 日本語専攻者 / 日本留学経験無

R:調査

者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

SC: 初級、男 日本語創意融合学部1年生

R: 日本語はいつ初めて習いましたか。

SC: 高校3年生の時、第2外国語として日本語を学んだ。学校には中国語と日本語があったが、日本語を選択した。

R: 日本語を選択した理由はありますか。

SC: 中国語より簡単だと思った。そして、前から日本へ行きたかったの。

R: 行きたかった？

SC: 留学でも旅行でも。日本に興味があった。母が主に外国に行ってみたらとか、このような話をたくさん聞いたので、外国に興味があった。弟は、中国に興味があって、中国語を今学んでいるが、私は日本に興味ある。

R: 昔からそのように海外に興味があり、その国の言語を習いたがったし、また、その中で日本に興味があった。そして日本語が中国語より良いと思って日本語を選択した？

SC: そうだ。その前からも日本に興味があった

R: 「良さそう」ということは「易しい」と「難しい」のような難易度を言うことですか。

SC: 使う時。私は中国語が好きではなかった。

R: (中国語に)興味がなかったのですね。

SC: そうだ。(中国語を)聞く時は、あまり良い印象を受けなかった。しかし、日本語は楽だった。

R: 高校3年生の時から今、大学1年生まで日本語を習っていますが、日本語はどのような外国語ですか。

SC: 聞き取りはある程度行けるけど。話すことと書くことは…、まだ上手にできない。まだ慣れてないので、まだちゃんと勉強したこともなく、それで…。

R: では、易しいと思いますか。

SC: 易しいとは言えないだろう。

R: では、高校3年の時、初めて日本語を習う時も、易しくなかったですか。

SC: その時は、センター試験用で、勉強しても深く入ることもなく、文字とか簡単な会話ぐらい。文法も簡単な自己紹介程度。

R: 大学に入学してからはどうでしたか。

SC: 難しくなった。

R: 韓国語と日本語について説明してください。

SC: (両言語は)似ている。私の故郷は「釜山」で、おばあさんと一緒に住んでいるが、語彙やイントネーションが似ているものが多い。釜山(プサン)方言の単語も(日本語と)似ているものが多い。

R: 文法の方はどうですか。

SC: 文法はよくわからない。

R: 韓国語が日本語を勉強する際、役に立たないと思いますか。

SC: 語順が同じで似ているけど、助詞はちょっと難しい…。英語のように明確に異なるのではないが、100%同じとは言えない。深く入れば、(日本語と韓国語は)別国の言語だ。

R: それでは、今、あなたは韓国語と日本語が相違点があるので、難しいと思っていますか。

SC: それじゃなくて、日本語自体が難しい。

R: 日本語を日本で習った経験がありますか。

SC:ない。

R:日本語へ行って日本語を勉強したいですか。

SC:したい。

R:理由は

SC:最初(の希望は)留学だったが、今は就職を日本の方で考えている。まずは日本に行ったら、仕方なく日本語を使わなければならないから、実力が伸びると思う。ここ(韓国)では、日本語で話せる機会があまりない。日本に行けば、必ず使わなければならないから。

R:今から日本語の指示詞について聞いてみたい。日本語の指示詞について聞いたことがありますか。

SC:ある、授業中に

R:高校の授業ですか。

SC:高校の時は、主に何か事物を、距離によって「これ」「あれ」ぐらい(習った)。大学でも同じことを(習った)。

R:それでは「これ」はいつ使いますか?

SC:話す時、自分に近い場合。

R:「そ」は?

SC:相手に近い場合。

R:「あ」は?

SC:二人から遠く離れている時。

R:これらを高校/大学で習ったんですね。

SC:そうだ。全部学校で習った。

R:それでは、本人は日本語の指示語を使う時、どのように使っていますか。

SC:まず、韓国語で考えてみる。まだ、すぐに(日本語が)出てこないから。

<アンケートPARTⅡ Q1~Q10>



R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか？

SC:大丈夫そうだ、読んだ時場面が想像できる。カバンがあって、「だれの物なのか」と聞いている。韓国語でも自然だ。

R:今、韓国語に解釈をしたんですか。

SC:そうだ。私は一度韓国語に変えてみなければならない。日本語そのものよりは。

R:このような文、たくさん見たことがありますか。

SC:本でたくさん見た。

R:それで「自然」だと思いましたか。

SC:そうだ。たくさん接した文だから。日本語文法的なことよりは、この文が慣れたものである。

R:Q2はどうですか。

SC:これも自然だ。これも教科書でたくさん見た。

R:Q3のAとB会話文の場合は？

SC:文法は分からないが、感じがQ1とQ2に似ている。

R:それではQ3も韓国語に変えてみたのか？

SC:韓国語で解釈はしてみたが、(この文も)たくさん見たことがある。それで正しいと思った。

R:それでは、この文の場面はよくわかりませんか？

SC:そうだ。このような文を本でたくさん見たから、自然であると思った。

R:Q4は、二人と一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

SC:不自然。(対象の)人がこの場にはいない人だから、「あの」を使わなければならない。

R:なぜ「あの」ですか。

SC:いったん二人がお互い知っている人みたいし、写真の中にいるから。

R:二人とも知っている人は「あの」を用いることは、どこで習いましたか。

SC:大学で学んだ。

R:Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

SC:Bの部分が少し不自然な気がする。「ここ」に直した方が…。

R:どうして「ここ」に直したいですか。

SC:お互いに感じる距離が、Aは後ろに座っていて、Bは前に座ってみたいで、「ここ」だ。AがBに近い道を指すから。

R:これを読む時、韓国語で考えましたか。

SC:いや、これは(二人の)距離を考えた。

R:Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

SC:大丈夫そうだ。遠くて、二人から遠くて。

R:この文章は韓国語で考えましたか。

SC:いや、文法的に考えた。

R:次はQ7は、どうですか。

SC:わからない。不自然よりは…(韓国語で)解釈が…うまくいかない。(自然なのか不自然なのか)判断しにくい。

R:日本語で「あの頃」を聞いてみたことがないですか。

SC:今日、初めて聞いた。

R:今まで習ったことを用いて、説明ができないですか。

SC:そうだ。できない。

R:Q8はいかがですか。

SC:不自然だが、どうしてなのか分からない。

R:それは、本人が聞いたことがないからですか。

SC:そうだ。韓国語の解釈もできないし、説明もできない。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

SC: 自然。 昨日言った「・・・(その店)」

R:これが「・・・(その店)」と解釈できましたか。韓国語の「あ」は「・(あ)」であるとよく言われていますが、この場合は、解釈が少し違うけど、それに対する気まずさはないですか。

SC:これはそんなこと(韓国語の解釈)より「二人が知っている場所」なので「あ」の指示詞が似合う。

R:「二人が知っていることには「あ」を用いる」とは、どこで習いましたか?

SC:日本人ネイティブの先生が説明してくれた。

R:韓国語でも考えましたか。

SC:そうだ。「・・・(その店)」。

R:Q10の文は、いかがですか。

SC:大丈夫そうだ。Bが知らない人なので「その人」

R:それでは9.10を整理すれば、二人とも知っているのは「あ」で、二人のうち一人が知らない場合は「そ」を使う。

SC:そうだ。どちらも知らないときは「こ」。

R:それでこの文を読んだ時、韓国語で考えなかったですか。

SC:Q9の場合は、韓国語の解釈がまさに「・・・(その店)」とすぐ出たが、Q10は文法的に考えた。Bが知らない人だから「そ」を使っていると。

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

**3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。**

SC: 少し違う。80%は似ているが、20%は少し曖昧。

**3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。**

SC:韓国人の立場ではちょっと難しい。私たちの立場ではそんなに気を使わず、使ってるようですが、日本語で習うと場面によってあまりにも使うものが違って、難しい。20%が少し大きく感じられる。

R:今、言った場面に対する勉強ができていないと思いますか。

SC:全部、代表の例だけを見た。

**3-3. 韓国語指示詞「……」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。**

SC:そんなにたくさんは。 60-70%程度。

R:残りの3-40%は?

SC:むしろ邪魔になる。

R:この表を見たことがありますか。

SC:たくさん見た。出るのがこればかりで。教科書でこのような枠組みで整理されている。

**3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。**

SC:違う。大きな枠組みは取ってくれるかの知れないが、例を見ると、全然役に立たない。

**3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。**

SC:ある。会話よりは書くとき(作文)、私たち(韓国語)とを感じるのが違って、相手(の位置)とか。

**3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。**

SC:そうだ。90%はそう思うけど自信がない。二つの言語が感じが違うということを知っていて。

**3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。**

SC: 私はそうではない。

**3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。**

SC: そうだ。 90%ぐらいは習った内容を中心に、または私が見た文を中心に。

**3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。**

SC: たまに。

R: 現在は、教材から内容中心に韓国語で考えて、指示詞を使っているんですか。

SC: そうだ。

**3-10 日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。**

SC: これもない。

**3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。**

SC: 細かく習ったことはない。70%程度の大きな枠組みだけ、主に使われることを中心に習った。

**3-12. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。**

SC: 自信がない。私は、主に(教科書の)横に書かれている韓国語の意味と対応させて考える。日本語指示詞「こ・そ・あ」がどのような形になっているか分からない。

R: 知りたいですか。

SC: 知らなければならないと思う。

**3-13. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。**

SC: 確認しようとしている。私は正しいと思うけど、どうして間違っているか知りたくて。

**3-14. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。**

SC: そうだ。もっと詳しく。

R: じゃ、どのように説明をしてほしいですか。

SC:日本人ネイティブ先生より韓国人先生が一度整理して説明をして欲しい。  
韓国語対照ではなく、場面別に日本語指示詞がどのように使われているかを。

R:お疲れ様でした。

④2016/08/30

CA : 中級 / 男 / 日本語専攻者 / 日本留学経験無

R:調査

者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

CA: 中級、男性

R: 日本語はいつ初めて習いましたか。

CA: 日本語は高校2年生から

R: どんなきっかけで?

CA: 本格的に習ったのは大学からだが、間接的に習ったのは、間接的には私の意志がなくやむを得ず、学ばなければならないので。

R: 本格的ということは深く勉強したのは大学時代からですか。

CA: そうだ。専門的に習ったのは大学時代から

R: 初めて高校の時に学ぶようになったきっかけは?

CA: 学校の授業そのものに日本語の授業が含まれていた。

R: 選択ではなく?

CA: 選択ではなく必須だった。2年生から3年生まで、2年間

R: 日本語だけ習らいましたか?

CA: 日本語、英語、中国語全部習った。

R:大学の専攻として日本語を選択した理由はありますか。

CA:具体的に話をするならば、入試をたくさん落ちて合格したところが日本語科であり、もちろん他の科もあったが、日本語にしたいと思った。他の学科よりは日本語がビジョンがあると考えた。

R:他の外国語も多いのに、あえて日本語をどうして選びましたか?

CA:他の言語よりは媒体を通じて多く体験し、よく聞いていた言語で、中国語より日本語にたくさん接していたので、日本語を選択した。

R:では、英語は?

CA:英語は、英語もたくさん接したが、英語はとても大変だ。

R:それじゃ、英語も日本語もたくさん接してみたけど…英語は難しい。

CA:英語は長い間続けて勉強したが、(実力が)伸びなかった。それに対して、日本はすらすらと話せるようになった。「学びやすい」そんな気持ちなのかな。初めのスタートが重要だ。理解ができるか否か。興味があるかないか。

R:あ、日本語は興味がありましたね。他の外国語より。

CA:ドラマ。 アニメ、マンガ、こんなことを通じて。

R:日本語を選んだ理由はこれだけですか。

CA:大きな目標はあった。目標は通訳家になりたくて。そして、日本語科が学費も安いし。学校側に知り合いもあって色々あった。

R:あ、様々な理由がありましたね。

CA:初めは私もできそうだった。日本語は。高校の時に日本語の成績も悪くなかったし、英語よりは(成績が)良かった。学校の成績や自信。

R:自信のある理由は何でしょうか。

CA:英語より(日本語は)自然に表現できる。語順も似ている。初めて習う時、語順が似ていると教わったし。また、学んでみたら(両言語が)似ていて、学ぶことも簡単で。解釈も簡単。英語は難しいけど日本語は触れてみると易しかった、英語より。英語を初めて習う時より。語順が似ていたから。私は不思議に英語の文字より日本語のひらがなが好きだった。覚えるときも。

R:理由は?

CA:不思議だ。

R:日本語に対する本人の考えは?

CA:10年程度勉強したが…。日本語は勉強すればするほど難しい。

R:なんで?

CA:初めは易しいと思った。ますますレベルが上がることに連れ、漢字や専門用語が多くて、漢字と語彙などが…。

R:それでも初めて感じた「両言語は似ている」という考えには変わりがなかったですか。

CA:私も日本語能力試験を準備して、最初は似ていると感じていたけど勉強してみたら、そうではなかったこともあると分かった。

R:100%、二言語が同じとは言えないですね。

CA:そうだ

R:韓国語と日本語の関係についてもう一度言ってほしい。

CA:けど、(両言語)似たような部分があるようだ。

R:じゃ、この部分が日本語を勉強に役に立つと思いますか。

CA:初めて、初級の時はよい影響を与える。今は大変だ。立たないと思う。

R:今は役に立たないと言いましたが、それでは最初から似ているとするのが全体的に役に立たないと思っているんですか。

CA:最初はそう思うのがよさそうだ。勉強がうまくいけるためには。最初はそう考えるのは心が楽なだし、英語のようにちょうど語順が反対ではないし。けど、だんだんレベルが上がると、そのマインドの考えをなくした方が良い。

R:それでは最初からそのように考えないとよいのではないのでしょうか。

CA:それでは興味が落ちる。最初は簡単に勉強した方が後にプラスになる。英語も数十年勉強したけど、上手になれない人が多い。その理由が難しく考えるからだ。それに比べて日本語は似ている部分があるからその部分を生かして…



R:しかし、その考えが、結果的には役立たないし、その考えをなくした方が良いと言いましたが…。

CA:(結果的に)役に立たないけど、最初は仕方がない。学ぶ立場では簡単な方が学びやすい。そして勉強してみると、本人が自ら分かるようになるだろう。

R:それでは現在あなたは日本語と韓国語が似ているとっていますか。

CA:半々。解釈によって韓国の言葉そのまま変えたらだめな部分もあるから。

R:日本語を日本で習った経験がありますか。

CA:ない。

R:じゃ、これから日本語の指示詞について聞いてみたい。あなたが考える日本語の指示詞について説明してください。

CA:指示詞は私が指すものと相手が指すもの。もし、物があるんですが私の前にいるものを指したら「これ」を使って、相手がこの物について述べる時は「そ」を使って、ものが私たち二人から遠く離れている時は「あ」を使う。

R:どこでそのように習いましたか?

CA: 学校で文法の授業で習った。本(教科書)を通じて。本には「コソア=…」対照して出ており、具体的に説明は書いていない。会話の授業でこのような説明をしてくれるが、その説明が十分ではない。

R:日本語の指示詞を用いる時、本人はどのように指示詞を選択して使っているのか。

CA:先、話した基準通り使っている。

R:もう一度まとめてみると、あなたは日本語の指示詞を使用する際に、今の話したものを基準として指示詞を使用しているんですね。

CA:そうだ。

R:それでは教科書に習ったのは日本語の指示詞は「コソア=…」

CA:それで終わり。

R:ところが、現在使用している日本語の指示詞はあなたそれなりの基準があるのではないのでしょうか?

CA:それが学校では詳しく教えてくれないのだが、塾では詳しく教えてくれる。別に科目がある。学校では学生数も多く、他の部分のするもの多くて、比重を置かないようだ。

R:ちょっと前に言ったコソアの説明は塾で学んだのか?

CA:そうだ。ほとんど

R:それではどちらが役に立ちましたか? 学校? 塾。

CA:塾で学んだものが役に立った。詳しい部分は塾でたくさん習ったし、大学は本に焦点を合わせた授業で不満があった。レベル差があるが、「コソア=・・・」の説明だけして終わり。

R:それでは日本語指示詞「コソア」は韓国語指示詞「・・・」とは対応していないと考えますか。

CA:説明は正しいと思う。大きな枠組みで見ると、対応しているけど、詳しい説明はされていない。見た目は、私の前にいる時は「こ」を使って相手が私の前にいることを指すことの時は「そ」を使う。このような説明だけで、詳しい説明が不足する。

R:その言葉は、つまり日本語の指示語に対する説明が不足していることであり、その点がよくない。

CA:そうだ。不足する。

## <アンケートPART II Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか?

CA:自然なようだ。

R:そう考える理由は何か?

CA:もし、かばんがAの近くにあるなら「これはあやさんのかばんですか」と話せる。それで「それは私のだ」と答えた文。

R:今韓国語で考えましたか?

CA: そうだ。

R: 韓国語に直した時、不自然ではないから自然ですか。

CA: それもあり、かばんがどこにあるかによって自然か、不自然かを考えた。

R: それでは自然だと思ったのは、かばんがA近くにあるからAは「これ」、Bは「それ」を用いる。

CA: そうだ。

R: この文章については全く不自然な感じはないのか?

CA: そうだ。自然に読み取れる。かばんがA近くにあり、Bよりは少し離れている。

R: さっきこの文章を見た時に韓国語でも考えたとしたが、どれぐらい韓国語で考えるみたんですか。

CA: ちょっと考えてみた。勿論、日本語でも考えた。半々ぐらいかな。

R: 整理すると、かばんがA近くにあるから「これ」だが、韓国語を代入しても自然だという?

CA: そうだ。

R: Q2はどうですか。

CA: これもQ1と似ている。感じが…。これが(てるてるぼうず)がどこにあるのかによってAが「それ」を使うか「あれ」を使うか「これ」を使うかが違う。それで少し曖昧である。

R: この文章を読む時、韓国語で考えましたか。

CA: これもQ1と一緒に韓国語でも考えた。半々ぐらい日本語と韓国語と一緒に考えてみた。韓国語にも解釈をしてみて、日本語にも解釈をしてみた。

R: Q3のAとB会話文の場合は?

CA: これも自然だQ1~2と同じように。これも漫画がどこにあるかによって、Bに近いから。Aが「それ」を用いる。

R: じゃ、今までのQ1~3は似たような形式だが、このような指示詞文について全く不自然さがないですか。

CA:私の立場では自然に読み取れる。物がどこにあるかによって「それ」を使うか「あれ」を使うか「これ」を使うかの差。

R:Q4は、二人と一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

CA:これはちょっと分からない。写真と一緒に見ているけど、Aが聞いたからAは「これ」を用いて、返事する時は「それ」にした方が良い。

R:それはルールですか？なぜ聞く時は「これ」返事する時は「それ」を使わなければならないのですか。

CA:無意識的にそう思っている。習う時、そう学んだ。

R:それでは、「これ」で聞いたのは「それ」で答えなければならない、「それ」で聞いたのは「これ」に答えなければならないという？

CA:そうだ。それでこのQ4の場合は、写真と一緒に見ているから両方「こ」を使わなければならないようだが、この部分がちょっと不自然に感じられる。指示対象が二人から遠くに離れていたら二人とも「あれ」を使えばいいが、この場合はよく分からない。お互いに別の指示詞を使わなければならないと習ったので、私も知らないうちにそう使っている。このQ4は同じ写真を見ているから、同じ指示詞を用いるのが正しそうだけど、少し判断がつかない。

R:Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

CA: ちょっと違和感があるが、同じ場所にいるため、同じ指示語を使わなければならないけど…違和感がある。

R: どうして、同じ空間の場所にいたら、同じ指示詞を使わなければならないのですか。

CA: 同じ場所、タクシーの中に一緒にいるから。同じ指示詞を使用してもいいと思う。しかし、この文が少し不自然に感じられる。私の口に合わない(自然に読み取れない)。ちょうど読んだ時、見たことがない文なので、不自然に感じられる。また、このように詳細に習ったことがない。

R: それじゃ、あなたは文法より本人が聞いたことがある表現なのかを主に判断しますか？

CA: そうだ。50%程度は私が聞いてみたのかで考える。Q5は同じ指示詞を用いているから、ちょっと違和感があるけど、同じタクシーの中だから、指示詞の

使用が正しいように見えるが、私はよく分からない。Q5は私は見たことがない文である。二人とも「あ」を使えばは自然な文になるようだが、「そ」を用いているので不自然であると思う。でも同じ空間にいるから、自然な文であるかも知れない。判断がつかない。

R:Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

CA: これは正しい。一緒に見ており、空を見ているため両方「あ」が自然だ。

R:それでは「こーこ」と「そーそ」はちょっと違和感があるけど、「あーあ」は確実に自然だと考えいる理由は何ですか。

CA: 「あ」は同じ指示詞を使用することが自然で、「こーこ」と「そーそ」少し不自然に感じられる。でも、それが物や場所によってまたは位置によって、どんな指示詞を使用するかが少し違う。「一緒にいる」ような。

R:次はQ7は、どうですか。

CA:これは、正しい文である。この文は「読解」でたくさん見た。そしてたくさん聞いたこともある。

R:Q8はいかがですか。

CA:これも自然。「あの時」は「昔の事を話す時」、Q7と同じ。昔、幼い時、過去の話をする時は「あ」を使う。

R:それでは、これは遠くにあることを示す「あ」とはちょっと違うものですか。

CA:さっき言ったように物の位置、空間の違いによって異なり、時間の違いによっても違う。過去は過ぎたものだから遠く離れていて「あ」を用いる。

R:韓国語で考えましたか。

CA:これは韓国語で考えず、日本語で考えた。そして、たくさん聞いたことがあるし、過去だから正しい表現だと思った。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

CA: これも自然である。過去のことだから、「あの店」。

R:それではBの「あ」については?

CA:BはAが「あ」で聞いたため、「あ」で答えなければならないと思う。

R:Q10の文は、いかがですか。

CA:これも自然。「・・・(その人)」だから、「その人」。

R:韓国語を代入して考えましたね。

CA:そうだ。そしてたくさん聞いてみた文である。「文法」や「読解」で「その人」という表現をたくさん見た。

R:それでは「あの人」はおかしいのか。

CA:あの方は私たち二人が一緒にいるか、または遠く離れている人を見ている時用いる指示詞である。「その人」はAが先に会ったので、「・・・(その人)」が「その人」になる。文法的にも違和感がないし、韓国語で代入してもおかしくないし、たくさん接して文であるから自然である。たくさん聞いてみたし、接してみた。それで、場面的な文法的な考えよりは、読んだ時の感じ、「あの人」を入れて読んでみたら自然に読み取れない。

R:それでは「あ」は二人とも遠くに離れている時に使うもので、「そ」は?

CA:Aが会った人だからBには「その人」である。

R:このように指示詞文と一緒に見てみたが、あなたは日本語の指示詞を用いる時どのように考えているみたいなのか。

CA:「韓国語」「日本語」そして「たくさん聞いたことがあるか」などの複合的に考えて使っている。私は韓国語で先に考えて日本語を使っている。場面によっては、日本語のみで考える時もある。難しい。詳しく入ると、とても難しい。

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

CA: そうだ。両言語の指示詞は似ている。

3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

CA:勉強すればするほど難しい。最初は韓国語で考えたけど、習えば習うほど日本語だけの表現がたくさんあるので難しい

3-3. 韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。

CA: 最初は助けになる。初級では役に立つが、レベルが上がると、習ったことが役に立たない。短くみたら役に立つようだが、長くみると役に立たない。最初から確実に習ったほうがいいかも。

R: この表を見れたことがありますか。

CA: たくさん見た。教科書で

3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

CA: 全く十分ではない。文の場面によって何を使うか使えないことが決まるのに。しかし、初級時はこれだけ習ったほうがいい。後に役に立たないけど、初級時はこれだけ。初級の時に細かくしてしまうと、興味が落ちる。残りは本人自ら勉強しなければならない。教科書は教科書で、それ以外は本人が自ら。どうせ詳しく教えてくれないんだ。

R: それでは初級時はこれだけ習ったほうがいいと思うのかそれとももっと詳しく?

CA: まあ、50:50。

R: この表1は必要だと思うか?

CA: 必要はある。

3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

CA: ある。少なくともある。

3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

CA: 半々だ。状況によって、頭の中で、まず韓国語を代入して考えてみる。これが習慣となっている。しかしもう一度日本語で考えてみようとする。

3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。

CA: 最近はそうしている。でも半々だ。

R: それじゃ、あなたは韓国語でも考えてみて、日本語でも適用させて考えることですか。

CA: そうだ。両方とも頭の中で考えてみる。

**3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。**

CA: 昔はそうした。初級の時は。今は昔習ったことと異なると知っているため、あまり適用させない。大きな枠組みだけで。

**3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。**

CA: そうだ。直感的に(指示詞を)使う。

**3-10 日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。**

CA: それは少し曖昧だけど、あると思う。何だとはっきり説明はできない。私なり何か考えていることはある。しかしこれが100%正しいかどうか分からない。自信がない。

**3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。**

CA: 大きな枠組みだけを習った。

**3-12. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。**

CA: 半分ぐらい知っている。まだよく分からない。

**3-13. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違えたのか確認する。**

CA: 確認したいですが、状況が簡単でない。言ってくれる人は多い。けど日本人ではない以上、何が間違っているか分からない。周りに日本人もたくさんいないし、でもどうして間違っているか知りたい。

**3-14. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。**

CA: 初めて習う時は、簡単に学ぶほうがいい。もちろん、後には役に立たない



けど、初級時には大きな枠組みだけを先のその表を通じて勉強した方が良い。結論的に多く異なるが、初級時は仕方がない。中級/高級の教科書には、その表以外の追加的にさらに詳しい説明をして欲しい。

R:主に最近日本語は何に接するのか?

CA:ドラマ、映画、日本人との会話

R:教科書に対する本人の考えは?

CA:教科書も重要だ。教科書が基本枠組みだと思う。ところでとても難しく説明されているのが多い。また、日本人が使わない文法も多く、同じ表現も多い。初級時は、教科書の勉強がすべてなのに長く見るとたくさん役に立たないようだ。教科書じゃなくて、ネイティブ・スピーカーとの会話、フリーターキングを通じて勉強する方がもっと自然な日本語またはもっと正確な日本語を使えるようになると思う。

R:それじゃあなたはそんなことを通じて正確な日本語を習っていると思いますか。

CA:正確に習っていないけど、それでもある程度は習っていると思う。専門的な内容はないけど。

R:これからどのようになったらいいですか。

CA:教科書を中心に勉強が殆どである。私は会話中心の授業が多くなってほしい。学校で学ぶのが不足した部分が多い。そして、ちょっと様々な分野とか教科書中心ではなく、多様な分野を広げてほしい。メディアを増やしてほしい。

R:お疲れ様でした。

⑤2016/09/02

CB : 中級 / 女 / 日本語専攻者 / 日本留学経験無

R:調査

者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

CB: 2中級、JLPT N2-1の間で、女性。

R: 日本語はいつ初めて習いましたか。

CB: 中学校2年生の時に課外授業の先生から日本語を初めて習った。中2から今まで勉強している。

R: 専攻として日本語を選択した理由はありますか。

CB: 自分ができることが日本語だけだった。日本語を副専攻にひて観光の方に行くことも考えてたけど、日本語をもっと詳らかに習ってみたいし、私より上手な人を見て刺激も受けたくてこの科(日本語学科)を選択した。

R: 日本語を専攻として選択する時、日本語が他の外国語より韓国語と類似していて、学びやすいと思いましたか。

CB: (韓国語と日本語は)語順も同じであるし、近い国であるからそう思うかもしれない。私は、中学2年生の時、(日本語の)家庭教師から「中国語は泣きながら入って、笑ながら出る」に対して、「日本語は笑いながら入って、泣きながら出る」と聞いた。思ったより中国語が複雑に見えるけど易しい部分があるそうだ。しかし、日本語はちらっと見たら、語順が同じで易しいと思われるが、韓国と日本の文化の違いとか・・・たとえば、「受け身」のような文化の差があって難しいと思い、(日本語の学習を)あきらめる人が多いそうだ。私も勉強すればするほど、韓国語で考えてはいけないし、日本人になって考え、(日本語を)話すべきだと。(日本語は)本当に難しいと思う。

R:韓国語が日本語は似たように見えるが、似ていない。

CB:日本語と韓国語は類似していないと思う。

R:日本語を日本で習った経験がありますか。

CB: ない。計画はある。留学しなければならないと思う。とにかく、ここは韓国だし、韓国で日本語を学ぶことより、日本で1年留学すると聞き取りも上手になるし、考えも広くなると思う。友達が今日本で留学しているが、私より上手になったので、私も日本に行って日本語を勉強したい。早く上手になりたい。

R:日本語を一言で説明したら。

CB:日本語は一生の課題だ。勉強すればするほど難しい。この前に日本語を専攻した先生もまだ知らない単語があったら、辞書を引くみたいで、日本語はとても難しい言語だと思う。

R:韓国語と日本語の関係についてもう一度言ってほしい。

CB:考えの違い。情緒が違って。言語が異なるのは当然なことだ。特に韓国語は私を中心に考えて言うが、例えば、韓国語は「・・・(私を見た)」と言うが、日本語は「私は見られた」と言う。そして、私も考えを変えなければならない。だから日本語と韓国語は似ていないと思う。

R:じゃ、これから日本語指示詞について聞いてみたい。本人が考える日本語指示詞について説明してください。

CB:「こ・そ・あ・ど」

R:どこでそのように習いましたか?

CB: アニメーションを通じて初めて「あ、あのようを使うんだ」と思い、詳しくは家庭教師から習った。

R: 日本語の指示詞を用いる時、本人はどのように指示詞を選択して使っているのか。

CB: そのまま代入してみるが、直感的に活用して使っている。韓国語で考えていることが、判断がつかない時があって、アニメで見たものを中心に使っている。直感的に。それでたくさん間違っている、私は。

R: それでは、教科書を通じて学んだことを基準として、(指示詞を)使ったことはないですか? 授業中に習ったこと。

CB: 教材の教科書を基準と考える。正確にはよく分からないから。この学校でもう一度復習をしたが、イラストで学んだら整理しやすかった。私はまず、教科書が基準であるようだ。

#### <アンケートPART II Q1~Q10>

R: 今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか?

CB: 自然だ。状況が頭の中に想像できる。

R: この文を日本人が話すことを聞いたことがありますか。

CB: ない。でも教材で見た。

R: Q2はどうですか。

CB: 自然だ。教科書でよく出る。違和感はない。距離を基準として考えれば自然だ。

R: Q3のAとB会話文の場合は?

CB: 不自然。「これ」の代わりに「そ」とか「あ」がよさそう。距離的に違和感がある。頭の中に場面が想像できない。

R: Q4は、二人が一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

CB: どちらとも言えない。「この」もできるし「あの」もできるし「・・・(この人)」「・・・(あの人)」韓国語で代入して見ても、両方可能である。

R: 「人」に似合う指示詞を用いること？

CB: そうだ。そしてこの文は韓国語で考えた。

R: Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

CB: 後に「そこ」が少し気になるが、曖昧だ。私はこの文が不自然に感じられる。でも直してみようとしたら何を修正すべきなのか分からない。日本人がこのような文を使ったのか考えてみた。

R: Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

CB: 自然だ。たくさん聞いたことがある。「あ-あ」が自然だ。

R: 次はQ7は、どうですか。

CB: たくさん聞いたことがある。それで自然。その以外の指示詞を入れてみても不自然だから。

R: Q8はいかがですか。

CB: 「あの」が自然。「その」も自然である。「あの」もたくさん聞いてみまし、私も使ったことがある。

R: Q9の文は、AとBの対話文です。

CB: 頭に場面が想像できる。二人が話して「., ...?(ああ、その店)」抽象的な?回想する二人が一緒に経験したのことについて。アニメでそのような状況を見たようだ。このような会話文を聞いたことがある。

R: Q10の文は、いかがですか。

CB: 「あの」も大丈夫です。「その」は違和感があるようだが、ニュアンスは自然だ。確信はない。「あの」に変えてみてもニュアンスは不思議ではない。見た覚えがあるようだ。自信はない。

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

CB: 辞書的な意味は同じだ。ニュアンスの差がある。

### 3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

CB: 今回の機会に難しいと感じた。そのまま「当てはまるか」と考えながら使ったけど、また勉強しなければならないと考えた。

### 3-3. 韓国語指示詞「……」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。

CB: 一次的には知らなければならない。そんな感じは受けなければならないと思う。韓国語で調べておいて日本語のみの表現は後に本人が勉強しなければならない。一次的に距離の感じは韓国語の意味で学んだほうが良い。70%ぐらいは韓国語が勉強を始める時に、プラスになった。以降は本人自ら勉強しないと。

R: この表を見れたことがありますか。

CB: たくさん見た。

### 3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

CB: 何か付加的な説明が必要だ。6-70%は役に立つと思う。

R: この表が必要だと思いますか。

CB: そうだ。この表は問題を解く時に役に立ちそう。そして、イラストを付けた方が、もっと良さそう。

### 3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

CB: ある。頭の中にまとめていないし、「そ」と「あ」がちょっと難しいです。方向や距離感が弱くて、相手が理解すると思って指示詞を使っているけど、もう一度整理する必要がある。

### 3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

CB: 一次的には考える。直感的にもう一度考えてみる。

### 3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用

する。

CB: そうだ。そして、そうしなければならないような感じ。

3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。

CB: 一次的には考える。直感的にもう一度考えてみる。

3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。

CB: そうだ。そしてそうしなければならないような感じ。

3-10 日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。

CB: 特にないようだが作らなければならない。

3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。

CB: ない。習ったみたいだが、私が覚えていないかも。再び学ばなければならない。

3-12. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。

CB: していない。整理ができていない。

3-13. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。

CB: 恥ずかしくて飛ばす。無知が恥ずかしいですけど、なんか一人で整理するタイプだ。

3-14. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。

CB: 最初からイラストを入れて説明してくれたらよい。初めから説明したら、もちろん興味は落ちるかも知れないが、細かくまでではないけど、例外とか日本語指示詞の特徴を説明して欲しい。

R: お疲れ様でした。

⑥2016/09/08

CC : 中級 / 女 / 日本語専攻者 / 日本留学経験無

R:調査

者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

CC: 中級 (JLPT2級)、女性。

R: 日本語はいつ初めて習いましたか。

CC: 小学校5年生の時

R: 小学生って少し早いですが、きっかけは何ですか。

CC: 幼稚園の時からテレビで日本観光CMを見て、日本へ行きたいと思った。その時、学校の放課後授業として日本語の授業があって、初めて日本語を習った。



R:大学の専攻は？

CC:日本語。

R:専攻として日本語を選択した理由がありますか。

CC:子供の時から日本・日本語に興味があったし、とりあえず、こちらの外国語大学に留学プログラムがあって。

R:日本語を専攻として選択する時、日本語が他の外国語より韓国語と類似していて、学びやすいと思いませんか。

CC:語順が同じだから。

R:日本語を日本で習った経験がありますか。

CC:ない。まだ計画はないけど、いつかは。

R:日本語を一言で説明したら。

CC:漢字が少し難しい。日本語は少し難しい方であるが、勉強しようとする心持さえあれば、できないことはない。

R:本人は日本語を使う時、韓国語と日本語を対応させて使っていますか。

CC:手紙書くときは、まず韓国語で考える。

R:話す場合は？

CC:会話する時は、日本語で考えようとする。

R:最近は何を通じて、日本語を勉強していますか。

CC:学校の授業

R:学校の授業に対する本人の考えはどうだろうか。

CC:今、中級の授業を受けているが…。中級ではなく初中級で、もう少し高いレベルの授業を受けたい。

R:今、あなたが学ぶ日本語が正確と思いますか。

CC:そうだ。日本人ネイティブの先生達の授業は

R:韓国人先生は？

CC:高校の時、ひらがなとカタカナを習う時。

R:じゃ、これから日本語の指示語について聞いてみたい。あなたが考える日本語の指示語について説明してください。

CC:日本語「コソア」。最初に独学で勉強した。教材を通じて。日本語の指示語は、韓国語で「..(これ)」「..(それ)」「..(あれ)」のようなもの。日本語は「コソア」。

#### <アンケートPARTⅡ Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか？

CC:正しい。Aは「これ」、Bは少し離れているから「それ」「.. .. .? .. .. .」

R:この文を日本人が話すことを聞いたことがありますか。

CC:聞いたことがある。

R:Q2はどうですか。

CC:どちらとも言えない。一緒に見ているかもしれないし、場面の説明が足りない。

R:Q1と同じ場面ではないですか。

CC:分からない、Q2は分からない。

R:Q1~2を読んだ時、韓国語で考えましたか。

CC:少し、けど日本語で考えようとした。

R:このような文日本人が使うのを見たことあるか。

CC:教科書からたくさん見た。

R:Q3のAとB会話文の場合は？

CC:自然だ。Aから少し離れているものだから。これを場面が頭のなかに想像できた。Q1とQ2より。

R:Q4は、二人と一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

CC:不自然。韓国語に直した時。後の指示詞を削除した方が良い。

R:もしこ「こ-こ」の指示詞に対する本人の考えは?

CC:指示語使用は大丈夫だ。一緒に見ているから。

R:Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

CC:不自然である。Bの「そこ」を「ここ」に直したい。理由は分からないけど、「そ-そ」は違和感ある。

R:Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

CC:自然。「あ」は「あ」と一番似合う。

R:次はQ7は、どうですか。

CC:自然である。「この頃」とか「その頃」は聞いたことがない。

R:Q8はいかがですか。

CC:どちらとも言えない。「あの」も似合うし、「その」も似合う。

R:Q7-8は、文法的より自分が聞いたことがあるかどうかを中心に考えたのですか。

CC:そうだ。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

CC:不自然である。Bの「あそこ」を「そこ」に直したい。後ろが「そこ」が似合うから。

R:あなたは、同じ系列の指示詞を用いいることに違和感があるんですか。

CC:教科書では、「これ」があったら後ろに「それ」があるし…。このような文は(教科書には)ない。見たことがあまりない。

R:Q10の文は、いかがですか。

CC:不自然。Bの「その人」を「あの人」に。山下さんがこの場にはいないから「あの」である。Bの視野内にはいないけど遠くいるから。

3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

CC:50%は似ていると思う。けど、相違点もある。

3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

CC:60%ほど難しい。簡単なものではない。日本語の指示詞が複雑で難しい。

3-3. 韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。

CC:30%は役に立つ。けど、私は韓国語自体が日本語の学習に役に立つとは思わない。

R:この表を見たことがありますか。

CC:教材から見た。

3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

CC:十分ではない。もっと説明が必要だ。

R:この表が必要だと思いますか。

CC:基礎的な段階では。

3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

CC:ある。少なくとも。あいまいだ。ただ私使っている日本語全体が指示語だけでなく、正しいかどうか自信がない。

3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

CC:ある程度は韓国語に直して考えてみる。けど、逆に簡単なことはすぐ日本語で考える。

3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。

CC:日本人と会話する際、80%ぐらいは。私は、韓国語・日本語、両方の場合を全部考えてみる。

3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。

CC:依存しない。私が聞いたことや見た表現中心に。

3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。

CC:80%、ほとんど直感的に判断して使用する。

3-10日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。

CC:ルールについては考えてたことはない。適当に使っている。頭の中にまとめてはいない。

3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。

CC:いや、教科書では、先の表1で終わり。それだけだ。

R:それで、不満であるんですか。

CC:そうだ。説明がないから

3-12. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。

CC:理解ができていない。50%ぐらいがまとめていない。

3-13. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。

CC:確認しようとする。同じミスを二度としたくなくて。

3-14. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。

CC:もっと詳しい説明がほしい。あえて、韓国語と日本語を比較する必要ない。

R:お疲れ様でした。

⑦2016/08/30

JA : 上級 / 女 / 日本語専攻者 / 日本留学経験有 1年

R:調査者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

JA:女性、上級

R:日本語はいつ初めて習いましたか。

JA: 高校の時から、1年生から習った

R:なぜ日本語を習い始めたのか理由があるのか?

JA: 日本語に以前から興味があって、高校も最初から日本語が習える外国語高校に進学した。

R:どんな興味があったのか?

JA:幼い時、兄が日本のアニメを見せてくれたし、私が学びたいと思ったのは日本の小説を読んでから。

R:日本語学科を選択した理由があったのか?

JA:高校の時から日本語を勉強しながら、私が翻訳したことを他の人に見せたくなくなったので。

R:日本語を勉強してから

JA:11年12年くらい経っている。

R:日本語に対する本人の考えは?

JA:難しい。勉強すればするほど。最初には、初級の段階で韓国語と類似していると思った。語順とか助詞の使い、単語などが似ていると思ったが、中級、上級になってから韓国語と（日本語は）全く違う言語であることが分かった。これが…本当に、その国の文化をよく知らないととても理解できない部分が多すぎて、勉強しなければならない部分も増えた。また、私は、詳細専攻が通訳・翻訳だが、勉強すればするほどもっと日本語が難しく感じられた。

R:初級の段階、最初勉強した時、日本語は韓国語と類似していると思ったと話したが、それは、どこから聞いたのか。それは、自らそう思ったのか。

JA:それは私も明確にわからないが、周りからたくさんそう言われた気がする。日本語は韓国語と似ていて易しいと。中国語は英語と似ているとよく言われるが、中国人の友達に聞いてみたら、英語と似ている部分がなくて難しいと言われた。こんなことから考えてみると、よく周りからよく聞く話。

R:韓国語と日本語はただ他の言語という言葉にはどう考えるか?

JA:私もそう思う。

R:「日本語は韓国語と類似する部分があって他の外国語より学びやすい」と考えた方が日本語学習に役に立つのか。

JA:最初には似ていると考えた方が（学習者に）親密感を与えるから良さそうに見えるが、多分、本人が勉強してみたら、自ら「違う」とわかるようになると思う。ただ、専門的に勉強を続けない場合は、「(両言語が)似ている」

と考えた方が楽だ。(結論的にそう考えたら)とても不自然な日本語を話すようになるはず。そのような学生たちが話す日本語を聞いてみたら、韓国語の影響をたくさん受けて日本語らしくない文もあり、そのように(韓国語の影響をたくさん受けて日本語を使う)学生たちの韓国語もなんか日本語式で話す場合もある。不自然な部分が多い。それを正確に区分するためには、結果的に韓国語と日本語は「別の言語」であることを(学習者)本人自ら認識することが大事だと思う

R:これから日本語の指示語について聞いてみたい。日本語の指示語について説明してほしい。

JA:「これ」「それ」「あれ」「どれ」が基本で、「こそあど」だとたくさん聞いた。(中略)基本的なことは韓国語と同じで、あ、これも、韓国語と似ているように見えるが…私は最初に指示詞を勉強した時、難しかったことは、二人がその(指示)対象を見ている状態だったら、韓国語と指示詞用法が同じだが、対象がその場にはない場合には、韓国語と日本語の指示詞の使い分けが違って…私は、とても混乱した。

R:どこで今の内容を習いましたか。

JA:独学の時は1:1対応して意味中心で勉強した。そのまま、辞書的な意味として。ちゃんと勉強したのは大学で、高校の時には初級段階のレベルまで、辞書的な意味中心に、「こそあ=・・・」と習った。

R:高校で学習した韓国語と比較したことが後にどのように感じられたのか?

JA:それでもっと難しかった。後に頭の中がくちゃくちゃになった。細部的なものに入ると、韓国語と異なる部分が多くて、むしろ分からないようになった。

R:それでは12年の間日本語を勉強しながら、自分が指示詞を使用する時、どんな形で使用していますか。

JA:今は日本語の状況に合わせて使っている。無意識的に使ったら、韓国語の影響を受けるかもしれないので、日本語の状況を考えて使っている。

R:自分が今僕の考える日本語指示詞の文法、用法を話してください。

JA:目の前にあることを指示する時は「こ」、少し離れていることは「そ」。そして、会話している二人から遠く離れている場合は「あ」。



<アンケートPARTⅡ Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか？

JA: 自然。理由なしただ自然である。初級の教科書によく出る感じ。二人が立っていてカバンの方に立っている人「これ」、相手は「それ」。

R:Q2はどうですか。

JA: Q1とまったく同じ。

R:Q3のAとB会話文の場合は？

JA: 自然だ。状況はQ1~2と同じで、今回は物が相手にある感じ。

R: この文を日本人が話しているのを聞いたことがありますか。

JA: 特別な違和感はない。教科書でたくさん見て慣れている表現なので自然に感じられる。でも実際には使わない。

R:Q4は、二人が一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

JA: 人を「これ」で指示するのは少し違和感がある。けど、二人が一緒に見ているので不自然ではない。

R:指示詞「こ-こ」の使用については、違和感はないですか。

JA:ない。

R:Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

JA: 正しいと思うけど。少し不自然に感じられる。このような状況で「そ」を用いたか、確信がない。けれども、日本ではこのような文を使えそうだ

R:このように同じ系列の指示詞を用いることについてはどうですか。

JA:2人が同じ空間に一緒にいるので大丈夫だ。同じ場所にいる人々が同じ対象について会話している。

R:Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

JA: 自然に感じられる。

R: どうしてこれはすぐに自然に感じられるのでしょうか。

JA: そうね。この部分が少し迷う部分であると思う。初級の時に、韓国語と1:1に対応させたことが、こんな場合に分からなくなる。でもQ6については、私は自然だとすぐ思った。

R: どうしてですか。

JA: 感じがそうだ。慣れた文であり、まったく変な感じがしない。

R: 次はQ7は、どうですか。

JA: 自然だ。読み取れる。たくさん見たことがある。私は日本語を感じと直感で習ったタイプだ。これは実際に使うこともたくさんある。

R: Q8はいかがですか。

JA: これも自然。Q7とまったく同じ。

R: それではQ7~8の「あの」は何を指示しますか。

JA: 過去の時点。

R: Q7~8を読んだ時、自然に読み取れましたか。

JA: 日本語そのままですぐ理解ができた。

R: Q9の文は、AとBの対話文です。

JA: 自然。これもただ直感的に。

R: 「あ」指示詞について明確に何だと説明できますか。

JA: 私はまだ判断がつかない。初めて「そ」と「あ」のイメージを作る時、正確に作ってなくて、私はまだちゃんとまとめていない。

R: それでは、Q7~9は文の親近感を基準として考えましたか。

JA: 親近感もあるが、二人とも知っている事実ならば「あ」を用いると大学で学んだ。

R: Q10の文は、いかがですか。

JA: 自然なのか不自然なのか半々である。Q9のように「二人とも知っている」人ではないから「そ」を用いると習った気がする。よく分からない。

R:さあこのように1-10まで一緒に読んでみたけれど、あなたは読む時日本語で  
すぐ状況が浮上するのか。

JA:読んだ時は、まず日本語で理解できたんだけどちょっと曖昧で韓国語に再  
び変えて考えているようだ

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1.日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

JA:似ている。

3-2.日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

JA:難しい。まだ私の頭が整理ができていない。とくに私は「そ」と「あ」が。  
韓国語と日本語、両言語の指示詞は類似しているけど、細かくみると、違  
う部分がたくさんある。私はその部分が非常に困難である。

3-3.韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に  
立つ。

JA:50%ぐらいは役に立つと思う。ところが、段階別に影響が違う。初級の時  
は、簡単に優しく理解できるが、レベルが上がると私みたいになるからだ。  
その初級の時の影響がとてもひどい場合は、後に再び分けて習得をするのが  
とても難しい。

R:初級の過程が後に影響を与えるという意味ですね。

JA:そうだ。

R:その段階を学生自ら乗り越えるべきであると思いますか。

JA:先生や教授は、一つ一つすべてを教えようとするが、一人の教授がクラス  
の30人程度を全部ケアすることは難しいと思う。そのため、学生自ら勉強し  
なければならない。例えば、教授がこの部分は韓国語とは違うと教えてくれ  
たが、それを理解して、本人のものにするのは、学生の力量である。正直言  
えば、本人が理解して、本人のものにする学生がいるか分からない。私も完  
全に理解ができていないのに…。

R:この表を見たことがありますか。

JA: たくさん見た。教科書で高校と大学の。日本語の初級の教材、私もこの表を用いて教えた経験もある。この表で説明は足りないと思う。これは初級用だ。

**3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。**

JA: 半々。段階ごとに異なる。中・上級になると、もう少し分けるだ方が良いと思う。これは日本語を韓国語の基準に合わせた感じがする。これは大きな枠組みとして意味がある。

**3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。**

JA: 多くはないが、あんまり気にしない。どうせ話すと、意味は通じる。けど、後にはずっと気になる。正しく使ったのかと。

**3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。**

JA: 普段は何も考えずに使っている。ところが、少し違和感がある際は、韓国語に変えて見る。2次的に。初級・中級の時は、韓国語でよく考えた。けれども、今は日本語でまず、話してみて、間違いそうだったら、韓国語で考えてみる。指示詞は難しい…。また改めて勉強しなければならない。教材にはあまりにも簡単な説明になっている。実際は、少し複雑なんだけど…。

**3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。**

JA: 先に言ったが、私は、普段は何も考えずに使っている。

**3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。**

JA: 判断がつかない時はそうする。しかし実際は直感的に判断している。日本語表現の中で、私がたくさん聞いて聞いたこととか、読んだことを中心に。

**3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。**

JA: そうだ。私は 直感的に判断して使っている。

3-10日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。

JA: あるとは思わない。指示詞を用いて話す際に拒否感があるかないかが重要である。

3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。

JA: あいまいだ。20%ぐらいは習った気がするけど、さっきのQ9-10のような場合は自分が習った内容を中心に考えたから。けれども私は80%は私の直感にたくさん偏る。

3-12. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。

JA: 完全にはない。日常で使用する事には不便はないが、整理はできていない。

3-13. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。

JA: 間違っただようであれば、私は自らが調べてみる。その場で修正してくれる人がいれば聞いてみるけどいないなら、私が調べてみる。

3-14. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。

JA: 必要である。二つの言語の相違点中心に詳しく説明してほしい。

R: 初級の時から?

JA: 今の私の立場では最初から詳しく習った方が良くと思うけど、私は日本語をずっと勉強するつもりだったからよいけど。最初に日本語会話くらいだけ勉強する人たちに最初から詳しく説明する必要があるだろうか? 最初からすべてを教えたらいいことはいいだろうが、中間にあきらめる人が多く出るだろう。さっきその表は初級の段階にあって、後にはもう少し細分化された新たな表がもう一つあるといいと思う。

R: 最近、主に日本語を接するものは何か?

JA: 最近はニュース、映画、ゲーム

R: それらの通じて接する日本語が正確な日本語でまともな日本語を習っている

と思うか?

JA:私は勉強する時はニュース、趣味はゲームの映画なんですけど、勉強する時はとても硬い日本語が多く、趣味生活とは、隠語が多くてこの二つの間のギャップが激しいことはある。

R:教材に対する考え。

JA:私ももちろん最初は学校で教材を通じて日本語を勉強した。教材の全体的な説明が足りないと思う。また、教材にある日本語は現実使わない表現が多い。典型的な日本語が多い。役に立たないとは言えないが、現実と大きく離れているよう気がする。

R:お疲れ様でした。

⑧2016/08/31

JB : 上級 / 男 / 日本語専攻者 / 日本留学経験無

R:調査

者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

JB: 私は男で、日本語のレベルは上級。

R: 日本語はいつ初めて習いましたか。

JB: 中学校3年生の時、初めて習った。

R:きっかけは何ですか。

JB:きっかけは、もともと外国語の学びに興味があった。英語をある程度勉強してから、他の外国語を習ってみようと思った、それが日本語だった。

R:日本語を選択した理由がありますか。

JB:父が生まれたところが広島だ。それで家が日本と関連あるものが多かった。それで日本語を選択した。

R:日本に留学した経験がありますか。

JB:ない。ずっと韓国で日本語を勉強した。

R:今まで何年くらい日本語を勉強していますか。

JB:7-8年ほど。中学、高校、大学まで。

R:大学の専攻として日本語を選択した理由がありますか。

JB:塾(日本語教室)で習った内容は、ある程度の限界があると考えた。大学では、より詳しく学ぶことができるのではないかと思った。将来の夢が先生だったので、最初は歴史教育科を進学しようと思ったが、外国語を勉強するのが好きで、幼い頃から言語がうまいという話をたくさん聞いたし、そして専攻を外国語とするのがいいんじゃないかと思い、日本語を専攻として選択した。

R:日本語としての魅力を感じたんですか。

JB:そうだ。

R:普段、日本語についてはどう思いましたか。

JB:まあ、終わりのない言語。難しいと思っている。

R:初めて習う時から「難しい」と思いましたか。

JB:いや。むしろ初めて習う時はそのまま文字だけ、ひらがなとカタカナを覚えて、漢字少し覚えて、私の場合は漢字資格証があつたので難しくなかった。それがだんだん勉強すればするほど難しくなった。文法的なものに入ったら、難しくなった。

R:韓国語と日本語が似ているという点に同意しますか。

JB:私は同意しない。なぜなら、それがピッタリ合う部分もあるけど、それが別の外国語より多いが、それ以外にもっと日本語らしい表現とか日本語で直した時「これだ!」という表現がない場合が(勉強を)すればするほどだんだん増えてきたから。

R:先生が韓国語と日本語を対照させて教えてくれたんですか。

JB:そうだ。大体そうだった。

R:それに対する本人の考えはどうですか。

JB:まあ、最初にはプラスになった。私は最初はそのように教えてもらった方がいいと思う。

R:日本語を主に何で勉強するのか? 何を通じて日本語を接しているか?

JB:私は最初からドラマで。

R:日本語教材については本人の考えを話してください。

JB:教材が段階別の種類が多くて選択する時、何が役に立つのか分からない。私は今アルバイトとして日本語を教えているが、気に入る教材がなくて、自分が直接作って教えている。

R:大学で使用する日本語文法本についてどう思いますか?

JB:これは他の教科書より日本語の勉強に役にやった。他の市販される教材より詳しく説明がされている部分も多い。また、先生の授業を受けながら、勉強するために実例を通じた説明があって、本当に勉強になる。

R:ドラマで学ぶ日本語と教材を通じて学ぶ日本語に差がありますか。

JB:教材で学ぶ日本語は書き言葉が多くて使わない表現もたくさんある反面、ドラマは現在日本でよく使用される日本語を学ぶことができる。

R:教材の日本語と実際使われる日本語が分離しているんですね。

JB:そうだ。私が日本で日本語を習ったことがなくて。日本人の友達が私の日本語をよく「きれい」だと言う。

R:「きれい」ってどういう意味ですか。

JB:「きれいだ」と言われる。しかしこれを言い換えれば、文法に合わせて使



う日本語だと思う。実際日本人は使わない表現みたいな。

R:日本語を日本で習った経験がありますか。

JB:ない。

R:じゃ、これから日本語の指示語について聞いてみたい。自分が考える日本語の指示語について説明してください。

JB: 指示詞、指示語…私が（アルバイトとして）教える時、（相手のレベルが）初級が多くて韓国語の「……」と同じように使われる「コ・ソ・ア」だと教える。レベルが上がって会話をする時は、「その」と「あの」の明確な違いを教えようとするが、正直、私もちゃんと（日本語指示詞の）習得が進んでいなくて、教えるのが難しい。

R:今、韓国語と日本語の指示詞が同じだと話したが、どこからそのように習ったのか。

JB:これは、最初（日本語を習った時）日本語学校で習った。

R:7年間日本語を勉強したが、あなたもそう思うのか。

JB:現在は同意しない。（日本語の指示詞と韓国語の指示詞は）少し違うと思う

## <アンケートPART II Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか？

JB: 自然である。韓国語で考えても「…(これ)」で聞いたら「…(それ)」で答えるのが自然だ。

R:韓国語で考えましたか。

JB:そうだ。

R:Q2はどうですか。

JB: これもQ1と同じである。

R:これも韓国語で考えましたか。

JB: そうだ。

R: Q3のAとB会話文の場合は？

JB: これも自然。

R: 指示詞文を読んだ時、まず何が浮かびましたか。

JB: 韓国語

R: Q1~3について「不自然さ」は感じられませんか。

JB: そうだ。状況も想像できる。教科書でこのような文を多く見た。

R: これは、教科書で多く見た文ですか。

JB: そうだ。教科書でたくさん見た教科書日本語？

R: このような文は日本人が使う表現ですか。

JB: ない。思ったより使う日本人は見たことない。

R: でも、この指示語文章が自然だと思いますね。

JB: そうだ。

R: 理由は、教科書で見たため

JB: そうだ。

R: Q4は、二人が一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

JB: 自然。二人が一緒にいて、二人で一枚の写真を見ている。「こーこ」の指示詞が正しく使われていると思う。

R: この文章を見た時に韓国語で考えましたか。

JB: これは韓国語より頭の中に二人の場面が想像できた。

R: Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

JB: これも自然。タクシーの中に運転手と乗客が一緒にいる。二人から遠く離れていることを「そ」で指示しているから。

R: それは自分がまとめたルールですか。

JB: そうだ。同じ空間でいて、他の空間を指示するから「そ」を用いる。

R:Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

JB: 自然のように感じられるが。ちょっと違和感がある。後ろに指示語を「それ」に直した方がいいと思う。Aの場合は、2人から遠いから「あ」で指示するけど、Bはすでに出たことを改めて指示するから「そ」で指示すべきではないか。

R:これは、自分がまとめたことですか。

JB:文法の授業にこのように習った気がする。

R:前に言及されたものは「そ」で指示する。

JB:それだ。そのように習った。

R:Q7とQ8はいかがですか。

JB: 両方全部自然である。これらはたくさん使われている。たくさん聞いたこともある。

R:この用法については何か知っていることはないですか。

JB:「二人が知っていること」とか「共有していること」は「あ」で指示すると習った。文法の授業の時に。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

JB: Q6と同じ文法であるが、まず、二人が共有している情報であるため「あ」を用いて指示する。Bは、前に言及された店を改めて指示するから「そ」を用いる。そして、この文は正しくない。

R:Q10の文は、いかがですか。

JB: これはBは山下を知らないから、「そ」で指示する。自然な文。

R:このように読んでみたが、自分はどのように指示詞を考えていますか。

JB:私は文法的に考えている。

R:授業中に習ったことを中心に

JB:そうだとそれに合わせて、考えているけど、確信はない。自信がない。

<アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

JB: 違う。似ている部分もあるし、異なる部分もある。

3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

JB: 難しい。段階別に異なる。初級時は、全く問題がないが、中級・上級になると難しくなる。

3-3. 韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。

JB: 初級時のみ。中級になるとその考えを削除した方が良い。ギャップが大きい。

R: この表を見れたことがありますか。

JB: 教材でたくさん見た

3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

JB: 初級の時には役に立つと思う。ところが、そこに合わせて考えるとしても、すべてとは言えない。

3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

JB: ある。特に「あ」と「そ」の使い分けが分からない。この二つが違うということを知っているから、使う時に気になる。気をつけて使う。(指示詞の使用を)避ける場合も結構ある。

3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

JB: 時によって違う。30%程度。まず韓国語に変えてみて、また状況を考えて直す。

3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。

JB: 私はそうしたことがない。私は韓国語に直して1次的に考えてみる。何と  
言うか。間違うか心配になる。私は日本留学経験がないから、余計に間違っ  
たらどうするか思う。それで文法中心に考える。

3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適  
用して使用する。

JB: そうだ。80%ほどそうだ。

3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。

JB: ほとんどない。

3-10日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。

JB: ある程度はある。「そ」とか「あ」については何かまとめられているもの  
がある。

3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法  
を詳しく習った。

JB: 70%程度だけを習った。

3-12. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。

JB: いや、理解していないし、まとめられていない。

3-13. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っ  
たのか確認する。

JB: 必ず確認する。理由を知らなかったら私はもどかしい。その文法に合わせ  
て使うべきだという強迫観念がある。

3-14. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要  
だ。

JB: そうだ。最初から必要だ。なぜなら、レベルが上がることに連れ、自然に  
理解できることではないため、最初から少しずつでもある程度説明してくれ  
る方がよさそうだ。段階をジャンプしないで。いつも私も教えてみたら、学  
生がドラマを見て来ていっぱい質問をする。なぜ、「その時」ではなく「あ  
の時」なのかと。私が説明をしてあげてもそれに対する知識が全くないから、  
理解できないそうだ。日本語の指示詞「こそあ=韓国語の指示語」と学んだ

ことが、後にはまったく使いみちがなくなると感じられる。だから、最初から次の段階のための準備が必要だと思う。

R:お疲れ様でした。

©2016/09/07

JC : 上級 / 男 / 日本語専攻者 / 日本留学経験有 1年

R:調査者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

JC: 男の日本語専攻。上級。

R: 日本で日本語を勉強した経験があるか?

JC: ある。1年程度、交換留学生として

R: 主に日本語を何で勉強するのか?

JC: 初めて、日本のアニメと漫画を見ながら勉強した。大学に入学してからは、大学の授業を通じて勉強した。

R: 日本語を勉強してどれくらいか。

JC: 5-6年。

R: いつ日本語を初めて習ったのか?

JC: 高校2年生の時、初めて日本語を学んだ。

R: 学ぶようになったきっかけがあったのか?

JC: 日本のアニメを見て、面白くて日本語が勉強したかった。正確に言えば、中学校の時からアニメを見ましたが、高等学校2年生の時に先生から教えてもらい、また、半年ほど日本語塾に通った。その時N2に合格して、その次に独学でN1に合格して、大学に入学した。

R: 大学の専攻を日本語にした理由があるの。

JC: 最初は日本語を勉強して翻訳や通訳の仕事がしたかった。今はよく分からない。留学をした後、様々な経験をしてみると考えが多くなった。

R: 日本語はどのような外国語だと思う?

JC: 日本語は韓国人が学びやすい外国語だと思う。また、韓国語に日本語がすごくたくさん残っている。

R: そう考える理由は?

JC: 一旦、韓国語と日本語の文の構造そのものが結構似ていて、文法を勉強する時、英語のようなストレスは少ない。

R:その考えは現在の上級になっても変わりがないですか。

JC:ない。

R:韓国語と日本語文章の構造そのものが類似していて、日本語を学ぶ時、韓国語が役に立つと思いますか。

JC:私の場合、韓国語を気にせずに日本語勉強した。でも、そうであると思う。

R:日本語の指示詞について説明してほしい。

JC:物を指す言葉?「こそあど」。一番最初に習った時は高校2年の時。

R:日本語の教科書を通じて日本語の指示詞について正確に習いましたか。

JC:正確に文法として習ったのは大学の時。

R:それでは今、自分が思い出す指示詞の用法は何がありますか。

JC:基本的に私の近くにあるものは「これ」、相手に近くにあることは「それ」、二人から遠くに離れているものは「あれ」を使う。これが基本。

R:あなたが指示詞を使う時、今話したことを基準として使いますか。

JC:以前はそうしたと思うけど、最近は感覚に合わせて使っている。

R:最近、主に日本語を接するものは何ですか。

JC:漫画、マンガ、雑誌。 インターネットで見ながら勉強というよりは趣味。

R:教材に対する考えはどうですか。

JC:私は教材で勉強するのが好きではない。あまりにも枠にはまって、基礎を習うためには良いが、教材の日本語は実際に使用しない日本語も書いてあって少し硬い日本語。

## <アンケートPARTⅡ Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか?

JC: 指示語使用は自然。

R:文章に対する不自然さはないですか。



JC:ない。

R:Q2はどうですか。

JC: これもいい。「これ何です」「それはテルテルボウズです」のような？

R:今韓国語に解釈をしたんですか。

JC:いや、解釈ではありません。状況を考えてみた。

R:Q3のAとB会話文の場合は？

JC: これも問題ない。Q2と一緒に状況が読み取れる。

R:Q1~3のような会話をして見たことがありますか。

JC:ない。でも教科書でたくさん見た。日本人が使うのは見たことがない。

R:実際にこういうふうには使わないが、この文章が自然に感じられる理由は何でしょうか。

JC:たぶん、見たことがあり、このように習ったことがあるからだと思う。けれども、日本人は使わない。

R:Q4は、二人が一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

JC: これは少し違和感がある。自然に読み取れない。「この人」が…。写真を見てるのに…。なんっていうか。「加藤さんの若い時」と言ったが…何か私の頭の中のイメージとこの文が合わない。私はただ「これ加藤さんの若い時ですか。違いますよ、加藤さんじゃないです。」と指示語を使わずに答えそう。

R:それでは「こ-こ」指示詞の使用については

JC:もう深く考えたら、韓国で習ったことが思い出す。そうしたら、後に「この」を「その」に直さなければならない。

R:Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

JC: これは自然。理由は答えにくいだが、自然である。運転手が前に座っていて、お客さんが後ろに座っていて、「そこ～」、「あ!そこです」こんな感じ。自然に読み取れる。

R:韓国語で考えましたか。

JC:いいえ。状況が頭の中に想像できて、文が自然に読み取れる。

R:「そ-そ」指示詞の使用については

JC:文法的に考えると、直さなければならないと思う。前に「その」を用いたので、後ろは「ここ」で指示した方が良いと思うけど。この文に関しては私は違和感がない。日本人が直接使用するのを見たことはないが、私には自然な文である。私はもともと文法的に考えない。

R:Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

JC:これはいい。理由は二人が空を見ているから。遠く離れているから。

R:これを見た時、頭の中には何が見えたんですか。

JC:韓国語ではなく、状況が想像できる。

R:Q7とQ8は、どうですか。

JC:両方、Q7も8も問題ない。Q7はたくさん聞いて見た。昔のことを回想する時よく用いる。

R:それでは過去のことを話す時「あの」を使う。

JC:そうだ。漫画でよく出る場面である。

R:それではここに「この」とか「その」を入れてみるとどうですか。

JC:不自然。「この」は聞いたことがない。けど「その」の場合は聞いて見たので、使えそうだ。私がたくさん聞いてみたこと見たことをデータとして、これを基準として指示詞を使っている。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

JC:問題ない。自然だ。

R:これは二人で店を見ながら話している場面ですか。

JC:いいえ、ここにはない店について語っている。

R:それがすぐ頭に浮かんでくるんですか。

JC:そうだ。そしてこれもたくさん聞いてみた。それで自然に読み取れる。

R:Q10の文は、いかがですか。

JC: これも自然。二人が会社で話をしながら、「昨日山下さんに会いました」  
「え？誰ですか。その人？」

R:韓国語に直して考えたことではないですね。

そうだ。

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1.日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

JC:似ている 80%程度類似している。

3-2.日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

JC:深く考えると難しい。私は最初に簡単に考えた。現在も私は指示詞について深く考えていない。

3-3.韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。

JC:80%程度役に立つと思う。初級に良い影響を与えると思う。ところが、私は日本語と韓国語を対照して考えていない。

R:この表を見れたことがありますか。

JC:見たことがある。

3-4.次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

JC:まあ、深く習わないなら、この表で十分だと思う。

R:どういう意味ですか。

JC:深く考えずに、そのまま話したらこの表が十分。学問的に勉強するなら不十分。

R:現在、あなたはこの表を基準として考えていないですね。

そうだ。

R:では、この表は初級の段階で必要だと思いますか。

JC: この表より絵で説明した方がもっと良いと思う。

3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

JC: ある。日本で何回もあった。

3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

JC: 違う。韓国語と日本語を比較してみなきゃと思ったことがない。

3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。

JC: そうだ。70%ほどそうだ。

3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。

JC: 今はよく分からない。影響を受けても私が集めたデータがあるから。

3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。

JC: そうだ。正しいか間違っているかよりは直感的に考える。

3-10 日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。

JC: (指示詞を)直感的に捉えているが、「これだ!」と言えるものはない。

3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。

JC: 習ったと言えよう。だけど、今は影響を受けていない。知識として習ったけど私は活用はしない。

3-12. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。

JC: 違う。60%ぐらい理解していると思う。完璧ではないから、迷うと思う。

3-13. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。

JC: 別に気にしない。指示詞が間違っても、会話には邪魔にならないから。

3-14. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。

JC: そう思う。私が正しく使っているのか疑問が生じるから、もう一度まとめられている何かがあってほしい。

R: お疲れ様でした。

⑩ 2016/08/31

JD : 上級 / 女 / 日本語専攻者 / 日本留学経験無

R: 調査

者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

JD: レベルは上級で、女性である。

R: 日本語はいつ初めて習いましたか。

JD: ひらがなに初めて接したのは小学校4年生の時だ。親戚のお姉さんが明治大学で留学中であったため、日本語の文字を勉強することができた。資格証勉強を中学校2年生の時から学び始めた。

R: 専攻として日本語を選択した理由はありますか。

JD: 私は勉強したいことだけ勉強する。そして、高校1年生の時から日本語学科の受験の準備を資格証勉強しながら準備をした。特に日本語を勉強したくてきたと言うことよりは私が好きな勉強をしたくて大学の専攻を日本語とした

R: 初めて日本語を勉強した時、面白いと感じましたか。

JD: 私が幼い時からかわいいのが好きで、ひらがながの形が可愛かったし、アクセントが韓国語と違って、可愛くて面白かった。

R: 大学に入って日本語を勉強しているが、日本語はどのような外国語だと思いますか。

JD: どうしても韓国語と文法的な部分が似ているから、韓国人が習いやすい言語だったと思う。また、日本語を習いながら感じたことが受け身の表現が多くて韓国語と異なる他人を中心に考える文化が多いと思った。

R: 韓国語と日本語は文法的な部分が似ていて韓国人が日本語を学びやすい外国語であると思いますか。

JD: 50-60%程度同意をする。どうしても最初はそれで簡単だと思ったけど、敬語や受け身のような上級の表現を習うと大変。

R: それで似ていると考えたが、勉強してみて両言語が似ていないと感じましたか。

JD: そうだ。

R: それなら韓国語が日本語の学習に役に立つと思いますか。

JD:私は韓国語母語話者であるため、役に立つと思う。入門の時は、良い方に助けをたくさん受けたが…。高級の語彙やこのようなことを勉強しながら、よくない影響もたくさん受けた。韓国式の表現のような。

R:現在の本人の考えはどうか。

JD:私は最初の時、韓国語の助けをたくさん受けたために、肯定的に考える。むしろ韓国人で幸いだと思う。

R:日本で日本語を勉強したことは？

JD:ない、でも行きたい。私は国内派だから言語的な限界を感じたことが多い。高校入試を準備する時に日本で生活してきた学生たちが多かったが、どうしても(自分の日本語と)比べられた。

R:日本語を勉強する時、どちらに重点をあげて勉強していますか。

JD:私は高校の時まで、会話の質力が低いことがコンプレックスだった。それで大学に入ってはタンデム(日本人と1:1フェア授業)とかビジネス日本語のような授業を受けながら、スピーキング中心で勉強をしている。

R:最近日本語をたくさん接するものは何ですか。

JD:私が最近、YouTubeをよく見る。日本人の動画よく見るし、アニメのクレヨンしんちゃんが好きで、よく見ている。聞き取り中心に。

R:日本語教材についてはどう思いますか。

JD:最近教授は教科書ではなく、それぞれプリントで授業を行う。

R:それではそのプリントはどうか。日本語文法本について。

JD:説明が不足である。内容が繋がらない。説明されているとしても、細かい部分に対する説明はされていない。

R:教材に対する信頼度はどれぐらいですか。

JD:JLPTに関する書籍は70-80%、一般会話の教材は50-60程度

R:あなたは、教材より日本人との対話や動画がほうがいいですか。

JD:そうだ。

R:日本語は難しいですか。

JD:日本語は難しいけど、面白くて、これからも勉強を続ける。

R:じゃ、これから日本語の指示語について聞いてみたい。あなたが考える日本語の指示語について説明してください。

JD:「これ・それ・あれ・どれ」で、遠くにあるものは「あれ」。近くあるのは「これ」、相手に近くあるのは「それ」。しかし、少し曖昧で、指示詞を代わりに他の表現を用いる時もある。

### <アンケートPART II Q1~Q10>

R:今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか？

JD: 自然だ。状況が自然に頭の中に想像できる。Aがかばんを持って「これ」で聞いたし、あやさん(B)はちょっと離れているところで答えている。

R:このような文章をたくさん見ましたか。

JD:昔にたくさん見た。

R:それでは、このような文章をアニメやYouTubeの動画から聞いてことがありますか。

JD:全くない。

R:しかし、不自然ではないですか。

JD:そうだ。これを聞いてみたことはないけど、教材でたくさん見た。

R:Q2はどうですか。

JD: これもQ1と同じように自然に読み取れる。

R:これも日本人が使っていることを見たことがないですか。

JD:そうだ。でも自然だ。教材でたくさん見た文である。

R:Q3のAとB会話文の場合は？

JD:これは自然・不自然、両方である。自然である理由は、Q1~2の反対の場合であると考えたら自然。ところが、もっと自然な文に作るため、「それ」と



「これ」の場所を変えた方が良いと思う。

R: そのように考える理由は何ですか。

JD: 何か初めての指示語は「これ」の場合が多いから。

R: Q1~3 のような文を聞いてことがありますか。

JD: ない。日常生活やインターネット媒体を通じて聞いてみたことはない。

R: では、どこでたくさん見ましたか。

JD: 日本語教材、テキストで

R: この文が不自然ではないですね。

JD: そうだ。

R: Q4は、二人が一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

JD: 自然に読み取れる。写真を「これ」で、写真の中の人物を「この人」で言えるから。

R: 同じ系列の指示詞を用いる会話に違和感がなかったか。

JD: 近くに一緒にいるから、行けると思った。

R: Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

JD: 少し違和感がある。私が勉強したことは「そ」の場合、「相手の近くにあるものを指示する」時用いる指示詞だけど…。二人が同じ空間に一緒にいるから「そ」よりは「あ」の方が自然だと思う。「・・(あっち)」だから…。

R: 「・・(あっち)」ですか。今、韓国語で考えましたか。

JD: そうだ。また、空間的にも遠いと考えた。

R: Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

JD: この会話は自然である。Q5と同じ状況である。自然に理解できる、二人が一緒にいるから。

R: Q7とQ8は、どうですか。

JD: この表現が慣れていないので、よく分からないけど、自然だと思う。どうしても過去のことを指示しているから。時間的な距離感？

R:この文章を読む時、韓国語に直してみましたか。

JD:ちょっと(韓国語で)考えた。「・・(その頃・時)」に..しかしこれちょっと違和感ある。

R:このような文章は聞いてみたことはないか?

JD:ある。過去回想のような、日本人友達からたくさん聞いてみた。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

JD:違和感があるけど、どこがおかしいのかよく分からない。なんか指示詞の「そ」がどこかに入らないと。後ろに。「あの一そこ」のように。

R:この二人の状況は?

JD:昨日一緒に店について、翌日、二人で話している。

R:二人とも「あ」を用いることがおかしいですか。

JD:なんかよく分からないけど、どちらも「そ」を使った方がいいと思う。韓国語で考えると「・(そ)」であるため「その店-そこ」直した方が自然。

R:Q10の文は、いかがですか。

JD:自然だ。Bが山下さんを知らないから「そ」を用いて指示している。

Bが山下を知らない場合は「そ」を用いるんですか。

JD:そうだ、知らないから…。相手の知り合いについて話しているから「そ」で指示する。

### <アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

JD:似ている。70%程度似ている。30%はどうしても状況別に日本だけの使い方があるから。

3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

JD:難しい。韓国と使い分けが異なるから100%同じではないから。

3-3. 韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に

立つ。

JD: まあ、これも最初は助けてもらうけど、後には、むしろ邪魔になる。高校生の時多くのストレス受けた。

3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

JD: 塾に通ったことがあるが、印刷物にいつもこれがあった。この表では十分ではないが、初めて基礎としては必要があると思う。

R: さっき指示詞文を読んだ時、この表が頭の中から思い出しましたか。

JD: この表を中心に考えた。ちょうどを読んだ時、違和感が感じられたら、この表を中心に考えた。けれども、日本語で考えようと努力はした。

R: 韓国語で考えないようにする方ですか。

JD: そうだ。

3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

JD: ある。それで(指示詞を)使わず、物事を直接言う場合がある。

3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

JD: そうではない、そうしないように努力している。

3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。

JD: 努力をしている。高校生の時先生に叱られたことがあって。でもしようとしてもうまくいかない。難しい。

3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。

JD: うまくいかないとき一番先に思い出すことが、習った内容。

3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。

JD: はい、そうだ。直感で判断する。それでなぜかと言われると、説明はでき

ない。

3-10日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。

JD: 私の頭に何かのルールがある。

3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。

JD: 詳しく習った。詳しく習ったのに、まだたくさん間違っているから、絶対的なものではないけど、指示詞について習った。

3-12. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。

JD: 50%程度理解している。詳細に学んだとしても限界を感じる。

3-13. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。

JD: 会話の途中であれば、あんまり気にしない。

3-14. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。

JD: そうだ

R: それではどのように習うのか一番良いと思いますか。

JD: どうやらたくさん間違った文法であるから、韓国語の先生や韓国人の執筆の教材ではなく、日本人の先生にちゃんと習らう方が、正確ではないだろうか。。

R: 最初から韓国語の影響を受けない方が良いと思いますか。

JD: そうだ。

R: お疲れ様でした。

①2016/09/09

JE : 上級 / 男 / 日本語専攻者 / 日本留学経験有 1年

R:

調査者

R: さ、これからインタビューを始めます。気軽に本人の考えを話してください。まず、あなたの日本語レベルと性別をお願いします。

JE: レベルは上級で、性別は男性。

R: 日本語はいつ初めて習いましたか。

JE: 初めて習ったのは高校の時からだ。けど、私は中学生との時から日本のアニメを見ていた。

R: 高校の日本語って、第2外国語ですか。

JE: いや、私が通った高校は、外国語高校であり、高校から外国語を専攻として勉強する。うちの学校では「日本語学科」「中国語学科」「フランス語学科」「ドイツ語学科」があった。この中で私は、日本語に興味があったので、「日本語学科」を選択した。

R: では、日本語を大学の専攻として選択した理由は何ですか。

JE: 私は、「自分が一番上手な分野はどこなのか」を考えた。正直、韓国では大学の専攻と関連した就職をしにくいだろう。そして、私は自身あることをもっと上達させて、生かした方が良かったと思った。

R: 日本語を日本で習った経験がありますか。

JE: 留学ではないが、1年間ワーホリ・ビザとして日本で生活した経験がある。半年は北海道で、半年は関西で。3か月ごと、転勤しながら生活した。その時、日本語の実力が伸びたと思う。敬語使いとか。ビジネス関連の日本語など。

R: 日本語を一言で説明したら。

JE: 最初は簡単だったけど、だんだん難しくなった。

R: 初めてはどうして簡単だったですか。

JE: どうやら、たくさんアニメを通じて聞いてみたし、また、韓国語と語順も同じで…。思った通り話せるから。ある程度話が通じるし、けれども、ここ

で敬語とか文法的なものを習い始めると、だんだん難しくなる。

R: 語順が同じで、日本語は勉強しやすかったですか。

JE: 私はそう思わない。もし、私が中学校の時、日本語ではなく英語をたくさん接したら、日本語より英語の方がもっと易しく感じられたと思う。韓国語が日本語の学習に影響を与えるとは思わない。両言語を関連付て考える必要がない。

R: じゃ、これから日本語の指示詞について聞いてみたい。本人が考える日本語の指示語について説明してください。

JE: 「こ・そ・あ・ど」、韓国語の「……………」に該当するもの。

R: どこでそのように習いましたか?

JE: 学校。そして教材にこのように説明されている。

R: あなたはどう思いますか。

JE: 私はそうではないと思う。ちょっと曖昧な部分がある。

R: 本人が日本語の指示詞を用いる時、韓国語の指示詞が役に立ちますか。

JE: 私は、学校で日本語を習う前に、アニメなどを通じて日本語を接したのだ、「話す」と「聞き取り」がある程度できていた。それで、学校で「こ・そ・あ＝……………」と教えてくれても私は気にせず、自分なりに(指示詞を)用いた。

R: 場面に合わせてですか。

JE: そうだ。

## <アンケートPART II Q1~Q10>

R: 今からは日本語の指示詞文を見て、それぞれ感じたことと考えを話してほしい。Q1は、AとBの対話です。これはどうですか?

JE: 少し曖昧である。後(B)がおかしい。間違っただとは言えないが、日本人がこんな文を話すことを見たことはない。

R: Q2はどうですか。

JE: Q1と同じように違和感がある。「これは何ですか」と言われたら「テルテル坊主ですと」でこたえる。指示詞を消した方が自然である。指示詞を用いる必要がない。

R: 「これ」で問い「それ」答えることに違和感があるんですか。

JE: そうだ。聞いたことがない。

R: 教材でこのような文章を見たことはないですか。

JE: 私は日本語の教材をあまり気にしていない。

R: Q3のAとB会話文の場合は？

JE: これは、Q1と2より違和感はないけど、不自然な気がする。

R: 聞いたことは？

JE: ない。全部違和感があるが、特にQ1と2は違和感が多い。全部私には不自然である。

R: Q4は、二人が一緒に写真を見ながら、写真の中の人物について話しています。

JE: 正しい。自然に読み取れる。おかしくない

R: Bに「その人」も使えそうですか。

JE: まあ、今一緒に写真を見ているから、できないだろう。

R: Q5はタクシーの中での対話、運転手と乗客の対話です。

JE: これはそんなに違和感はない。たくさん聞いたような？タクシーの中で使えそうな自然な会話。不自然ではない。

R: Q6は空を飛ぶ鳥を指しながら話しています。どうですか。

JE: 「あの鳥」、「あの鳥」の部分に違和感がある。少し曖昧だ。指示詞「あ」の使用は大丈夫だが、あまり使われないような会話文である。会話の文体が硬い。

R: 指示語使用は？

JE: 問題はない。遠くにある鳥だから。

R: 指示語を使用することに対するルールがあるのか？

JE:私はただ読む際直感で判断するタイプ。

R:次はQ7は、どうですか。

JE:自然である。自然に読み取れる。過去の話をしている。

R:Q8はいかがですか。

JE:「あの時」より「その時」の方が似合いそうだ。

R:どうしてですか。

JE:説明はできない。「あの時」より私は「その時」をたくさん耳にしたので。発音する時のもっと自然に発音ができるし。

R:指示詞の用法に関する知識は。

JE:まったくない。直感。

R:Q9の文は、AとBの対話文です。

JE:これは自然。二人が昨日一緒に行った店について話している。指示詞文が自然に読み取れる。

R:Q10の文は、いかがですか。

JE:「その人」? 「誰?あの人」の方が良さそうだ。「その人」は、「相手が出会った人」を指すようだ。それに対して「あの人」は、「今、私が思い浮かべている人」を指示する。

R:「その人」は「相手が言っている人」、「あの人」は「私の頭の中にいる人」を指示する。

JE:そうだ。

R:それでは「そ」と「あ」に関する文法的に整理されているのではないのでしょうか。

JE:私は、単に文の全体的な流れ中心に考える。直感的に判断する。私は文法的に考えていない。



<アンケートPARTⅢ 1~14>

3-1. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は韓国語指示詞「・・・・」と類似している。

JE: 70%はそうだ。言い換えれば、60%ほど似たような部分があって、一般的な部分は似ているが、話してみると、異なる部分も多い。

3-2. 日本語指示詞「コ・ソ・ア」は難しい。

JE: まあ、指示詞についてこのように聞かれたら、難しい。

R: じゃ、今まで指示詞を重要に考えなかったですか。

JE: そうだ。普段口から出るそのまま(指示詞を)使っている。

3-3. 韓国語指示詞「・・・・」は、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の学習に役に立つ。

JE: 役に立つかな? そのまま日本も3つで韓国も3つの指示詞があるような。ここまで。10%程度は、概念的な理解する部分だけ。このような指示詞が存在する。それで終わり。

R: この表を見れたことがありますか。

JE: たくさん見た。高校の時。

3-4. 次の<表1>で、日本語指示詞「コ・ソ・ア」の文法説明として「十分」である。

JE: 十分ではない。初級の時のみ、それ以上は役に立たない。中級の時からはここに含まれていない日本語の指示詞の用法を説明してほしい。

R: あなたの頭の中にはこの表がありますか?

JE: ない。

3-5. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、どんな指示詞を用いて良いのか迷ったことがある。

JE: ほとんどない。口から出るまま気にせずに。指示詞使いで指摘された覚えはない。

3-6. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、まず韓国語で考えて、日本語で直訳して使用する。

JE: 私はそうしない。絶対。

3-7. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、すぐ日本語の用法で適用して使用する。

JE: そうだ。

3-8. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、教科書と教師から学んだことに適用して使用する。

JE: 作文する時、指示詞ではなく、「動詞」や「語尾表現」のようなものはそう考えるけど、指示詞は考えずに使っている。

3-9. 日本語指示詞を用いる際(作文/会話)、直感的に判断して使用する。

JE: 100%そうだ。

3-10 日本語指示詞の使い分けに関して、自分なりのルールがある。

JE: 具体的に考えたことがない。(指示詞文を)読んだ時の感じを中心に。ルールはないと思う。

3-11. 学校(日本語教室)の授業や教科書/教材を通じて、日本語指示詞の用法を詳しく習った。

JE: 高校の時あの表で説明を聞いたぐらい?

3-12. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」の文法的用法をよく理解している。

JE: 用法の理解はしていない。私は100%言う時の感じ。

3-13. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」を間違えて使った場合、必ずなぜ間違っただのか確認する。

JE: 日本で仕事をする時、表現を指摘されることがあるが、指示詞の指摘はなかった。

R: 日本語を間違えた時、どうして間違えたのかを確認するタイプですか。

JE: 私の場合、日本人の友達がいてすぐに直してくれた。働きながらワーホリの時。周りから直してくれた。

3-14. 日本語指示詞 「コ・ソ・ア」について今よりもっと詳しい説明が必要だ。

JE: そう思っている。先程の表よりは例を挙げて、説明をした方が良いと思う。

R: 初級の時からですか。

JE: 初級の時から説明してくれるのが一番良いけど。そうしたら、学習者の興味が落ちる可能性がある。日本語を深く学習する意向があれば、最初から教えてもらうのが一番良い。最初から詳しく説明してもらったら、直す必要なく楽に日本語の習得ができると思うが、果たして学習の興味、意志がそこまですぐに続けられるが、疑問だ。まず、最初は簡単に、中級からはより詳しく。

R: お疲れ様でした。